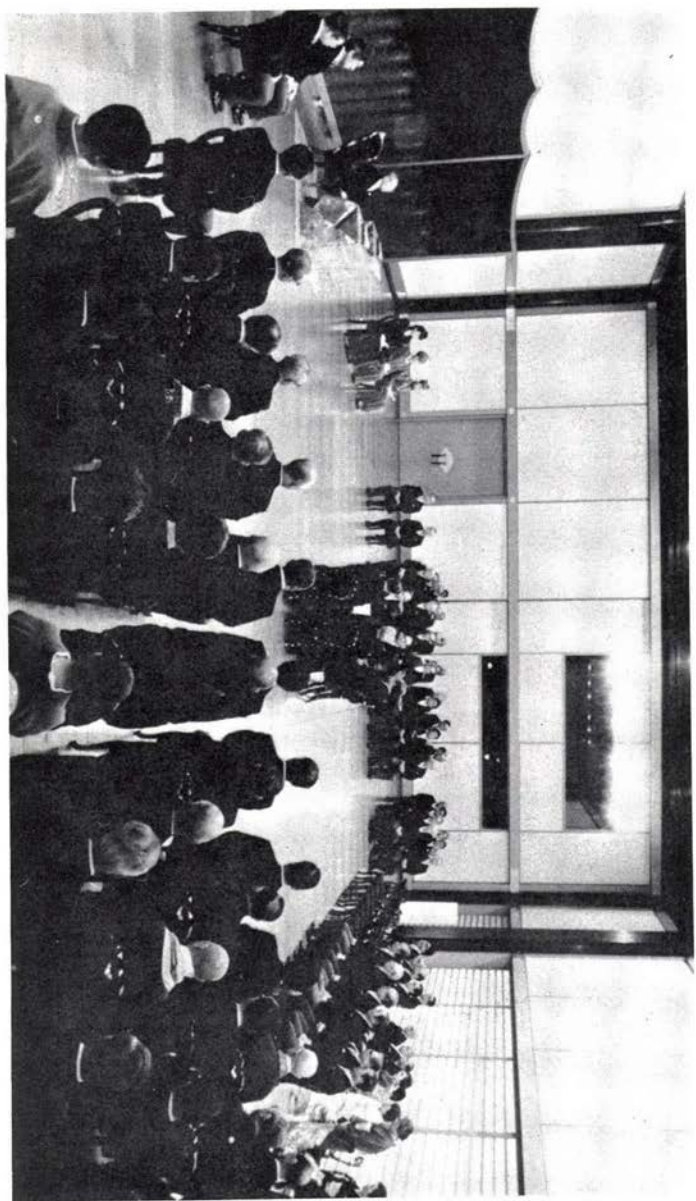


日本教文社刊

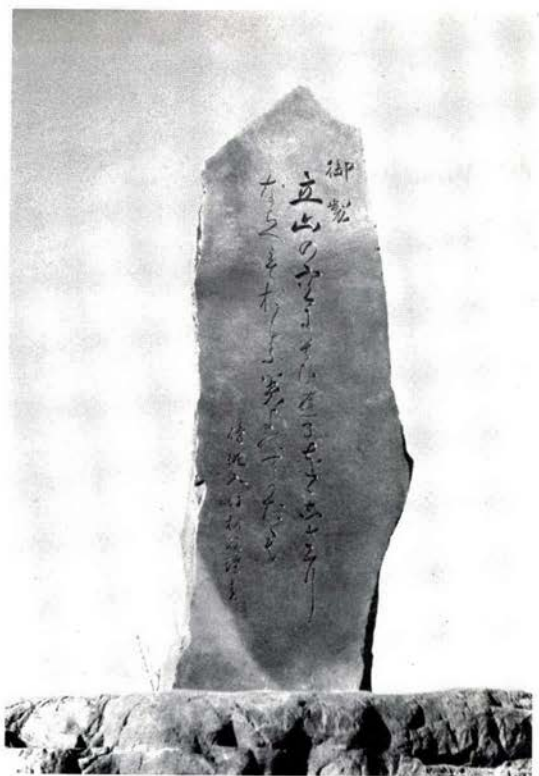
夜久正雄 編著

歌人・今上天皇

增補新版



宮中歌会始（昭和六十年）

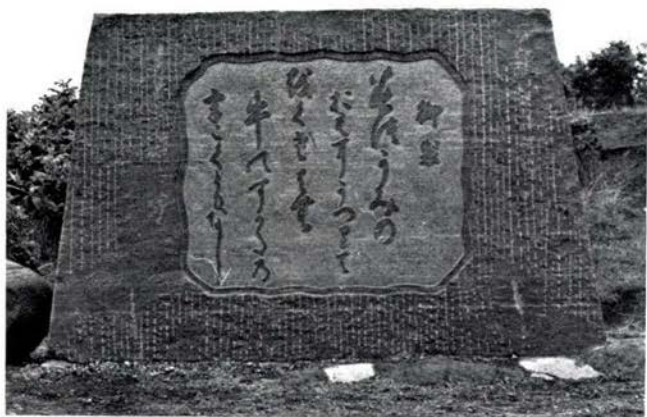


(富山市郊外呉羽山上)

御製

立山の空にそびゆるを、しさに
 ならへとぞ思ふみよのすがたも

(本文二二六頁)



(澗沸湖畔原生花園)

御製

みづうみの
 おもにうつりて
 をぐさはむ
 牛のすがたの
 うごくともなし
 (本文二四二頁)



御製

千鳥ヶ淵戦没者墓苑

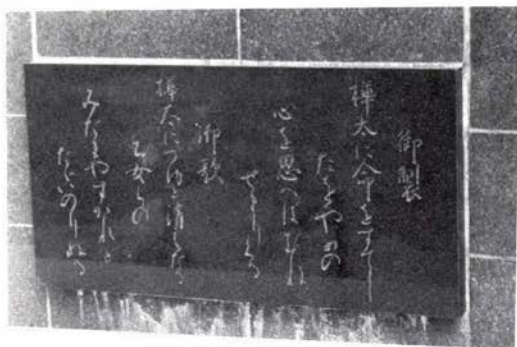
くにのためののち

さげしひとくの

ことをおもへばむねせまり

くる

(本文二三三頁)



御製

樺太に命をすてし

たをやめの

心を思へばむね

せまりくる

御歌

樺太につゆと消えたる

乙女らの

みたまやすかれと

たゞいのりぬる



御歌

(雲仙国立公園野岳上の碑)

高原に

みやま

きりしま

美しく

むらがりさきて

小鳥

とぶなり

(本文二三八頁)



御製

ひさしくも

みざりしすまひ

ひとりと

手をたゝきつつ

見るがたの

しさ

(本文二三四頁)

(華厳国持院の碑)

序 御心そのままの御歌

元掌典長
明治神宮名誉宮司

甘露寺受長かんろじきやうなが

科学者天皇としては早くから世に伝えられたことだが「歌人・今上天皇」の著書にはちよつと驚いた。宮中に五十年も奉仕しながらまことに申訳ないが、今更ながら御歌の立派さに打たれた。著者の研究に対しつくづく感服するほかはない。

思ふに陛下は、歌のほかに御心を自由に現はされることはないのであつて、歌を通じてのみ思ひのままを表現され本当の思召を述べてゐられる。大正天皇は漢詩が特に御堪能で歴代中御一人と思はれるほどであつた。明治天皇は広く知られてゐるやうに歌聖といはれた御方であつたが、明治様も今上天皇もともにおほらかで平易で何人にも同感される御歌を詠まれた。明治天皇にも今上天皇にも戦後の御歌が多いのは、矢張りもの思はれる感情のたかまりは国家非常の場合に多いのであらうと拝察する。なほ今上天皇の神事に対する御態度の立派さは申すまでもないが、昭和二十九年の神嘗祭には当時掌典長の私に侍従を通じて二首の御歌をお示しになつた。これは神事に対する御心の深さを示されたものとして私の終生忘れ得ぬところである。

目次

序 御心そのままの御歌……………甘露寺受長

増補新版に際して自序 改訂増補に際して

前篇 御歌研究 改訂

まへがき……………	15	六 御歌と日本現代史……………	68
一 御歌の語法……………	21	七 御歌歌風の開展(広瀬 誠)……………	76
二 御歌の音調……………	26	八 叙景の御歌……………	87
三 御歌の内容……………	32	九 昭和三十年発表の御歌……………	98
四 家庭感情の御歌……………	43	一〇 明治天皇御製との比較研究……………	101
五 平和の祈り……………	62	一一 御歌「ともしび」……………	112
御歌解説 改訂			
一 歌会始の御歌(1)……………	119	二 終戦後の御歌六首……………	144

三	歌会始の御歌(2) ……………	151	七	ご家庭生活の御歌 ……………	176
四	植林関係の御歌 ……………	157	八	その他の御歌 ……………	178
五	地方巡幸の御歌 ……………	160	九	余 録(一〜三) ……………	192
六	生物学者としての御歌 ……………	173			

後篇 御歌研究 増補・再増補(九・十)

一	終戦時の天皇御歌について ……………	203	六	『あけぼの集』について ……………	248
二	歌と思想(一〜三) ……………	211	七	天皇御歌と皇后御歌 ……………	256
三	天皇御歌と「天皇制」論(一〜四) ……	217	八	皇后御歌「やつがしら」 ……………	262
四	天皇御歌の歌碑(一〜六) ……………	231	九	今上陛下御成婚六十年奉祝に際して	269
五	北海道・濤沸湖畔の御製碑 ……………	241	十	昭和六十年歌会始の御儀に参列して	279

御歌解説 増補・再増補(昭和五十二年以後)

	元日発表の今上御歌を拝誦して(昭和四十三年より昭和六十年まで) ……………	285		夜久正雄謹編 ……………	339
	今上天皇の御歌(昭和六十年まで、五十一年以後再増補) ……………				

増補新版に際して自序

前版へ増補改訂版は、昭和五十一年十一月十日に、御在位五十年を奉祝記念して刊行された。それから十年を経たので、今回版を改めるに際して、さらに増補改訂の必要が出来たため、次の通りの増補と改訂を行った。

一、前版の著者謹編の『今上天皇の御歌』は、年代からすると昭和五十一年新年歌会始の御製「坂」で終つたので、今回は、六十年新年歌会始「旅」の御製までを謹編増補した。主として『国民同胞』（国民文化研究会発行）に拠るものである。

二、なほ前版に洩れた植樹祭の御製二首を加へた。謹編の御製は五百八十九首となつた。

三、後篇の「御歌研究」に「今上陛下御成婚六十年奉祝に際して」と「昭和六十年歌会始の御儀に参列して」の二篇を加へた。

四、後篇の「御歌解説」に、五十一年以降十年間の元日御発表の御製についての解説を『国民同胞』誌各年の一月号から抄出転載させていただいた。

五、前版の誤記誤植を訂正した。

六、御製歌碑が百余基に及ぶことを知つたのでその一覧表を掲載した。これは主として侍従長・入

江相政先生の御好意に拠るものである。

右の増補改訂を行ふことができたのは、一に師友諸賢の御指導ならびに出版社の御尽力に依るものである。一々お名前はあげないが深く御礼申上げる。

その他は、前版の「増補改訂に際して」に記した通りである。併せて読んでいただきたい。

編著者として一言私的な感想を記すとすれば、御在位六十年奉祝のくはだてが行はれる年に際して本版を刊行することが出来たことは望外の幸ひであつた。たまたま今春歌会始に入選参列の榮を賜はり、それを記念してアジア巡礼紀行の歌集『旅遠く』を、つづいて評論集『「しきしまの道」研究』を著はすことができ、さらに今回ここに御在位六十年奉祝の徴衷をこめて、本版を刊行することが出来たことは、著者生涯の研究を世に問ふことができたことで、昭和盛代の恩恵の賜ものと感謝の言葉を知らないものである。

昭和六十年六月二十一日

編著者 識

改訂増補に際して

今上天皇のお歌は、今日までに発表されたお歌だけです。大正十年（一九二一）御年二十一歳おんとしの東宮時代に歌会始うたぐわいはじめの「社頭暁しゃとうのあかつき」といふ御題のもとにお詠みになられたお歌から、昭和五十一年（一九七六）御年七十六歳になられた今年の歌会始の「坂」の御製ごよせいまで、五十年間にわたつて、その時々ときどきに御発表ごはつぱつになられたお歌を合せますと、五百十二首になります。『天皇皇后兩陛下御集・あけぼの集』の木俣修氏の「編輯の記」に拠りますと、未発表のお歌は「おびたらしい数にのぼる」と言はれてをります。

歌をつくるといふことは、自分の心を言葉にあらはすことによつて人に伝えることでもあります。同時に自らをみつめかへりみることもあります。「自覚」といふことです。このことは誰でもできるたやすいことのやうでもありますが、実際にやつてみると、実にむづかしいことであり、深い意味をもつてゐることがわかります。

今上天皇さまは、この御修養としての歌の道を御生涯にわたつてふみ行つていらつしやるのです。ですから、かうした御努力のあととしてのお歌は、発表されたその時々ときどきに、読む者の心をあたたく導いてくださるお歌でしたが、さらに全体を通じて拝誦びやくじゆしますと、昭和五十年の国の歩みそのもの

が、お歌にあらはされてゐると思はれるのです。

国の政治に勞せられるお心のお歌、神々祭祀のお歌、戦死者慰霊のお歌、災害をかなしまれるお歌、各種産業御見聞のお歌、自然觀賞のお歌、御家庭生活のお歌、年毎の歌会始のお歌、植林事業のお歌、国民体育大会のお歌、外国元首に対するお歌、生物学御研究のお歌等々、お歌の題材は、まことの歌の道がさうであるやうに人生万般にわたつてをります。

さうしてかうしたお歌にはもちろん天皇さまの御経験が表現されてゐるのですが、その御経験の内容は、われわれ国民の味つたこの時代の経験と本質的に変らないものであることが、お歌を拝誦するとよくわかるのです。日本人はみな日本人として、——つまり国の運命のもとに一種の劇的な経験をしてゐると言ふことができませう。天皇さまはさうした国民の歩みの先頭にお立ちになつて、国家の運命そのものを身を以て経験されるのであります。ですから、お歌を拝誦すると、われわれ国民の先頭に立つて雄々しく歩んでゆかれる天皇さまのお心が、ありがたくなしく仰がれるのです。数ならぬ身のわれわれもまた、この天皇さまのもとでこの時代を生きてきたのだ、この世を生きてゐるのだといふ実感が、痛切に味はれます。この思ひが究極において日本国民の信念であり生きがひではないでせうか。この気持は、お歌を読み味ふことによつて養はれ深められ強められるのであります。今上天皇さまのお歌の中に、かういふお歌があるのをみなさまはご存じでせうか。「七十歳になりて」といふ題の昭和四十五年（一九七〇）のお歌です。四首連作のはじめの三首を引用します。

七十の祝ひをうけてかへりみればただおもはゆく思ほゆるのみななそち

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

「よろこびもかなしみも民と共にして」——とお詠みになられる天皇さまの深いお心に、われわれは何としてお答へしたらよいのでせうか。天皇さまのおよろこびとおかなしみをしのびまつることによつてわが身を正すことこそ、天皇さまのお心におこたへする道ではありませんまいか。国をおもふことが天皇陛下のお心をしのぶことと一致するのが日本の国の国がらではないでせうか。お歌を読んでつくづくときさう思ひます。本書の書名『歌人・今上天皇』とは、かういふ意味なのであります。

天皇さまのお心を知るには、そのお歌を読むのが早道である、——とは、本書旧版の序文に小田村寅二郎氏の力説されたところです。それは昭和三十四年（一九五九）の安保騒動前夜の騒然たる情勢下での発言でしたが、天皇否定論のさかんな今日も同じことを力説しなければなりません。

もちろんわれわれが今上天皇さまのお心をよく知つてゐるなどといふ大それたことを言ふのではありません。知る努力をほらはなければならぬといふことが言ひたいのです。道が無いわけではない、お歌があるではないか、——と言ふのです。

この五十年間の、未曾有の時代に、国民とともに、国民の先頭に立つて歩まれた天皇さまのお心は、この間に発表された五百首をこえるお歌に、お心のしらべのままに仰ぐことができるのです。

御在位五十年を記念する祝典の行はれるこの時に、『歌人・今上天皇』（昭和三十四年、明治書院刊）の増補改訂版が日本教文社から、『歴代天皇の御歌——初代から今上陛下まで二千首』（小田村寅二郎・小柳陽太郎共編）の姉妹篇として出版されることは、著書にとつて望外のよろこびです。しかしこの私のよろこびはさておいて、本書がこの時に際して、今上天皇のお心をおしのび申しあげるためのお役に立つならば、それこそ本当にありがたくうれしいことです。本書を読んでくださる方々とご一緒に、今上天皇のお歌を心から拝誦して、国のため民のために日夜御心労をつづけさせられる天皇さまのお心を、つつしんでおしのび申上げたいと思ひます。

この増補改訂版にかかげた序文は、いまから十七年前に旧版が出版された時に、明治神宮の宮司でいらつしやつた甘露寺受長先生かんろじ せいちがが、その出版記念の会の席上でお話くださったお言葉の要旨であります。今回の改訂増補に際し、お許しを得て序文としていただくことができました。書中をかりてあつく御礼申上げる次第であります。

甘露寺先生が感動してくださつた『歌人・今上天皇』といふ書名は、畏友小田村寅二郎氏の示唆によるものでした。『あけぼの集』が刊行された今日では、さして驚くべきことではないかも知れませんが、昭和三十四年当時にあつて、この書名は、それだけで時流を批判する決意と信念とを示したものでした。

昭和三十五年二月六日に旧版の出版記念の会が開催され、当日の模様について、角田時雄氏主宰の『伊勢春秋』昭和三十五年二月十五日号では第一面全面に詳細に報道していただきました。すなはち

世話人代表太田耕造氏をはじめ安岡正篤、甘露寺受長、土屋文明、久松潜一、井上孚麿、永田菊四郎、今田竹千代、秋岡保治、浅野晃、佐藤通次、小田村寅二郎氏ら、学界思想界多彩の顔ぶれをはじめ、青年学生も多数参加して出席者二百余名、この種の会合には全くまれに見る盛況であつたが、この日会場の和やかにして肅然たる雰囲気の中には、今にして漸く表面に現はれんとしてゐる「恋闕」(天皇をおしたひすること)の国民感情が、春の若草のごとく萌え出でつつある息吹きがひしひしと感ぜられた。これはまことに意味ふかい情景であり『歌人・今上天皇』の出版は当日の諸氏の発言から見てもあらゆる意味で戦後の思想史に大きな機縁をもたらすものではないかと思はれる示唆をふくんでゐた。これはもはや単なる出版祝賀会とはいへない重要な意義をもつ。

とあり、当日の諸先生の御発言があげて掲載されてゐました。その御発言には期せずして今上天皇のお歌お人柄についての諸先生のお考へが述べられてゐまして、重要な意味をもつものと思はれました。いまその中から、直接お歌について触れられた太田耕造・久松潜一両先生の御発言をここに引用させていただきます。

世話人代表 太田耕造氏の所感――

今上天皇は特に神事を重んぜられ、神嘗祭における御態度の如きは歴代天皇の故事にもまさる熱意を示され

るのを常とする。このことは日本精神の本質、その掘つて来る所を明かにしてゐるものと思ふ。今日の如き時代に、今上天皇の御歌によつて日本語の本質が最高度に發揮されることは、言葉の乱れのみならず、思想・道徳の乱れに対しても無言の教へとなるであらう。”

”久松東大名督教授の所感——和歌の正道を示された——

今上天皇が学問に理解を持たれてゐることは周知のことであるが、ここにまとめられた御歌を拝見すれば、平易な言葉でおほらかな表現が多く、帝王調といふべきもので、大きな広い深い御心持が窺はれ、普通人には見られない御歌である。歌は本来技巧よりも本当の心、至純のまごころそのままに歌ふべきものであることを、陛下がお示しになつてゐるとも言へるのである。国文学としては今後研究すべき大事なテーマであり、向ふべきところを示された思ひである。”

この出版記念の会の後に、谷口雅春先生ならびに谷口清超氏は『生長の家』誌に御懇篤な御紹介を賜はり、また今上天皇のお歌についての御感想を発表されました。なほまた師友先輩の諸氏からいろいろな誌面で御紹介御激励を得たのであります。

亡くなられた小泉信三先生や亀井勝一郎氏からのお言葉も忘れがたいものでした。小泉先生は、皇太子さまに御推薦くださることを御約束してくださいました。亀井さんは「目のさめるやうないいでまづびつくりしてゐるところです」と書き送ってくださいました。

それぞれお歌を読む上に指針となるお言葉と思はれますので引用させていただきます。

さて、旧版出版後、読者諸賢から御叱正いただいたあやまりや、自分で気づいたあやまりがいろいろ出てきましたので、いつか改訂しなければならぬと考へておりました。また年数も経つにつれて、お歌の数も増加しましたので、増補の必要も出て来ました。旧版当時約二百首のお歌がいまでは五百十二首になつてゐます。

幸ひ今回、改訂増補のうへで刊行する機会を与へられましたので、大幅な改訂を加へてそれを前篇とし、旧版以降すなはち昭和三十五年（一九六〇）以降の研究、解説を後篇として増補し、さらに昭和五十一年（一九七六）の夏までに集録しえた御製全部を年代順に編集して「今上天皇の御歌」の題下に発表することとしました。新聞等発表のお歌約四百首に『あけぼの集』から約百二十首の歌を再録させていただきました。多少私の見落しがあることと思はれますので全部とは言ひ切れませんが、今日までに御発表になられた御製はほとんど全部を集録しえたのではないかと思ひます。

この件について宮内庁侍従職のおゆるしを得たことは、まことにありがたいことでありまして、これも書中をかりまして、あつく御礼申上げます。

なほ、旧版ではほとんどふれませんでした皇后陛下のお歌について、本書では多少の感想を述べさせていただきます。御製を仰ぐにつけて、皇后さまのお歌をあはせて拝誦すべきことが御歌を読んでよくわかつたからであります。殊に「やつがしら絵巻」の四十首の御歌は、まことにすばらしい記念すべき連作の御歌と存ぜられますので、昭和四十八年九月、東京上野の日本芸術院会館で行はれました「皇后さまの絵と書展——古希をお祝いして」といふ展覧会場で、私が謹写したお歌四十首全部

をかかげさせていただきました。

皇后さまのお歌を読むと、その率直な御述懐に感動するとともに、さらに深く天皇さまのお心をもしのばしめられるからであります。

本書の成るについては、旧版の時と同じく小田村寅二郎氏の御斡旋による所甚大でありました。また日本教文社の方々に非常な御尽力をいただきました。また旧版を出してくださった明治書院の三樹達生氏には、今回の増補改訂版を日本教文社から出版することについて御快諾を得ました。誌して謝意といたします。なほ、旧版以来、終始変らず激励くださつて改訂増補をおすすめくださった読者諸友諸氏に対して深く御礼申上げる次第であります。

昭和五十一年九月二十三日 師友慰霊祭の日に

著 者

凡 例

一、旧版は「現代かなづかひ」で出版したが、今回の改訂増補に際しては「歴史的かなづかひ」、当用漢字使用を原則とした。

一、御製・御歌・お歌等の言葉を混用した。(天皇陛下のお歌を御製・大御歌と言ひ、皇后陛下・皇太子殿下以下皇族の方々のお歌を御歌と言ふのが正式の呼称であるが、あまりかたくなるしくならないやうにといふ配慮から、右のやうに簡略な呼称も混用したのである)

一、御製の表記については、年々の新聞等発表のものに拠ることとした。同一のお歌に『あけぼの集』と新聞発表との二種の表記のある場合は、新聞発表に拠ることとした。理由は研究・解説との関連による。

一、御製の配列は年代順としたが、同一年度内の配列の順序については、新聞発表の順序と『あけぼの集』の配列順序とを重ね合はせる形にした。これは私案にすぎないが、新聞発表のお歌と『あけぼの集』のお歌との両方を一緒に編集する場合には、かうせざるをえないと思つてしたことである。当然のことながら、同一年度内の配列順序は御製制作の時間的順序によるものではない。

一、「昭和〇〇年元日新聞発表」のお歌は、その前年度のお歌とし、「歌会始」のお歌は「歌会始」の行はれた年のお歌とした。昭和二十一年発表のお歌は歌会始のお歌以外すべて『あけぼの集』に拠つて昭和二十年のお歌とした。

一、御題も主として新聞発表のものに拠つたが、『あけぼの集』から県名地名など補つた場合もある。その他、「今上天皇の御歌」篇に註記した通りである。

一、口絵写真については今回新たに秋田一季、「理想世界」編集部の方々の御世話になつた。

歌人・今上天皇

前篇
(旧版改訂)

まへがき

むかしはくらは小学校の国語読本や中学校（旧制、いまの高等学校にあたる）の国語教科書の中で、明治天皇の御製ミヨゼを読誦する機会を与へられたものである。戦時中は中学校の朝礼の時などに明治天皇の御製を朗誦する学校も多かつた。しかし、その多くは形式的、儀礼的なものであつて、教育勅語も同じだが、直接に、強い感動をもつて読んだり聞いたりしたことはなかつた。だから、明治天皇の御製といふと空虚なお説教の代名詞程度にしか考へられず、自分たちの思想とか生活とか、自分たちの心もちとは縁のない存在と考へてゐたわけである。しかも、形式的儀礼的には、最高の敬重を要求されたので、かへつて反抗的な気分をおこすやうな結果になつたのであつた。心から尊敬するものに対して深く頭を下げることは自然の表現だが、よくわからないものに強しひて頭を下げさせれば、その結果は、強い反抗的気分の生れるのが自然で、ぼくらはどちらかといふと、かういふ気分の中で、昭和六、七年前後の青少年時代を送つたのである。

だから今になつて、御製といふものを直接よく研究することなしに、御製なんかつまらない、あれは誰か他の人が作つてあげたのだ、などと言つて、頭から反撥おとする大人が大学出の人に多いのは無理

のないことである。自我の目ざめる青少年時代に、淡い反抗的気分の対象となつた御製が、青年時代の人生觀の確立に対して無縁な存在となり、その反抗的気分をますのみで、そのまま成人してしまつた人が多いのである。だから、御製について、話したり書いたりすると、すぐ強い反撥にであふるのであるが、それはまた、さういふ話や記述が、形式的な權威をかがげて、聞き手や読者を圧迫しようとしたり、あるいは、同じことだが、自己の權威をますために御製を利用しようとするものがあつたりしたためだらうとおもふ。ほくなどもさういふ罪深い所業におちいつたことを今に悔いてゐる一人である。しかし、いまの時代は、天皇の權威を失墜させようとする言論の方がかへつて盛んな時代だから、御製についての研究も、軽蔑冷笑されこそすれ、研究者を權威づけることにはならない。その点、研究者にはかへつて気易くありがたいと言へる。それに、短歌とか文学作品とかの研究批評といふものは、研究対象の価値に対する考察であつて、研究や批評が正しかつたり間違つてゐたからといつて、研究対象自体の価値が増したり減つたりするものではないらしい。いくら御製をほめたからといつて御製がよくなるわけでなし、いくらけなしたからといつてわるくなるわけでもない。それはただ一人の研究者または読者が、かういふふううに御製を味つた、といふことを表現して、他の読者や研究者の参考にとどまるものである。

さて、といつても大分前のことになる。昭和二十八年の天皇誕生日に、ラジオで徳川夢声、武者小路実篤、亀井勝一郎三氏の、「今上天皇について語る」といふ座談会があつた。これはききのがせない、どんなことを話すだらう、と思つて、三氏のことばに耳をかたむけた。いい座談会で、三者三様

に話がすすんだが、武者小路、徳川両氏の間で、天皇のお人がらについての話が出て、その時のことばははつきりおぼえてゐないが、要するに、今上天皇のお人がらが、かぎりなく誠実な、善意のお方で、かういふ人とは会つたことがない、といふ話になり、徳川氏がたしか亀井氏に、かういふお人柄がおうたにはあらはれてゐないのだらうか、と質問した。今上御歌の中心に迫る、この鋭い、正確な、そして同時に短歌の本質をとらへた質問に、ぼくはおもはず息をつめて、どなたかが蘊蓄をかたむけて今上御歌の解説をするのを待つた。ところが、御歌とお人柄との関係に関するかぎり、残念ながら、話は一向進展せず、夢声氏の質問は解答を見ずに終つてしまつたやうにおもはれた。本稿はいはばこの質問に応ずる解答である。

さて今上天皇の御歌の価値について現代の歌人はどう考へてゐるのだらうか？

斎藤茂吉は御歌について「御発想が如何にも御自由で具体的で、従来のいはゆる御製調とも、謂ふべきものから著しく展開してゐることに瞠目した」「天皇歌集・みやまきりしま」所載の論文より」と言ひ、その「展開」は「すべて、終戦後の御詠に属する」といつてゐる。「従来のいはゆる御製調」については、「歴代天皇の御製を拝読すると、お歌柄の上に何か一貫した特質と言つたものが感ぜられるやうに思ふ」と言ひ、「清纯とか、おほどかとか、平明とかいふやうな抽象的な言葉で表現される、共通したある匂ひがあるのではあるまいか」と言ふ。釈迺空・折口信夫もまた、異なる見地から同一の感じをのべてゐる。「昭和御製と宮廷ぶりの歌」といふ御歌論に、まづ短歌の歴史についての独自

の見解をのべ、「帝王の御歌」の特質についてかう述べてゐる。「その中、不思議な程、他と異つてゐるのは帝王の御歌であつた。歌を読むと同時に、その組みあはされた個々の題材の関係などを了解する。その先に、いち速く来るのは、外形要素——しらべが、まづ特殊だと言ふことに氣のつくことである。知識でもない、権威でもない、圧力でもない、おほどかにしてあたたかに、清くしてまどかなもの、さういふ形式要素が、何よりも強く我々に響くことに心づく。これはおそらく、我々の持つてゐる伝統的な短歌に対する直感と言ふものが、既に綜合された感覚から出発してゐて、これが宮廷ぶりだと言ふことを、一刹那無意識に感じ、瞬間に他と判別することが出来るからであらう。だから私の話は別に神話を語り、呪詞じゆしを説いてゐるのではない。論よりも証拠、文学史上の証拠であり事実である。次いでは科学の裏書きが出て来るはずである」と。また近ごろ『文藝春秋』の隨筆欄に木俣修氏が、「今上陛下の御歌」と題する小論を寄せ、「歴代の天皇の御製に比べて陛下の御歌にはその人間としての御感情が何のおはからいもなくいきいきと流れていて、それぞれの御歌がわれわれの身近にぐんぐんとせまって来るような思いがする」「自由でとどこおりのない人間的な御抒情の中におかすことのできない位を保たせておられる御歌風こそ、天皇ぶりの昭和の新風と云つてよいのではなからうかと思ふ」と言ふ。

私自身の感想をのべると、今上天皇の御歌をよむと、自分のくるしみや悲しみがとけてゆくやうな感じがする。われわれが生きてゆく上には、理不尽な目にあつて苦しみなやむ時もあるし、どうにも

ならぬ悲しみに沈むこともある。さういふ時、今上天皇の、殊に戦後の御歌をよむと、その御歌には、自分の苦しきよりもつとはげしい苦しみをへてきた人の息づかひが感じられ、自分の悲しみよりもつと深い悲しみがたたへられてゐるやうに感じられて、自分の苦しきや悲しみが御歌の作者の大きな悲哀と苦悩とにつつまれてしまふのである。ここに、いまの世の中をもつとも深く味ひ、もつとも誠実に生きてをられるお方がある、とおもふと、勇気が湧くのである。この感じ、この感じを伝えることができれば、くどくどと理屈めいたことを書く必要はない。ぼくは、ただ、この感じをたしかめようとして、御歌を研究したのである。そして、いま、この感じは自分ひとりの感傷ではない。この感じをもたらすものは、御歌の価値である、と信ずるのである。人はこれを信仰とよんで笑ふかもしれない。それはそれでもいいが、そのために、御歌の芸術的価値は、かはることがないものとおもふ。

(昭和三十四年十月十五日)

御歌研究 改訂

一 御歌の語法

『天皇歌集・みやまきりしま』（昭和二十六年刊）を手にして、はじめて次の御歌みかうたを読んだ時は、まづたく驚嘆した。

奈良にて（昭和二年）

大き寺ちまたに立ちていにしへの奈良の都のにはひふかしも

この御歌の「大き寺ちまたに立ちて」といふおことばづかひの、何といつたらいいのだらうか、自由な、大胆な、ものの本質をずばりととらへた、簡潔な表現のすばらしさに驚嘆したのである。単語のひとつとひとつとは実に平明なことばである。「大き」が「大きな」、「ちまた」が「市街」の意味であることは辞書を引くまでもない。単語のひとつひとつは日常使ひなれたことばがもとになつてゐるので、現実の感動が生き生きとあらはれてゐるのだが、さうかといつて、口語そのままではない、

古代語を活用してゐるから、感動の深さを充分に表現してゐる。日常語のもつ現実的な感じと、古代語のもつ深い情緒の表現力とを、実に自然に調和させて使つてをられる、不思議なおことばづかひである。「いにしへの奈良の都」をしのばす「大佛寺」と、近代的市街「ちまた」との際立つた対照は、「大佛寺のちまたに立ちて」といふやうに助詞をもつて接続することをせずに、短歌形式のリズムにあはせて、「大佛寺ちまたに立ちて」と直ちにつづけて、ことばの対照と、「大佛寺」と「ちまた」とを対照的に感じた作者の心もちとを完全に一致させたので、われわれは、この一語から、作者が受けた感じをそのままにうけとることができる。ここに作者の清い鏡のやうなくもりない心を感じるのである。「ちまたに」といふ「に」もすばらしい。全体として、「町なかに大佛寺立ちて」といふことばとくらべてみれば、これは死んでゐるが、御歌の句が、生きて動いてゐることがよくわかるであらう。また、かういふ歌の場合に、短歌の一、二句は、以下の三、四、五句に対しては、説明的になつてしまふのが普通だが、この御歌の場合には、一、二句も、前にのべたやうに、生き生きとして、ことばが心の動きとともに生きてゐるやうにさへ感じられるので、一首のはじめから終りまで、くまなく、作者の感動がゆきわたつてゐるのである。つまり、完全な表現である、といふ他はない。古代奈良のほひ深い近代奈良の本質は、この一首にをさめられたといつても言ひ過ぎにはなるまい。

同じやうなおどろきを次の一首にも感じた。

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

この一、二句。ことばが平明だからちよつとみると誰にでもうたへさうだが、かうずばりとはうたへないものである。うたをよむといふ意識がくもりになつて表現対象をゆがめてしまふことが多いものだが、御歌にはさういふくもりがない。海上に照るひろくさやかな月光は、作者の心にうつたそのまま、ことばとなつて、そのことばをよむものの目に見えるやうに感じられるのである。「月かげは」といふこの「は」。いま詳しく説明してゐるゆとりがないが、総じて、今上天皇の御歌では、助詞や助動詞や動詞・形容詞の語尾が、実に生き生きとはたらいてゐると思はれる。山田孝雄博士の昭和十二年発表の「国語と国民性」によると、助詞、助動詞、動詞、形容詞の語尾は、外来語のはひることを許さない日本語の根幹の部分に当つてゐる、といふ。だからこの部分が、御歌にあつて生き生きとしてゐるといふことは、今上天皇が、日本語の本質をとらへてその表現力を最高度に發揮してをられるといふことになるのである。実際、歌を作つてみると、この部分は、作者が一番苦心をする部分なのである。この部分によつて、歌が生きたり死んだりすることが多い。

かういふ例を御歌にもとめようとすれば、御歌を全部引用しなければならぬやうなことになるだらうが、そのうち、用言の終止形で終つてゐる御歌数首について、かんがへてみる。御歌は一首一首深い内容をもつてゐるので、部分的な表現技巧の例としてあげることが、解説者としては苦痛であるが、御歌を正しく理解し、その価値を正しく感じるために、かういふ分析的な研究も行はねばなるま

いと思つて、述べるのである。「東北地方視察」といふ題の御歌が二首ある、その前の方の御歌、

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

この「あはれと思ふ」、

「貞明皇后をしのぶ」二首の、あとの方の御歌、

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひいでらる

この、「思ひいでらる」、

「皇居内の勤勞奉仕者」二首、

をちこちの民のまる来てうれしくぞ宮居みやゐのうちに今日もまたあふ

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

この、「またあふ」、「草とる」。これらはみな用言の終止形で、現在をあらはすものである。くはしい説明はできないが、この現在形で結ぶことによつて、情意が進行中の生々なまなましさをもつて迫つてくるのである。何とも説明のできない、生きたことばである。簡潔に、自由に、うたつてをられるのだが、それ以外にうたひやうのないぎりぎりのことばをもつてせられるのである。何の奇もない普通の

ことばが作者の深いあつい情意によつていのちを与へられるので、それはまたことばにあらはすことのできないやうな真実のお気持そのままをあらはすのである。かういふおことばづかひは、どういふ心持から生れるのであらうか、と思ふと、ここに、「まへがき」で述べた徳川夢声、武者小路実篤、両氏のいふ「誠実無比のお人柄」がしのばれるのである。また、釈迦空氏の御歌についての感想も、同じやうだ。——「私どもが御製を通じて一ばんはつとした感じをうけることは、一つしか表現法をお持ちにならぬ——さう言つていい程、純粹無垢なもの言ひをなされることである。私どもがもし、一つより表現法を知らなかつたとしたら、どんなに清潔で、明らかで、最も正しい人間らしさを発露することが出来るだらう、といふ反省が起る。それは決して、空想ではない。かう言ふ美しい考へをしてゐるお人も、この世にはあるものだといふ信仰を、私どもも持つことが出来る。さうしてその「一人」が、日本人の間に立つていらつしやることだ」(『みやまきりしま』一一〇頁)

「奈良にて」「和倉にて」の御歌と歌の調子もおことばづかひもよく似た御歌をもう一首あげておく。昭和二十八年元日、日本経済新聞所載。

うちあぐる花火うつくし磐城なる阿武隈川の水にはえつつ

幼児のやうな清い心の驚嘆と鮮明な客観的対象とのありありとうかんでくる不思議な語法と歌調とである。

二 御歌の音調

「帝室林野局移管」四首の中の一首、(昭和三年)

こりて世にいだしはすとも美しくたもて森をば村のをさたち

この御歌を、声をあげて作者の気持ちを味ひながら読誦すると、短歌形式としての五七五七七の句の中にさらにみじかいリズムがあるやうに感ずる。「こりて、世に、いだしは、すとも、美しく、たもて、森をば、村の、をさたち」と、よまれるのである。この音数をかぞへてみると、(3・2) (4・3) (5) (3・4) (3・4) となる。これは、五七五七七といふ、音調のくり返しの中にさらに小さくなり返しを含んでゐることになる。それが作者の、懇切な、無限の、幾度くり返して言ふとも言ひつくしがたい思ひをあらはすのである。「こ(樵)りて世に出す」といふ国民生活の実際について同情されつつ、水害の危険のさらに大きいことを御心配になられて、「美しく」森をたもて、「村のをさたち」に呼びかけられたのであつて、この一首にこもる作者の、愛情と憂慮とはかぎりないものである。そのお気持の深さを語るのが、このおうたのリズムである。このリズムは、前に引用

した「皇居内の勤勞奉仕者」（昭和二〇年）二首の後の方の御歌、

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

に通ふものがある。この御歌は、ぼくの感じでは、「戦に、やぶれし、後の、今も、なほ、民の、よりきて、ここに、草とる」（5）（4・3）（3・2）（3・4）（3・4）の音数律をもつてゐるやうにかんがへられる。深い感慨のおのづから生み出した律動である。

今日一般に短歌は、声に出してうたひ耳にきいて心に味ふものより、文字に書きあらはして目に見て味ふものが多くなつてゐるが、御歌は、明らかに、音調に重点をおく短歌本来の道を進んでをられるものだと思ふ。声に出してよみ耳にきいて味ふのは万葉集の短歌の多くの性格であり、文字に書き目に見てかんがへるのは古今集の短歌の性格だと思ふ。その点、御歌は万葉調で、声に出してよみ味はれるべきものだと思ふ。「葉山にて」（昭和二四年）の御歌、

潮のひく岩間藻の中石の下海牛をとる夏の日ざかり

この、「岩間、藻の中、石の下」のリズム。軽く躍るやうなりズムが、潮のひくそこをいそがしくゆききして海牛をとる作者の気持とその場の状況をあらはして、実に、精妙である。

「香川県大島療養所」（昭和二五年）二首の前の方の御歌、

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば

このおうたは、源実朝の、

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる

とともに、一句切れの歌の不朽の作として伝へられるであらう。その真実さ、その深いいつくしみ、よく似た歌だとおもふ。この歌ばかりではない、歌の性格として、今上天皇の御歌と源実朝の歌とはよく似てゐるとおもふ。古代短歌の抒情的な直接さを失はぬといふ点において、万葉語を根拠としながら当代の日常語の現実的な感じを充分に發揮する点において、正岡子規のことももつてすれば、「一方には万葉を擬し一方には破天荒の歌を為す」点において。この点についてはまた後にふれる。

さて、歌の調子に敏感な作者の歌の中には必ずすぐれた「字余り」の歌があるものである。実朝の歌がその適例だが、御歌にあつてもこの「字余り」はすばらしい効果を發揮する。「福岡県和白村青松園にて」（昭和二四年）の御歌、

よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木のまに

第四句「遊ぶ声きこゆ」が八音で字余りである。幼い孤児たちのあそぶ、清いかん高い声が、澄みとほつてきこえてくるやうに感じられる。「あそぶこゑきこゆ」といふ字余りがはつきり強くひびくからである。

ついでに一言。この御歌の第三句、「うれしげに」といふことばについて、斎藤茂吉氏は「ただこの場合『うれしげに』の主観句は、もつと沈潜すべきであつたと思ふ」といつてゐる（『みやまきりしま』九八頁）が、うなづきかねる。「主観句」とか「沈潜」とか茂吉が何を言つてゐるのかはつきりしないが、「うれしげに」といふので、作者の「よるべなき幼子」らの運命に対する無限の愛憐があらはれ、その幼児らが、己が運命をも忘れてこゑをあげて嬉々としてあそんでゐるらしい、その可憐さに暗涙にむせぶ作者の同情があらはれてゐるのではなからうか。「主観句」をさけ「沈潜」して、「客観句」に直したら、作者のこのいつくしみはあらはれまい。「うれしげに」は、生きてゐる、完璧な表現だとおもふ。「よるべなき幼子」は、「戦災孤児」であらう。

字余りの御歌について研究をつづけよう。「折にふれて」（昭和二三年）の中に、

たゆまずもすすむがををし路をゆく牛のあゆみのおそくはあれども

この最後の句がやはり八音の字余りで、重い牛の歩みをさながらに感じさせる。作者はおそい牛のあゆみをじつと見てゐるわけなのである。おそいが、たゆまずすすむのがををしい、といふ、おそいが、力を入れて語れば、それは、おそい、といふことに對する一種の同情をしめすことになる。この字余りも微妙な生彩をもつてゐる。

静かなる潮の干潟ひがたの砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし

この最後の句「おほみどりゆむし」は、「珍しい環形動物の名」といふことである。この微生物を採集した生物学者のよろこびが、この動物を前にして、採集した時をしみじみとかへりみてゐる、その思ひが歌のしらべにあふれて、八音字余りの動物の名をそのまま結句においたのである。八音の動物の名は、それだけでは、何の感情をもとまはないことばであるが、この御歌の結句に字余りとしておかれると、作者のこの動物に対する深い愛情を語調にあらはすのである。

この御歌について、三井甲之『今上御歌解説』の未発表草稿の中に、次のやうに書いてあつた。

『静かなる』の一句をおちついて味ひ、「潮の干潟」といふ複雑の内容を簡約に示す造語を仔細に味ひ、一語一語を味ひつつオホミドリユムシと打とめると、此の珍しい環形動物のささやかなる生命に作者天皇の御心が集注し、この微小生物は大自然にひろがりつつ全宇宙につながる。この一首をしづかに朗詠すれば心境は寂滅の静かさに入り忘我の歡喜が湧く」と。

以上、今上御歌の歌調について気のついたところの一端をのべたのであるが、次の御歌のごときは、正に「奇くきしらべ」といふ他なく、説明を絶するのである。

折にふれて（昭和二四年）

枯れ立てるコスモスのみにむらがれりこかはらひわは冬立つ朝

三井甲之『今上御歌解説』一七頁——「一首の主格『こかはらひわ』を第四句に置いて第五句にポツンと『冬立つ朝』と置く、一首の姿勢は安定といふよりむしろ断続的で、小鳥の動揺する諸体がさながらに活躍してをる。『立春』を『春立つ』といふが『冬立つ』は現実に即して慣用法にとらはれぬ。変易無常の姿そのままに動揺する奇しきしらべである。」

三 御歌の内容

御歌をよんでみると、御歌が時の国民生活の實際にふれて、その中心にせまり、国民生活の指標をかかげてゐるやうに感じられることが多い。つまり、われわれの国民としての心がまへが示されてゐるやうに感ずることがあるのである。

前にふれた「帝室林野局移管」の御歌は、『みやまきりしま』によると次の三首の連作である。

うつくしく森をたちてわざはひの民におよぶをさげよとぞおもふ

こりて世にいだしはすとも美しくたもて森をば村のをさたち

料の森にながくつかへし人人のいたつきをおもふ我はふかくも

『みやまきりしま』には、御歌編集の経緯が何も記されてゐないので、はじめてこの歌集の中に発表された御歌の創作年月は明らかではないが、御歌配列の前後の關係から、この御歌は昭和二十二年の御歌とみられる。「帝室林野局移管」といふ史実の点からも明らかである。

この三首の御歌をよみ味ふと、そこに、水害をさけるために「うつくしく」森林をたもてと、まごころこめてねんごろにおさとしになるあついおこころが感じられるのである。国民生活の実際の問題に関連して、国民生活の幸福を念願してくださる、深いあついみこころは、みうたにあふれて、よむものの心に強くせまる。昭和二十二年作とかんがへられるこの御歌を、その後、九州、和歌山、伊豆水害のいたましい有様を、新聞やラジオでよみききたあとで、いま、読誦するとき、無量の感慨にうたれるのは、わたしひとりではあるまいとおもふ。前にもちよつとふれた御歌であるが「東北地方視察」二首の一首、同じく二十二年作とかんがへられる御歌は、次の御歌である。

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

かういふ御歌を読誦すると、何とも言ふことがなくなつてしまふ。国民生活にそそがれる、無私
の同情といふものが、素朴単純なことばのすべてにあふれて、うたといふよりもさういふうたになつ
たまごころそのままがぢかにゆらいでゐるやうに感じられるのである。独特無比のおことばづかひ、
精妙なりズム、さういふ芸術的表現としての価値に対する意識はうすらいでいつて、それを通して感
じられる作者のあついまごころ、それだけが感じられる。

「うつくしく森をたもちて」、「美しくたもて森をば」といふ「うつくし」といふことばは、「祈る」
とか「思ふ」といふことばとともに、今上天皇の御歌の中に実によく出てくることばである。宮内省
発行の『明治天皇御集』一六八七首の索引によると、「うつくし」といふことばの出でくる御製は、

四首である。今上天皇の御歌は『みやまきりしま』についてだけしらべてみると、総歌数七九首中、八首ある。『みやまきりしま』以後の御歌にも何首かある。「打ちあぐる花火うつくし」の御歌はそのうちの一首である。「うつくしい」といふきはめて平凡なことが御歌の中で実に生き生きとつかはれてゐるのは、おどろくべきことである。かんがへてみれば、短歌は文学なのだから、うつくしいと感ずることの表現が主になるのは当然で、だから「うつくし」といふことが一人の作者の歌の中で、何べんも出てくるからといって、おどろくにも当たらないはずなのだが、この平凡といふか、素朴といふか、この事實は、おどろくべきことである。「うつくしく森をたちて」といふ「うつくしく」といふ感じの中には、国民生活の実際とはなれぬ意味がある。「名古屋にて」(昭和二五年)の御歌、

名古屋の街さきに見しよりうつくしくたちなはれるがうれしかりけり

といふ御歌の、「うつくしく」と同じである。「うつくしい」といふのは、華美な贅沢ではない。三井甲之「永訣の書」にいふ、「美しく」ウツクシはイツクシと近親語である。厳いっくは高度の美としての莊嚴を意味し、慈いづくしむ、慈悲いづくしみ、又広く「愛」と連絡する。仏陀の慈悲、クリストの愛、孔子の仁は人情の自然の表示である。孔子は里仁為美といつた。仁に里ちかるを美となす、といふのである。此の愛憐仁慈の心からこそ都市も其の廢墟より復活するのである。此の慈悲心は和歌一首中に配置せらるる一語一語の音調から触発せらるるのである」(『今上御歌解説』) 残酷無道の心には人生、自然の美しさは感じられない。自然の美しさを感じるのは、利己的なころもちを去つて、心を自然にひらくとき

である。自然の美に心が清められる、といふのは、他をおもふ心、いつくしみの心がよみがへることをいふのである。愛憐慈悲の心もちにこそ人生・自然の美しさが感じられるのである。美の感情は愛につらなり、真の芸術は宗教的な情操をもとにする、といふことができるであらう。

敗戦直後の御歌は次の御歌である。

折にふれて（昭和二〇年）

海の外とがの陸づかに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

当時国民の衷心の悲願は、そのまま天皇のお祈りであつたのである。二十四年の御歌にも次の一首がある。「引揚者ひきあげに対して」二首の中の一首、

国民こくたみとともに心をいたためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

前の御歌の結句「ただいのるなり」が、開戦直後の、昭和十七年新年御歌会始に発表された、

連 峯 雲

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

の、結句と同じおことばである。「ただいのるなり」といふ悲痛なおことばよ。そのお祈りは国民生活の安寧によせられたのであつて、その真実さは、短歌のしらべと事実とに客証せられたのである。

二十二年一月二十四日各新聞に発表された新年御歌会始の御歌は次の御歌である。

あけぼの

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて

「うつつちのおと」は、暁の大工場から立ちおこる、ものを打つ槌の音響であらう。敗戦の廢墟からおこる復興のひびきをよまれて、「たのもしくよはあけそめぬ」とうたはれたのである。

二十二年暮には、「折にふれて」の題下に、

潮風のあらしきたふる浜松のををしきさまにならへ人人

と、敗戦の苦難に打ちひしがれんとする国民の心を、鼓舞されたのである。

この天皇のおこころもちは、おうたにはつきりとあらはれてゐるやうに、深い、深い、限りなく深い真実のものであるから、このおこころもちを九千万人の日本人が感じないわけがあるだらうか。

天皇に対する内外の誹謗にたへながら、民衆は、天皇をおしたひするところをもちつづけて、それを、天皇奉迎の群衆の歓呼と、現憲法第一条天皇制支持との中にあらはした。この天皇と国民とのこのふれあひの中から、不朽の御歌が生み出されてゐる。

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちてきぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

皇居内の勤勞奉仕者二首（昭和二二年元日各紙）

をちこちの民のまる来てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ
戦にやぶれし後の今もなほたみのよりきてここに草とる

開拓地（昭和二五年『改造』一月号）

かくのごと荒野が原に鋤をとる引揚人をわれはわすれじ

和白村青松園（同右）

よるべなき幼児どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木のまに

香川県大島療養所（昭和二五年四国巡幸）二首

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば

船ばたに立ちて島をば見つつ思ふ病やしなふ人のいかにと

日本の歴史をふりかへつてみると、天皇のその時々のおこころもちとは別に、天皇の名が国民の一部の者に利用されて、国民生活に禍殃くわがやのもたらされることのあつたことは否定できない。しかしこの歴史的反省が直ちに天皇打倒とむすびつくならば、それは重大な過誤であつて、人間の真実を打倒する結果になるものであることを警告したい。御歌がそのことを示すのである。ある人は、前にちよつとふれた「連峯雲」の御歌をとつて、天皇が国民を戦争にかりたてた、といふ人もあるらしいが、それはまちがひである。ただ、まちがつてゐない点は、今日までに発表された今上天皇御歌百八十首のうち、その人たちがこの一首だけをふりまはして鬼の首でもとつたやうに得意になるところで、それは逆に、御歌の中で戦闘を鼓吹するやうに誤解されるおそれのあるのがただこの一首のみであるといふ事実を示してゐることに他ならない。もしこの御歌が当時において戦闘を鼓吹したものであつたとしても、御歌の芸術的価値を損ずることにはならないし、全体として御歌の宗教的倫理的価値をそくなふわけではない。しかもこの御歌は、よくよんでみれば、好戦的な感情を鼓吹したものと見えないのである。昭和十六年十二月八日、開戦となり、昭和十七年新年御歌ぎ会始にこの御歌が発表されたのであつた。

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

当時この御歌について「むら雲」を敵国米英、「ふく風」を日本、「はやくはらへ」を開戦とみて、この御歌によつて敵愾心を發揮させようとした人が、戦争指導者の中にあつたことは事実だが、それ

は間違つてゐる。短歌といふものを、さういふ風に具体的事物の暗示的表現とみることはできない。さういふ解釈が、御歌を利用して自己の考へを他に押しつけようとするものなのであつて、その解釈自体が天皇の權威をかりて己が意志を国民全体におしつけようとするあやまつた考へ方から生れた解積なのである。わたしは、この御歌から、強い戦闘意志を感じたやうにおぼえてゐるが、いまかんがへてみれば、それもあさい解積であつたので、この御歌の中心は、結句「ただいのるなり」にある。

この「ただいのるなり」は、前にのべたやうに、

海の外との陸ぶかに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり
 の「ただいのるなり」と同じである。祈るのみである、祈るほかにすべもない、ただいのるのである、「ただいのるなり」と、悲痛なおこころもちをもつて、平和をお祈りになつたのである。今上天皇の戦前の平和のお祈りがどれほど痛切なものであつたかは、戦争前の次のやうな御歌によくあらはれてゐる。それぞれ当時発表された御歌である。

旭 光 照 波（大正二年）

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

社 頭 雪（昭和六年）

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

朝 海（昭和八年）

天地の神にぞいのる朝なきの海のごとくに波たたぬ世を

神 苑 朝（昭和一三年）

静かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

— 迎 年 祈 世（昭和一五年）

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

この一貫する平和のお祈りがむなしくなつて、昭和十六年開戦となつたのである。今日になつて見れば、今上天皇の平和への政治上の御努力がいかなるものであつたかは既によく知られてゐるところであるが、その事実^に照応するのが、この「連峯の雲」の御歌であつたのであらう。平和な天地におほひかぶさる連峯の雲を、吹く風のはやくはらへとただ祈りに祈られたのであつて、平和への痛切限りなき御祈念こそあれ、それ以外の意味はない。さう感すべきであつた。といふことは、いま言つてもしやうのないことであるが、当時、われわれ国民が、言ふところの緒戦の勝利に酔ふことなく、この御歌の沈痛なお祈りを正しく心に感じえたならば、日本の運命もつと幸福な道をたどりえただらう、といふことである。

この御歌はもしかすると開戦前のお作ではないかときへかんがへられる。わたしがこの文章のいちばんはじめに、御歌をよんでみると、御歌が時の国民生活の中心問題にふれて、その指標となつてゐるやうに感ずることがある、といつたのは、この御歌にあつてもいへることである。国民生活の安寧をお思ひになられる無私のおこころに、国民生活の中心問題が明らかにとらへられ、その行く末が遠く見通されるのであらうか。さういふ意味で、御歌は、現実的であり、倫理的であり、宗教的である、といふことができる。

さうして、さういふお気持ちを、概括的な教訓的な形で表現されずに抒情的な切実なお気持ちのゆらぎそのままに表現せられるので、よむものの心をなほ強くうつのである。「貞明皇后をしのぶ」(昭和二六年、『あけぼの集』「貞明皇后崩御」)二首の御歌は、孝を説いてはをられないが、その御歌をよんで、母の心をおもはないものはないであらう。

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひいでらる

この点、『明治天皇御集』のお歌は多く総合的法則的であるが、(しかし、そのことは教訓歌といふものとはちがふ)今上天皇のお歌は、直接的抒情的であるといふことができるだらう。しかも、この主観的抒情詩がそのまま国民感情としての普遍性をもつてゐる点、ここに今上御歌の国民文学とし

ての価値と神秘とがある。

四 家庭感情の御歌

『天皇歌集・みやまきりしま』は巻頭に「貞明皇后をしのぶ二首」をかかけてゐる。

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひいでらる

この二首につづく御歌は、大正十年「社頭暁」からはじまつて、大体年代順に配列されてゐるやうであるから、この「貞明皇后をしのぶ二首」の御歌を巻頭に置いてあることには、何か特別の意味があるとおもはれる。しかしこの『みやまきりしま』には、残念なことに、編纂の経緯について一切書いてないので、何か特別な意味といふその意味は、想像することができるだけで、そこに、歌集の作者の意図をかんがへるべきか、編纂者の意図をかんがへるべきか、きめることができない。貞明皇后のおなくなりになられたのが、昭和二十六年五月、歌集の刊行が二十六年十一月であることから、この二首の御歌が歌集刊行当時の作者にとつて最も切実な体験の表現であつた、そのために、この二首

が巻頭におかれた、とみることだけはまちがひないと思ふ。もつと深く想像をはせることもできるやうにおもへるが、それは想像であつて、しかも、その点については、御製であるから、作者の説明を大きくできないため、想像が正しいかどうかきめることができない。ただ、以上のことだけ注意するにとどめておかう。ともかく、この二首の御歌は、歌集刊行当時の一番新しい御歌とかんがへられる。だから、『みやまきりしま』の配列を年代順に統一すれば、この二首は、巻末にくる御歌なのである。

第一首第一句「いでましし」は万葉集に用例のあることばで、「いでましになられた、御出ましになられた、御出でになられた」といふ意味である。結語「はも」は古代語で詠嘆のことばである。

「母宮が行啓先の浅間山麓からお送りくださったこの草木よ、この草木は亡き母の賜ひし草木」といふ意味である。二首連作の一首で、第二首につづくのである。第二首の中の第二句「かた白草」は、

三白草科「はんげしやう」の別名といふ。「上茎ノ葉ハ半バ白変ス、夏季、葉腋ヨリ穗状ノ花序ヲ抽キ細カキ無被花ヲ開ク、初メ白色後ニ緑色」(寺崎留吉『日本植物図譜』) 斎藤茂吉「御集みやまきりしま」より引用) といふから、その名のごとく、白色のかつたさびしい湿地の草花であるらしい。二首連作

とおもはれるので、後の歌の「かた白草」は前の歌の「母のたまひしこの草木はも」の「この草木」にあたりとみられる。深い深い悲しみが素朴平明なことばにあふれ、ことばがある感動の表現であるといふより、感動そのもののやうにみえる、それほど真切な表現である。二首ともひとつづきの文章の形で、句切れも反転もなく一息によみくだした歌であるが、ともに第四句のはじめに「母」と

いふことばが出てきて、声を出してよむと、自然にこの「母」といふことばに力が入ってくる。第三句の終りが、「麓より」「見ること」となつてゐる点にも理由があるとおもはれるので、この第四句の「母」に力のはひる理由は完全にはわからない。

短歌の調子は、ことばの選択とともに、作者の、ほとんど忘我ともいふべき創作過程によつて生み出されてくるものであつて、話しことばの音声のやうな役割をはたすものであるから、ことばの意味よりも強く直接に作者の感動をつたへるのである。ことばはすべて、概念的要素と情意的要素、意味と音声とがむすびついてゐるとみることができ、短歌における感動の真実さをあらはすのは、主としてことばの情意的要素となる音声の高低強弱に代る歌の調子しらべである。明治天皇御製「声」、

目に見えぬ人の心のよろこびも声によりてぞ聞きしられける

といふ「こゑ」が、芸術的に客観化される時に、うたの調子となるのである。だから非常にすぐれたうたをよむと、作者の声がきこえるやうにおもへることがある。それは、その歌の真実さ、生きた感動が一首全体の調子にあらはれるからであらう。歌の調子によつて、歌の中にあることばがつよくひびいたり弱くなつたりするので、その点は字余りのあるうたによくあらはれてゐるが、字余りでなくともさういふことはいくらでもある。人のこゑは瞬時にして消えうせるが、そのこゑにあらはれる人の生きた真実がうたのしらべに表現されて国語の滅びぬかぎり永久にのこるのである。

「憶良らはいまはまからむ子泣くらむそのかの母も吾をまつらむぞ」といふ山上憶良の有名な歌の中

の第三句、「子泣くらむ」は全体の中からはだつて強くひびいてきて、子をおもふ作者の強い感情をむき出しにあらはしてゐる。これが歌の調子である。「しらべ」といつても「リズム」といつても同じことだ。五百年も千年も昔の人の心もちが、歌の調子につてありありと、作者の声をきくばかりに迫つてくるのは、短歌独得の力ではないだらうか。

最近は何でも歌が多くなつて、この、歌の音調といふことについてはあまり注意がはらはれてゐないやうであるが、前にも書いた通り、今上天皇の御歌では、この歌の音調が非常に大事に見えるので、特に注意してよみ、あぢはひたいとおもふのである。万葉調とか古今調とかいふのも、主としてこの歌の音調の全体をいふので、万葉語を使つて「かも」とか「妹」とかいへば万葉調、「かな」「きみ」で古今調といふのでは困る。

さて、御歌にもどる。御歌の第四句「母」に力がはひるとのべたが、この第四句のはじめに力のはひる例を思ひうかべるままに二、三首あげてみる。

夏草の野島が崎の浜風に妹がむすびし紐ふきかへす (万葉集・柿本人麿)

笹の葉はみ山もさやに乱れども吾は妹思ふ別れ来ぬれば (同右)

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心われあらめやも (金槐集・源実朝)

物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ (同右)

御歌が、かうした歌をおもひうかべて、意識して「母」を第四句のはじめにおいたものではないことは、言ふまでもない。偶然の一致で、いづれも短歌の形式からくる自然の音調の暗合である。ただ

かういふ例をかんがへてみると、御歌第四句、「母」の一語は、一首のしらべの上から、作者が深い感慨をこめてうたつてゐる、さういふ風にこの歌の調子をあぢはふことは間違ひなさうだ。だからこの歌を声をあげてよむと、二首ともに、なき母を「母」とよぶ作者のかぎりない感動が、その声さへ聞えてくるばかり切実に、感じられるのである。

いでましし浅間の山の麓より母のたまひしこの草木はも

第一句「いでましし」は、古語であるが、現代口語を話すものにもたやすく理解できる、非常に具體的な生きたことばである。「浅間の山の麓」の「の」は、音調の上で小さなくりかへしをもつてゐる。「浅間の山、麓より母の」と続くのである。前にあげた「奈良にて」その他の御歌にもこの「の」のくりかへしがある。

大き寺ちまたに立ちていにしへの奈良のみやこのにほひふかしも (奈良にて)

潮、ひく岩間藻、中石の下海牛をとる夏の日ざかり (葉山にて)

一般に同じ言葉をくりかへすとその言葉の意味を強めることになるが、このやうに助詞「の」をくりかへす場合には、主として音調のくりかへしとなつて、一首の中に小さなリズムをおこして、作者の感動の深さをしめすらしい。今上天皇の御歌について解説を書かうとおもふまでは、こんなことは

かんがへてもみなかつたが、短歌の音調には、五七五七七のリズムの中にかういふさざ波のやうなり
 ズムがあるらしい。前に例歌としてあげた人麿の「夏草の」といふうたにも、この「の」のくりかへ
 しがある。なほ「浅間山麓」といふより「浅間の山の麓」といふ方が、具体的であることも注意して
 よむべきだらう。「麓より母のたまひし」といふのは、われわれのことばで普通にいへば、「麓から
 母の送つてくれた」といふことばに当るが、この途中の「送る」とかどうとかいふ手段をあらはすこ
 とばを抜いてしまつて「麓より母のたまひし」と直接につづけるので、母が下さつたといふ意味が強
 くなつて、そこに母の心の直接に作者に迫りくる切実さが、表現されてゐるのである。そして、最後
 の句は、「この草木はも」と、言ひつくしがたい感動を、眼前の草木をさししめすことにこめてある。

ことばが、すべて、具体的で実に生き生きとしてゐる。不思議といふ他ない。「たまふ」といふこと
 ばは、概括的であるが、しかし感情の上で具体的直接的なのである。結句「はも」は、これも古代語
 であるが、「は」に詠嘆のことばの「も」のついた形とかんがへれば、現代語を話す者にとつても耳
 なれぬことばとはならない。日本武尊の辞世の御歌、

をとめのとこのべにわがおきしつるぎの大刀たちその大刀はや

の「はや」とは少し意味の上でもちがふらしい。この日本武尊の御歌の「はや」が、そこにないも
 の、ふたたび手にとることのできないものに対する強い詠嘆のことばとなつてゐるのとくらべあはせ
 れば、御歌の「はも」は、眼前に存在するものに対する同じやうに強い詠嘆のことばである。古代語
 が現代的感覚によつて実的に使はれてゐる。万葉集に多彩豪華な表現力をあらはした日本古代語

の生命は、ここに再生したかに見られて、この点、今上御歌は源実朝の歌とならんで、和歌史上の双璧といふことができよう。万葉語をそのまま模倣した歌は結構いくらでもある。普通万葉調の復活などといつてゐるのは、さういふものだが、今上御歌では、万葉語が現代に再生されてゐるので、万葉模倣のアナクロニズムにおちいらず、現実的感覚が生き生きとすることばにあらはれて、古語から現代語まで一貫する国語の生命力が奔騰活躍するのである。かう書いてくるとおのづから心にうかんでくるのは、三井甲之先生の長詩「祖国礼拝」（大正七年）の一節である。大分古い詩であるが、原始生命の憧憬と古代日本語の生命の復活への熱望を読みとることができる。

青山をから山なす

号泣の

民族移動の悲劇を

記録にのこせし

いにしへの

みちよ、

めさめよ

今、大正の大御代に、

ことそぎて

力ある

いにしへの

みちよ、めさめよ。

この「ことそぎて力あるいにしへのみち」、ことば、こころもちを、今、現実に、今上御歌に、仰ぐことができる。かういふ意味で、今上御歌には、短歌の将来を開拓する萌芽が実践的に示されてゐるやうに見える。

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひいでらる

第二首のこの御歌は、一首全体が話しことばのやうな単純さをもつてゐる。「池の辺のかた白草を見るたびに母の心が思ひ出される」と言へば、それは、話しことばのなから切りとつてきたことばのやうになるが、御歌は、この話しことばの生々しさを失はずに、それを短歌の音調にとかしこんで、永久化するのである。「母の心の思ひいでらる」といふおことばづかひよ。お心のうごきそのままにうたはれて、一切の作為を加へられない。心は動いてゐるそのままにことばになつてゐる。その一瞬の真実のことばであつて、二度とくりかへされぬことばである。これ以上に真実の表現といふものはかんがへられない。これは、人生無常の痛感が深ければ深いほど、現実一瞬の感動が深く味はれるためなのであらうか。

室戸むろとなる一夜ひよの宿のたましだをうつくしと見つ岩間岩間に

この御歌の「一夜の宿のたましだを」といふ痛切なしらべは、作者の現実の人生に対する深い感想——詠嘆と愛情とを語るものであるが、ことばにあらはすことのできないやうなはかない一瞬の心のゆらぎに心をかたむけるのは、現実の人生に対するこの深い愛情であつて、それは人の生命ははかなく、無常であるといふ痛感によつて生れるやうである。人は死ぬものであるといふ人間の運命を痛感するとき、このはかない人の一生を現実の世界にむすんで、家庭・隣保・社会・国家・国際人類の歴史的展開に協力責務の生をささげることによつて、はかない一生が人類無窮の生の進展につながるといふ信仰に達する。ここに生き甲斐と安心とが不断の努力の中に感じられるのである。だから生命がはかないと痛感することは、享樂にはしつたり隠遁におちいつたり人生を蔑むことにならないで、現実の生活を尊ぶことになり、それは個体の生命の尊さをおもふことにもなる。人生無常の痛感が人生の愛惜と表裏し、永久の生命をおもふおもひが現実瞬時の生命を尊ぶのである。

「母の心の思ひいでらる」といふゆらぐが如きことばのしらべは、「一夜の宿のたましだを」と心をこめてうたふ作者によつてはじめてうみ出された稀有のしらべであつて、それは作者の内面生活の稀有の信にもとづく表現であるとかんがへられる。無心の独白にも似た「池の辺へのかた白草」の御歌をくりかへしてよみ味へば、人は、この歌がいいとかまづいとかいふことをこえて、直ちにめいめい自分の母を、母の心をおもはずにゐられないであらう。それが人のまごころといふものであらう。

さて、この御歌では二首とも「母」といふことばをおつかひになつて、皇室内の特殊語もおつかひにならず、「母君」とも「母上」とも言はれない。このこともこの御歌の簡素な力づよきをあらはすやうにおもへる。敬称をつかはぬ方がかへつて切実な直接さをあらはしてゐるのである。かういふ点は、作者がいちいち効果を意識してことばを選択するわけではないので、自然の表現と言つてよいのだらうとおもふが、自然の表現に価値があるのは、表現される心持に価値があるので、その心持をただしくたもたうとする作者の努力が表現の背景にひろくふかく存在してゐることを忘れてはならない。

大正十四年撰政宮時代の御歌に、

山 色 連 天

たて山の空に聳ゆるををしきにならへとぞ思ふみよのすがたも

とある、この「みよ」は、作者が撰政宮であられたから、「よ」(世)に敬称をつけられたので、御即位ののちはすべて「世」となつて、敬語を付してをられない。作者の身分上の自覚の微妙精到を語るものではなからうか。一例のみあげておく。

神 苑 朝

静かなる神のみその朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

これは昭和十三年の御歌である。

「貞明皇后をしのぶ」の御歌の第一首では、「いでましし」、「母のたまひし」の「たまひし」が、敬語であるが、その敬語は、どちらも簡潔であつて、作者の母をしのぶ敬愛の切実さをしめすのである。ことばが虚飾なく簡潔で、かへつて心がふかくこもるのである。

もうひと言。この二首の御歌の発表は、近代の御製の歴史の上で、画期的におもはれる点があるが、それは母宮をおしのびになるかういふ御歌が、『明治天皇御集』にも『大正天皇御製歌集』にも見あたらない、といふ点である。『明治天皇御集』には、

董（明治四〇年）

母が手にひかれてあゆむうなるこのたちとまりては董つむなり

といふ御製があつて、母とをさな子の連れ立つて道をゆく平和な一時の様子がかなし^{ひとよ}いまでにはあらはされて、すぐれた歌であるとおもはれるが、これは勿論、明治天皇が直接ご自身の御母宮をおもふ心をおうたひになられたのではない。また、

夢（明治四三年）

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覚めにけるかな

月似古（明治三八年）

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかげかな

思 往 時（明治三七年）

たらちねのみおやの御代につかへにし人も大かたなくなりけり

をりにふれて（明治三六年）

月の輪のみさゝぎまうでする袖に松の古葉もちりかゝりつゝ

の御製がある。第三首目、第四首目は、御父天皇孝明天皇をおしのびになられた深い感慨のこもつた御製であり、第一首目も第二首目も同じやうに解釈できる御製である。いづれも直接御母宮をおしのびになられた御製ではない。

『大正天皇御製歌集』には、明治三十四年、東宮時代に、

吾が子の生れたるを見そなはずとて

皇后宮のいでましけるをかしこみて

このもとに今日仰がむと思ひきやわがははそはの高きみかげを

といふ御歌がある。「貞明皇后をしのぶ」の今上天皇御歌に比してその切実な直接性においてはうすいやうにおもはれる。これは、かういふことがいへるかどうかむつかしいが、やはり御生母おぼであらせ

られなかつたからではなからうか、とおもはれるふしがある。この他には、母宮又は御生母をおしのびになつておうたひになられた御製は見当らない。

『明治天皇御集』『大正天皇御製歌集』はともに全歌集ではないから、編纂の際、発表をさしひかへられたほど切実直截な御製が洩れたことも充分かんがへられるのであるが、明治天皇の御製は、父天皇をさされる場合に、「おや」といふ言葉をつかつてをられる点、今上天皇が「母」といふ具体的なことばをつかつてをられるのに比すれば、その限りでは、概括的一般的である。この点今上天皇の御歌が抒情的で具体的であるといふことは、それだけ人間的な表現であるといふことであつて、これは恐らく、敗戦といふ未曾有の経験によつてあらはれた「人間天皇」の率直なお心をしめすものであらう。またかういふ御歌が発表されることにも時代人心の推移があらはれてゐるし、かういふ御歌の生みなされる天皇の、いはば、ご家庭環境の推移も、明らかにあらはれてゐるのであるから、その意味でこの今上天皇御歌は、敗戦後の昭和の時代を表現したものと云ふことができる。

一首のうたを精密に分析すれば、そこに個人の境涯と時代のかげとが採り出されるにちがひないとおもふが、この二首の御歌のごときは、うたのしらべ、ことばづかひ、その素材、すべて、時代の総合的表現となつてゐる。しかも、具体的な直接さを失はない抒情詩であるから、あまりいいことばではないが、昭和短歌の代表的な傑作といふことができるわけである。

明治天皇の御製には「孝」をおよみになつた歌が多い。前記四首は、「みおや」をしのばれた比較

的直接的な御製であるが、その他、次のやうな御製がある。

孝

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ
 (明治四五年)

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり
 (明治四〇年)

親 (明治四〇年)

たらちねの親の心をなぐさめよ国につとむる暇ある日は

たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

親 (明治三七年)

ひとりたつ身になりぬともおほしたてし親の恵をわすれざらなむ

国の為たふれし人を惜むにも思ふはおやのこゝろなりけり

引用の順序でいふと第四番目と第六番目の二首が、直接具体的であるが、他の四首は、教訓的である。この教訓的といふのは、悪い意味でいふのではない。明治天皇御製の教訓的内容の歌は、情意の律動をともなつてゐるので、道徳的法則を直接体験の中とかしこむ熱烈さをもつてゐて、悪い意味

の教訓歌とは全く異つた思想詩としての威力をもつてゐる。直接具体的な二首とおもはれる、第四、第六番目の御製も、規範的である点では、他の御製に近い調子をもつてゐる。この明治天皇の御製と比較すると、今上御歌の特質がよくわかるので、それをぼくは、具体的、直接的あるいは抒情的といふことばで表してゐるのである。そして今上御歌をよむと、作者の具体的体験の中にひきいれられて、作者と同じところをあちははされて、自然に、実践的な意味で、親をおもふころもちをよびおこされるのである。具体的な表現が思想的内容をふくんでゐるのであつて、その表現内容としての感動の深さ清らかさに、人としての理想を仰がしめられるのである。

日本国民が天皇を国の象徴と仰ぎ敬愛をよせるのは、偶像を崇拜してゐるのではない。はつきりと御歌にあらはれてゐる人間のまごころを仰いでゐるのだ。日本人が天皇を国の中心と仰いできたといふことは、日本人が人間のまごころの尊いことを見失はなかつたといふことで、世界に誇るべきことである。それは歴史の中からも発見されるが、ぼくは、いまそれを御歌をよんで感じるのである。

昭和二十六年講和会議が終つて日本の独立が回復した時の御歌五首の中に次の一首がある。この御歌は『みやまきりしま』刊行以後の御歌で、当時の新聞に発表されたものである。

冬過ぎて菊桜さく春になれど母の姿をえ見ぬかなしさ

敗戦のかなしみを共にされた母宮貞明皇后が、日本国独立のこの春のよろこびをとにもにすることの

できないことを悲しまれたこの御歌の中に、未曾有の時代の苦難を経歴された天皇と皇太后とをむすぶ母と子の切実な情愛があふれてゐるのが感じられる。深淺公私の差こそあれ、似通ふ体験をへてきた昭和の民にとつて、この御歌は国民感情の綜合的表現と感じられるのである。この御歌についてのべたいことは、すべて、前の二首の御歌の謹解につくしたと思ふ。天皇もまた人の子としてこの苦難動乱の時代の悲喜を深く深く味はれたのである。それをおもひ、ここにまたたびこそをあげて御歌を誦すれば、おのづから現世の憂患をはらはしめられるのである。次の御歌は昭和二十八年元日新聞紙上に発表された御歌である。

ありし日の母の旅路をしのぶかなゆふさびしき^{かみ}上の山にて

母宮をおしのびになつて、このやうに哀切な追悼のお歌をおうたひになつた天皇なればこそ、また、あたたかいご家庭の団らんをもおうたひになられるのであらう。天皇御歌には、痛切な家庭感情をおうたひになつた御歌が多い。

岡山にて

池の辺のそぞろありきに娘らとかたるゆふべは楽しかりけり

(昭和二八年)

軽井沢にて

ゆふすげの花ながめつつ楽しくも親子語らふ高原の宿

(昭和三〇年)

このやうな御歌もまた『明治天皇御集』には見ることの少ない御歌である。御集にのらなかつた明治天皇の御歌には、この今上天皇の御歌のやうに、直接、ご家庭の団らんのおよろこびをよんだ歌があるかも知れないが、うかがひ知るよしもない。御集の御歌に関するかぎり、明治天皇の御歌には、かういふ、ご家庭の生活の、直接、具体的表現は、見当らないやうである。

さう言へば、「天皇のご家庭」といふ言葉も、戦後はじめて新聞記事にあらはれた言葉である。天皇が皇后、皇太子はじめ皇子皇女がたとご家庭の団らんの一時をすごしてをられるお写真なども、戦中戦前には見るこのでしなかつたものである。かつては天皇の公的な一面のみがとりあげられて、私的な一面が故意に民衆の目から遠ざけられてゐたのであらう。天皇もまたわれわれと同じやうに、「人の子」であり「人のおや」であるといふ事実立つて、その悲喜の家庭感情を御歌に抒すること、は、現代の幸慶である。

「娘らとかたる」とおうたひになり「親子語らふ」とおうたひになる。少しも權威ぶらない自然の表現が、何ともいへぬ親しみを感じさせるのであるが、この、ながれるやうなおうたにはしみじみとしたご情愛がこもつてゐて、深い感動をさそはれるのである。平凡な事実をあたりまへなことばづかひでうたつて、深い心がこもつてゐるといふことは、その平凡な事実のもつ意味の深さを、作者がほんたうに知つてゐるからである。さう考へると、このみうたが、二十八年三十年のみうたであることを

かんがへなくてはならないやうな気がする。

平凡、といへば平凡な家庭の団らんを深くあちはふには、この平凡をまもるために非常な努力があつたり、あるいは、この平凡すらおびやかされた長い年月があつたりする時である。このみうたも、やはり、無常の人生に対する痛感と表裏するのではなからうか。生きてゐることの価値をほんたうに知るのは死に直面した人であるやうに、平凡なものの価値をほんたうに知る人は、非凡の経験へた人であらう。このみうたの、おちついた、やすらかな感じの背景には、作者のこえてきた狂瀾怒濤の人生体験がうかがはれる。

しをれふすあしの葉がくれいづこよりわたりきにけむこがものあそぶ (昭和二十七年)

この「こがも」によせる痛切な慈愛は、背後に、家庭恩愛の生活の深さをおもふ感情がある。すでののべた、

青松園にて

よるべなき幼子どもうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木のまに

の、「よるべなき幼子」によせる、何とも言ひやうのないご同情は、「親なき子」の悲しみにそそぐ涙で、家庭団らんのよろこびを深くあちはふ心からこそあふれである。この家庭感情に発する慈愛は、今上天皇の御歌の核心であつて、源実朝の次のやうな歌をおもひださせるのである。

道のはとりに幼き童の、母を尋ねていたく

泣くを、そのあたりの人に尋ねしかば、父

母なむ身まかりにしと答へ侍りしを聞きて、

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる

五 平和の祈り

今日までに発表された、今上天皇の御歌の中で一番初期のものは、大正十年東宮時代の「社頭暁」の御歌である。

社頭暁

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

今上天皇は明治三十四年四月二十九日のお生れだから、大正十年御歌会始のおうたといふと満十九歳でおよみになつたことになる。後年の御歌にあらはれた天皇てんすんはすでにこの歌に感じられる。殊に、最後の句の「もりぞみえゆく」といふおことばづかひの獨創性は、後年の御歌に美しく花開いて、稀有ひ未曾有の表現となつたものである。

鳥の音とともに夜はほのぼのとあけはじめて、代々木の宮、明治神宮の森がだんだんはつきりと見えてきた、といふことになるが、「代々木の宮の森ぞ」と言つて、明治天皇をおしのびする強いおこころもちを「ぞ」の一語に表現し、「見えゆく」といふあまり例のなささうな、それでゐて極めて自

然のおことばづかひによつて、明治神宮の森の次第次第に目に見えてゆく時間の経過と、それを仰ぎみてゐる作者の鑽仰せんぎやうのころもちとをあはせて表現するのである。だから、この最後が「みえける」とか「みえくる」とかいふ習慣的な表現をとつたとしたらこのうたの価値は低いものになつたにちがひない。それを、作者が自分のころもちに最も適切なことばを発見したことによつて、この御歌が生き生きと感ぜられるわけである。この、平凡な日常語の具体性を活用駆使して、微妙な心もちを表現することのできる天才の萌芽はこの「みえゆく」の一語に明らかである。そして、また一面この御歌は、明治神宮を仰ぎみて明治天皇をおしのびするお心もちを実によくあらはしてゐる。横山大観かか書いた暁の明治神宮の絵のやうに、あかつきのひかりの中に次第にすがたをあらはしてくる代々木の宮の美しい森は、そのまま、時代のシンボルであつたらう。

大正十年、いろいろな意味で歴史の中に退いてゆく明治天皇の御事業を、暁の薄明にしのんだ若き作者は、歴史の回顧と将来の展望とを一つ心に感じてをられたであらう。今上天皇の御歌集のはじめにあるにふさはしい御歌である。明治天皇は神とまつられて時代の背景から新しい時代への光を投じてをられたわけであるが、その新しい時代も、遂に、二次の大戦争となり敗戦となつて、明治天皇のご経綸のカタストロフに終つたことをおもふと、明治から昭和へと推移した時代の流れを、深く深くご体験になつた今上天皇のお心もちが、どのやうに苦しく悲しみにみちたものであつたかが少しは想像されるのである。この大正十年の御歌が発表になつてから約二十年、日米英戦争が勃発したのであるが、その開戦前の御前会議で、今上天皇は、明治天皇の御製「よものうみみなはらからとおもふ

世になどなみかぜのたちさわぐらむ」を朗々と誦されて平和的解決のご衷情を吐露された、といふことである。これをおもひ、再び、大正十年の前記の「社頭暁」の御歌を誦すると、今上天皇の明治天皇鑽仰のおこころもちが一貫したものであることがわかる。そして戦後の日本が、明治からのやり直しであることをおもふと、なほさら明治天皇と今上天皇との歴史のつながりがほとんど運命的であるやうにおもはれるのである。その予感が、「社頭暁」の御歌にあつたのではないのだらうか。

同年、同じ御題の大正天皇の御製は次の御製である。

神まつるわが白妙しろたへの袖の上にかつうすれ行くみあかしのかけ

この御製が、『大正天皇御製歌集』の最後の御製である。同歌集大正十年のところにはこの一首しかのつてゐない。他の御製はない。恐らくこの後は、大正天皇のご病気が重くなられて、うたをおよみになりうるまでには回復なさらなかつたのではないかと拝察される。悲痛凄絶な絶唱とも拝誦されるこの御製と、さきの東宮御歌とを対比してみると、そこに明らかに時代の転機が感じられるのである。そして、その転機のゆゑにこそ、「代々木の宮の森ぞ見えゆく」といふ御歌が発表せられたのであらう。

翌大正十一年には、今上天皇は摂政宮として御歌を発表になつてをられるが、この年にはもう大正天皇の御製のご発表はたえてしまった。摂政宮の御歌は次のうたである。

旭光照波

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

この御歌から、昭和十六年の対米英開戦まで、御歌十八首のうちで、実に五首までが、直接平和のお祈りを内容とする御歌である。殊に、昭和六年「社頭雪」以後は、開戦までの十首中四首がこの内容の御歌である。その御歌を列記すると次のやうになる。

社頭雪（昭和六年）

ふる雪にこころきよめて安らげき世をこそいのれ神のひろまへ

朝海（昭和八年）

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

神苑朝（昭和一三年）

静かなる神のみその朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

迎年祈世（昭和一五年）

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

一首一首にこもる痛切な平和のお祈りも遂にむなしく、昭和十六年十二月八日、日本は世界的大動

乱の渦の中にまきこまれて、対米英開戦となつてしまつた。昭和十七年新年の御歌は、次の御歌である。

連 峯 雲

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

この御歌の「ただいのるなり」といふ結句は、実に悲痛なしらべをもつてゐる。前記の御歌に、「安らげき世をこそいのれ」、「波たたぬ世を」、「神にぞいのる」、「栄ゆかむ世をこそいのれ」と、いのりつづけられたおことばに比して、この「ただいのるなり」のおことは、一切の努力も遂にむなしく、今はただいのるばかりである、といふひびきをもつてゐるとおもふ。平和のお祈りは、平和の天地におほひかかる暗雲の掃攘そうじょうを、ただいのる、いのりに一貫してゐるのである。天皇の平和のお祈りのこれほど痛切であつたことと、昭和六年滿洲事変後、敗戦まで十数年間のうちつづく戦乱とは、実に悲壯な対照をなしてゐる。このことについてはいまここには述べない。ただ、御歌をよむかぎりでは、今上天皇の平和のお祈りは戦前、戦中、戦後一貫してたとへやうもないまでに痛切であるといふ一事、この一事は否定することができない。これは、今上天皇が平和主義者であつたといふやうなことではない。御歌のばあひには、主義主張といふよりもつと具体的な平和の祈念である。そしてこの祈りこそ人間真実のきはまるところであつて、それは実に、終戦の混乱のうちに実現されたのである。

敗戦、米軍の進駐、占領下の幾年かすぎて、昭和二十七年独立の年の天皇誕生日に発表されたおよろこびの御歌の五首最後の一首は次の御歌になつてゐる。

わが庭にあそぶ鳩見て思ふかなたひらぎの世のかくあれかしと

「わが庭にあそぶ鳩」、それは日常見なれた姿である。その姿を見つつ「たひらぎの世のかくあれかし」と願ふ、前の句の日常性と後の句の広大な念願とが対照されて、あとの句の念願が、具体的で強く烈しく燃えてゐることをしめすのである。ことばそのものも平凡であることがかへつてそこにこもるおこころもちの深くはげしいことをしめしてゐる、直截簡潔の古代歌謡に見られるやうな強いはげしい御歌である。この御歌のはげしさは、大正天皇の次の御製をおもひおこさせる。

猫（大正九年）

国のまもりゆめおこたるな子猫すら爪とぐ業は忘れざりけり

日常卑近のものもの姿にも国家の運命をおもふのは、そのこころもちがそれだけ強く日常の心もちを支配してゐるといふことである。この強くはげしい意志が祈りである。

六 御歌と日本現代史

今上天皇の御歌を年代順によみかへしてみると、さながら日本現代史をたどる思ひがする。

海 辺 巖（昭和五年）

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐいはほの力をぞおもふ

この御歌をよむと、米英に対抗して軍備の充実につとめ世界に卓立してゐた当時の大日本帝国の誇りと勇氣とが、独立防護の決意の中に生き生きと感じられる。当時まだ少年であつた筆者の身辺にも、時代の緊張は、ひしひしと感じられたくらゐであるから、当時の社会の経験をもつ老年の人々にはさらによくわかるのだとおもふ。昭和五年といふ年はロンドン会議のあつた年である。対米七割の海軍軍縮条約が、「皇國」の独立を極めて危い状態におとし入れる可能性があるといふことで、国論沸騰したのである。

いま思へば夢のやうだが、かうして、一步一步、日本は米英に押されてきたのであらう。米英に対抗したといふことが己を知らぬうぬぼれであつた、と当時から二十五年も経つてから言ふのは、全くの

結果論で、人生の機微を知らない者の言である。そのうぬほれはどこから来たか、と言へば、日露戦争の勝利である、といふことになるから、日露戦争に敗けた方がよかつた、といふことになる。敗けたら戦争をしなかつた方がいい、といふことになるから、結局、米露の植民地にでもなつてゐたらよかつた、といふことで、国の独立も何もない、文化の否定になつてしまふのである。国民の全体感情といふものは、生きる意志にしたがつて、国家の独立をまもらうとするのであるから、政策の誤謬を結果論から指摘して、国家の独立意志を否定するのでは、話にならない。国家独立防護の勇氣と誇りとは、何時の時代にも貴ばれる人類文化の至宝である。その凜然たる志気をこの御歌に感ずる。

海上雲遠

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

昭和十一年の御歌である。昭和六年満洲事変勃発、八年国際連盟脱退、大日本帝国が極東に孤立して、世界に対峙した当時の御歌だ。当時、米国は太平洋艦隊をハワイに集結して日米関係は緊張の度を加へたのである。本州南端の潮ノ岬に立たれてはるかに洋上の雲をながめられた天皇のお心の中に、この国際的緊張のうつらぬはずはない。堂々たる格調と雄大な視野とが、卓立する国家意志の表現となつたのである。といつても、その「雲」が米艦隊である、といふのではない。この御歌はあくまで抒情の御歌で、寓意的な御歌ではない。作者の感懐の大きさと勇氣とが、日本の国際的緊張を暗示するのである。潮岬灯台の大芝生に御製歌碑が立つてゐるといふ。

この二首が、国の独立をまもらうとする決意の凛々しきとすがすがしさを暗示してゐるのに対して、次の御歌は、平和の御祈りの歌であるが、前の二首と同じやうに、当時の日本のおかれた国際関係を暗示するやうに感じられる。戦争勃発の危機が平和の念願を強化するのである。したがつて、これらの平和を祈る御歌にも、当時の日本の足跡が感じられるのである。

社 頭 雪（昭和六年）

ふる雪にこころきよめて安らげき世をこそいのれ神のひろまへ

朝 海（昭和八年）

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

神 苑 朝（昭和一三年）

静かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

次の昭和十五年「迎年祈世」の御歌は、日独同盟締結と関係が深い。おそらく天皇はこの同盟を東西諸国すなはち世界文明諸国の平和共存への歩みとなさらうと希求したものであらう。政治の現実と理想とはなればなれになつてしまつたのは悲劇だが、理想をわらふわけにはゆかない。

西ひがしむつみかはして榮さかゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

歌の意味は「東西の国々人々が親しみ合つて榮えゆく未来の世を祈る、年頭に際して」といふ意味である。「むつみかはす」は「むつびあふ」の意味、「榮ゆかむ」は「榮えゆくであらう」と未来についていふのであつて歌はここで切れない。「榮ゆかむ世」とつづくのである。「榮えゆく将来の世界」といふ意味である。「世」は、世界でもあり時代でもある。文法的にいふと、「榮ゆかむ」の「む」は終止形ではなく連体形であつて、「世」といふ体言にかかつてゐる。そつくり口語に訳すと、「榮えゆくであらう世」となつて、ヘンな日本語になるので、かういふ言ひ方は今はなくなつてしまつた。「こそいのれ」は今日では「こそいのる」と文の切れるところである。やはり文語の文法で「こそ」といふ前の語をつよめる助詞があると、その文の結びの用言が、已然形になるのである。「榮ゆかむ世をいのる、としのはじめに」といふのと、同じ意味である。「こそ」とあるので、将来の平和共存の世界に対する念願が痛切なものであることがわかる。

ここまで、昭和初年から対米英戦争開戦までの御歌の中から、特に時代的な感じの濃厚な御歌をあげてみたのである。その時々の御歌が、国民の全体生活と深いかかはりをもつてゐることの一端はこの抄出によつても明らかであらう。開戦直後の有名な「連峯雲」の御歌については既に述べた。(本書六六頁)

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海おほうみのはらに日はのぼるなり

当時既に戦局危急を告げて、日本は制海制空権を失ひ、日本軍は各地に孤立して苦戦をつづけてゐたのである。そのことを当時の岡村誠之参謀に指摘されてこの御歌を誦した感動はいまだに忘れぬい。「舟にとりでに」といふたたみかけるやうな表現が、「つはもの」の悲痛な孤軍奮闘の様相をしのばせる。立体、平面をうしなひ、線、をたたれて、点にこもつた往時の将兵の苦戦と、苦闘に撓まぬ忠義感情は、この一首の歌に永久化せられたのである。この御歌の三句切れを注視して、戦局危急に際しての天皇の御心の苦悩を拝察し、時容易ならずと告げたのは、歌人広瀬誠氏であつた。翌二十年は敗戦の年であるが、その新年御歌会始のおうたは、次の歌。

社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

沈痛きはまらない感情の表現は、今にしておもへば敗戦の予感であつたのであらうか。内容の複雑を統一しようとする強い意志の緊張は、敗戦といふ最大の国難に対処しようとなさつた天皇の苦悶と、それをすべる意志とを示すものであらう。この頃天皇は宮中にありながら政治的に孤立され、ただわづかに、「しきしまのみち」になぐさめを求められた、と当時耳にして、悲痛の感にうたれたことがあつた。皇居も爆撃をうけた。皇居の疎開が噂されたが、お許しにならなかつた天皇は、いふま

でもなく、決死の覚悟をかためてをられたのであらう。やがて、敗戦。敗戦直後の御歌は、昭和二十年、「折にふれて」一首である。

海の外の陸くわに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

父を子を夫を、海のかなたの戦場におくり、あるいは、明治以来の海外雄飛の国運の先頭を切つて朝鮮に、満洲に、台湾に、アジア各地にうつり住んだ同胞の帰国こそ、全国民の祈願であつた。この感情が祈りとなつて表現されたのが、この御歌である。後の世の人は、この御歌によつて、このかなしい「祈り」についてもものおもふ時があるにちがひない。

敗戦の年明けて二十一年は、混乱の時世であつたが、一月二十二日、表おもて拝はい謁い問つで、歌会始の儀が行はれ、御歌が新聞に発表された。御題「松上雪」の御歌である。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

敗戦後の思想的動揺と困窮の生活とに苦闘してゐた頃、いく度この御歌をくちずさんで勇氣をえたことであらう。その意味で、私にとつては、御歌は、人生の指標であつた。いまも、この鑽仰の心に變りはない。栄枯盛衰、明暗交代して、不可測に開展する現実国民生活にとつての精神的支柱として、私は、今上天皇の御歌を誦するのである。現実の国家国民生活と無関係ではない、国民生活そのものの全体感情を表現して、その感情に方向を与へることのできるもの、それが国民文学の名に値す

るものであるとするならば、御歌は、真の国民文学である、といふことができるであらう。

次にあげる一文は、昭和二十一年十月三十一日各新聞に発表された「災害地を視察したる折に」と題する三首の御歌を読んでよせられた広瀬誠氏の当時の手紙である。御歌が、時代人心と感応するしるしとしてここに掲載する。

災害地を視察したる折に

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

“このたびの大御歌、真にありがたく拝誦しました。連作の御製を賜つたといふことからして例のないことです。(明治天皇御製にも一題のもとに何首もをさめられてはあつても実際の御連作は僅かしか拝されぬやうに思ひますが、いかがでせうか)さうして、思ふこと思ふがままに技巧もなく修飾もなく平々坦々とおよみになつた御しらべを、陛下の御独白をまぢかに洩れ承つたやうな思で、涙ながらに拝誦しました。今春「松上雪」の御製をおよみになつた時は、陛下も本当に御苦しくあらせられたのであらうと拝します。畏多いことですが、「松ぞををしき人もかくあれ」と屈折起伏した御言葉に、陛下の御苦慮御迷惑の程が拝されるやうに思へて、おいたはしさにたへませ

ん。それに対比して、今回の御製の、日常の御言葉に近いやうな自然のおしらべに、苦闘のかぎりを嘗めつくされた後の御崇高な安らかさといったやうなものを拝して、拝誦しつつほつと安堵するやうな思ひしました。肩の重荷が取除かれたやうな思ひしました。「……国民をおもふ心にいでたちて来ぬ」「……民の心をうれしとぞ思ふ」「……民の姿たのもし」、この明るいおしらべ、暖いおしらべ、およろこびと御信愛の程、「うれし」「たのもし」との御ことばを拝して、民草のころも真にうれしくありがたく涙がこぼれます。敗戦によつてかへつて君臣間の一切の虚飾と煩縛とが取除かれ、直接できるやうになつたことの深い意義を思ひます、この御製を拝誦しつつ。ほんたうに日本の前途は洋々としてゐますね。さう思へば現在の物資生活上の困窮も物の数でないやうな気がします。”

七 御歌歌風の開展 (広瀬誠)

一

ぼくは今上御歌を拝誦すると、いつも清められるやうな高められるやうな思ひを味ふ。御歌はまことに天皇のご人格そのままに清纯そのもの、謹厳そのものである。しかし、この謹厳は、決して儒教道徳的な固さではない。自力聖道しやうだう門的な堅苦しさではない。それは聖徳太子の『三経義疏さんきやうしよ』の文体から受ける厳肅感と同じく、国政の最も責任ある地位に立たれて、権臣の専横に苦しまれつつ、ひたすらに世界の平和と国民の幸福とを祈りつづけられた、その絶えざるご祈念が、一首一首にこもつてゐるからであらう。

山やまの色はあらたにみゆれども我まつりごといかにかあるらむ (山色新 昭和三年)

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ (社頭雪 昭和六年)

ゆめさめて我世わがをおもふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる (暁鷄声 昭和七年)

天地の神にぞいのる朝なきの海のごとくに波たたぬ世を
 (朝海 昭和八年)

静かなる神のみそのの朝ばらけ世のありさまもかかれとぞ思ふ
 (神苑朝 昭和一三年)

ぼくは『維摩経義疏』の「念々連持」といふ言葉を思ふ。真に絶えぬ御祈りである。暁の床に夢さめてまづ世を思ひ、ただ安らげき世をくりかへし祈られる。心をむなしくして今上御歌を味つたら、この「念々連持」のご祈念に打たれぬ者はあるまい。敗戦後、来朝したカトリックの僧正に、特に「キリスト教における祈り」について質問されたといふ事が新聞に出てゐた。天皇が日頃から心を尽し思ひを尽して祈念をつづけてをられればこそのご質問である。

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐしいはほの力をぞおもふ
 (海辺巖 昭和五年)

この、たゆまず寄するあら波を凌ぐ巖こそ天皇ご自身のご努力そのものである。「人が芸術品において自然そのままでとして驚嘆するものも、実は自然―外部の自然―ではなくて、人間―内部の自然―である」(ゲーテ)これらのたゆまぬご努力ご祈念のこもつた数々の御歌。しかしそこには苦惱から来るところの濁りやせせこましさが全然なく、いつも朝風のやうに清らかである。おほらかである。大正十年東宮時代から昭和二十三年に至るまでの勅題の御歌二十六首のうち十一首までが実に朝の歌である。拝誦するものの心を清めるやうな朝の崇高さ。これはまことに天成のご人格の雰囲気そのも

のである。

都いでてとほく来ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道
 (田家朝 昭和四年)

古事記の「ここに須賀すかの地に到りましてのりたまはく、吾ここに来まして我が御心すがすがしとのりたまふ」を偲ばすやうな爽やかな御歌である。日頃休む暇なく国政に肝胆を砕いてをられればこそ、たまに田舎に出かけられて、吹きわたる清風に息づく思ひをお味ひになつたのであらう。

清さといへば、赤人や宗武を思ひ出すが、赤人・宗武の清さは夜の清さである。清澄度においては御歌以上である。しかし御歌の清さは朝の清さである。ほんのりと霧がかかつてゐるやうな含蓄のある清さである。赤人・宗武の境地在冷やかに小さくまとまつてゐるのに対して、御歌はひろびろと開かれた清さである。赤人・宗武の清さは歌境の清さである。それは作者の風格と嗜好を示す。これに対して御歌の清さは人格そのものの清さである。宗武の歌は単に清高であるが、御歌は崇高ともいふべき清さである。

ゲーテはよく朝をうたつた。「若くて朝モルゲンの美シエーしさ」「輝く美しさよ朝モルゲン雲アウルクのごと」「朝モルゲンの花は天のかをりを愛す」などと歌つた。ゲーテの朝は可憐な美しさである。御歌の朝は心のたかまる清さかうがうしさである。

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな
 (海上雲遠 昭和二年)

楽しげにたづこそあそべわが庭の池のほとりや住みよかるらむ
 (池辺鶴 昭和一〇年)

高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま
 (朝陽映鳥 昭和一四年)

謹厳の一面にこののびやかさ。イエスの清らかな高さとともに、ゲーテの豊かな広さである。すこしも巧まず、屈折なくありのままにすらすらとよみくだされたこのご態度。楽しげに遊ぶ鶴を見て、わが庭の池が住みよいであらうと子供のやうに喜ばれるお心は、そのまま平和を愛されるお心である。高殿から朝日に映える沖の島を見て、「うつくしく」と単純なお喜びを洩らされたお言葉。子規が宗武の「いよいよ赤くいつくしきかも」について「子供の言葉に似たるだけ面白味あり、此平凡及ぶべからず」と評したが、御歌は宗武以上に純真そのものである。

一一

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり
 (連峯雲 昭和一七年)

ゆたかなるみのりつづけと田人らもかみにいのらむ年をむかへて
 (農村新年 昭和一八年)

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海のはらに日はのぼるなり
 (海上日出 昭和一九年)

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり
 (社頭寒梅 昭和二〇年)

以上四首、これが大東亜戦中の御歌である。連峯雲には断乎たる決意の力がある。その決意はただならぬ苦悩を纏縮てんしゆんしつつ。天皇のご努力むなしく、つひに開戦となつた。乗出した舟はもはや引くことができぬ、今は行くところまで行くだけ。しかし、早くこの戦乱を拾取せよ、難局を解決せよ。かういふやうに解される。「はやくはらへ」は、時局の早急解決であつて、敵の掃滅と解すべきではあるまい。この難局といふのも、単に外戦だけではない。内外を分たず一切にわたつての葛藤をすべてお心に集めて、ただ一人苦しみつけ祈りつけられた、その御心そのものご労苦であつたやうだ。当時の新聞に「何等の御慰みとてなく、ただ折にふれ敷島の道に御精進」とあつた。ウソの多かつた戦争中の新聞における真実の一つであつたらう。権臣の専横・葛藤のただ中に立たれて、誰にも打明けることのできぬお心をわづかに御歌によつて歌ひ晴らされたのであらう。軍閥のやうな傲慢な者の察知しえぬお苦しみである。

「農村新年」の御歌はまことに豊かである。心から楽しげなおよみぶりである。権臣の我儘に悩み国の行末を思うて苦しまれつつも、ひとたび名もない民の上にお心をそがれるときは、何ともいへぬ喜びと希望と信愛とのあふれくるままに、かうよみ出でられたのであらう。生活苦にあへぎ通しの親も、己が幼児の笑顔を見ては、一瞬にすべてを忘れて喜ぶ。そのやうな暖かいお心のあふれた御歌である。

「海上日出」は、既に戦局挽回し難いまでに悪化してゐた頃の御作。ほくは当時この御歌を新聞でよみ、からだの力が抜けてゆくやうな思ひがした。N先輩をたづねて、二人で「陛下もひどくお疲れの

やうだ」と憂へて語りあつた。題材は雄大であるのに、この調べの何といふ力無き。毎年、御歌発表のあるたびに心こめて拝誦拝味してきたばかりは、お言葉の端々にも危機を察知することができた。この御歌の一首二文形は当時の天皇のご心境に深い迷ひの去来があつたことを偲ばすのである。

つづいて二十年、「社頭寒梅」。この御歌は、一度よみくだしたただけでは分らぬ。寒風、霜夜、月、世を祈る広前、薰る梅……と材料を頭の中でよくよく味つてみて、その歌境を組立ててみて、やつとうなづける。この材料の複雑は、あれやこれやとご心労絶えなかつた当時の宸慮しんりょそのままである。一首は危く分裂しさうになりつつ、わづかに「なり」でふみこたへてゐる。ただ「世を祈る」それが天皇にとつてすべてであつた。この世を祈るお心が凝つて、敗戦の最悪危局を救はれたのであつた。それまでどんなに苦しみつづけられたらう。十九年二十年の御歌は、この事実をいたいたしく示すのである。

以上が戦争中の御歌である。御歌には戦争を肯定的な態度でよまれたものは、一首もない。世を祈るとはよまれたが、戦勝を祈るとはよまれなんだ。将兵を思ひやつての御歌は一首あるが、将兵の武勇はよまれなんだ。勝敗といふやうなことを越えて、ただ平和の回復と万民の幸福とを祈りつづけられたのであつた。日華事変中も同じだ。事変中の御歌は次の通り。

静かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

(神苑朝 昭和一三年)

高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま

(朝陽映島 昭和一四年)

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに
 （迎年祈世 昭和一五年）

あけがたの寒きはまべに年おいしあまも運べりあみのえものを
 （漁村曙 昭和一六年）

「天皇には自ら国政を左右する力が無かつた、だから戦争についても責任がないといつて人々は弁護するが、それならば御製はどうか。まさか御製まで天皇が自分の意思に反して、周囲から強制されて作つたとは言へまい」（直接引用することが出来ず、記憶を辿つて書いたのだから、原文のままではないことを断つておく。）

中野重治氏がこんな事を何かに書いてゐた。しかし中野氏は全然御歌を知らないのではないかと思ふ。今上御歌に、戦争肯定的なものがただの一首もないことは前述の通り。この事実を知れば中野氏はこの意見をひつこめなければならんのではないか。

詔勅は原則として側近の起草にかかるものだが、御歌は天皇ご自身のご直接のご述懐。詔勅は公の立場で発せられるものだが、御歌は私の立場で独白され、時としてその一端を発表されるもの。御歌こそがほんたうに天皇のお心のこもつたものである。天皇に戦争責任があるかないか、それは論ずるだけヤボである。天皇は国政の総攬者、従つて戦争の最高責任者、これは厳然たる事実である。しかしそれとともに次の事を確認せよ。天皇は世界人類の平和福祉を祈りつつけられた、同時に又祖先の遺訓と国家国民のために努力しつづけられた、心を尽し思ひを尽し力を尽して祈りつつけ努力しつづけ

られた、天皇は決してロボット的存在ではなかつた、しかし不可抗の運命のままにすべては破局に向つて動いた、この世界的悲劇の中心人物が天皇である、と。そしてこの事実の動かすべからざる真証こそ天皇の御歌である、と。

三

戦後の御歌は、十九年二十年の御作にひきつづいてご苦悩の表現である。

ふりつもるみ雪にたへているかへぬ松ぞををしき人もかくあれ
 (松上雪 昭和二一年)

海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり
 (昭和二一年元日新聞)

松上雪の屈折多く、しらべ激しき御歌。「海の外の」の、さくなだりに落ちたぎつ滝津瀬たうつせの如く、一気によみくだして息もつかぬ御歌。二首とも孝明天皇御製を偲ばすやうな、荒々しいリズムである。第三句を「のこる民の」と字余りに力を入れてよみつづけられたところにももる無量の思ひ。当時のご苦勞を偲ぶいたいたしさよ。しかし、十九、二十年御歌とちがつて、既にあれかこれかの躡たもひはなく、苦悩しつつも、今は行くところへ行くといった、まつしぐらの力がある。

昭和二十一年十月愛知岐阜行幸後「災害地を視察したる折に」と題する三首が発表された。

戦のわぎはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

ぼくはこの御歌を拝して、ほつと安堵した。肩の重荷がおりたやうだつた。「松ぞををしき人もかくあれ」とよまれた頃は、ほんたうに、お悩みであつたらう。お苦しみであつたらう。しかし、悩まれつつも一筋に民の上を思はれるみ心は、民の心と、よびあひ、とけあつて、沸騰した。各地巡幸によつて日本は若がへつた。君民相互の信愛、ただそれだけ、一切の虚飾と繁札は消えた。太陽は直接に地を照した。その率直なお喜びとご信頼とが、この自然のままの、口をついて出たやうなお言葉に揺れあふれてゐる。連作の御製といふことは始めてであつた。内から自然にもりあがる創造力に乗託するとき、連作短歌となる。二十二年六月新聞記者と会談の際、「私は気持を率直にあらはしたい。さういふ精神で歌を勉強したい」と語られた、そのお言葉通りの御作風である。そしてこの御歌風は、

をちこちの民のまるきてうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

の二首に至つては絶頂に達した。この自然さこの率直さ、この淀みなさ。感じたことを感じたままにすらすらとおよみになりつつ、及び難い調べである。ここに天皇は円融無礙、自然法爾の歌境を成就

された。「おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも」と明治天皇の念願されたところのものはここに成就した。ぼくはこの二首を短歌史上もつとも注目すべきものと思ふ。「短歌の近代化」などといつて右に左に迷ふ現代歌壇人は心をむなしくして、反覆この御歌を味誦してみるべきだと思ふ。

四

以上を概括しよう。今上御歌は、これを三期に分つことができると思ふ。第一期は即位から昭和十六、七年頃迄。(そして摂政時代はこの準備期とみることができよう)この間の、国政の展開を一つのご祈念に集めて味はれつつ、無量の思ひを一首一首にこめて表現された数々の御歌。行く水のやうに自然で清くしてしかも神々しく気高い御歌。ことに「田家朝」・「社頭雪」・「咄鶏声」の如きは短歌史上稀有の絶唱である。

第二期は、昭和十九年戦局破綻より終戦直後に至る迄。この間の苦悩の御歌。一首は分裂しようとしつつ、世を祈るご一念によつて辛うじて踏越えてゐる如きこの間の御歌。これらは芸術的価値は高くないであらう。しかしここにこめられた無量のご苦闘は、昭和悲劇の絶頂を形造るものとして永久に記憶されるべきであらう。

第三期は、昭和二十一年十月以後の、他力易行・自然法爾の、おのづから吹く風に乗託するやうな御歌風。第一期のやうな神々しさ気高さは、ここにはない。しかし、国民の中にとけこみ、国民と

もに生活さるるやうな親しき、なつかしき。一切の曲折ををさめつくした自然さ巧み無さ。ここにはゲーテのいつた意味での諦念ていねんエントザーゲンクといふべきものがある。エントザーゲンクは真の意味で努力である。今上天皇は日本文学史上特筆すべき真成の歌人である。詩人である。そして諦念の人格、努力の人格である。(この項「御歌歌風の展開」は広瀬誠・昭和二十三年八月二一日執筆論文)

八 叙景の御歌

昭和二十四年雑誌『改造』の新年号に五首の御歌が発表された。その第一首は次の御歌だった。

雲仙嶽にて

高原たかはらにみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

この御歌をはじめて読んだ時の感激は忘れたいものがある。清いすみきつた鏡のやうな美しい心境を仰いでほつとしたのであつた。敗戦直後から、新年の宮中の御歌会始以外の御歌が、時折新聞紙上に発表されるやうになつて、それぞれ深い感激をあたへられたものであるが、その多くは直接その時の国民生活に関係の深いものであつて、この御歌のやうに、いはば純粹な芸術的な香気に、うたれたのはまた別の感想であつた。この御歌に至つて、純粹の自然鑑賞ともいへる御歌がはじめて発表されたのである。総合雑誌に御歌が発表されたのははじめてのことであつて、天皇にも芸術の自由な発表の機会が与へられたやうにおもへて、苦難の時代にかへつて天皇と国民との親愛感がふかまるやうなほのぼのとした明るさを感じることができた。敗戦前、つまり戦時中や戦前の御歌の中にも、叙景の歌があるにはあつたが、それは新年御歌会始の御歌であつたので歌の題との関係が深く、それ

だけおのづから時代との関係をおもひあはされて、これほど客観的な叙景の御歌はなかつたやうにおもはれた。いま『天皇歌集・みやまきりしま』——この歌集の題はこの御歌によつたものであらう——をひらいてみると、この御歌の前どころに、やはり戦後の叙景の歌といふことのできる次の二首の御歌がある。

和倉にて

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

折にふれて

秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく

この二首の御歌は、御歌「雲仙嶽にて」と全く同じやうに純粹な叙景であるが、当時まだこの二首は発表されてゐなかつた。戦前戦中の御歌の中で、叙景の調子の最もつよいものをあげれば、次の御歌であらう。

朝陽映島

高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま

しかし、この御歌でも、「高どののうへよりみれば」といふところが、作者の行為をあらはしてゐ

るので、自然そのものの鑑賞を歌の内容のすべてとする純粋な叙景とはまた別のものである。これは、芸術的な価値の優劣を問題にするのではないので、このやうな御歌もまた実にすぐれた歌だともふのであるが、叙景の純粹さといふ点で、御歌「雲仙嶽にて」とはことなつてゐるとおもふ、といふそのことだけを注意してみるのである。戦前戦中の御歌の多くは、かういふ御歌か、あるいは作者の、時代と国民生活に対する思想が優勢となつて、自然鑑賞を支配する思想詩である。たとへば次の御歌である。

朝 海

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

神 苑 朝

静かなる神のみその朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

東宮時代の御歌に、「河水清」（大正十五年）がある。

広き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

この御歌は、作者の行為もはひらず、純粹の叙景のやうにも見えるが、どちらかといふとこの御歌は、思想詩であるといつた方がよいとおもふ。

この御歌をよんで最上川の清い流れが目に見えるやうに感ずる人はないはずである。最上川が「広き野を流れゆけども」海に入るまでに「ごら」ないといふことに對する作者の讚嘆の心もち、むしろ作者の人生觀が最上川の景色よりもつよくうたはれてゐるのだとおもふ。だからこのうたをよむと客觀的な叙景としてよりも、人生觀、人の生き方としての感想にうたれるのである。「流れゆけども」「に、ごら、ざり、けり」といふことばのつづきが、客觀的叙景よりも主觀的思想表現にかたむくのであつて、この御歌も「実にいい歌」（三井甲之『天皇御歌解説』）だとおもふが、それは思想詩としての良さであつて、叙景歌としてのよさではない。次にあげる明治天皇御製と同じである。

みなもとは清くすめるを濁江におちいる水のをしくもあるかな（水 明治四三年）

元來叙景とか抒情とかいふことも際立つて對立することかながへてはまちがひになる。叙景といつても写真ではないので、結局は作者の心持の表現であり、時々的心持といふものは、作者の自我、人生觀によつて左右されるのであつて、叙景の歌に表現されるものは、自然の中に見出された作者自身の姿である。抒情といつてもまた多く人生のできごととにふれての表現であつて、純粹に感情の律動をあらはす音楽とは異つてゐる。人生のできごとや自然とはなれた作者の心といふものはない。だから、叙景の歌とか抒情の歌とかいつてもそれは程度の差にすぎないのだらう。ここにいふ叙景歌といふのは、作者自身の行為や感想が直接歌の中心にあらはれないで、作者の心が全く自然の中に没し切つてゐる、しかも思想的であるより、感覺的であるものをさしたのである。

さて、昭和二十四年に、以上のやうな経過を背景にして、御歌「雲仙嶽にて」は、純粹な叙景歌として、はじめて発表されたのである。ここには、時代も国民生活も作者の思想さへも直接ことばにはあらはされてゐない。ただ目にうつる美しい自然の一瞬が作者の深い人生に対する感じとともに表現されてゐるのである。道徳とか宗教とか、哲学とか科学とかとは、はなれた、いはば、純な芸術の世界である。かういふ御歌もあるのだ。このうたをよんで、心は、このゆめのやうに美しい自然鑑賞の世界にさそひ入れられるおもひがした。

かういふ系列の歌とおもはれる御歌は前記「和倉にて」「折にふれて」(コスモス)二首の他、この御歌以後に、次のやうな御歌がある。すべて『天皇歌集・みやまきりしま』発刊以後新聞紙上に発表された昭和二十六、七年の御歌である。

谷かげにのこるもみち葉うつくしも虹鱒にじますをどる醒井さめがみの里さと

めづらしく晴れわたりたる朝なぎの浦わに浮ぶ天の橋立

木がらしのすさぶみ空はすみにすみてふけゆく夜半よはの月ぞ寒けき

秋ふかき山のふもとをながれゆく阿武隈川のしづかなるかな

島島もかすかに見えぬ朝ぎりの深くこめたる松島の海

水きよき広瀬川べの谷ぞひは木木のもみちに美しきかな

うちあぐる花火うつくし磐城なる阿武隈川の水にはえつつ

「秋ふかき山のふもとを」「うちあぐる花火うつくし」の二首は殊に静かな秋の阿武隈川の清い流れ、川水にうつる打上げ花火の美しさが、目に見えるやうに感じられる。かういふ御歌が、すべて御歌「雲仙嶽にて」の発表以後の御歌であることをかんがへると、この御歌「雲仙嶽にて」は、作者にとつてもひとつの新しい歌境・世界を開いた歌となつてゐるやうにかんがへられるのである。その世界といふのは、前にものべたやうに、叙景詩の世界であり、芸術的香気の純粹に感じられる世界である。さて最後に、この「みやまきりしま」の御歌からうける感じを記しておく。第一句、「高原に」といふ大胆な、潤達なうたひ方、「みやまきりしま美しくむらがりて咲きて」と豪華な色彩の世界をひろげ、「小鳥とぶなり」といふ結句で、静寂の世界に、音もなくとびゆく鳥の姿を追つてゆく作者の、純一な感情を表現したのである。すべて目に見える世界の描写であつて、聴覚にひびいてくるものは何もない、絵画的であるが、しかし、すばらしい静寂を感じさせるのは、豪華なみやまきりしまの群生と小鳥の飛翔との静と動との対照によるものであらう。自然の受けとり方が、感覺的な意味でも実に新鮮で、素直で、鏡のやうに清澄である。

よるべなき幼児どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木の間に

(昭和二四年)

第四句八音の字余りが、子どもらのこゑをきこえるやうにあらはすのであつて、この御歌は聴覚の世界を中心にしたものであるが、この御歌と「みやまきりしま」とをくらべてみても、そこに共通する、感覚の新鮮さ、くもりない心は、無比のものである。

この歌のどういふ表現技巧、つまりことばづかひが、かういふ宗教的な味ひを感じさせるのだから。かう考へつづけてゐるうちにふと気づいたことがある。それは『文章概論』といふ書物の中の、白石大二氏の論文「日本語の修辭」の一節をよんでゐて、気づいたことなのである。

その一節といふのは、石川啄木の、

東海の小島の磯の白砂に

われなきぬれて

蟹とたはむる

の歌について、白石氏が「だんだん取材が小さくなつてゐる」と指摘し、源実朝の、

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

大海の磯もどろによする波われて碎けて裂けて散るかも

は、「たたみこんでゆく表現の中に、対象がだんだん小さくなつてゆく」と述べた一節である。この一節をよんでゐて「みやまきりしま」の御歌を謹解する手がかりをえたやうに思った。

この御歌は、明らかに、白石氏が例にあげた啄木・実朝の歌と同じ傾向の修辭法を示してゐる。語の順序が、「高原」「むらがり咲くみやまきりしま」「小島」と、だんだん小さいものになつてゆ

く。そこで、その小さな、しかもすばやい動きを示す小鳥の飛ぶのをはつきりと心にしるして、この作者は「小鳥とぶなり」とうたつたので、「なり」といふことばが生きて、ひろい「高原」と小さな「小鳥」との対照をくつきりと浮き立たせるのであらう。「高原」「みやまきりしま」「小鳥」とだんだん対象が小さくなつて、その小鳥のとびゆくさきは、無限の世界に消えゆく思ひがする。しかし、なほ、その小鳥のとぶのは眼前の事実である。現実の生活は無限の中に消えてゆくが、しかしそれは、人間にとつてかけがへのないたしかな人生である。この現実の生活を通して以外には無限の生を味ふことはできないといったやうな気をおこさせるものがある。この歌の豪華と言つても足りず、清澄といつても足りない、深い宗教的味ひは、この辺にあるのではなからうか。——かうかんがへられる。

「高原に」の御歌を啄木の「東海の」の歌と比較してみる気はおこらないが、右の白石氏の一文の中の、実朝の歌とは、非常に感じが似てゐるとおもふ。

こんなことをかんがへてゐるうちに、明治天皇の御製の次の一首をあらためて今上天皇の御歌とくらべてかんがへさせられた。

笹原も小松がはらも霜ふりて枯野まばゆく朝日さすなり
(冬眺望 明治三四年)

これは、対象がだんだん大きくなつてゆく、さうして、最後は輝く光明の中にすべてとけいつてしまふのである。この意味で、「高原に」の御歌と対照的である。同じ明治天皇の御製の、

岩が根によせて砕くる荒波のしぶきにくもるいその松原 (磯波 明治三七年)

は、前出の実朝の「大海の磯もとどろによする波われて砕けて裂けて散るかも」と、全く対照的である。前者は波濤のくだけでそのしぶきが磯の松原いちめんによせてゆく豪壮な海辺の光景であるが、後の実朝の歌は、内へ内へと追求してゆく分析と反省の極致の表現であらう。作者の目が、心が、対象をだんだん細かに追求してゆくのである。歌としていいわるいといふことではなくて、どちらも不朽の短歌であると思ふが、心のうごきのちがひなのであらう。明治天皇の右の御製と実朝の歌とを比較して井上孚磨先生が話されるのをきいたのは昭和十四年頃のこと、それから時々そのことをかかんがへてきたが、やつとそのちがひがわかりかけてきたやうな気がする。明治天皇の御製は豪壮だが、実朝の歌は悲壮である。実朝のうたには、このやうな、大きな対象から小さな対象に語を配列した歌が多いやうだ。例へば、有名な、「奥山の岩垣いはぎのま沼に木の葉おちてしづめる心人知るらめや」の序詞の部分などさうだし、「山川に風のふきいるる桜花ながれてきえぬ泡かとぞ見る」なども同じ傾向をもつてゐる。「箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ」は、視野の経過をもよく示してゐる。「箱根路をわがこえくれば」といつて、その経過をしめし、「伊豆の海や」と、大局をしめし、「沖の小島に浪のよる見ゆ」と、だんだん小さくこまかく眼をくばつてゆく、それが、何とも言へぬ、さびしい深い情趣をもつのである。

昭和三十年「泉」の今上御歌もこの点から説明することができる。

みづならの林をゆけば谷かげの岩間に清水わきいづる見ゆ

かつて、この御歌を昭和四年「田家朝」、

都いでてとほく来ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道

と比較して、この二首の歌の間に、二十六年といふ時の長さ、それほどの長い期間の表現技術の発展が考へられないと思つた。その意味で、短歌といふものには、ほとんど表現技術の上での進歩などはないかんがへられない、それはただ、天稟の個性と境涯の所産で、表現技巧のうまいまづいなど大した問題ではないと考へた。いまでもそのかんがへにあまり変りはないが、右の二首の全体印象の、わづかな相違が、どこから生れるか、気づいたので、述べてみる。

同じやうに、清らかな感じのする御歌であるが、前の御歌が、さはやかな明るい感じのするのに対して、あとのうたが、心にしみるやうなさびしい感じのする、そのちがひ。そこに、青年と壮年との年齢のひらきを感じる事ができるやうだ。それは、どこからくるのだらう。

前の歌は、例の、大きいものから小さいものにうつつてゆく傾向で、「みづならの林」「谷かげ」「岩間」とだんだん対象が小さくなつて、いやはてに、こんこんと湧きでる「清水」を見出した作者の心持が、対象の推移そのままに表現されてゐるのである。「高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり」と同じ趣向である。大きな対象から次第に小さな対象にうつり、やがて、そこ

に発見される極小のもの、「小鳥とぶなり」といひ、「清水わきいづる見ゆ」といふ、小鳥とか清水とかは、全体を分析して発見される自我、無力な、しかし、全体の中にあつて、全体をやどすたしかな、自我に通ふのである。前のうたには、かういふ傾斜はない。

「吹きわたる朝風清し」と「都出でて遠く来ぬれば」とは同一の比重で対照してゐるから、平明で、前者が立体的であるといへば、後者は平面的である。だから明快である。さはやかな明るさは、この対照によつて生れるので、似通つた趣向の前者の歌の、宗教的情感のさびしさは、ここにはない。人生の朝の、青年の情意の新鮮と、同一個性のたどつた壮年の宗教的悲哀との対照を、この二首の歌にみとめることもできる。そこに、二十六年といふ年齢の経過と、境涯の変化と、個性の成長とをみることが出来るかもしれない。表現技巧のうまいまづいではないが、やはり、体験の深淺をみとめることができるやうだ。昔の考へを補正したい。後者が感覺的であるといへば、前者は思想的である。

九 昭和三十年発表の御歌

三十年、富山の広瀬誠氏が年賀状に、「新年御発表御製八首」を書いて送つてくれた。「例によつて、図書館で、元日の各新聞をしらべ、これだけ集めました」とある。

新年御発表御歌八首 (昭和二十九年御作)

見わたせば海をへだてて淡路島なつかしきまでのどかにかすむ (舞子にて)

たらちねの母の好みしつはぶきはこの海の辺に花咲きにほふ (伊豆西海岸堂ヶ島にて)

湖の面にうつりて小草喰む牛のすがたのうごくともなし (澁佛湖畔にて)

松島も地図さながらに見えにけりしづかに移る旅の空より (飛行機上より)

その知らせ悲しく聞きてわざはひをふせぐその道疾くところ祈れ (洞爺丸の惨事)

えぞ松の高き梢にまつはれる薄桃色のみやままたたび (阿寒国立公園にて)

山崎に病やしなふ人見ればにほへる花もうつくしからず
 (山崎あたりの車中にて)

夏草のおひたち見つつ憂はしも二十年はたとせ前のひよりにも似て
 (昭和九年の夏の天候とくらべられて)

第一首、第二首、第三首、三首とも現在形で終つてゐて、自然の現実態そのもののやうに迫つてくる。殊に第二首目の御歌は、一読深く心にしるされた。一種の挽歌で、その何気ない表現が、何ともいへない深い同情をさそふのである。人麿の「こそ見てし秋の月よは照らせれど相見し妹はいや年さかる」を思ひおこさせる。明治天皇の御製に「まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり」といふ歌があるが、この今上天皇の御歌のやうな歌がそれであらう。

第四首「松島も」の御歌の「地図さながらに」といふ比喻は、全くさもあるべしとおもはれる表現で、話したり聞いたりするときにはごく自然に使はれるとおもふが、それがそのまま歌の中に使はれることが、すばらしい。名勝の地松島も地図そつくりに見えた、といふ童児のやうなくもりない感覚と驚嘆とが、この破天荒の表現となつてゐる。三十一年今上御歌の「児島湾縮切堤塘を見て」

海原をせきし堤に立ちて見れば潮ならぬ海にかはりつつあり

といふ、「潮ならぬ海」といふ表現とも似通ふ、事実に対する新鮮な感覚といふものが、無比である。第三句で切つて「静かに移る旅の空より」と前にもどす歌の調子が、機上の人の視野のゆつくり

した動きをそのままあらはすので、人も自然も全くありのままに表現されてゐる。何の技巧も、何の意識も感じられない、因襲にとらはれるところもない、天衣無縫の表現とでもいふのだらうか。

第五首、「その知らせ悲しく聞きて」の御歌は、また、何といふはげしい悲痛な御歌だらう。全国民の声なき祈りのひとつにあつめられた叫びともきかれる。「その知らせ、悲しく、聞きて、わざはひを、ふせぐ、その道、疾く、と、こそ、祈れ」歌の調子が、こまかく切れてゐるので、ひと言ひと言力がはひつて、言ひやうのない切迫した感情が渾身の意志となり、祈りとなつて、ことばに託されるのである。かういふ御歌は、——すべてについても言はれるが、——解説を絶する。われわれはくりかへしくりかへしこの御歌をよんで、天皇のお祈りにわれらの祈りをあはせるばかりである。直接的具体的感情の極限の表現である。

一〇 明治天皇御製との比較研究

今上天皇の御歌と明治天皇の御製をくらべてみると、——と言つても、具体的にどの御歌とどの御歌とを比較考究するといふわけではない。お二方の御歌を読誦してゐるうちに、自然に、くらべあはせられて気づくことがある。その感じをのべようと思ふ。

今上天皇の御歌には、今日までに発表された御歌の中には、『明治天皇御集』の中に見うけられるやうな神話的観念をあらはす歌は少い。神話的な観念をあらはす歌といふのはどういふ歌をさすかといふと、次のやうな歌である。

おのが身のまもり刀は天にますみおやの神のみたまなりけり (太刀 明治四二年)

天皇の御まもり刀、それは現実存在してゐる伝承の護身の宝刀である。その宝刀は、皇祖の神の神霊であるとおうたひになつたのであるから、その思想は、日本の古典神話にみられる刀劍信仰とよく似た思想である。

あまてらす神のさづけしたからこそ動かぬ国のしづめなりけれ
(宝 明治四三年)

この「たから」は、三種の神器のことで、古典神話に、天照大神が皇孫ニニギノミコトにおさづけになつた、と語り伝へた八咫の鏡、八坂瓊の勾玉、草なぎの劍のことをおさしになつたものと考へられる。この三種の神器が国家不動の「しづめ」である、とおうたひになつたので、前の御製とおなじやうに、その思想は古典神話の信仰をそのまま継承してをられるものとみられる。もつとも、明治天皇は、鏡・玉・劍といふ古代日本の礼拝の対象であつた宝器については、そこに道徳的な普遍的な価値を発見してをられるので、この「たから」もさうした道徳的な価値のシンボルともかんがへられる。また、明治天皇の思想では、この道徳的哲学的觀念と神話的觀念とがひとつになつてゐるとみられる。がしかし、それにしても「さづけしたから」といふ言葉は、具体的であつて、抽象概念の表現ではない。さういへば、「さづけし」も、過去の歴史的事実の表現とみられることばで、そこに、古典神話の表現との渾融がある。神話と歴史との連続に対するご信念が現はれてゐる。

天照大神は、神話中の存在であつて、歴史的人間存在ではないから、その行為は歴史的事実ではない。それを「さづけし」といふ歴史的記述と同一の表現をつかつたところが、神話的思想とみられるのである。もつとも、この場合にも、「さづけたまひし」とのやうに、敬語法を用ひないことが、行為の具体性を稀薄にして、行為よりも行為の意味する思想に重点をおいてゐることがうかがはれる。さういへば、明治天皇の御歌には神についてうたはれた歌が多いが、神の行為について敬語を用

ひた例を思ひ浮べることができない。これは、御歌にあらはれる「神」が、祖先の神々全体の思想意志をさすからであらう。「湊川懐古」「柱」二首、

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ
 (明治三五年)

樞原のとはつみおやの宮柱たてそめしより国はうごかず
 (明治四二年)

「まもりたまふ」とか「たてそめたまひし」とかいはれないのである。この「思想」とか「人生法則」とかをうたつた歌が明治天皇御製には多いのであつて、この点、今上天皇の御歌が、体験の直接的表現にむかつてゐるのと、対照的である。

いそのかみふるごとぶみは万代もさかゆく国のたからなりけり
 (書 明治四三年)

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり
 (歌 明治三九年)

どちらもぼくの大好きな歌であるが、この「……は……なりけり」といふ文体の表現は、前の、「おのが身の」の御製にも用ひられてゐる、価値判断の提示であつて、内容はきはめて思想的なものであるが、明治天皇の御製には、しばしば見られるところである。今上天皇御歌には今日発表されたところでは二首あるだけである。「なりけり」の「けり」は詠嘆で古今集の和文序「やまとうたは人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」の「けり」と同じである。だから、前の御製の「けり」

をとつてかんがへてみると、前の御製の意味は、「古事記は、万代も榮えゆく国の宝である」といふことになり、次の御製は、「すなほでををしいものは日本語の姿である」といふことになつて、思想の提示になる。その提示に「けり」をつけるのは、思想そのものが作者にとつて強い感動をよぶからにはかならない。

つまらないことだが、『明治天皇御集』中、この「……は……なりけり」といふ文体の御製の数をしらべてみたら、概略、卷上七首。卷中十五首。思つたより少いが、「……かりけり」「……ざりけり」なども似てゐるから、それらを一緒にかんがへると、相当の数にのぼつて、明治天皇御製の思想的性格を示す文体の特徴とみることができらうであらう。

話が少し脇道にそれたが、もう一度前にもどつて、明治天皇御製にあらはれた神話的観念をたどつてみよう。

くもりなき朝日のはたにあまてらす神のみいつをあふげ国民 (旗 明治三八年)

あまてらす神の御光ありてこそわが日のもとはくもりざりけれ (寄神祝 明治四三年)

「くもりなき朝日の旗」「日の丸」のことである。その日の丸は太陽を象徴する。そこに、「天てらす神」の「みいつ」をあふげ、と国民によびかけられたおうたである。「天てらす神」は太陽の徳をもつてゐた、といふふうにかへた古典神話の記述に通ずるのである。古典神話の「天てらす

大神」は、何をさすのであらう。太陽の一面と、巫女の一面と、女酋の一面と、高天原の王者として地上国家の天皇の祖先神としての一面と、それらをひとつにした「神」であつて、「天てらす大神」といふ名をもつた、一個の人間ではない。信仰の対象として想像された「神」である。この信仰は、古典神話に結晶されて今日まで伝へられてゐる信仰であつて、この信仰を、純化抽象化して表現してをられるのが、明治天皇のこの御製である。

すめるもの昇りてなりし大空にむかふ心も清くぞありける (天 明治三八年)

「すめるもの昇りてなりし大空」といふのは、日本書紀の冒頭の天地創成の神話にもとづいたことばである。「古、天地未だ割れず、陰陽分れざる時、渾沌たること鷄子の如く、溟滓りて牙を含めりき。その清陽なるものは薄靡きて天となり、重く濁るものは淹滞きて地となる」といふ、「その清陽なるものは薄靡きて天となる」といふ記述にもとづいて「すめるものぼりてなりし」といはれたものであることは疑ひない。渾沌たる天地が分れてその中で清澄なものがのぼつて天となつた、といふのは、神話的の考へ方である。現代科学の知識と合致するかどうか知らないが、科学的研究の結果でないことはたしかである。「昇りてなりし大空」といふ場合の、「し」は、過去回想の助動詞で、明治天皇御製の文法では、これを、「……しといふ」といふ意味にとることはできない。大空にむかつて、たびたび心の清くなる体験を重ねられて、その体験をおよみになつたのがこのお歌であるから、それほど神話的思考を強く感じないが、「のぼりてなりし」といふ「大空」に対する修飾語は、神話

的観念、神話的信仰を示すものである。たとへば、

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり (日 明治四二年)

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな (天 明治三七年)

といふ御製、——この御製を声を出して誦すると、天皇の御願望にひきいれられて、心は清まり、広められるのを覚えるが、——この御製においては、「朝日」や「大空」は感覺的な存在で、神話的存在ではない。

彼の方や東なるらむあさづく日にはひそめたり沖の波間に (海上朝 明治四〇年)

すべてが、感覺的の自然であつて、その感覺的世界を統一するしかたが作者の思想を暗示して、誦する者を、未来への希望にさそひこむが、そこに神話的観念はない。

一村と思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ (雲 明治四〇年)

自然の動きに対する驚嘆をうたつて、人生の動乱を暗示するのである。この思想を、そのまま、直接におうたひになつたのが、次の「をりにふれて」である。

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり (明治四五年)

「思はざること」、それが何であつたかといふことを、具体的におよみにならないから、その意味でこのおうたも概括的であるが、その概括性が法則性を示すのである。「世の中は」といふおことばが、このうたを人生観の表現とするのである。こころみに、この御製と今上天皇の前にあげた「洞爺丸の惨事」の、

その知らせ悲しく聞きてわざはひをふせぐその道疾くところ祈れ

と比較してみると、今上天皇の御歌の性格と明治天皇の御製の性格の相違がはつきりする。どうもうまく書きあらはせないが、明治天皇の御製にみられるやうな神話的觀念の直接表現は今上天皇の御歌にはあまり見られない、そのかほりに、明治天皇の御製の強い規範性に代る、非常な現実性・感覚性がある。

松島も地図さながらに見えにけり静かに移る旅の空より

海原をせきし堤に立ちて見れば潮ならぬ海にかはりつつあり

明治天皇の御製に神話的觀念のみられるのは天皇のご信仰と関係があるわけであるが、天皇のご信仰が直接表現されたのは、それを支持する国民の信仰があり、それは当時の国家観と関係があり、明治時代の政治思想としての「天皇親政論」と不可分であらう。明治維新の指導精神が、「王政復古」で

あつたことはいふまでもない。この「王政復古」は、「神武天皇の古にかへる」ことで、神武天皇の古といふのは、「天皇親政」といふことである。明治天皇の御父天皇の孝明天皇は三十六歳で悲劇的な生涯をへられたのであるが、その御歌には、このやうな「天皇親政思想」はみられない。三条実美たちが、橿原神宮に天皇の行幸をねがつて討幕の挙兵を計略したが、これが、実美たちの失脚の理由になつたのであつて、天皇はこの実美たちの行動を非常に怒りになつたことが、震翰に見える。であるから、「王政復古」「天皇親政論」は、時代思想であつて天皇の支配意志のあらはれではない。そして、この時代思想としての「天皇親政」論は、徳川幕府が倒れ、征韓論をめぐる内乱をへて、薩長中心の政權が確立し、欽定憲法が發布されて、天皇の名による政治が行はれた。爾後、政党、軍人、官僚が時々の政治的権力を争ひ、その権力は、天皇の名によつて行使された。

明治天皇は、超人的なご努力によつて、この「天皇親政」の思想を實行しようとなさつたらしく、御製にはその思想が一貫してゐるやうに拝される。たしかに、明治といふ時代は、日本歴史の中に時折、噴火のやうな形であらはれる天皇親政の時代である。明治天皇の崩御とともにこの親政ははつて、大正時代になればもう「親政」の理想をかかげて現実政治と戦ふ日本主義者があらはれてゐるから、「親政」の実はなく、大東亜戦争の敗戦は、明治時代のカタストロフィであつて、「親政」の夢すらも崩壊したのである。戦後の今上天皇の御歌は、「人間天皇」「象徴天皇」といふ新しい政治体制と不可分のものであるから、明治天皇の御製には見ることでできないやうな感じの御歌を拝するものであらう。御製の本質の変わらないことはいふまでもないが。

昭和三十三年発表の今上天皇御歌の中に、

人々と苗木をうゑて思ふかな森をそだつるそのいたつきを

といふ御歌があつた。「人々と苗木をうゑて」といふご表現。国民とともにあるといふ親しさ安らかさのあふれたおことばづかひである、かういふご表現は、明治天皇の御製にはすくない。今上天皇の戦後の御歌には、この他にも、

ひさしくも見ざりし相撲すまみひとびとと手をたたきつつ見るがたのしき

といふ御歌がある。天皇が国民の中にとけこんでゐるといふ感じである。明治天皇の日露戦争当時の御製に、軍人に対して非常な親しみをもつた御製があり、また、政治の枢機にあづかつた重臣たちに対して直接お送りになされた御製にもこの親愛の感情がみられるが、それは「臣」であり、「つはもの」「いくさびと」であり、あるいは「民」「賤ちぢ」であり、全体として統治の補佐であるか、統治の対象である国民こくみんくにたみであつて、

をりにふれて（明治三九年）

みちのべにわれを迎ふるくにたみのたゞしきすがた見るぞうれしき

といふ明治天皇の御製にあらはれた、天皇の国民に対するご態度は、今上天皇の、既出の、

をちこちの民のまる来てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ

の御歌の、民に対すご態度とは、その表現の上に微妙なちがひがあるとおもふが、どうだらうか。

今上天皇の戦後の御歌は、「象徴天皇」時代の、天皇と国民との親愛感情を示して、新しい日本の基礎をなすものである。

昭和三十三年新年に発表された天皇御歌の中に、「佐久間ダムにて」といふ題の一首がある。

たふれたる人の碑いしぶみ見てぞ思ふたぐひまれなるそのいたつきを

碑はイシブミと読む。巨大なダムで川の水を堰きとめ、作りあげるのには、着工以来二、三十年もかかつたらしい。その間に工事中の災害で犠牲になつた人が何十人もあつたといふ。巨大な人間のいなみのかげにあるかなしい人のいのちである。御歌によつてみると、この犠牲者たちの記念の碑がダムの傍に立つてゐるものやうである。その碑をご覧になられて、ダムの背後に、悲しい犠牲者たちをふくめた目に見えぬ大きな人間のいなみをお思ひになられたものである。御歌は一誦、直ちにこのお心もちに人をひきいれる、率直、痛切、深いお心がこもつて、表現技術の分析を必要としない、自然そのものと拝誦される。

この御歌をくちずさんでゐるうちに、ふと明治天皇の御製の中によく似た歌があるのを思ひ出した。『御集』明治四十三年「をりにふれて」の中の次の歌である。

思ふことなるにつけてもしのぶかなもとゐ定めし人のいさをを

第三句で切つて、四・五句が「思ふ」こと「しのぶ」ことの内容を示す、修辭法の上でいふと倒置法で、一首の調子がそつくりの上に、内容もよく似てゐる。はつきりちがつてゐるところは、第一は、一・二句の、今上御歌の「たふれたる人の碑見てぞ」に対して、明治天皇御製の「思ふことなるにつけても」の語句である。第二は、「いたつき」と「いさを」である。まづ第一の点について述べよう。誰でも気がつくが前者の具体的に對して後者の思想的であることは明瞭だ。このちがひが、今上御歌と明治天皇御製の歌の性格の相違である。『明治天皇御集』では、この御製は「をりにふれて」の題下の一首になつてゐて、その作歌動機の具体的条件を示すものはない。今上御歌ははつきり「佐久間ダム」の御歌なのである。明治天皇が古今集を愛読されたといふこと、語法を古今集によられたらしいことなど、この表現の思想性によつて解釈しうるのである。

明治天皇御製を「古今調」といへば、今上御歌は「万葉調」といふべきだらう。さう考へて、明治天皇御製はつまらない、といふのでは、その語法の古今的性格のみにまどはされて、一首全体の眞実性を見ず、明治天皇御製が和歌史上稀有の思想詩であることを見おとしてゐるものである。この点については別のところに論じたので今はふれないが、今上天皇の御歌の、具体的抒情的性格と明治天皇の御製の規範的思想的性格との対比は、この二首の御歌にも拝されるのである。

一一 御歌「ともしび」

山口県矢筈が岳の植樹（昭和三一年）

人々とつつじ花咲くこの山に鋤を手にして松うゑてけり

植樹植林について今上天皇は、特に深い関心をおもちのやうで、そのことをおよみになつた御歌が多い。このことは戦後しばしばおとづれた大洪水の災害がおもに森林の乱伐によるといはれてゐることと関連がある。「つつじ花咲く」晩春の山に、「人々と鋤を手にして松」の苗木を植ゑをへた、とただそれだけの意味であるが、つつじの美しく咲いてゐる、といふことは、灌木の繁つてゐるといふことだから、植林の見地からすれば禿山だらう。そこに「人々と」一緒に植林した、といふ天皇のおよろこびの深くこもつてゐる御歌である。「人々と」といふ第一句が生きてゐる。前にあげた「植樹祭行事に際して」の「人々と苗木をうゑて思ふかな」の御歌は、この御歌と連作になつてゐるのではないか、と思はれる。概括していつてしまへば、国民生活の幸福をねがはれるお心持があふれてゐる、といふのであるが、それが、具体的の事実に即してうたはれてゐるので、深く、あたたかく、心

に迫るのである。しかも、「人々と」一緒になつて、天皇も国民もひとつになつて、国民生活の平和と幸福をまもりきづいてゆかうと努力する、そのよろこびがある。変なことばだが、ここには、国民と一体となつた天皇のおよろこびとご安定があると思ふ。

明治天皇の御製は、かういふ今上天皇の御歌とは少し感じがちがふ。明治憲法にいはゆる「国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬」する天皇の自覚が、御製の根柢にある。明治天皇は歌人軍人を統一した大政治家である。今上天皇は、歌人で科学者である。さうして、戦後、「新日本建設に關する詔書」に見られる通り、「單ナル神話ト伝説トニ依」るにあらざる、相互の敬愛の中に基礎をおく象徴天皇となられたので、いはば政治的権力の座をはなれたのである。しかし国民とひとつである。国民生活の中心にあつて、政治的権力を綜合する政治的統治の意志としてではなく、精神的な中心として、再生されたのである。明治天皇と今上天皇との御歌を比較して、この微妙な変化をたどることは、時代思想の推移をたどることである。ともあれ、わたしはこの、「人々と」一緒にある今上天皇の深いおよろこび、はかないが永久の安定性をおもふと、まなこうるむのである。

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

昭和三十二年宮中御歌会始の御歌である。「こたへてわれも」といふおことばは、「人々と」とおうたひになるお心もちのあらはれである。この御歌を誦して、友人のひとりには、次のことばをよせてきた。

「一月十一日のラジオ放送で、御歌会始の御製をおききした時の感激は、とても散文ではいひあらはせない。人と人の結びつきは、単なる外交辞令、原稿朗読演説などで実現できるものではなく、人の生活に直接「共感」して自分もその人の生活のなかに溶けこんでゆく時に、始めて「芸術」として実現されるので、このやうな「瞬間」こそは人類にとつて記念すべき瞬間であり、「歴史」は実に無言の感激のうちに進展してゆくものであると確信する。国民が、おのおのその職場で、生活環境のなかで、このやうなしつかりしたつながりをもつて、協力してはたらいたならば、この世の中はどんなに明るく、どんなに発展することであらう。このやうな希望と祈りをこめて、私は、この御製をラジオでおききした時の感激を、お伝へしたいと思ふ。日本は独立した。貿易も自由になつた。（ひとつきりは、商船の速力まで制限をうけたのに）そこで往年の貿易国日本の姿にまさるとも劣らない、有無相通じ、各国ともにさかえる真の世界平和を裏づけすべき本當の貿易に乗り出さうと、平和国家日本は決意し、ここに繰りひろげられた港まつり。夜の港に浮ぶ船らの、満船飾の無数のあかりのひかりかがやくそのひかりは、海国日本の民の心の無限の希望を示すひかり。この無限の希望にどよめく民らに「こたへてわれもともしびをふる」と、全身心を振りうごかされて、おうたひなされたこの大御歌。「人はパンのみにて生くるにあらず」人は法律、制度、予算だけで動くのではない。われら日本国民は、心こころからわれらの生の息吹に「こたへて」下さるこの天皇の大御歌を口ずさみつつ、感激の涙ぬぐつて、あたらしい生の旅路に船出しようではないか。」

「学半ばにして罹病疎開し、開拓農業に従事し、しかもそれに失敗して、いまや指圧治療業に転向し

ようとしてゐる一青年の、この十年間における魂の決算書」といふ石川章氏の詩歌集『日本の門出』の、最後のことばである。これ以上に、つけ加へるものはないが、ぼくはこの御歌をよんで、戦時中、また戦後、長く侍従長をつとめ、終戦内閣の総理大臣だった鈴木貫太郎大將が、講演の中で話した今上天皇の逸話をおもひ出した。昭和六年、この御歌から、二十六年の昔のことである。いまその逸話を、昭和十七年刊行の、藤樫準二著『仰ぐ御光』から引用する。

熊本県下で陸軍大演習が行はれた昭和六年十一月十九日のこと、陛下には鹿児島島の行幸を終へさせ給ひ、軍艦、榛名に御乗艦、海路を横須賀へと還幸の御途につかせられ、御召艦は県民の熱誠なる奉送裡に桜島を後に静々と鹿児島湾を南下した。

供奉員中で一番早く夕食を終つた木下総務課長は、陛下はまだ御食事をお済ませ遊ばされぬであらうと、思ひながら特別の階段から馳せ上られた。最早日はとつぶり暮れ、風はなく海上は真暗で、甲板には小さな電燈が只一つ灯つてゐるばかり、電燈の下なら兎に角、少し離れたら人の顔もよく判らぬ位の夕暗に甲板は包まれてゐた。

すると思ひ掛けなくも間近な夕暗の中に、畏くも陛下御一方の御後姿を拝したのである。しかも右舷の手摺り近くに海の彼方に向つて直立の御姿勢で、御挙手御会釈あらせられつつある御尊姿！である。

木下課長は、陛下の御覽遊ばされてゐる方向を遙かに凝視したが、肉眼では夜闇の外何物も見えないので、近くの望遠鏡に暫く眼をあてがつた結果漸くにして、御召艦は今し薩摩国指宿いよすきの沖合あ

たりを航行中のこと、海岸一带に赤い灯の流れが連綿として続き、小高い所には点々として大きな火のかたまりが見えた。これぞ海岸の人々が今しも御召艦が自分達の村の沖合を御通過になるに相違ないと、山々に篝火を焚き、老いも幼きも悉く海岸に立ち並び、手に手に提灯ちやうちん、松火たいまつを振りかざして、海上遙かに心からなる奉迎送を申し上げてゐることが判然と想像された。

畏くも陛下には望遠鏡でこれをお察し遊ばされ、御食事もとらせられず、只御一方で暗い甲板の上から、遙かにこの村民達に御会釈を賜つてゐるところであつたのである。彼方の海岸に立ち並ぶ無数の人々の中に誰かこの有難き大御心を仰ぎ知るものがあつたであらうか。……嗚呼何といふ莊嚴な光景であらう。”

陛下が、「こたへてわれもともいびをふる」ことのできたのは、それから二十数年をへて戦争が終つて、辛くも「国体を護持し」えて後のことであつた。敗戦によつて自由をえたのは、国民ばかりではない、天皇もまた自由をえた、といふのは逆説であらうか。天皇と国民のつながりが、この十年の間ほど、強く直接になつたことはなかつたのではないだらうか。国家の独立が危機にさらされ、国民は外国の占領によつて自由を失ひ天皇は主権の座から追はれたこの十年の間ほど、天皇と国民とがより合つたことがないといふことが、言ふならば、日本の国体の永久性である。かうして、国民生活の安定と繁栄は過ぎさつた昔の苦難を忘れさせるのであらうから、天皇と国民とのつながりもまたうすらいでゆくであらうが、この十年の感激は、この御歌にあますところなく表現されてゐる。

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

戦後十年の御歌である。三十一年の御歌の中の次の二首は、素材の構成に、明るさがある。

旅の宿にて

つたもみち岩にかかりて静かにも旅の館やぐらの秋の日は暮る

防府市の毛利邸にて

水清きいささ小川の流れゆくたたらたたらの庭の春のしづけさ

この二首の御歌の素材の構成は、前にのべた次の御歌のそれと対照的なのである。

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

みづならの林をゆけば谷かげの岩間に清水わきいづる見ゆ

戦後十年、寂寥孤独の緊張から、自信と安定をえた魂が、次代に希望の眼をはなつのであらう。戦後十年、亡国すれすれまでに荒廃した国民生活が、神武景気とかいつて平和と繁栄をたのしむことができるまで立直つた。それはもちろんん国民の総合的な力であるが、そのことを身にかへてもと祈つた人、つとめた人、その人の名をあげよ、と言へば、今上天皇をあげるがよいとおもふ。この気持は、

次代の人にはわかるまい。だからわたしはこの御歌謹解をかきのこしておくのである。戦中戦後の、国民の全体感情は、今上御歌にその微妙な表現をのこしてゐる。御歌をよむことは、われわれが天皇を戴いて経てきた、昭和三十年間の年月日々の思ひをたどることである。当代の国民の苦難にみちた歩みを、遂に戦争に負けたが、ふたたび天皇をいただいで復興し得た当代国民の悲喜明暗を、のちの代の人々は、御歌によつて味ひ知ることができるだらう。われわれ昭和の民のいのちは御歌の中に生きてゐるのだ。

御歌解説 改訂

一 歌会始の御歌 (1)

（東宮時代・摂政宮時代・昭和戦前・
 戦中・戦後の五期に細分する。
 大正十年より昭和二十一年まで）

ここに集録する「歌会始」うたわいはいはじめまたは「歌御会始」うたごわいはいはじめ（ウタギョカイハジメともいふ）の御歌といふのは、新年恒例の宮中歌会に発表される天皇の御歌のことである。「歌御会始」は、「宮中における新年儀式の一つで、古くは年ごとの定めではなかつたが、明治二年以後、毎年一月中旬行はれ、両陛下臨席、国民の詠進歌のうち秀逸を選んで披講」と「広辞苑」にあるが、他書によると「明治十二年から臣民の預選歌を御前に披講する」とある。「しきしまのみち」を重んぜられた明治天皇のお考へによつて毎年の宮中の年中行事となり、天皇の服喪中以外に戦時にも欠かされず、明治から今日まで一貫して継続された。天皇が前もつて提出なさつた「御題」によつて、天皇皇族をはじめ高位高官の者から一般民衆に至るまでの歌をあつめ、一種の国家的規模によつて歌会を挙行するわけである。

一般人の「献詠」は莫大な数にのぼるから、戦前は宮中の「御歌所」おんかどころといふ歌に関する事務を扱ふところの「寄人」よゆうどつまり宮中勤務の歌人たちによつて予め選ばれて、その中の数首が、新年の歌会に「披講」されるのである。戦後は一般歌人の中から選者が選ばれる。現在は戦前とおなじく盛んで、毎年何万首といふ歌が献ぜられ

るといふことである。明治天皇以来、天皇・皇后の御歌はかかさず発表され、今日に至つてゐる、全く日本独自の文化行事である。明治天皇は預選歌以外の一般人の歌をも集録しておかれて、折にふれてお読みになつた、といふことであるから、明治時代における天皇と国民との直接の精神交流は、この献詠によつて行はれてゐたといへる。

今上天皇の御歌についていへば、戦争中までは、この歌会始だけが天皇の御歌の発表される唯一の機会だつた。したがつて、昭和二十年、敗戦の年までの御歌はすべてこの歌会始に披講された御歌なのである。皇太子殿下の英語教師として来日したヴァイニング夫人や詩人ブランデンは、この「歌会始」に列席して非常な感銘をうけたことを書き記してゐる。日本文化の精髓が国境をこえて通ふ価値をもつてゐる証拠の一例である。

東宮時代

社頭暁

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

題は「社頭の暁」と読む。「とりがね」は普通鶏のときをつげる鳴き声をいふ。「夜」は「よ」と一音で読む。大正十年、御年二十歳、東宮時代の新年歌会始の御歌であり、今上天皇の御歌としては最初に発表されたもの。

「代々木の宮のもり」つまり明治神宮の森をおよみになつたこの御歌が、御歌集の最初にくることの意味については、本書「御歌研究」の中に詳しく論じた。今上天皇が、旅順攻略の軍司令官で後に明治天皇に殉死した乃木

学習院長の薫陶を受けられ、つづいて東宮御学問所総裁となつた日本海海戦の東郷元帥の輔導を受けられたことなども、明治天皇へのご傾倒のお気持を強める理由の一つとなつたにちがひない。たしか高宮太平氏の名著『天皇陛下』だつたと思ふが、今上天皇が明治天皇関係の図書二百数十冊を読破され、明治天皇ならびに明治時代について専門家も及ばぬ知識をもつてをられる、と書いてあつた。さもあることは思つたが、今上天皇と明治天皇との精神的の關係を想像させる資料でもある。

旭 光 照 波

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

大正十一年。「旭光、波を照す」朝日の光が波を照すといふ題である。「あらまほし」は「あつてほしい」の意味であり、「にはへる」は「照り映えてゐる」の意であらう。「おほうみのはら」は「大海の原」で、もちろん「大海原」の意味であるが、語調が雄大である。大正十一年の新年に発表なされたものだから、この御歌に反映するのは前年のご体験のはずである。かう考へて大正十年の宮のご行動をみると、この年は例の「御外遊」の年である。同年三月三日、軍艦「香取」を御召艦おめしかんとして渡欧の壮途につかれ、歐洲各国をお巡りになつて、九月三日、ご帰国になられたのである。航程実に二万三千五百哩と言はれるご航海中、大洋上での御歌かと拝される。おだやかに朝日のかがやく大海原を御覧になられて「世の中もかくあらまほし」と、悠容として迫らぬ調べに世界の平和を願はれる、一首の調べがまことに雄大である。

摂 政 宮 時 代

暁山雲

あかつきにこまをとどめて見渡せば讃岐のふじに雲ぞかかれる

大正十二年。御題「暁の山雲」。こまは「駒」でこ乗馬である。明治天皇もだが今上天皇がこ乗馬にすぐれてをられることは有名である。「雲ぞかかれる」は「雲がかかつてゐる」の意。「ぞ」といふ言葉は係り助詞といつてこの助詞で強く指示すると、その結びの用言は連体形で止めるといふ語法である。文の構造、終止にいつての古語の法則で、古代語では現代のやうに終止形で終るだけではなかつたのである。したがつて、「かかれ」といふのは普通の終止なら「かかれり」といふところで意味は同じ。「讃岐のふじ」は香川県綾歌郡の西北部にある火山・飯野山の別称。「丸亀市の東南方約四軒に孤立し、飯野・川津・坂本の三村に跨る。古銅安山岩に属するいはゆる讃岐岩サヌカイトより成る美麗なる円錐峯にして一に讃岐富士と呼ばれる。標高四二二米。頂上よりの展望は極めて好く、北方遠く中国の連峰より瀬戸内海の青螺白帆を望み、また脚下には坂出町、丸亀市、多度津町の港湾街衝を指顧すべし」(『大日本地名辞典』より)

早暁駒をとどめて讃岐のふじに雲のかかつてゐるさまを見渡される、といふ爽快、凜然たる御歌である。前年大正十一年十一月二十五日、父帝大正天皇のご病氣により、摂政に就任された。したがつて、この御歌は、摂政宮の御歌として発表された。大正十三、十四、十五年の御歌、みな同じである。

新年言志

あらたまの年を迎へていやますは民をあはれむ心なりけり

大正十三年。「新年言志」は「新年、志(こころざし)を言ふ」と読んでゐる。新年に際して志を表現する、といふ意味である。「あらたまの」は「年」を修飾する枕言葉である。枕言葉といふのは短歌や長歌で音調をととのへるために創り出した五音の修飾語である。はじめは意味がよくわかつてゐたはずだが、段々わからなくなつて、万葉集の中の短歌でさへ意味不明のまま使はれてゐると思はれるものが多い。「あらたまの」といふ枕言葉も元來、「掘り出したままでまだ磨かぬ玉」の意味だといはれるから、「年」とか「月」とかの枕言葉となつたのはどういふ理由かちよつとわからないが、万葉時代から「年月」を修飾する語として固定してゐる。この御歌の場合「年を迎へて」といふので「新年を迎へて」の意味になるが、「荒玉」は「新玉」と通じ、さらに「改まる」の音と通じるので、「新玉の年」と言へば、それで新年の意味に使はれる。「あらたまの年を迎へて」で「新年を迎へて」の意味となる。「いやます」は、「ますます増すのは」といふ意。最後の「けり」は詠嘆の感情をあらはす助動詞である。「民をあはれむ」といふのは「民衆に同情する」といふ意味。戦後の御歌には「水のまがに苦しみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ」とある「あはれと思ふ」に通じる言葉であるが、この「あはれむ」といふ言葉の方が統治者としての意識が強く、戦後にはないお言葉づかひで、大正十三年「明治憲法」下の摂政宮殿下のご感覚である。一首一文、屈折もなく率直明快に読み下された「まつ正直な」といふ評語が適切な、竹を割つたやうな一種の爽快さの感じられる御歌である。前年、大正十二年九月一日は関東大震災、帝都東京が焼土と化した。

山 色 連 天

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも

大正十四年。題は、「サンシヨクレンテン」と棒読みにするか、あるいは、「山色さんしよく、天につらなる」と読むか、後者がよいやうだ。歌意は分明である。「みよのすがたも」は「み代の姿も」の意で、特に「み代」と言はれたのは摂政宮といふ身分のご自覚にもとづくのである。天皇になられてからは、ただ「世」と言はれて「み世」とは言はれないので、「天皇の統治せられる世」であるから摂政宮として天皇にお仕へするご態度をもつて「御代」と言はれたのであらう。研究篇にも関説したが、謙抑、精妙なお心がまへの一端がうかがはれる言葉づかひである。この御歌は、何とも清らかな、勇壮な御歌と拝するが、殊に富山県の人々は、郷土の名山をおよみになられたこの御歌を大切にして、御歌の歌碑を二つまで建てたばかりか、県民歌として作曲した。次の年大正十五年の「河水清」の最上川の御歌が山形県民歌として作曲されたのと好一对か。この御歌碑その他については、富山の広瀬誠氏の詳細の調査記録「立山の御歌についての覚書」がある。

「立山の御歌についての覚書」

(1) 大正十三年十一月三日、陸軍大演習御統監のため御来県中の摂政宮殿下には、富山県石動町いすまき（富山県西端、礪波山麓なだ）附近の御野立所おのたてどころ（埴生野はにみのの御野立所）から、晚秋快晴の空に連る新雪の立山連山を眺められて、深い感興を催された御由。その翌年の御歌会始（大正一四・一・二〇）に「山色連天」の勅題（この勅題は摂政宮の撰ばれたものと思はれる）の下に披露せられた。

(2) 「ならへとぞ思ふみよのすがたも」と詠せられた御心を拝察する上に記憶すべきことは、立山の大観をめでさせられたのが十一月三日、先帝明治天皇の御誕生日であつたことで、明治天皇の大御代を回顧される御心もちがこもつてゐるやうに拝される。

(3) 摂政宮としての御地位がよく拝察されるやうに思ふ。昭和の御代になつてからは、「わがよ」とお詠みに

なり「みよ」とはお詠みになつてをられない。大正天皇の御治世なるが故に「みよ」とお詠みになつたものと拝される。しかも「ならへ」といふ命令形の強い御表現は摂政宮なればこそと拝する。摂政宮といふ御地位を考へずしては味ふことの出来ぬ御作である。

(4) この御歌が発表されると、富山県民は感激し、東京音楽学校教授岡野貞一氏に依頼して作曲し、富山県では国歌と共に尊重され、式典などに合唱された。毎朝、或は週一回朝礼の際校歌と共に斉唱してゐた学校もあつたとさく。(作曲者を信時潔氏とする誤伝が相当流布してゐる)(曲は莊重でなかなかよい曲である)戦後も、昭和二十二年行幸の奉迎式場では国歌と立山の御歌とを合唱した。昭和三十三年国民体育大会開会式にも立山の御歌を合唱した。

(5) 立山三ノ越（じ）の歌碑由来——大正十四年一月二十日の御歌会始で御作発表。その年、富山県では三ノ越の自然岩に御歌を謹刻せんとし、富山県教育会は率先この挙に賛し、県下学校生徒児童青年団婦女会らこれに和し、挙県一致赤誠を捧ぐ。入江東宮侍従長に揮毫を乞ひ、大正十五年夏秋(立山山頂附近では夏及び秋しか工事ができぬ)工事し、翌昭和二年五月十二日、県知事代理(内務部長)らが雪ををかけて登山し、除幕式をあぐ。歌碑建設を記念して御歌道（ごた）と称する新登山路が開拓されたが、現在は廃道となつた。

(6) 三ノ越の御歌碑を見られた最初の皇族は北白川宮永久王殿下である由、大正十五年八月北白川宮御年十七歳の時、除幕式以前の歌碑を御覧になつた。竹田宮恒憲王(十八歳)も御同行。

(7) 呉羽山の立山御歌碑由来——富山国民体育大会を記念して、富山ロータリークラブ、北日本新聞社等発起で、昭和三十三年建設。入江相政氏揮毫、中村勝五郎氏が彫り、高さ二・四メートル、幅〇・八メートル伊豆産ねぶかは石使用。六月彫り完成し、八月十九日起工。九月十四日高松宮殿下御臨席のもと完工除幕式。

(8) 越中では古来、男は立山登拝せぬと、一人前の男の仲間入が出来ぬ習いで、十四、五歳になると必ず立山詣をした。小学校高等科、中学校などでは団体登山をした。御歌碑が出来てからは、登山の時、碑前で立山の御歌を合唱したもので、私もその記憶と感激は今も鮮明。雲を貫いてそびえる岩山の一角で歌ふ歌声は、七十二峰八千八谷（古来、立山七十二峰、黒部八千八谷と称す）にこだましてひびく。戦後はこの風習もすたれ、碑面は風化磨滅してゐる。碑の傍の岩に、由来を記した銅板がはめこまれてゐるが、これは今も鮮明である。御歌は戦後あまり歌はれなくなつたが、国民体育大会で合唱することになつて以来、相当復活普及した。

(9) 立山は古代はタチャマ、中世以降タチャマと呼称。歌語詩語には後々まで「たちやま」が使用されたが、御歌は一般に親しみのある「たてやま」の方をお使ひになつた。

(10) 三ノ越歌碑は「東宮御歌」と標記。今上天皇御即位後「御製」と書く者があり、昭和一五、六年頃、県会で問題になり、宮内省に問合せた結果「御歌」が正しいといふことに決定した事がある。しかし最近建立された呉羽歌碑は「御製」と標記されてゐる。

(11) かな漢字の混用法は相当まちまちのやう。『みやまきりしま』に拠るべきか。

『みやまきりしま』——たて山の空に響ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすかたも

三ノ越歌碑——立山の空にそひゆるををしさにならへとぞ思ふみ代のすかたも (入江為守謹書)

呉羽歌碑——立山の空にそひゆるををしさにならへとぞおもふみよのすかたも (入江相政謹書)

昭和三十四年、北日本新聞その他掲載の「富山の宿より見たる立山連峰」の御歌は、大正十四年の「山色連

「天」の御歌から数へて実に三十年目の御歌である。

富山の宿より見たる立山連峰

高々と峰々青く大空にそびえ立つ見ゆ今日の朝けに

ほとんど変らぬと見えるやうな御歌であるが、やはり青年時代の緊張した意力的な感じの御歌にくらべると、昭和三十四年の御歌には、淡泊な自在のご心境があふれてゐるやうだ。

河水清

広き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

大正十五年。「河水清し」といふ題である。歌意は分明で解説の必要もない。最上川は芭蕉の俳句にも詠まれて有名な山形県の大川（五月雨を集めて早し最上川——『奥の細道』）。この御歌は山形県民歌となつた。また酒田市に御歌の碑が建つてゐる。前の立山の歌と双壁である。一方が山、一方が川であることも対照的である。山形県生れの歌人齋藤茂吉もこの御歌を愛誦したらしいが、その意見については、研究篇に批評した。この御歌は、最上川といふ河川を「写生」したものでなく、最上川といふ河川の性格によつて、人間のあべき姿を暗示した、つまり、叙景歌ではなくて思想歌であるといふ点が大切だと思ふ。茂吉にはこの思想的なところが観念的に見えるのではないだらうか。前の立山の「山色連天」の御歌と同じく、自然は、人生の理想を示すものとして眺められたのであるから、そこに優勢に働いて歌の主題となつてゐるものは、この作者の思想なのである。釈道空・折口信夫は『みやまきりしま』に寄せた「昭和御製と宮廷ぶりの歌」といふ論文の中で、この御歌につ

いて、「文学と、其のほかのものとのぎりぐり——境の線まで来て、はつきり踏みとどまつていらつしやる」と暗示的な言葉でこの間の消息を語つてゐる。この御歌をよむと明治天皇の次の御製がおもひおこされる。

水

山川のながれは末になりぬれどにござらぬ水は濁らざりけり (明治四〇年)

今上天皇の御歌には地名をちかによみこまれた歌が多いが、『明治天皇御集』には稀である。いまあげたこの御歌にしてもさうで、今上天皇の御歌には「最上川」とある、明治天皇の御製には、一般的抽象的に「山川」とある。この相違は微妙である。その点についていろいろなことが考へられるが、それだけ今上天皇の御歌の方が具体的素材に即され、明治天皇の御製の方が、思想的であると思ふ。これは、抒情的直接性と思想的規範性の差とも考へられ、御二方の天皇の個性の相違とも考へられるのではないかとおもふ。

以上、摂政宮時代のうちの、前記二首の御歌は、大正末年における摂政宮の、時代人心に対するご希望であつたのであらう。国民の精神に対する調への高い鼓舞激励である。いまから実に数十年前のことである。御歌は時代の變遷にも少しも色あせず、いまも生き生きと人の心に働きかける力をもつてゐる。

昭和戦前

山色新

山やまの色はあらたにみゆれども我まつりごといかにかあるらむ

昭和三年。御題は「山色新あたらなり」と読むのだと思ふ。大正十五年十二月二十五日、大正天皇崩御、今上天皇即位。改元して昭和となる。翌昭和二年は大正天皇御大葬、諒闇おつらみのため歌会始の御儀式なく、したがって御歌も発表されなかつたのである。大正天皇は大正十五年年末におかくれになつたので、昭和元年は数日で終り、昭和二年になつた。そこで、大正十五年の御歌から昭和三年の御歌にとぶが、中に一年欠くのみである。

「我まつりごと」は「わがまつりごと」で「わたしの政治」の意。歌意分明である。「山やま」といふ「山」といふ名詞を重ねた疊語は、日本語では複数を示すが、その示し方が英語のやうにSをつけて複数を表示することなどにくらべると具象的だ。日本語では一般に単数も複数もあらはさない、とも言へるので、とりわけ疊語による複数表示が具象的に感じられるのかも知れない。今上天皇の御歌には、この疊語が盛んに使はれてゐる。前記引用の昭和三十四年の「富山の宿より見たる立山連峰」の「高々と峰々、青く大空にそびえ立つ見ゆ今日の朝けに」、また昭和三十年「秩父セメント有恒クラブにて」の「朝もやはうすうす、立ちて山々のながめつきせぬ宿の初冬」など、それぞれ一首の中に疊語が二つも使はれてゐる。もちろん歌の音調とも関係があるが、そればかりでなく御歌の表現法の本質に根ざしてゐるやうである。

最後の句の「いかにかあるらむ」は八音で字あまりである。普通だと「いかにあるらむ」（どうだらうか）といふ意味で、「か」を略して七音にととのへてしまふところであるが、丁寧に、省略を加へず、心をこめてのべたので、八音字あまりとなつたのである。政治についての深い反省のお心持を語る。この年、陛下御年二十八歳。「天皇」として、国民に君臨したまふ、政治上の責任感の痛切な御歌である。

都いでてとほく来ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道

昭和四年。「田家の朝」(いななかやの朝)。「都いでて」は「都を出て」の意、第一句六音の字あまり。御歌に多い手法で、普通第一句の字あまりは頭でつかちになつて安定を欠くといはれるが、御歌ではそれがかへつて御歌の表現の直接性を生かしてゐるのが特徴である。「来ぬれば」は「来たので」、「小田」の「小」は「を」で接頭語、「田んぼ」の意。田の中を通る道が「小田のなか道」で、畦道をさすのではないかと思ふ。まことにこの田園の朝風のやうに平明で清新な御歌である。昭和三十年の「泉」の「みづならの林をゆけば谷かげの岩間に清水わきいづる見ゆ」と比較して研究篇に詳論した。

海 辺 巖

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐいはほの力をぞおもふ

昭和五年。御題「海辺の巖」。「いそ崎」は「磯崎」で「磯の海中に突き出したところ」、岬とまではゆかない程度の荒磯をいふのであらう。「凌ぐ」は「しのぐ」、荒波をかぶりながらゆるがぬ巖——島国日本の海岸随所に見受けられる光景であるが、それだけにかへつて、巖の力に日本の独立意志をおもふ。当時ある詩人はこの御歌を拝読して、

「まことに、われらもろともに

御国まもると 立ちいづべしと、

めさめしめさせ給ふ 大御歌」

とうたつた。同年六月には満洲事変が勃発した。国家的緊張の身に迫るやうな御歌である。

社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らげき世をこそいのれ神のひろまへ

昭和六年。「社頭しやとうの雪」は「神社にふりつもる雪」といふ意。「社頭」は「神社のほとり」。「ふる雪」は「いま現にふつてゐる雪」をいふ。「世をこそいのれの」の「こそ」は例の係り助詞で、下にくる用言を已然形で結ぶといふ、法則があるので、「いのれ」と結んだのである。「世を祈る」の世を強調した表現である。「切に平和の世を祈願する」といふ意味である。

同昭和六年九月満洲事変勃発。下村海南記「内側から見た天皇」にかういふ一節があつた。小林躋造談話で、
 “昭和五年六月に僕が海軍次官になつて間もなく満洲事変が突発した。其秋南九州で陸軍大演習が行はれ、天皇陛下には統監のため軍艦霧島にて、鹿児島に行幸された。その（還幸）航海中のある夕、晩飯を了へて上甲板に出た処へ電信兵から一通の電報をうけとつた。電燈に近づいて一読してみると後から「何か新しい情報か来たの？」との声を聞き、振りかへつて見れば薄暗がりの中に御姿を御見上げした。「陸軍は愈々満洲里まで進出したやうで御座ります」と申上げると、陛下は独り言のやうに「大きな戦はしたくないね」と仰せられた。”

おのづから満洲事変に対する陛下のお気持の一端があらはれてゐるやうである。「ふる雪に心きよめて」「神のひろまへ」に「平和の世を祈念する」と、歌会始の御歌におよみになられた天皇のみ心とは異つた方向へとまつしぐらに日本は進んでいつたやうである。以下、昭和十六年大東亞戦争開戦までの十首の御歌のうち、五

首の御歌が明らかに平和の祈念をおよみになつてをられる——このことの歴史的意義は重大である。

暁 鶏 声

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる

昭和七年。「暁の鶏声」。「我世」は「わがよ」、「わが統治する世」の意。「声ぞきこゆる」は例の係り結びで、普通文では「声きこゆ」となる。歌意明瞭。「ゆめさめて我世をおもふ」のお言葉は歴代御歌の語法として平凡であるが痛切である。昭和三十年、「八月十五日那須にて」の御歌、「夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる」と同じ第一句である。昭和七年一月八日、朝鮮人某桜田門において天皇ご乗車に對し爆弾を投下。同月二十八日上海事変勃発。三月三日停戦。五月十五日、いはゆる五・一五事件。かくして展開する狂瀾の昭和史を背景にして、はじめて、この御歌の沈痛なみしらべを味ふことができるのではないだらうか。

朝 海

天地の神にぞいのる朝なきの海のごとくに波たたぬ世を

昭和八年。「朝の海」、前註の時代的背景と対照される平和のご祈念である。「朝なきの海のごとくに波たたぬ世を」「天地の神にぞいのる」といふ順序を替へて、——修辭法の上でいふ「倒置法」によつて、祈念の強さを語順にしめされたのである。

池 辺 鶴

楽しいにたづこそあそべわが庭の池のひとりや住みよかるらむ

昭和十年。「油辺の鶴」と詠んでゐる。「たづこそあそべ」は、例の係り結びで、「鶴遊ぶ」の意味と変りがない。歌意明瞭。昭和九年の歌会始の御歌はない。十年のこの御歌が、皇太子殿下のご誕生以来はじめての御歌で、さう思つてみるせるか、何となく家庭の団らんをおもはせるやうなあたたかい感情の流れがうかがはれる。すなはち、前々年、内外正に騒然たる、動乱の昭和八年の終らうとする十二月二十三日、皇太子ご誕生。昭和三十四年御結婚の儀式をおあげになつた皇太子さまである。今上天皇のご結婚は大正十三年一月二十六日久邇宮良子女王とのご結婚で、当時の重臣山縣有朋の「封事」に見られる反対意見があり、裏面の内情は举国奉祝のよろこびを許さぬものがあつたやうだ。時に摂政宮御年二十四歳。新しい時代の夜明けのやうに感じられてゐる皇太子殿下ご結婚とくらべれば今昔の感がある。それはそれとして、大正十三年御年二十四歳でご結婚になられながら、昭和八年十二月の皇太子殿下ご誕生まで、皇男子のご出生がなかつたので、皇太子殿下のご誕生は文字通り国民待望の慶事であつた。当時二十歳だつたわたしは、その日その知らせにわきあがつた歓声のどよめきをよくおぼえてゐる。外戦と内乱のさ中に噴きあげた悲痛な歓声のやうに感じられたのである。川手麻須美先生の絶唱が当時の国民的感情をよく伝へてゐると思ふ。

皇太子殿下御降誕をことほぎまつりて

皇神は御子下しませり清き故になやむ皇国に御霊添ふべく

大倭あぐる歓呼をよものくにききついましなに思ふらむ

古へと来む世とを現在にとりすべてわき興る皇国のすがたうれしも

高松宮さまの御歌もすばらしい。

昭和八年十二月二十三日朝まだき皇子あれましぬとききて

かくばかり嬉しき事の又やあるまちにまちつる皇子のあれまし

その時から二十年、皇太子殿下立太子の折の天皇御歌をよみ、ふりかへつてこの「池辺鶴」の御歌をよむと、今上天皇のご生涯が多難な時代であつただけに、感慨さらに深いものがある。

海上雲遠

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

昭和十一年。「海上、雲遠し」。「紀の国」は和歌山県。御歌においては現在の県名をそのままで詠みこまれることなく、多く古名が用ひられる。「和歌山県、潮ノ岬に立ち寄りて」では歌の感じが出ない。古名が土地の歴史性をあらはすのだらうか。紀伊半島南端の潮ノ岬は黒潮洗ふ雄大なながめで有名である。東と南へ、さへぎるものもなく太平洋がひらけてゐる。太平洋の東のはてにアメリカ合衆国がある。「沖にたなびく雲」はアメリカ合衆国のことだ、といふ解釈は、短歌の芸術的価値を無視した頓智的解釈で、まさしく間違ひである。しかし、この「紀の国の潮ノ岬に立ち寄つて沖にたなびく雲を見ることだなあ」といふ意味の雄大な感じのする御歌に、凜然たる国家の独立意志を感じることは、間違つてゐないのではないか。斎藤茂吉のいふ「清純とかおほどかとか平明とかいふ抽象的言葉で表現される共通したある匂ひ」釈道空の「知識でもない、權威でもない、圧力でもない、おほどかにしてあたたかに、清くしてまどかなもの」——さういふ感じが、そつくりそのまま時代の把握の仕方であらはれてゐると見たいのである。研究篇の「御歌と日本現代史」の項で詳しく考へてみた。さう

いふ意味で御歌には倫理的要素がある。その点が専門の歌人の気にさはるらしいが、御歌はあくまで総合的であることがその特色であるやうだ。

「雲をみるかな」の「かな」は感動の意味をあらはす言葉で、万葉集では「かも」といふ。短歌や俳句には盛んに使はれた言葉である。何でも「……かな」といふと古今調と言はれ、「……かも」と言へば万葉調と言はれたりするやうな誤解を生むほどである。そんな一語二語、万葉語をつかつたら「万葉調」になるのでもなく、平安朝時代の「かな」を使つたら「古今調」になるものでもない。現にこの御歌など威風堂々たる格調は、何調といふなら、正に万葉調といふべきであらう。だが、それはそれとして、「雲をみるかな」といふ語法は、御歌にはあまり見ない。御歌は多く現在形（現在の完了をふくめて）でそのまま終止する句が多い。「雲をみる」といふ風に、そのまま止めてしまふのである。したがつて、この場合「雲をみるかな」はあくまで「みるかな」で、これを現代語でいふとどういふふうになるのだらうか。「見ることだなあ」と訳しておいたが、どうもまだ訳し足りない気持である。

田家雪

みゆきふる畑のむぎふにおりたちていそしむ民をおもひこそやれ

昭和十二年。「田家でんかの雪」。「むぎふ」は「麦生」で「麦畑」の意。「いそしむ」は「一心にはたらく」の意。

「おりたちて」は作者の行為ではなからう。「おりたちていそしむ民」を作者が「おもひやる」のである。「おもひこそやれ」は、「おもひやる」といふ言葉を二分して「おもふ」を強調し、例の係り助詞の「こそ」を挿入したので、「やる」といふ言葉の已然形で結ぶことになった。古語でよく使ふ語法である。「おもひやる」を強

調したとみればいい。民の方を強調すると「民をこそ思へ」などとなる。ここでは「民」については一句から四句まで使つて充分にのべたから、最後の一句を、強く、しつかり、「思ひこそやれ」と結んだのである。「雪のふる麦畑に立ち出て麦ふみをする農民の苦しい生活を身にしてみてもふ」といふ意味である。——以下昭和十六年の「漁村曙」をはじめ戦後の数々の御歌が、勤労生活者に対する深い同情を語つて、天皇御歌の主題の一つの系列を構成してゐる。前年、二・二六事件が軍の政權掌握への道程となつた。この事件に対する天皇の断固たるご態度は戦後漸く明らかになつたが、翌昭和十二年の支那事変に対するご態度と通じるものがあつた。高宮太平著「天皇陛下」を読むと、この軍部独裁への動向に対してはほとんど孤軍奮闘する天皇のご努力が、すべて崩れ去つてゆく姿がありありと書かれてゐる。戦争の予感と国民生活の苦難に対する同情とが表裏したのではなからうか。

神苑朝

静かなる神のみその朝ばらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

昭和十三年。「神苑の朝」（文みんかした）。「神苑」は「神のみその」つまり「神社の境内」のことである。歌意明瞭であるが、この御歌が、昭和十三年新年に発表されてゐることは、やはり、当時の日本内外の情勢と不可分であると思ふほかない。前年昭和十二年七月七日いはゆる芦溝橋事件（あしやまはし）が勃発して、宣戦布告なき戦争に入つたのであつた。これから昭和二十年八月十五日敗戦降伏まで、日本は文字通り戦争の八年間だつたのである。さういふ時代の背景を考へながらこの御歌を読むと、大戦争の勃発といふ事実と、御歌の平明率直な平和の念願のまぎれもない事実との間に、恐ろしいばかりの断層があつたやうに感じられる。白川大将の遺族におくられた御歌（一七八頁参照）は陸軍一部の圧力によつて十年間極秘にされたのだから、国民が知らなかつたのはもつともだとしても、こ

の御歌にあらはれた天皇の平和の念願がどうして全國民を動かすに至らなかつたのだらう。当時にあつてかういふ御歌のご発表を敢へてなされた天皇の大きな勇氣と決意とを今さらのやうに思はしめられる御歌である。

朝陽映島

高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま

昭和十四年。題は「朝陽、島に映ず」と読むのだらう。「朝日が島にさしてゐる」の意か。「高どの」は「高松」。「はつしま」は静岡県熱海市に属する「初島」のことだらう。海上十キロの沖にある。源実朝の有名な「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ」は、十国峠あたりからこの初島をながめたものだらうか。あるいは熱海までおりて来てのうただらうか。いづれにしる「沖の小島」は初島をさす。実朝のこの歌には前書があつて「箱根の山を打出て見れば浪のよる小島あり、供の者に此のうらの名は知るや、と尋ねしかば伊豆の海となん申す、と答へ侍りしを聞きて」とある。正に実朝の文体で、簡潔な、いい文章だ。今上天皇のこの御歌は、実朝の歌のやうな前後にひろい展望をもつ歌ではないが、朝日に照らされて燦然たる海上の小島が髣髴する。「うつくし」のお言葉は、今後の御歌にさかんに使はれることになる。専門歌人は、かういふはばひろい平凡な言葉を使ふと、感情や情景の微妙な質があらはせないとやつて、とりあげないが、御歌はこの言葉をとりあげて詩語とした。

以上、歌会始の御歌十七首のうち、明らかに朝・暁の言葉のある御歌が八首あつた。他の御歌は、日時を明示してない御歌だから、朝ともとることでできるので、御歌を全体としてみると、ほとんど朝の御歌ばかりではないかと思ふほどである。

迎年祈世

西ひがしむつみかはして榮ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

昭和十五年。題はわれわれは「迎年祈世」と棒読みにしてゐたが、「年を迎へて世を祈る」と読むのが正しいとのことである。「ゆかむ」はここで切れるのではなくつづくので「榮ゆかむ世」となるのである。「榮えゆく将来の世界」の意。「東西の諸国親和して榮えゆく未来の世界」——その実現を祈念する、とおつしやるのである。前年昭和十四年には欧洲において第二次世界大戦勃発。日独伊の連合は、当初の平和維持の目的から対米英戦の準備に転換したやうに見えた。さういふ時代であつた。「西ひがしむつみかはして榮ゆかむ世」は、文字通り「榮ゆかむ」将来の世界であつて、現実の世界は世界的規模の大戦争に突入したのである。現実の事態と平和の念願との開きが甚しくなればなるほど、祈念が深刻になるのである。

漁村曙

あげがたの寒きはまべに年おいしあまも運べりあみのえものを

昭和十六年。「漁村の曙」。「年おいしあま」は「老年の漁師」の意。「運べり」は「運んでゐる」。当時、全世界に波及して日本をもまきこむかにおもはれた世界戦争に視聽を奪はれてゐたばかりは、この御歌を読んで、何だかはぐらかされたやうな、視野にないものを見せつけられたやうな感じがしたことをおぼえてゐる。時代の趨勢とは縁のうすい御歌と見えたといふこと、今日になつてみれば、そのことにかへつてこの御歌の価値があると思はれる。

明治天皇の御製、

田家翁

こらは皆軍いぐさのにはにいではてゝ翁やひとり山田もるらむ
 (明治三七年)

御歌はこの御製と全く同じである。しかし、日露戦争は内村鑑三の非戦論を自由放任し、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を文学と認めたが、大東亜戦争は、出征する父を、夫を、兄を、弟を、子を見送つて泣くことも許さぬ冷酷な拘束があつた。憲兵が戦ふ国民を見張つてゐた。したがつて、戦時下には当然おこつてくる戦後の国民の苦しみといふものを、強ひて無視する風潮があつたのである。この風潮と御歌の精神とは全然別のものである。未曾有の大戦争も自然の人間性を損ふことはできない。しかしまた一面、戦争の大きさは、名もない僻村の浦の老いたる漁夫の日々のくらしにまで及ぶ。それ故にこそ「平和」が祈念せられるのである。

戦中

連峯雲

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

昭和十七年。「連峯れんほうの雲」は「連山の雲」と言つても同じ意味。「連山をおほふ群雲を空吹く風の早くはらへと、ただいのるのである」の意。

言ふまでもなく前年十二月八日、対英米宣戦が布告され、大東亜戦争——のち占領軍によつて太平洋戦争と命

名し直された戦争が開戦となつたのである。昭和六年の満洲事変から事変といふ名の戦争が継続し、領土的野心はもちろん相手国の主権を侵害する意志もないといふ「聖戦」が、いつ果てるともなく戦はれて、うんざりしてしまつてゐた国民は、名実応ずる「戦争」に入つたのであつた。道行く人々がラジオで宣戦の大詔を「奉戴」して、涙を流した。「この時を待つてゐたんだ」と言つて涙を流した人もあつたが、それは相手国に対する敵愾心よりも、むしろ「事変」といふ名の不自然さに対する内部的反撥の気持だつたといへよう。実際には、相手国のあまりに大きいのに立ちすくんだのである。しかし当時一部の人が、この御歌の解釈として、「峯つづきおほむら雲」は「米英」をさし「ふく風」は「皇軍」を言ふとしたのは、歌の解釈としてはあやまりである。この御歌については研究篇に詳論した。

農村新年

ゆたかなるみのりつづけと田人らもかみにいのらむ年をむかへて

昭和十八年。「農村の新年」。戦のさ中の御歌である。「田人」は「農夫」。「田人らも」と言つて、作者自身の深い祈りを暗示する。「かみにいのらむ」は「神に祈るだらう」といふ推量の意味であるが、それよりも強く「神に祈らう」といふ気持があらはれてゐる。

海上日出

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海のはらに日はのぼるなり

昭和十九年。御題は「海上日出」とと椀読みにせず「海上、日出づ」と読むのが正しいといふ。意味は変らな

い。「つはもの」は「軍人・将兵」の意味で、「いくさびと軍人」と同じにつかふらしい。明治天皇御製には両方の言葉が使つてあるが、ほとんど区別を見出しがたい。「とりで」は「要塞、拠点」の意。今日まで発表された御歌中、直接軍人とか戦場をよんだ御歌はただこの一首だけである。前にも述べたやうに日露戦争の御製を中心とする『明治天皇御集』とはいちじるしい対照をなす。ご性格の点から言つても明治天皇の軍人的性格と今上天皇の科学者の性格とは対照的である。今上天皇が軍国戦時の天皇・大元帥として軍務を統帥なされたことは言ふまでもないことであるのに、軍人・戦争についての直接的な御歌がこれほど少ないといふのは、よほど努力して発表をおさしひかへになられたのではないかと想像されるほどである。戦争の終結の際にお示しになられたご決断とあはせ考へると、意識して軍国的戦闘的な御歌をおよみにならなかつたのではないかとおもふのである。しかも、この、第一句から、「つはものは」と出てくる直接的な御歌にしてからが、「舟にとりで」とたたみかけるやうな調子で、あちらにこちらにひとかたまりづつ点在してゐる陸海軍の姿をおよみになつてゐる。つまり、既に孤立敗退しつつかある日本軍の苦闘をおよみになつてゐるのである。この御歌は、三句切れで、一首二文になつてゐるから、いはゆる上の句の一文と、下の句の一文とを結びあはせるのに非常な精神的努力を要する。ただ御歌にこめられてゐる意力がこの二文をからうじてつなぎとめてゐる。この分裂と統一との、求心力と遠心力との緊張関係が、しばらく出すやうな歌調となつて作者の心の苦闘を語るのである。

当時の参謀岡村誠之氏は既にこの御歌を「苦戦」の御歌と言つてゐた。当時の言葉で言へば、日本軍の占拠は、ただ「点」となつて、長い兵站線が寸断されてゐる。つまり、各所に孤立して無力化してしまつたのである。また広瀬誠氏は、当時この二句切の調子に注目して御心の苦悶を予言した。「大海原にのぼる新年の日を、舟艇上にゐる海軍軍人も、要塞にたてこもる陸軍軍人もをがむだらう」といふ意味であるが、さういふふうに一

文で詠ま^よないで、「つはものは……をろがまむ」と一旦切つて、「大海原に日はのぼるなり」といふので、この下の句が、「日はやはりのぼるのだ」といふ感じになる。最後の「なり」は文語助動詞で「推定・伝聞・詠嘆」「断定」の二義があるといふ。この場合どういふ文法的意義をもつてゐるのか。はつきりわからないが、強くその事実を指示することによつてその事に対する感動を現はすのではないだらうか。「日はのぼるのだ」といふ「のだ」も、感動の表現とみられないことはない。「日はのぼる」といふ事実に対する感動である。三井甲之先生昭和二十三年「祖国再興」と題して、「西にしづむ夕日ふたたびひむがしにのぼる朝日のまばゆくもあるかな」といふ歌がある。「日はのぼるなり」といふ御歌の表現には、何かかうした、敗戦と復興との予感があるやうな感じだ。かういふ解釈は結果論的でもしろくないが、御歌を歴史の中において見ると、当時わからなかつた光を発するといふのは、御歌が当時既にその光をもつてゐたからにはかならないのだと思ふ。声をあげてこの御歌を誦すると、大東亜戦争の苦しい戦ひの記憶が一瞬に集約される。

社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

昭和二十年。既に敗戦の兆歴然たるものがあつた。御題「社頭の寒梅」。「しもよ」は「霜夜」（霜の降る寒い夜）。広瀬誠氏の解説に、「この御歌は、一度よみくだけただけでは分らぬ。寒風、霜夜、月、世を祈る広前、薫る梅……と材料を頭の中でよくよく味つてみて、その歌境を組立ててみて、やつとうなづける。この材料の複雑は、あれやこれやとご心労絶えなかつた当時の宸慮しんりょそのままである。一首は危く分裂しさうになりつつ、わづかに「なり」でふみこたへてゐる。ただ「世を祈る」それが天皇にとつてすべてであつた。この世を祈る御心が

擬つて、敗戦の最悪危局を救はれたのであつた。それまでにどんなに苦しみつづけられたらう。昭和十九年二十年の御歌は、この事実をいたゞしくも示すのである。”

戦後

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

昭和二十一年。「松上しやうじやうの雪」。「たへて」は「耐へて」。「ふりつもる雪にたへてかはらぬ緑の松のををしき、人もこの松のやうにあれ、苦難にたへてかはらぬ志をつらぬけよ」とよまれたのである。敗戦は国民の実生活にとつて未曾有の混乱をもたらしたばかりでなく、思想の混乱もまた底止するところを知らなかつた。「神聖にして侵すべからず」と明治憲法に規定された天皇は、一転して嘲笑と弾劾の対象となり、戦争の責任を追及されるに至つた。この御歌も第四句で切れてゐるから一首二文である。最後の句が押しつけるやうに加へられてゐるのは、作者のしぼり出すやうな勇気を示すのである。この荒唐から立ち上る意力こそ復興の原動力となつたのであつて、御歌はその内容において、そのことを語るばかりでなく、内容の真实性を音調に託して、日本復興の記念となつた。

二 終戦後の御歌六首

折にふれて

海の外の陸くわがに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

歌会始の御歌ではないが、昭和二十一年一月に発表された。制作年代は前の「松上雪」より早いやうに思はれる。一切の修飾を去つて祈りそのままが一息によみ下された御歌である。後に詳しくのべるやうに「白川大将の遺族におくりたまへる御製」が、極秘にされてゐたので、この「折にふれて」の御歌が、当時歌会始の御歌以外に発表された唯一の御歌となつた。歌会始の題詠以外にも今上天皇が歌をおよみになる、といふことがはじめて知らされたわけである。開戦直後の「連峯雲」の御歌の結句と、偶然の一致を示したこの終戦の御歌ともいふべき「折にふれて」の御歌をよんで、われわれは自分たちの最も身近かないのり、がこの御歌の中に結晶されてゐることを感じた。「のこる民の」は六音字余りであるが、前後の句にわたつてゐるので、字あまりの感じがうすく、語調を早めて一首全体の一息の調子をたすけてゐる。

問題の引揚は、ソ連中共の抑留によつて満洲ソ連の引揚が数年後までもちこされ、戦争に続く悲劇をもたらすことになつたが、何といつても当時の最も切実な国民の願ひは、外ならぬ引揚の問題であつた。この御歌こそ當時のその願ひの表現であつたのである。さうしてこの御歌にあらはれてゐる一気呵成の、凝滞キョウタイなき捨身のお心も

ちが、天皇をしてマッカーサー元帥のもとにおもむかせ、当時国民生活最大の問題であつた食糧問題打開についての懇請を行はしめた原動力である。この天皇の捨身のご精神が、敗戦の危機を救つた最大の力であつた。この原動力がこの御歌に表現されてゐる。

災害地を視察したる折に 三首

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

昭和二十一年十月三十一日、右三首の御歌が東京の各新聞紙上に発表された。御歌集『みやまきりしま』によると前書が「戦災地視察」となつてゐる。あとで要約したのであらう。当時天皇に対する非難の声があまり高かつたので、天皇のありのままのお心もちを知つてもらひたいといふ良識が、この御歌を発表させたのかもしれない。この御歌をよんでわれわれは文字通り、ほつとしたものである。敗戦直後の御歌ともいふべき「をりにふれて」の御歌が、あの流れおちる滝のやうな一息の調子に、現実のあらしの中にをどり出た天皇の不退転の決心を示してゐること、つづく新年発表の「松上雪」の御歌が一首二文で非常な緊張感をひそめてゐること、この二首のしらべに対して、「戦災地視察」の三首は、緊張をといった自然自在の安らかさを底にたたへてゐる。それは弛緩ではない。安心である。

御歌の自然さは、この三首が天皇の御歌には珍しい連作の形をとつたことにもしめされてゐるやうだ。この飾

り気のない自然の真実さが、他の人にとつて心の救ひとなるのである。天皇の御歌が、国民生活に直接光をかか
 げるやうになつたのは、これらの御歌からであらう。明治天皇の御製が日露戦争当時の国民に勇氣と感激とを与
 へて戦意の高揚をもたらしたやうに、今上天皇の御歌は敗戦からの国民の立ち上りに無比の鼓舞激励を送ること
 となつたのである。災害地の視察はつひに全国巡幸となつた。それは天皇の巡礼姿に他ならない。共同通信社員
 田中徳著『天皇陛下と美しい生活』から引用して、天皇の視察旅行の一端をうかがひ見ることにしよう。

「陛下の視察旅行は、毎日少しのお休みもない重労働であつた。視察中は右に左に従業員や戦災者、引揚者等
 等に応え、幾人も幾人もに話しかけてもゆかれ、途中の車の中では、体を乗り出して一日に何千回と帽子を振
 りつづけて行かれた。オープン自動車で市内を徐行される時などは、自動車がやっと通れる位の道を開けて街
 を埋めて迎える中を通つたが、学童達の耳をさくような万歳の叫びは、紙鉄砲のような小旗のはためきの嵐
 は、供奉員達の耳を聳にしてしまつて日程を終つて宿についてからもいつまでも幻聴になやまされたが、――
 もつともそれは酔つたやうにうれしき幻聴ではあつたが、「陛下はいつまでもあの幻聴が耳についてお困りに
 なるようなことがございませんでしょうか？」直接こうお尋ねした時、「いえ、わたしは皆がああして迎えて
 くれるのをうれしく聞いているから……」陛下のお答えはこうであつた。町でも村でも、シートから乗り出し
 て相当の運動量で、あのうれしき顔で応えて行かれたが、しんからうれしくつてたまらないのであろう。文字
 通り、全国各地にくり広げられたこの天皇と国民との交流は、新日本の基礎となつたのである。天皇の
 「人間宣言」と呼ばれる昭和二十一年年頭の勅語の、「天皇と国民との紐帯は、単なる神話と伝説によるにあ
 らずして、相互の信頼と敬愛にもとづく」といふ思想は、この戦災地の視察の際の天皇の体験に基礎をおくもので
 あつたとも言へる。一回はピストルで狙撃され、一回は爆弾を自動車にぶつけられるといふ、襲撃を受けた天皇が、

戦後十年以上にわたり無慮数百万軒の旅程において国民の中に身を投じ、もみくちやになるまで国民にもまれて、ただの一回も、傷をうけられることもなかつたのである。国民は、天皇のお心を知つてゐたからである。

皇居内の勤勞奉仕者 二首

をちこちの民のまるきてうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

昭和二十二年新年、たしか元日の新聞に発表されたと記憶してゐる。皇居は昭和二十年五月二十五日の東京大空襲の際灰燼に歸したとのことである。天皇は焼け残つたご文庫に移られ、焼跡の皇居の庭園は、おのづから野草しげる武蔵野の面影となつた。「皇居内の勤勞奉仕者」といふのは、東京の市街と同じく焼跡となつた皇居内の整理に奉仕した人々をいふのである。老いも若きも、男と女とを問はず、社会人も学生も、あらゆる職業階層あらゆる宗教に属する人々が、自ら進んでこの皇居の整理に従事した。一般の民衆がこのやうに天皇の身近くお手伝ひ申上げるといふことは、明治以来かつてなかつたことである。天皇もお気軽に、この人々に慰勞感謝の言葉を伝えられたことがあつたやうである。文字通り名もなき民と天皇との接近は、かうしてはじまつたのである。言葉こそ多くは交されなかつたらうが、心はあたたかく通つたにちがひない。第一首、「をちこち」は「遠近」、「まるきて」は「参り来て」、「宮居」は国民の側から「皇居」といふのを天皇の側からいつたのである。天皇の住居をさす。第二首、「戦にやぶれし後」は「戦争に敗けた後」の意味で、いまから考へれば何の不思議もない平凡な言葉であるが、当時の社会心理を考慮においてみると簡単に読みすこせない。といふのは、戦時中

の国内宣伝は、敗戦の事実を国民の耳目からかくすことにつとめ、「全滅」を「玉砕」と言ひ、「退却」を「転進」と言ひ、サイレント・ネーヴィー（沈黙の海軍——黙々と軍務にはげむ日本海軍の性格から、日本の海軍のことをかう呼んだのである）は、戦争の勝敗の分岐点になつたミッドウェー海戦について、専ら敵側の損害をあげ自国の敗北については正にサイレントであつた。このことは宣伝の不必要となつた戦後の社会心理に尾を曳いて、「敗戦」のかはりに「終戦」といふ言葉が使はれた。事実に直面することがむづかしかつたのである。しかし、事実を認めずして、何の復興が可能だらうか。敗戦を敗戦と認める現実精神が同時に眞の復興精神であることを身を以てお示しになられたのが天皇のこの御歌のおことばであると思ふ。

「民のよりきて」は、「民衆が寄つてきて」の意味。「ここに草とる」は、「此処に草取る」で、あまりにも普通な言葉で、かへつて注釈を必要とする。それほど素直なお言葉づかひなのである。御歌は、語法は一般に文語の語法によるから、口語短歌といふやうなものではないが、御歌に使はれてゐる言葉はほとんど口語そのままのものが多く、これは発想法に關係することで、発想が現実の生活からちかに生れるしるしで、非常な直接性をもつてゐる。短歌の価値はこの直接性を保ちながらそれを永久の言葉に定着するところにある。その意味で、御歌の口語的用語法は、短歌表現の主流をゆくものである。言葉はやさしく平明である、しかし、——といふか、その上といふか——、歌の調子は深くこまやかである。これが御歌の短歌としての特質といへる。

第一首を文節に分けると、ヨチコチノ・タミノ・マキキテ・ウレシクゾ・ミヤキノ・ウチニ・ケフモ・マタア
フとなつて、音数律は、5 3 4 5 4 3 3 4 となる。第二首目は、タタカヒニ・ヤブレシ・アトノ・イマモ・ナホ
・タミノ・ヨリキテ・ココニ・クサトル 5 4 3 3 2 3 3 4 3 4。一首全体の調子の一息のうねり（五七七七七音
数律）の中で、七音が三音四音の文節にわかれて、さざなみのやうな感じをおこす。その調子が何とも言へぬこ

まやかな心のゆらぎをさそふのである。この二首は、前の三首の戦災地視察の御歌と同じく、連作である。

連作短歌といふのは、一首一首孤立した短歌を数首ならべて構成するのではなく、あるひとつの経験を、時間的順序とかあるいは他の心理的順序にしたがつて、数首の短歌に表現する、短歌の一樣式とみるべきものだと思ふ。したがつて、短歌形式には、一首で完結する独立短歌と連作短歌との二つの様式がある、と考へていいのだと思ふ。もちろん連作短歌は独立短歌から分化したものであるが、その分化発展は古く、人麿の短歌の中にすでに連作短歌とみるべきものを見出すことができるほどである。そしてこの連作短歌は、万葉調の盛衰に平行し、実朝、西行によつてこころみられ、田安宗武以下幕末維新の際の万葉調歌人の作品の中に実作がみられる。しかし、この連作短歌を意識的にとりあげ、実作の上でも、独立短歌よりもむしろ連作短歌の方に比重をおいたのは、正岡子規以来である。したがつて、正岡子規を先覚とする近代短歌の正系は、連作短歌中心で、大正以降の歌人といへば、短歌についての主義主張の異同にかかはらず、連作短歌による表現をとるといふ点においては同じである、とも言へると思ふ。アララギとかアカネとか牧水とか信綱とか、歌壇結社の盛衰にかかはらず、連作短歌が現代短歌の主流である。したがつてこの連作短歌といふのは明治時代の生み出した新しい文学形式である、あるいは明治以降の短歌の様式の本質である、と言へるのだと思ふ。芭蕉の発句が、あたらしい文学形式と言へるのなら、子規の連作短歌もまたあたらしい文学形式とみるべきだと、ぼくは思ふ。さうして、文学形式の創造といふことは文学史上最高の価値をもつ事業である。

さう考へると、連作短歌といふものを今上天皇がおつくりになつた、といふことの重大性を見のがすわけにはゆかなくなるのだ。新聞の歌壇が紙面の都合から連作短歌の切ればしのやうな独立短歌をならべるのは、作者の数を多く載せる点からは親切だとしても、短歌の現状からみればはなはだしいアナクロニズムである。世間の

人は多くこのアナクロニズムが短歌の現状であると考へ、短歌といへば独立一首の短歌といふものしか考へられないやうだがそれは不幸な間違ひであるとおもふ。独立短歌と連作短歌との違ひの根本はどこかといふと、一番簡単に考へれば、同じ体験を一首によむか数首によむかといふことのちがひなのだから、独立短歌は概括的になり集約的になり思想的になる。それに対して、連作短歌は、具体的になり並列的になり感覺的になる、さういふ傾向をもつのである。

『明治天皇御集』は編纂そのものが連作短歌に対して願慮が払はれてゐないから、その中から連作短歌を見出すことは非常に困難で、あつたとしてもごく少数とみる外ない。言ふまでもなくほとんど全部が明らかに独立短歌であつて、「をりにふれて」といふ御題で一括されてゐる御製のところどころに、同じ時に、ある心理的順序に従つておよみになつたのではないかと思はれるやうな御製を見ることがないことはないが、それは、生涯の歌作数万首といはれるやうに多作であられた天皇の創作態度から自然に生れてきたことで、連作短歌といふ意識は明治天皇にはなかつたのではないかと思ふ。しかしこの「災害地視察」の三首と、「皇居内勤勞奉仕者」二首は、明らかに連作としての意識をもつておよみになつてをられる。これがまた、明治天皇と今上天皇との歌風の相違を物語るのである。明治天皇御製は、思想的で規範的である。語法は古今集の語法をとつてをられるのもそれがこの独立短歌の概括的表現に適するからである。今上天皇の御歌は、殊に戦後の御歌は、直接的で抒情的である。語法は、むしろ万葉集の語法をとつてをられる。戦後の御歌にこの二つの連作短歌をみることの意味は、説きつくしがたいものがあるやうに思ふ。歴代天皇も連作短歌をおよみになつたお方は比較的に少ないやうである。今上天皇が明らかに当代国民の創造した文学形式によつて表現なさるといふことも、天皇といふ御存在が国民思想と無関係ではないといふことの証拠で、天皇が国民の内部にあつて、国民文化の作用を受けながらこれを

統^と統^とするものであることのいい例でもある。

三 歌会始の御歌 (2) (昭和二十二年より三十四年まで)

あ け ぼ の

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて

昭和二十二年歌会始の御歌。「あけぼの」の御題が当時の苦しい国民生活に対して象徴的である。地方巡幸のご体験をおよみになられたのであらう。「よ」は「夜」、「うつつちのおと」は「打つ槌の音」であるが、この槌といふのは、鍛造などの鉄槌で、工場生産の再開をよろこばれたものであらう。漢語を極度に制限されるのがまた御歌の特徴で、この点は、明治天皇御製の用語法をそのまま継承になつてをられる。それに、語彙が少いといふことも御歌の特徴らしい。したがつて、「うつつちのおと」は、どちらかといふと稚拙な感じのする表現であるが、地響きするやうな工場の鍛造の音が聞えてくる感じがあるのはどういふ技巧によるのだらう。日本復興の黎明で、工場の復興は正にそのシンボルである。「水戸の町」は「水戸市」で、これも細かく言へば、「水戸市」と言はずに「水戸の町」といふのが、漢語をさける御歌の特徴ともみられる。県名についても、天皇は古名をお使ひになる。「福島県」といはずに「磐城いは」、「和歌山県」といはずに「紀の国」とおよみになる。そして、それがそれぞれ芸術的効果をあげてゐることは、「紀の国の潮の岬に立ちよりて……」「……磐城なる阿武隈川

の水にはえつつ」などによつて明らかである。さうして、この地名をよみこまれた御歌が今上天皇には非常に多いので、これも、『明治天皇御集』の中に地名をよみこまれた御製が非常に少いのと対照的である。これは、今上天皇の戦後のご巡幸といふことが偉大なご体験であつたことによることも勿論であるが、戦前の御歌にも何首かを拝するほど多いのであるから、前にのべた御歌の歌風の相違によると解すべきであらう。つまり明治天皇御製の思想的規範の性格に対して今上天皇御歌の感覺的具体的性格を示すものである。

昭和二十一・二年の御歌は敗戦直後の国民の痛苦を一身に背負ひたまひながら、それを復興のあけぼのとなさるまでの、みこころの経緯を示してあますところがない。御歌もまた新しい世界を開拓されたのである。前途は苦難にみちてゐるが、しかし、必ず前進できるといふ確信の安らぎがみうたの調子にあらはれてゐるのではなからうか。

はるのやま

うらうらとかすむ春べになりぬれど山には雪ののこりて寒し

昭和二十三年。歌意分明、おのづから当時の国情を示す御歌である。「うらうらと」は疊語、御歌に多い手法で、具体的描写の性質を濃くする。「春べ」は「春近い頃」の意。万葉集卷一、柿木人麿の吉野宮行幸供奉（たぐ）の長歌に、「たたなはる青垣山、山神の奉る貢と、春べは花かざし持ち、秋立てば黄葉かざせり」とある。「夏べ」「秋べ」「冬べ」などとはいはない独特の言ひ方であらう。さうとすれば、万葉語の復活使用とみられないこともない。「海べ、山べ」などといふ「べ」は現代語としても生きてゐるから「早春」の意味でお使ひになられたものであらう。古語であるが、現代語としても通用しうる。したがつて前述のやうに歌意きはめて明瞭である。

「なりぬれど」は「なつたけれども」の意。四・五句「山には雪ののこりて寒し」が4343文節に分れてリズム感がある。また「雪の、のこりて」の「の」も、同音を重ねてリズムミカルである。

朝 雪

庭のおもにつもるゆきみてさむからむ人をいともおもふけさかな

昭和二十四年。「あしたの雪」。「つもるゆきみて」は作者の行為である。「さむからむ人」は「寒からう人」の意味で「ゆきみて、寒からむ人を……おもふ」とつづく文脈である。昭和十二年、「田家朝」の「みゆきふる畑のむぎふにおりたちていそしむ民をおもひこそやれ」とよく似てゐる文脈なので、この「おりたちて」も作者自身の行為であるかとも思はれるが、この場合「おりたちて」は、麦ふみのことになると思ふので、天皇が麦ふみをなさることを聞かないので「おりたちていそしむ民」と考へたのである。

若 草

もえいづる春のわかきよろこびのいろをたたへて子らのつむみゆ

昭和二十五年。「もえいづる」は「萌えでる」、「わかき」を修飾する。「春のわかき」は「春の」が余分のやうな気もするが、実際には冬でも若草が見えるからやはり「春の」といふ方がはつきりするかも知れぬ。「若草を……子らのつむ」といふのは、どういふことなのだらうか。俗にいふもち草をつむことなのだらうか、つくし摘みなどをいふのだらうか。「たたへて」は「満たして」の意、「笑みをたたへる」などのやうに使はれてゐる。淡々たる御歌であるが、次第に明るくなつてゆく国情を暗示してゐる。

淡路なるうみへの宿ゆ朝雲のたなびく空をとほくみさけつ

昭和二十六年。「淡路なる」は「淡路島の」に同じ。「宿ゆ」は「宿より」。この「ゆ」は万葉語といつてよい。「みさけつ」は、「見放く」に完了の助動詞「つ」をつけて終止した形。強く言ひ切つた調子で、万葉の歌にみるところ、したがつて語法や語調からいふと、かういふ歌が万葉調といふのである。昭和十一年「海上雲遠」の「紀の国のしほのみさきに立ちよりて沖にたなびく雲をみるかな」と素材が似てゐる。しかし、「紀の国」の御歌が、明るくひろらかに前途をのぞむロマンティックなところのあるのに対して「朝空」の御歌は、強く現実を見すゑた感がある。前者は雄大であるが、後者は強烈である。前途の把握のしかたが、前者はロマンティック、後者はリアリストティックであつて、やはり敗戦といふ未曾有の経験の中にはさんだ十五年間の年月のへだたりは、おのづからこの表現にあらはれてゐるとみられる。二首とも好きな歌であるが、そして素材も似てゐるが、素材のつかみかた、つまり人生に対する態度に微妙な推移と成長とがみられるやうに思ふ。

昭和二十七年は、歌会始の御歌がない。前年昭和二十六年五月、貞明皇后がおなくなりになられたので、天皇の御服喪中で、歌会始の儀式が行はれなかつたためであらう。しかし昭和二十六年十一月には、「貞明皇后をしるぶ」二首の絶唱を巻頭におく「天皇歌集・みやまきりしま」が刊行されて、それまでの御歌がほとんど網羅されたばかりでなく未発表の御歌がつけ加へられた。天皇ご自身の選歌による歌集ではないやうだから、歌集編纂の上にどれだけ天皇のご意志が加はつてゐるか見当がつかないが、なんといつても珍しいことであつた。当代第一の歌人と目せられた斎藤茂吉、釈迦空の御歌論もその歌集に掲載されたもので、これも阿歌人なきのちの今に

して思へば、貴重な文献となつたのである。

船ふね
出で

しもにけふる相模の海の沖さして舟ぞいでゆく朝の寒きに

昭和二十八年。「しもにけふる相模の海」は「霜にけふる相模湾」、葉山にご避寒中の御歌であらう。第一句は六音の字あまりで、しかも33の文節に分れるから、詰屈きつこくであるが、それを五音につめるやうによむので、一氣に強くうたひ出す調子があらはれるのである。この「舟」は漁船であらう。農業・漁業・工業と各産業に満遍なくお心をそそいでおいでになることがよくわかる。その産業こそ国力である。前年昭和二十七年四月、日米行政協定締結、「朝の寒きに」「しもにけふる……沖さして」「いでゆく」舟が、日本の国運を象徴する。さういふ感じがある。

林

ほのぼのと夜はあけそめぬ静かなる那須野の林鳥の声して

昭和二十九年。前の「船出」を葉山ご用邸での御作とすれば、これは那須のご用邸滞在中の御歌であらう。「ほのぼのと」は、例の疊語である。昭和二十二年「あけぼの」の「たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて」と同じ姿の御歌。

泉

みづならの林をゆけば谷かげの岩間に清水わきいつる見ゆ

昭和三十年。「みづなら」は水楡、『広辞苑』に「ぶな科の落葉喬木、高さ約二〇米」。昭和四年「田家朝」の「都いでてとほく来ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道」とどこか似てゐるので、研究篇に比較論評した。

早春

たのしげに雉子のあそぶわが庭に朝霜ふりて春なほ寒し

昭和三十一年。「雉子」は「きぎす」と読む。

ともしび

港まつり光りがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

昭和三十二年。研究篇参照。

雲

高原のをちにそびゆる那須岳に帯にも似たる白雲かかる

昭和三十三年。「をち」は「遠」で遠方の意。「那須岳」は「なすだけ」。

窓

春なれや楽しく遊ぶ雉子らのすがたを見つつ窓のへにたつ

昭和三十四年。「春なれや」は「春だからか」の意。「窓のへ」は「窓へ」。

四 植林関係の御歌

帝室林野局移管 四首

うつくしく森をたもちてわざはひの民におよぶをさげよとぞおもふ

こりて世にいだしはすとも美しくたもて森をば村のをさたち

料の森にながくつかへし人人のいたつきをおもふ我はふかくも

九重に仕へしことを忘れて国のためにとなほはげまなむ

昭和二十二年。帝室林野局は、「旧制で宮内大臣の管理に属し、帝室の土地及び林野の管理、経営に関する事務を掌つた宮内省の外局。昭和二十二年廃止」（『広辞苑』）戦後皇室財産の国有化の結果、全国にわたつて広大な面積をもついはゆるご料林が国有林となつたのである。この四首はその時の御歌であるが、『みやまきりしま』には前の三首で、最後の一首がない。この四首——つまり最後の一首を加へたものは神社本庁の『今上陸

『下御集』によつたものである。前の三首の芸術的価値については、研究篇に詳しくのべたのでここには簡単な解説を記すにとどめる。第一首は語釈解説の必要はない。第二首目、「こりて」は、木を伐り出すことを「こる」といふ、「木こり」の「こり」である。「村のをさ」は「村長」。第三首目「料の森」は、「ご料林」と呼んだのを天皇の側から「料の森」と言ひかへたのであつて、これらにも、日本語を純粹に生かさうとするお心づかひが見える。第四首、「九重」は「宮中」、「はげまなむ」は「はげんでほしい」といふ意。文法的に言ふと、「なむ」は願望の意味の助詞といふのである。

植林については特別なご配慮があるやうで、以後、植林関係の御歌が多く、乱伐が洪水の原因となることをおそれられたこの御歌は、後年の水害惨禍の悲しい予言となつた。大阪神戸の洪水をはじめとして戦後の焼跡にくつつかの大洪水がおそひかかつて、多くの人命を失ひ貴重な家財を流出した。戦災と食糧難と洪水——と苦難は相つぐのであつた。さうしてこの洪水が、戦後の治水事業の停滞に加へて乱伐が原因であつたと聞くと、殊に御歌の実際上の意味が痛感されるのである。かつてのご料林の管理についての天皇のお考へといふものものしければ、はたしてこの移管が成功であつたかどうか判断に苦しむほどである。それほど、今上天皇は植林事業について深い関心をおもちで、植林関係の御歌が多い。以後毎年御歌を拝するほどである。ここには乱伐と関係のある洪水の御歌を数首かかげることとする。

東北地方視察 二首中一首（昭和二十二年）

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

昭和二十二年、キャスリン台風による東日本の水害は死者千名、流失家屋四千戸、田畑の流失六千町歩と伝へ

られてゐる。

水 害 二首（昭和二八年）

荒れし国の人らも今はたのもしくたちなほらむといそしみてをり

嵐ふきて実らぬ稲穂あはれにて秋の田見ればうれひ深しも

昭和二十七年、北九州一帯、中国地方に梅雨に伴ふ豪雨による洪水、死者約千名、流失家屋二千、被害田畑二十七万町歩。昭和二十八年、近畿地方全域にわたる洪水、死者約千名、流失家屋五千戸、田畑の被害三万町歩。翌昭和二十九年にも日本全土にわたる洪水があり、昭和三十三年には伊豆狩野川洪水の惨禍がおきた。

狩野川沿岸の水害（昭和三十三年）

思出の多き川とてひとしほにその里人のいたましきかな

狩野川かのがはは伊豆天城山に発して沼津で駿河湾にはひる河。昭和三十三年十月伊豆半島をおそつた台風が、北伊豆に豪雨をふらせ一瞬にして狩野川の氾濫となり、沿岸町村に甚大な被害を与へたのである。その惨害は戦災の惨状をおもひおこさせるものがあつた。上流天城山はかつてのご料林、現在は国有林である。この時の洪水も全く天災のやうに言はれてゐるので、植林事業とは関係がないかも知れないが、この項にあげておいたのは、いたましい水害の惨状のニュースがいまも耳目にのこるからである。この水害をふせぐための植林であり、植樹祭である。植林関係の御歌の数の多いのは、御歌の発表が実際上の目的をもつといふ例になる。したがつて御歌の研究

は、単なる芸術上の鑑賞に終止するべきではない。御歌の発表そのことに倫理的目的があるからである。昭和三十四年には名古屋を中心として伊勢湾沿岸に未曾有の水害をうけることになった。

五 地方巡幸の御歌

東北地方視察 二首（昭和二年）

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

あつさつよき磐城の里の炭山にはたらく人ををしとぞ見し

地方巡幸の御歌は前述した昭和二十一年の「戦災地視察」の三首連作にはじまるといつてよいだらう。すでに詳論したところである。今上天皇戦後の御歌の大半がこの地方巡幸中の御歌であることは、このことの意義の重要性を示してゐるのではないだらうか。かつて日露戦争に多数の部下将兵を失つた軍司令官が、戦後遺家族を歴訪したといふ話は当時の美談として伝へられてゐるが、今上天皇地方巡幸も一種かうしたお心による巡礼行であるやうな気がする。天皇だからできるのだ、といふ人があるだらう。それはその通り。しかし、この巡礼が、天皇にとっては生やさしい労働でないことは、前述した随行の新聞記者の記事によつてもうかがはれる。天皇はこの地方巡幸で国民生活の悲喜哀歡をつぶさに共感されたやうだ。「戦災地視察三首」をはじめとして永久にのこ

る御歌の数々は、この天皇と国民との交流の中から生れたのである。とすれば、この巡幸こそ、政治的には無力であつたかも知れないが、現代日本史の基礎的事実と言へよう。それは、敗戦といふいたましい体験をへて獲得されたひとつの精神的の事実であると言へるのである。

前掲「東北地方視察二首」は昭和二十二年の御歌であるから、年代的にいふと「戦災地視察三首」につづくものである。二十一年の「戦災地視察」は東京の焼跡に立たれての御歌だと思ふ。そのご経験から全国へ歩をおすめになつたのである。戦後数十年をへた現在もなほ続けてをられる、天皇の巡礼行の、最初の御歌である。「統治権」を失はれて国の象徴となり、政治に関しては「認証」するのみといふ政治的には無力化した天皇の、残された唯一の国家的行為であるのかもしれない。「水のまが」は「水禍」の、例の純粹国語的表現ともいふべきおことばだらうか。「まが」は「まがつび」などの「まが」で、漢語でいふと「禍殃くわやく」にあたる。「水のまが」と第一句六音の字あまりで、第一句の字あまりは、全体として一気に主題にはひる感じをもつので、それだけ直接的な歌風をしめすことになるのである。「みちのく」は「道の奥・陸奥・奥羽地方」のことである。「もる」は「まもる」。「あはれと思ふ」は、口語的表現で、精神と表現が完全に一致してゐるから、深い同情に沈んでをられるお心もちがちかに迫つてくる。もちろんかういふ歌はおよそ専門歌人の歌とは縁遠い歌であるが、これが短歌の正道といふものであらう。

第二首目。「磐城いはま」は前述の通り「福島県宮城県の東部地方」、総じて県名は古名の方が地形などをあらはしてゐるやうだが、この「磐城」といふ地名など、炭鉱地帯をさすのにふさはしい地名である。「炭山」は「すみやま」と読んでゐるが、「たんざん」が正しいらしい。「磐城の里の炭山」すなはち「常磐炭田」をいふ。この古めかしい表現が、不自然でないのが不思議だ。酷熱の炭坑の内までもおはひりになつた天皇をお迎へして、

坑夫たちが歓迎のさげびをあげてゐる写真を見たことがあるから、その時の御歌だったのであらう。どんな辺鄙なところへも、どんな苦しいところへも、国民の働いてゐるところはどんなところへでもはひつていつて、その苦しみを共にしようといふのが、天皇のいつはらぬお心もちなのではないだらうか。のち、「昭和二十二年八月五日東北巡幸の第一日の至尊陛下が福島県磐城郡湯本町（現いわき市）にある常磐炭鉱株式会社湯本六坑地下千尺の斜坑内にお入りになつた時のみ歌です」と青山新太郎氏から御指摘をいただいた。以下地方巡幸中の御歌と考へられるものを数首、年代順に並列し、簡単な解説を記す。

栃木県益子窯業指導所にて（昭和二十二年）

ざえのなきおうな媪なのゑがくすゑものを人のめづるもおもしろきかな

益子まじこはいはゆる益子焼の産地で、無名の媪が絵をかいた伝統の焼物に、何ともいへぬ味があるといはれる。

「窯業指導所」といふのは「陶器製造の指導所」の意味で、さういふ名の指導所があるのだと思ふ。「ざえ」は和魂漢才などといふ場合の才で「学問」の意味。「媪」は老婆の意、「ゑがく」は「絵をかく」。楽焼の時にするやうに陶器に絵をかくのである。「すゑもの」は「陶器」、「めづる」は「ほめる」、「おもしろきかな」は「愉快だなあ」程度の意味ではないだらうか。

日本民芸館長柳宗悦氏「兩陛下の行幸啓」といふ記事によると、昭和二十二年十月三日、天皇后兩陛下の日本民芸館行幸啓のことがあり、「大変に面白かつた」といふ感想をおもらしになつた由であるが、そのつい先日、益子窯をご訪問になられたことが書いてある。そして、「後日のことであるが、この焼物について御詠があり、近時その歌碑が益子に建設された」と書いてある。また、その附記の中に、益子窯の絵付土瓶がドイツで開かれ

た万国工芸展に金盃を得たことが記されてゐる。

折にふれて（昭和二年）

老人をわかき田子らのたすけあひていそしむすがたふとしとみし

「田子」は「田人」と同意であるが、ここは青年をいつたので「田子」といふのだらう。前の歌とよく似た歌であるが、「みし」は「見たことだ」といふやうな意味で、回想してよんだ御歌であるから、巡幸をへておかへりになつてから、忘れたい印象としておよみになつたもののやうである。前の御歌は、その場でのご感想である。この御歌は、忘れぬ印象をおよみになつたのである。（島根県庶務課の『天皇陛下御巡幸誌』に伊波野村高畦栽培地での記事がある。）「みし」と連体形で終止したのは、詠嘆の意味があると解される。

香川県大島療養所 二首（昭和二五年）

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば

船ばたに立ちて島をば見つつ思ふ病やしなふ人のいかにと

三井甲之先生『今上御歌解説』第二次稿にいふ。

〳〵四国巡幸の御歌である。旗をふりつつ御船の方向に海岸を走りお見送りする人々を双眼鏡で見そなはしつつ詠まれたのであるといふ。「あな悲し」といふコトバは万葉集から二十一代集には用例がない。「ああ悲し親あり妻ある人々をみなたすけむに手だてはなきか」といふ船長三田峻策の四十九首連作中の一首があるが、そ

れは大正年間の作である。

「人の心の」「病やしなふ人のいかにと」この主格を示す助詞（てにをは）ののがよく御歌に用ひられる。これを「が」又は「は」と比較すれば、「の」が簡單率直の主語を指示するコトバであることがわかる。

第一句「あな悲し」は源実朝の「いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる」を思ひ出させる一句切の手法で、第一句字あまりと同じに、顧慮もなく、かにうちつけに心情を吐露するのである。

興居島にて（昭和二五年）

静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし

「興居島」は愛媛県、瀬戸内海の小島。ご巡幸中のひと時をおさきになつて生物採集にあられた時の御歌であらう。生物採集といふこと自身が短歌の主題としては珍しいのだから「おほみどりゆむし」といふ微生物はおそらくはじめて短歌によまれたのではないだらうか。素材の上からいつても珍しい新鮮な御歌である。遠い旅先の小島で採集された微生物にそそがれる深い愛情は、慈愛の極といふべきであらうか。三井甲之先生永訣の書『今上御歌解説』第二次稿にいふ。

「静かなる」の一句をおちついて味ひ、「潮の干潟」といふ複雑の内容を簡約に示す造語を仔細に味ひ、一語一語を味ひつつ、オホミドリユムシと打とめると、此の珍しい環形動物のささやかなの生命に作者天皇の御心が集注し、この微小生物は大自然にひろがりつつ全宇宙につながる。この一首を朗詠すれば心境は寂滅の静さに入り忘我の歡喜が湧く。

「静かなる潮」の「干潟」の「砂」と、次第に対象を小さくとつて、最後に眼前の微生物にうつる表現法は、

「高原にみやまきりしま美しくむらがり咲きて小鳥とぶなり」「みづならの林をゆけば谷かけの岩間に清水わき
いづる見ゆ」と同じ手法であつて、一種独特の宗教的感情にさそふのである。それは感覚世界を回想の世界につ
なぎ、現実の世界を永久の世界につなぐ作者の思想をしめすものである。（興居島は松山港Ⅱ『万葉集』額田女
王の名歌のニギタ津Ⅱの前面の島、南北朝時代の懐良親王が九州に行く前にをられたことがあるといふ。）

名古屋にて（昭和二十五年）

名古屋の街さきに見しよりうつくしくたちなほれるがうれしかりけり

日の丸をかかげて歌ふ若人のこゑたのもしくひびきわたれる

夜の雨はあとなくはれて若人の広場につどふ姿たのもし

昭和二十五年秋第五回国民体育大会へ行幸の時の御歌である。国民体育大会へはかかさず行幸なさるやうであ
る。文字通り、国民体育の奨励のお心持によるものであらう。スポーツは何でもおやりになるといふ天皇のこと
だから、お好きなこともお好きにちがひないが、行幸はご興味よりもむしろ、国民の健康に対するご配慮にもと
づくものにちがひない。三首、ほとんど連作のやうな形である。

第一首、「さきに見しより」は、戦災の廃墟からの復興をおよろこびなさつてのお言葉であらう。昭和三十年
「浦島ヶ丘に立ちて」の「いくさのあといたましましと見し横浜も今はうれしくたちなほりたり」、昭和三十二年「関
西の復興」の「いくさのあといたましましかりし町町もわが訪ふごとに立ちなほりゆく」、三首ともおなじ内容の御
歌であるが、この昭和二十五年「名古屋にて」の御歌は、敗戦後五年、やうやく復興の目に見えてきた大都會を

直接にうたはれたものである。「名古屋の街」、第一句、例の六音の字あまりで、一氣に対象を提示して、率直明快にお心をのべられるのである。「立ちなほれる」は、「いま立直つた」の意。「る」は完了の助動詞連体形で、動きがある。「うれしかりけり」の「けり」は詠嘆の助動詞、「うれしいことだなあ」ほどの意味だらう。

第二首の「日の丸をかかえて歌ふ」も、敗戦直後は個人が家の軒先に立てることも遠慮せざるをえなかつたやうな時勢だつたから、やうやく正常な国家意識へと復帰した時代精神のよろこびが御歌のリズムにあふれてゐる。「ひびきわたれる」は「ひびきわたつた！」の意。「る」は連体形で詠嘆をこめて終止した形、完了の助動詞だから、前と同じやうに、「いまひびきわたつた」といふ意味になつて、わきおこりひびきわたつたうたこゑが聞えてくるやうな、動きのある表現である。

第三首目、「夜の雨はあとなくはれて」も何か国民生活復興のシンボルのやうな感じで、戦禍の中から立ち上つた青年の元気をよろこばれる天皇のお心もちがよくあらはれてゐる。「みやまきりしま」には、三首中のこの一首を欠いてゐる。あるいは、「夜の雨」について、「連峯の雲」の御歌の「むら雲」と同じやうな解釈——つまり、「夜の雨」は占領政治・軍政である、といふやうな間違つた解釈が行はれるのを危惧されたのかもしれない。

滋賀県（昭和二十六年）

谷かげにのこるもみぢ葉うつくしくも虹鱒をどる醒井のさと

「醒井（さめがゐ）の里」。日本武尊が伊吹山の神に惑はされた時、山を下りて玉倉部の清水に憩ひまして、やうやく御心がさめた、その清水を「居寤（ゐさ）の清水」といふ。（古事記）この清水の古蹟を伝へるのが近江国坂田郡醒井である。「うつくじも」の「も」は詠嘆の助詞。「虹鱒をどる」は「にじます」が躍りはねるのである。青

く澄む水に躍るにじます、谷かげのみみち、鮮明な色彩、清澄な感覚世界の表現である。

三重県賢島（昭和二六年）

美しきあごの浦わのあまをみなとりし真玉は世にぞかがやく

「あごの浦」は三重県志摩半島英虞湾、真珠の名産地。「あまをみな」は「海女」、きはめていていねいな言ひ方であつて、おのづから作者の人柄をしのばしめられる。「真玉」は玉の美称、ここでは真珠の和語として使はれたのだらう。「世にぞかがやく」は、真珠の光が世界に輝くといふ意味で、日本の真珠の世界的に有名であることをたたへたものである。

はり紙をまなぶ姿のいとほしもさとりの足らぬ子も励みつつ（昭和二六年）

知能の劣つた子どもが一心に「はり紙」細工を習つてゐる姿をあはれまれた御歌で、同情哀憐の御心があふれてゐる。「さとりの足らぬ」といふお言葉にもお心づかひがうかがはれる。（中村薫氏のおたよりに、「千葉縣市川市の八幡学園行幸の際の御歌と承つてをります。同学園は画家山下清を出したところですよ」とあつた。）

東北視察の折に（昭和二七年）

うちあぐる花火うつくし磐城なる阿武隈川の水にはえつつ

「磐城」は「いはき」、福島県の東部の古名。「阿武隈川」は「あぶくまがは」、「福島県西白河郡旭岳に発し、福島盆地を流れて宮城県にはひり、太平洋に注ぐ、全長約一九七軒」。第一、第二句一気に感嘆の感情を吐露

し、次の三句以下にしづかに説明するこの御歌の調子が、川の面に映えてうち上げる花火の明滅そのもののやうに感じられる。

秋ふかき山のふもとをながれゆく阿武隈川のしづかなるかな

小高い丘に立つて、眼下に流れるしづかな川をながめたことのある人なら、誰でも、その時の感じがそっくりそのまま歌はれてゐると感じるだらう。主観的作爲のあとが皆無で、自然そのままのやうにうたはれるのである。

ありし日の母の旅路をしのぶかなゆふべきしき上の山にて

「上の山」は山形県の市、温泉で有名。なき母宮、貞明皇后をおしのびになられた御歌。人麿が阿騎の野で日並の皇子を哀悼した「日並の皇子のみことの馬なめてみ狩立たしし時は来むかふ」などと同じやうな発想の挽歌である。

松島にて（昭和三〇年）

春の夜の月の光に見渡せば浦の島島波にかけさす

「波にかけさす」は、「波に島影がうつる」のを、「島島」が「波にかけをおとす」と見、「おとす」といふ言葉よりもつと月夜にふさはしい「さす」といふ言葉をお使ひになつたのであらう。春の夜の月てらす松島湾の静寂の光景は、「波にかけさす」の表現によつて、波にゆらぐ島影が目に見えるやうに感じられ、悠久の自然が

夢のやうに美しくとらへられる。

三つ沢国民体育大会開会式場（昭和三〇年）

松の火をかざして走る老人のををしき姿見まもりにけり

スポーツ界の最長老で当時横浜市長であつた故平沼亮三翁が、この「老人」であつたやうだ。「松の火」は「たいまつ」、本物のたいまつを使つたのではないだらうか。あるいはオリンピックなどで使ふやうないはゆる聖火をかざして走つたのだらう。（『あけぼの集』には「平沼亮三」との御題である）

防府市の毛利邸にて（昭和三十一年）

水清きいささ小川の流れゆくたたら庭の春のしづけさ

「いささ小川」は「細小小川」で、「小さな小川」といふことで、意味は重複してゐるが、「いささむら竹」などのやうに、この場合も水のさらさらと流れる擬声語の意味が感じられる、きはめて精妙な表現である。「たたら庭」の「たたら」は毛利邸の所在地の地名だといふことである。「いささ」「たたら」音の重複があつて、御歌によく使はれるしらべである。防府市は山口県周防の国府のあつた地。毛利氏の本拠だつた。

児島湾締切堤塘を見て（昭和三十一年）

海原をせきし堤に立ちて見れば潮ならぬ海にかはりつつあり

児島湾は岡山県所在。児島湾の干拓事業は有名である。「潮ならぬ海」は「シオナラヌウミ」と読む。「潮」

は「海水」の意味だから、「潮ならぬ海」は「海水でない淡水の湖」。科学の力によつて壮大な事業の完成することに対する驚異の感情が、科学者らしい平静さをもつて表現されてゐる。「松島も地図さながらに見えにけり」とならんで、近代科学の開拓する新世界をよみこまれた珍しい御歌である。

尼崎防潮堤を見て（昭和三二年）

さきざきに思ひをいたす県人のこころも見えてうれしき堤

防潮堤をながめて、「さきざきに思ひをいたす県人のこころも見えてうれし」と仰せられる、平凡な事実に対する感想が生き生きとしてゐる。——これも、天皇の御歌の特徴で、あたりまへのことのうつくしきかなしさが、まぎれもなく感受され表現される。人生のまことといふのはこのことかと思ふばかりである。

一旅の宿にて（昭和三二年）

つたもみぢ岩にかかりて静かにも旅の館の秋の日は暮る

「館」は「やかた」とよむ。「旅の館」は「旅館」に外ならないが、「旅館」といふことばをその語の成立にさかのぼつて、和語化して表現する。静寂寂寥の秋の日暮れは、そのまま音もなく永久の闇にしづんでゆかうとする。結句「秋の日は暮る」の現在法終止形が音もない時の進行を表現する。

黒部の工場にて（昭和三三年）

たくみらもいとなむ人もたすけあひてさかゆく姿たのもしと見る

「たくみ」は技師労働者、「いとなむ人」は経営者。技術、経営、労資協力して発展する姿で、黒部市吉田ファースナー工場での御作であらう。(御歌歌碑が建てられた)

宇奈月の宿より黒部川を望む(昭和三十三年)

紅に染め始めたる山あひを流るる水の清くもあるかな

富山県宇奈月温泉。紅葉しはじめた「山あひ」である。

氷見の宿にて(昭和三十三年)

秋深き夜の海原にいさり火の光のあまたつらなれる見ゆ

「氷見」は、富山県有磯海に臨む。「秋深き夜の海原」の語は平明であるが、晩秋の夜の北の国の海の闇黒と冷気を感じさせるほど微妙な表現である。無技巧が技巧を超える表現だ。「いさり火」は漁火。「つらなれる」は「つらなつてゐる、並んでゐる」。(氷見市朝日山に御歌歌碑建つ)

和倉の宿にて(昭和三十四年)

波たたぬ七尾の浦の夕ぐれに大きな能登島よこたはる見ゆ

昭和三十三年十月二十二、二十三日。「和倉の宿」はこの時「七尾市和倉町加賀屋旅館」、七尾湾に臨む。「能登島」は「のとしま」。(加賀屋旅館に建碑の由)

輪島市の鴨ヶ浦にて（昭和三十三年）

かづきしてあはびとりけり沖つべの舢倉島より来たるあまらは

『行幸啓御日程書』（石川県・昭和三十三年十月）によると、輪島市鴨ヶ浦の概況の中に舢倉島の説明があり、——「専ら海女の特技によつて、あはび、のり、わかめ等の採取を行ひ、年産約一五〇〇万円から二〇〇〇万円の水揚げを行つてをります。……今ここでその実演を行います」とある。昭和三十三年十月二十三日のことである。「かづき」は「潜水」、「沖つべ」、「沖べ」といつても同じ、「沖の方」の意味である。「舢倉島」は「へくらじま」。

下関の宿にて（昭和三十三年）

見てあれば色とりどりの美しき花火ぞ開く海の夜空に

防府市宝辺正久氏の報告による。——「昭和三十四年一月三日防長新聞所載。昭和三十三年九州植樹祭に行幸の途次、両陛下おそろひで四月六日夕刻下関着、春帆楼にご宿泊された時、海峽に花火をうちあげ、四階の窓をあけはなつて御覧になられたときのおうたと思ひます。……翌朝お宿のとなりの赤間神宮に御参拝になられるみゆきを拝しました」

赤間神宮ならびに安徳天皇陵に詣でて

水底に沈み給ひし遠つ祖を悲しとぞ思ふ書見るたびに

「赤間神宮」は下関市阿弥陀寺町に鎮座、元官幣大社、祭神安徳天皇。「安徳天皇陵」は赤間神宮の隣にある。安徳天皇は源平の戦に平氏に擁せられて西国に遷幸、寿永四年三月平家の一族と共に壇浦の海に投じて崩せられた。御年八歳。『平家物語』のこの一節は涙なくしては読めない。「遠つ祖」は「先祖」の意味で、安徳天皇をさす。「書見るたびに」の句は、二十八年「高松にて」の御歌にも見える。

六 生物学者としての御歌

今上天皇の生物学者としてのご業績については、『天皇と生物学研究』といふ著書もあり、関係論文の公刊もある。専門外の筆者などが説明する必要もないことである。研究作業そのものは科学であつて、芸術的創造ではないから、研究の内容が御歌に表現されてゐるといふことはない。しかし、二百首近い御歌を通読してみると、そこには生物学者でなければ詠めないと思はれる題材や、表現の御歌が相当数あることに気づくのである。本書でとりあげた御歌の分類は、既述の通り、御歌そのものの内容の種類によつて行つたのであるから、歌数の上から言つても、生物学者の御歌といふ項目をあげることができると思ふ。植樹関係の御歌その他農漁業関係の御歌にも、生物学者としての一面のあらはれることのあるのは当然である。しかし、そこまで範囲を拡大してしまふと、分類といふことの意義が成り立たなくなるから、一読、生物学者らしいお心づかひがある、と推察せられる御歌を列挙してみた。多く地方巡幸中の御歌と重複するが、これらの御歌は、その素材その見地、ともに破天荒の御歌といふべきで、科学と文学との補足関係を立証する全く独自の御歌であると思ふので、敢て再録した。

自然科学の伝来は、徳川時代までさかのぼることができるとしても、欧米の自然科学を真に理解してその水準に達したのは、明治時代以降のことである。したがって、日本の自然科学は明治時代の移入にはじまると見てよい。さうしてこの自然科学が二十世紀の世界の指導力であることは、原子力の保有国がほぼ世界の大勢を制しようとしてゐることからもうかがはれる。したがって、今上天皇が、自然科学者であるといふことは、古昔仏教文化の移入に際して奈良朝時代の天皇が仏教に帰依したことに変らぬ、日本天皇の、つまり日本の、世界文化への参与に他ならないのである。しかも近代人の思维方法の特徴ともいふべきものが、科学的思维であるといふことを考へるならば、天皇が生物学者であられるといふことは、聖徳太子が仏教に帰依されたと同じやうな文化史的意義をもつ出来事なのではないだらうか。しかも、生物学者としてのご研究の体験が御歌の中に色濃く反映されて、短歌史の中でも珍しい御歌となつたのである。湯川秀樹博士も短歌をよみ、西田幾多郎博士にも短歌があるが、今上天皇の科学者としての御歌は、その両者をはるかにしのぐもので、やはり、今上天皇は、総合的人格であるといふ感が深い。

葉山にて（昭和二四年）

潮のひく岩間藻の中石の下海牛をとる夏の日ざかり

「葉山」は神奈川県葉山町、ご用邸がある。天皇が避寒避暑に行幸されるのは、この葉山と那須である。

「海牛」は「軟体動物腹足綱後鰓亜綱の一種。多くの属と種類がある」。海牛採集中の御歌である。

三井甲之『御歌解説』第二次稿に「イハマ。モノナカ、イシノシタ、ウミウシと同音の重ぬるとともに一首は緊縮され、その句法は蕪村の「柳散り清水渦れ石とところどころ」を思はしむるものがある。句を切り概念を引離す

と、概念は急速度に融合する。ここに拈華微笑^{ねんげふみせう}瞬目の妙音がある。無完成、生成しつつある一瞬に触れるシラベである」とある。採集の緊張と喜悅とがリズムミカルな語調に表現されてゐる。他に類例のない御歌ではなからうか。

折にふれて（昭和二七年）

しをれふすあしの葉がくれいづこよりわたりきにけむこがものあそぶ

生物採集ではないが、小鳥を愛されるお心もちが、普通以上のご愛情で、やはり生物学者として、動植物の生命に深い慈愛をそそいでられる天皇さまでなくては、これほどのこまやかな感じはあらはさないと思ふ。「しをれふすあしの葉がくれ」に何心もなくあそんでゐる「こがも」を見て、「いづこよりわたりきにけむ」と、ものいはぬ可憐な小鳥の身の上までみ心をそそがれる。——そこに生物学者の深い洞察があり、洞察をみちびく愛情がある。田中徳著『天皇と生物学研究』に詳しい。

折にふれて（昭和二四年）

枯れ立てるコスモスのみにむらがりこかはらひわは冬たつ朝

「こかはらひわ」は「小川原鷺」。「燕雀目すずめ科の小鳥。秋冬の頃、山地及び村落の樹林に多数現はれ、畑に害を与へる」このほか、鳩、雉子、こがも等、小鳥に対する深いご愛情のあふれた御歌が多い。さうしてこれらの鳥の特性が、御歌の中にはつきり詠みこまれてゐるのは、作者の科学者としての認識の裏づけがあるからであらう。科学的認識と芸術的表現といふ、相反するかに思はれる分析と綜合の調和がかういふ御歌にあらはれてゐる。

る。それが人間の未来の理想像を暗示する。他にもかういふ御歌が多い。

七 ご家庭生活の御歌

菊久栄（昭和二十七年）

この秋にほひそめたる白菊のさかり久しく栄えゆかなむ

「菊久栄」は「菊久しく栄ゆ」の題で、皇太子殿下の将来を祝はれた御歌である。「栄えゆかなむ」は、「栄えていつてほしい」の意。皇太子殿下は、前に述べたやうに、全国民の歓声の中に誕生され、順調に成長された幸福な方であると思ふ。敗戦の苦痛も、恐らく両陛下のご庇護の下に、少なくとも父陛下ほどにはお感じになられなかつたであらう。それなりに、自由なのびのびしたお人柄は、国民敬愛の的である。天皇の皇太子殿下に対するご愛情は次の幾首かの御歌にあふれてゐる。順調な皇太子の、この年ご結婚を心からお祝ひ申上げるとともに、皇太子が、父天皇を模範として、やがて昭和盛代を継承してゆかれることを心からいのる。

立太子 礼（昭和二十七年）

このよき日みこをばいはふ諸人のあつき心ぞうれしかりける

「諸人」は「もろびと、多勢の人々」の意。「あつき」は「親切な、心のこもつた」。皇太子をお祝ひ申上げる

人々を、父天皇は、「うれし」とよろこばれるので、天皇の親心の一面があらはれてゐる。

帰 国（昭和二八年）

すこやかに空の船より日のみこのおり立つ姿テレビにて見し

皇太子殿下の外遊からのご帰国のことである。「空の船」は大型旅客機をいふのではないだらうか。この外遊出発に際しての皇太子の勇気凛々たる次の御歌がある。

荒潮の海原こえて船出せむ広く見まはらむとつくにのさま

明治天皇が孝明天皇に歌作のご指導を仰いだやうに、皇太子殿下が父天皇に歌作を指導していただいたらと思はれるのである。

岡 山 に て（昭和二八年）

池の辺のそぞろありきに娘らとかたるゆふべは楽しかりけり

第二皇女順宮^{よりのみ}さまは岡山の池田氏と結婚なさつた。「娘ら」とおよみになられたのは、池田ご夫妻をさされたものと思ふ。「そぞろありき」は「散歩」の意。嫁にやつた娘をいつくしむ平凡なしかし深い父親の愛情——庶民的といつていいやうな感情が自然に流露してゐる。とても天皇の御歌とは思へないことばづかひであるが、また天皇でなくては、これほど自然な素直な表現がむづかしいと思はれる御歌である。

軽井沢にて（昭和三〇年）

ゆふすげの花ながめつつ楽しくも親子語らふ高原の宿

戦後十年、満洲事変から数へて二十五年、多難峻険な生涯の中にこの家庭団らんの本当に幸福さうな御歌を詠んで、「先憂後楽」の君子天皇の「後楽」をことほぎたい。「ゆふすげの花」は、和名キスゲ、花は夕方開いて翌朝しばむ。「語らふ」は「語りあふ」。

八 その他の御歌

白川義則大将の一周年の折に（昭和八年）

をとめらが雛祭る日にたたかひをとどめしいきをおもひいでにけり

白川義則大将は、昭和七年一月二十八日勃発の上海事変に、軍司令官として派遣され、早期に事変を収束して、三月三日停戦布告、四月二十九日上海虹口公園における天長節祝賀会場において、朝鮮人某の爆弾投下によつて負傷し、のちに死亡した。この御歌の発表の歴史的事情については、故下村海南著書中の「白川大将への追悼歌」の項に詳しい。

——「……白川義則大将は、上海事変に司令官として任に赴く時、陛下に拝謁した。陛下からは、決して長追ひせず早く事態を収めよ、といふ御詞があり、白川大将は上意を胸にたたんで、中国軍を上海から撃退しただ

けで南京まで行かず、途中で軍を停めてしまった。それまでゼネバの国際聯盟では、対日空気が頗る險悪になつてゐたが、この停戦命令のニュースが届くと、自然大いに緩和されたものである。しかしこのため、白川司令官は陸軍の各方面からは勿論、直屬部下の幕僚からさへ、非難を集中されたのだつた。

停戦して間も無い昭和七年四月二十九日、上海において陸海軍及び居留民合同の天長節祝賀会が催されたその席上、爆弾事件が突発し、野村吉三郎大將は隻眼を失ひ、重光全權公使は隻脚を失ひ、植田謙吉金沢師団長は足の甲の半を失ひ、白川司令官は傷いて遂に命を失つた。

翌八年三月三日、上海事変収まつた日に、陛下は白川大將追悼の歌をよまれ、入江歌所長にしたためさせ、鈴木侍從長を使として遺族へおくられた。この時、侍從武官長本庄繁大將から、鈴木侍從長に対して、この事が知れると、満洲や内地陸軍部内に不満の声が起るから、十年間極秘に付してほしい、といふ情ない残念な依頼があつた。

鈴木翁は、……白川大將におくられた厚き仁慈の思召をわざわざ内証おぼしめしにしなければならぬなど、全く心外な話で、全く狂人にもひとしい連中のために国をあげて戦々競々たる有様であつた、と追懐慨嘆つぐなひされたものである。

この通り、十年間はもちろん、それ以上もこの御歌は極秘にされたものらしい。昭和八年から十年といふと、昭和十八年になるが、戦争中のことで、この御歌が公表されたこともきかない。戦後になつてはじめて国民の前に登場した御歌である。この御歌の運命が、同時に今上天皇のご意志そのものを象徴するのであらうか。またそれだからこそこの御歌を極秘にしなければならぬものがあつたのであらう。この一首の御歌の運命に、歴史をおもひ、人生をおもひ、時代をおもつて、暗然たることがある。

藤樫準二著『千代田城』には前書が「昭和八年三月三日、鈴木侍従長をして白川大将の遺族におくりたまへる御製」となつてゐる。この前書は、御歌成立の事情を説明したものであつて、作者即ち天皇のお書きになつたものがあるわけではないから、事実即してゐる方をとればよい。したがつて、下村海南の記事が正確だとすれば、藤樫準二著書中の前書の方がいいやうである。「一周忌の折に」といふと、白川大将死亡の日になるが、藤樫準二著書には、「その翌年の停戦記念日に、陛下がお詠みになつた御作」とあつて、三月三日の作と註記してあるし、その方が内容ともよくあふ。それはそれでよいとして、御歌そのものの方も『千代田城』には、「をよめらの雛まつる日に戦をばとどめしいさを思ひ出でにけり」となつてゐて、「たたかひを」が「戦をば」となつて違つてゐるほか、「おもひいでにけり」も、表記が「思ひ出でにけり」となつてゐる。あとの方は表記の問題だけだが、前の「たたかひを」か「戦をば」かは、一語ゆるがせにしがたい短歌のことだから、はつきりしておきたいと思ふ。普通かういふ場合は作者にきくのが一番早いが、天皇陛下におきするわけにもゆかないから、いまここには、両様の伝承をあげておくことにする。「いくさ」といふと戦争全体をさすやうに感じるが、「たたかひ」といふと「戦闘」の感じがある。「が」と「の」の違いも重要である。

昭和八年三月三日、鈴木侍従長をして白川大将の遺族におくりたまへる御製
 をよめらの雛まつる日に戦をばとどめしいさを思ひ出でにけり

皇室博物館移管（昭和二二年）（『みやまきりしま』二五年）

いにしへのすがたをかたるしなあまたあつめてふみのくにたてまほし

「帝室博物館」は「もと宮内大臣の管理に属し、古今の技芸品を蒐集して公衆の観覧に供した所。東京及び奈良に置かれた。昭和二十二年文部大臣所轄の国立博物館となり、昭和二十五年文化財保護委員会の付属機関となる」（『広辞苑』）東京のは普通「上野の博物館」といふ。昭和二十二年の国立移管に際しての御歌である。「古の姿を語る品あまた集めて文の国建てまほし」である。「ふみのくに」は「文の国」、当時日本再建の目標としてかけられた「文化国家」をいふのであらうか。しかしそれでは「……あつめて……たてまほし」のつづきが穏当でないから、「芸術の国」と解しておく。存疑。帝室林野局の移管に際しても御歌があつた。昭和二十三年の次の御歌と関係が深い。

折にふれて（昭和二十三年）

海の外とむつみふかめて我國のふみのはやしを茂らしめなむ

悲しくもたたかひのためきられつる文の林をしげらしめばや

「ふみのはやし」は「文林」の和語とみて「文林」を『広辞苑』でひくと、「①文壇②詩文集」の意がある。さうすると「文学」の意味になるが、この御歌の場合をもつとひろく、芸術・科学・宗教をふくめて「文化」の意味にとるのが適當ではないだらうか。海外諸国と親和してわが国文化を發展させよう、との第一首。「茂らしめなむ」の「茂る」は「文のはやし」の縁語である。第二首の「きられつる」とか「しげらしめばや」とかいふのもみな文林の縁語とみるべきで、戦争によつて破壊された文化を茂らせたものだ、といふのが第二首である。かういふ縁語による表現はおよそ今時の短歌の常識とは異つてゐて、現代の概念を耳なれない古語で表現したた

めかへつて意味が不明瞭になつたやうに感じられるがどういふものであらうか。やたらに漢語や口語を使ふのも不勉強だが、現代の概念を古語で表現するのむづかしいことである。どちらかといふとかういふ概念の内容をおよみになると、今上天皇の御歌はあまり包括的な多義的な言葉づかひが、意味をアイマイにして、滲透する意志の深さをあらはしきれないのではないかと思ふ。人によつてはかういふ古語の表現を風雅とし、短歌はそのやうなもので、漢語や口語を使ふのは短歌ではないと思ふ人もあるだらうが、わたしは、むしろ次のやうな御歌の方が力強く人をうつ力をもつてゐると思ふ。

折にふれて(昭和二年)

冬枯のさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとはせむ

潮風のあらしきたふる浜松のををしきさまにならへ人人

戦後荒廃する人心に対するいつはらぬ天皇のご希望である。前の御歌「かがみ」は「鑑」で「模範」の意。あの御歌は、悲劇の天皇大正天皇の御歌に、

海 辺 松(大正七年)

しほ風のからきにたへて枝ぶりのみなたくましましいその松原

とある御歌とよく似てゐる。

折にふれて(昭和二三年)

せつぶん草さく山道の森かげに雪はのこりて春なほ寒し

「せつぶん草」は「節分そう」。六音、第一句の字余り。この草は「うまのあしがた科の多年生草木。地中に球状の塊茎があり、高さ一〇〜二〇センチ、二、三月頃（さむかひ）総苞の間から一本の花茎を出し白色五弁の小花を開く」（広辞苑）とある。道に咲きでた小花に早春のシンボルを見て、「春なほ寒し」と結ばれる御歌が、何となく当時の時世を暗示するものと感じられた。年々の時代思潮といふものがあるもので、昭和二十二、三年頃の国民一般の生活状態やそこから生れた生活感情といふものは、十年もたつた今日では思ひ出せないくらゐに薄れ、やがて、世代が変れば、人の記憶から消えうせてしまふであらうから、後代の人は、これらの御歌の制作年次に注意をむけることがなくなるであらう。その時、逆に御歌は当時の時代思潮の代表的表現と考へられるのである。御歌制作の年代的背景について詳しく述べるのはこの故である。

折にふれて 五首（昭和二十三年）

秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく

「秋ふけてさびしき庭」、ものみな枯れはてようとする寂寥の庭に、「あきざくら」（コスモス）が「いろとりどり」に「美しく」咲き乱れる。「明るい哀愁」とでもいふやうな気分を感じさせる御歌である。この哀愁の共通こそ当時の国民感情であつた。ぼくはいくたびこの御歌をくりかへしよんだことだらう。このさびしさのあふれた御歌に天皇の御心をしので心を清められはげまされたものである。後代の人は、恐らくこの御歌にそのやうな時代精神を感じとることはできなくなるだらうから、あへて感想を書きとどめておくのである。昭和二十一

年十一月三日公布の日本国憲法（昭和二十二年五月三日施行）の文面には、当時占領軍総司令官の管理下にあつた天皇の統治権は消え、天皇の政治的の権能は弱められた。それは天皇のたへうるところであつたかもしれないが、敗戦直後の天皇に対する国民の一部の非難攻撃はたへがたく感じられたにちがひない。ともあれ、この御歌には、敗戦の悲しみが、底に沈んで、寂寥たる御歌となつてあらはれたのだと思ふ。

霜ふりて月の光も寒き夜はいぶせき家にすむ人をおもふ

敗戦直後の食糧不足は、国民の闇行爲と占領軍の放出物資とによつてともかくも切抜けたが、住宅問題はさうはいかなかつた。戦災の焼あとの防空壕に穴居する人がいつまでもあとをたたなかつた。御歌の「いぶせき家」は「みすばらしい家」の意でかういふ住居をもお心に入れての表現である。皇居復興のお許しが戦後十数年に至るまでなかつたといふのも、戦災による住宅難が未だに尾を曳いてゐるからであらう。食糧も住宅も衣服も、生活の基本条件だから、それが不足してゐる人にとつては痛切な問題となるが、安定してゐる者にとつては全く問題にならない。つまり国民全体の問題となり難い性質の、基本的問題である。衣も食も、不足でも我慢しうるが、住は、穴居では、現代生活はできない。それ故にこそ「いぶせき家に住む人」の悲しみ苦しみをお思ひになる痛切な同情を示されたのである。

風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

「風さむき霜夜の月を見てぞ」「かへらぬ人のいかにあるかと」「思ふ」——これが普通の語順である。月を見てぞ思ふ」とつづけたので、月を見てただちに心にうかびくる傷心のこと——抑留者にたいする同情の痛切さが

あらはされる。悽愴な御歌である。引揚者については殊にお心づかひがあるので、この種の分類項目を立てることもできるが、地方巡幸の目的の一半がまたこのやうな戦災者引揚者激励にあると思はれるので、別項目を立てなかつた。併せて読まれたい。

緑なる牧場にあそぶ牛のむれおほどかなるがたのもしくして

たゆまずもすむがををし路をゆく牛のあゆみのおそくはあれども

第一首は、ゆつたりとした牛の動きにたのもしさを感じるとおよみになつた御歌であつて、裏面に人生に無益な緊張の弊を戒められるお心があるやうに拝される。第二首目の御歌によく似た歌で、『明治天皇御集』に、「身にあまる重荷ぐるまをひきながらいそがぬ牛はつまづかずして」の御製がある。「いそがぬ牛」「たゆまずもすむ」——いづれも物いはぬ牛のすがたに人生態度の指針を見とられたのである。第二首第五句「おそくはあれども」は八音字あまり、牛のゆつたりした、しかしたしかな足どりを髣髴する。

引揚者に対して（昭和二四年）

外国につらさしのびて帰りこし人を迎へむまごころをもて

国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

敗戦直後の「海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり」から一貫する、引揚者の上にお心をよせられる御歌である。「ただいのるなり」とうたひ、「ただ待ちに待つ」とむすび、また、「かくのごと荒野

が原に鋤をとる引揚人をわれはわすれじ」(昭和二四年)の「われはわすれじ」と、極限の表現をお使ひになる。万事ひかへ目のご表現をされる天皇の、やむにやまれぬお心のおのづからなる表現とみるべきであらう。

「つらさしのびて」「まごころをもて」「心をいためつつ」「待ちに待つ」など、みな稚拙ともいふべき言葉づかひで、それだけに切実な、それ以外には言ひあらはしがたい無限の感懐をあらはすのである。祈りの真実さが技巧や修飾を拒否して切実そのものの表現となる。

湯川博士ノーベル賞受賞 二首(昭和二四年)

新聞のしらせをけさは見て嬉し湯川博士はノーベル賞を得つ

賞を得し湯川博士のいさをしはわが日の本のほこりとぞ思ふ

明らかに二首連作の御歌である。第一首は新聞をひらいてはじめてこの事実を知つたおどろきが、その場に即して具体的に生き生きと表現されてゐる点で、今上天皇御歌の特徴をよくあらはしてゐる。一切の修飾がなく全くありのままの表現で、強い感動は、ただ一首全体のリズムに示されてゐる。「まことの歌」といふ性質がよく出てゐる。「得つ」の「つ」が強く言ひ切つて、事実の確認を語るやうだ。総じて助動詞つ(口語のタに当たる)でとめた御歌には、現実に対する強くたしかな把握の態度があらはれてゐて、科学者天皇を髣髴するのである。

国民体育大会(昭和二四年)

風さむき都の宵に若人のスポーツの歌ひびきわたれり

体育大会関係の御歌も十首近くあるやうだから、ひとまとめに分類することができる。国民の体育によせられるお心のあらはれである。

横浜訓盲院にて（昭和二四年）

めしひたる少女がともの編物にはげむ姿をかま感じてわれ見つ

「はげむ」の一語は労作意志に直結する。「感けて」に近代感覚が顫動する。「少女がとも」の「とも」は集団生活を表現する。一語一語に精微の妙趣がしのばしめられる。「いつくしみ」の音調である。声を出して音読朗誦すれば一首三十一字の音律に乗つてその一語一語は生命の脈絡につながる。（三井甲之『天皇御歌解説』）

博士らに二首（昭和二五年）

うれひなくまなびの道に博士らをつかしてこそ国はさかえめ

はかなしと人は見らめど博士らのいたつきにより世はすすむなり

「うれひなく」は「生活の心配がなく」、「まなびの道」は「学問研究」、「さかえめ」は前に「こそ」といふ強調の意味をもつ係り助詞があるので、已然形で終止したので、「さかえむ」といふのと同じである。「さかえむ」は「栄えるだらう」。学問研究を職業とする博士たちは、実業に従事する人々と違って、直接自己の利益にならない研究をも行ふものであるから、生活に苦しむことが多い。それでは一國の科学は興らず、国民生活の向

上も期すことができないと、おつしやられるのである。

昭和二十七年

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重桜咲く春となりけり

国の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに

花みづきむらさきはしどい咲きにほふわが庭見ても世を思ふなり

冬すぎて菊桜さく春になれど母の姿をえ見ぬかなしさ

わが庭にあそぶ鳩見て思ふかなたひらぎの世のかくあれかしと

昭和二十六年(一九五二)サンフランシスコにおいて日米講和条約が締結され、昭和二十七年日本国は名実ともに独立を復活した。御歌は独立のよろこびをうたつた御歌である。第三首「花みづき」は「花水木」、「むらさきはしどい」は別称ライラック、リラ。第四首「菊桜」は桜の一種だらう。五首連作と見られる。第四首に、独立復活の喜びを共にしえぬ前年薨去の母宮をしのばれ、最後の一首に平和を強く祈念される、強烈なしらべの御歌である。第一首第三句「まちにまちし」の六音字余りの疊語が、独立の日の国家的名譽の復活をひたすら待ちのぞまれた御心をあますなく表現してゐる。戦争、敗戦、降伏、占領、独立——と、全く多難な国運であり、天皇として多難なご生涯である。そして、この独立がかちえられた時、天皇の統治権は、日本国憲法の文面には消えてしまった、そのことを思へば、天皇こそ、人として、身をすてて国を救つたお方といふべきではないのだらう

か。日本が、今後独立国家として永続するならば、百年二百年の後代の史家は、必ず、昭和の天皇の捨身の成果を長い歴史の目によつて、発見するにちがひない。われわれのやうに、時代の波動に埋没してゐる者は、展望がきかないし、あまりにも身近かなために長い時の流れの中に聳えたつ人物の価値を判断することができないやうだ。

木がらしのすさぶみ空はすみにすみてふけゆく夜半よの月ぞ寒けき（昭和二十七年）

「木がらしのすさぶみ空はすみにすみて」風すさぶ冬の夜ぞらに月光が澄みわたる清爽の光景が、おのづからS音のくりかへしにあらはれてゐる。雲もない冬空にひとりふけゆく月、それだけを真正面から歌つた御歌である。「すみにすみて」の言葉が御歌独得の覺語で、月光の照らす冬空の青い色を目に浮ばせるほど深味のある表現となつてゐる。澄み切つた大空にひとりふけゆく月をいつまでもながめてをられる作者天皇の傷心は、そも何故であらうか。

古の文まなびつつ新しきのりをしりてぞ国はやすからむ（昭和二十七年）

「古のふみ」は、「昔の書物」と解すべきだらうか。「新しきのり」は「新しい法則」すなはち「新時代の原理」の意味ではないだらうか。明治天皇の御製に、「すすみゆく世におくれなばかひあらし文の林はわけつくすとも」といふ御製がある。世界の進歩と国民的伝統と、その中間に正しく位置する国家のみが平和を確保し国家生活を持続しうるのである。

洞爺丸の惨事（昭和二十九年）

その知らせ悲しく聞きてわざはひをふせぐその道疾くこそ祈れ

昭和二十九年九月二十六日夜十時、台風十五号の強風によつて青函連絡船洞爺丸は函館湾内において転覆沈没、約千五百名の溺死者と行方不明を出した。この死者数はタイタニック号の犠牲者の数より大きい。しかも函館港内の惨事で、全国民に深刻な衝撃を与へた。

「その知らせ」といふ第一句の直接法、「ふせぐその道」といふ言葉の、無技巧のあらげぶりの表現、「疾くこそ祈れ」といふ悲痛な語調、「ただ祈るなり」とうたはれたお心に通ふ痛烈なしらべであつて、その率直な表現において、その一気呵成の強いしらべにおいて、源実朝の「時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ」を思ひ出させる、いな、それ以上の、強烈な祈願の御歌である。

相 撲（昭和三〇年）

ひさしくも見ざりし相撲ひとびとと手をたたきつつ見るがたのしさ

蔵前国技館の中にこの御歌の碑がある。天皇さまには、戦中、戦後、国民生活の苦難を思はれるお心からであらう、相撲観覧をご遠慮になつてをられたのではないのだらうか。「ひさしくも見ざりし」とうたはれたのはこの故である。「相撲」は「すまひ」で、「角力」の古語。お好きな相撲を十数年ぶりでながめられる。「先憂後楽」のお心が、「ひとびとと手をたたきつつ」のお言葉に如実にあらはれて感涙をさそふ。民衆と楽しみを共にせられるそのままの表現で、明治天皇御製「千万の民と共にたのしむにます楽はあらじとぞおもふ」（明治四三年）の規範的表現のいはば実践的表現とみられる。

折にふれて（昭和三〇年）

なりはひに春はきにけりさきにはふ花になりゆく世こそ待たるれ

「なりはひ」は「産業」、「世こそ待たるれ」は「世が待たれる」の、例の、「こそ……已然形」の係り結びによる表現。「花になりゆく世」を強調する。戦後十年やうやく復興の実績のあがつた産業界の努力をおよろこびになり、さらにその発展を期待される御歌である。

昭和九年の夏の天候とくらべられて（昭和二九年）

夏草のおひたち見つつ憂はしも二十年前のひよりも似て

「二十年前」は「はたとせまへ」と読むのである。「ひより」は「天気つづき」、稲の出来をご心痛になつたのである。農林水産工鉱業と、文字通りあらゆる産業にお心をおつかひになる天皇には、お心のやすむひまもあるまいと思ふほどである。しかし、そのお心によつてこそ、国家生活内外の調和が保たれるのであらう。

八月十五日那須にて（昭和三〇年）

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

「那須にて」と前書があるので、那須ご用邸にての御歌と考へられる。「旅寝の床に」は都をはなれたご感慨の表現である。「十とせてふ」は「十年といふ」の意。「十年の昔」といふより「十年といふ昔」といつた方が、思惟の過程がそのままにあらはれてゐる感慨深い表現である。その「昔」は、昭和二十年八月十五日、敗戦決

定——いはゆる終戦の日である。その日終戦の詔書が放送されて戦争が終つたのである。

時も十年、所も東京と那須とで、へだたつてゐるが、それ故にこそかへつて痛切に、敗戦のその日のことがしのばれるのであらう。「夢さめて」その日のことを思ひ「胸せまりくる」と結ばれるこの一首の御歌こそ、長い大戦争の終結を告げるのであらうか。簡明率直な表現にかへつて体験の未曾有の深さと広さとがこもつてゐると拝される。

九 余 録

一

今上天皇の御歌には、源実朝の歌と似た感じがある、とかつて書いたことがあつた。これを読んだわたしの中
 学時代の恩師が「そりやあ少しほめすぎないか」と忠告してくださいました。もちろんその意味は、今上天皇の御歌
 は、正岡子規をして「人暦以来の第一人者」と讃嘆させたあの実朝に及ばぬこと遠い、といふ意味である。恩師
 は今年八十歳、まぎれもない明治の人で、この忠告には、暗に、天皇にお世辞なんか言はなくつてもいい、とい
 ふ意味もある。明治の人には、天皇といへば、明治天皇といふイメージがあるので、明治天皇にくらべると、今
 上天皇は、軟弱な感じがする、と考へてゐるのではないだらうか。天皇の典型を明治天皇に求める気持があるか
 ら、歌聖といふなら明治天皇こそ歌聖で、今上天皇はまだまだ、と言ふ気持ではないだらうか。

明治時代の人が、明治天皇を基準にして、天皇を考へ、御製ぎよせいを考へるといふことはもつともなことである。事實、明治天皇は、聖天子であり、歌聖であつた。日本の近代が明治にはじまつたことはいふまでもないとして、その近代化を成就した明治時代といふ輝かしい時代の精神的政治的指導者を一人あげるとすれば、おそらく十人の歴史家のうち九人までは明治天皇をあげるだらう。明治天皇は正に明治の天皇であり、天皇の典型であつた。同時に、天皇は『明治天皇御集ぎよしゆ』にその一端を示す数万首の短歌の作者として不世出とも見られる歌人天皇であつた。その御製は、明治三十七・八年日露戦争の当時、当時の御歌所長ぎよたどころとして天皇の御歌を管理する職にあつた高崎正風が、天皇のお許しをえずに、もしもおとがめがあつたならば切腹をしておわびしようといふ必死の覚悟で、新聞紙上に発表し、大戦争に苦闘してゐた国民の氣持を湧き立たせたものである。それ以後、特に、『明治天皇御集』が刊行されて以後、御製は文字通り津々浦々に朗誦されて、幾億兆の人の心に影響をもつたのである。『御集』の刊行された数も莫大なものであつたらう。善い悪いは一応別として、短歌として、これほどひろく、これほど深く国民の間にしみ通つていつたものは他に類を見ないだらうと思ふ。ベストセラーなどといふ程度ではない。この明治天皇の御製を鑽仰する人々が、今上天皇の御歌に満足できないのもまことに無理からぬものがある。明治の人は、今上天皇に、明治天皇のやうな天皇になつてもらひたい、と願つてゐるのである。それはそれでいいが、しかし、今上天皇はあくまで昭和の天皇であつて、明治天皇と同じではない。時代が推し移れば、天皇も推し移るのである。今上天皇の御歌には明治天皇の御製とは違ふ点がある。しかし、違ふといふことが直ちにその芸術的価値の高低とはならない。どこがちがふのか、また、どうしてちがふやうになつたか、その問題についても考へてみたいと思つた。

一方、昭和生れの若い人にとつては、明治天皇についてはもちろん、明治時代の原理を示す「帝国憲法」も

「教育勅語」も「軍人勅諭」も『明治天皇御集』も、全く知らないといつてよいだらう。さういふものがあつた、といふことは知つてゐるかも知れないが、それらの内容を生活の中で実践したり批判したりすることは全くなかつた、といつていいだらう。また、その明治の制度と精神の延長の下で、「兵役」に従つたり「応召」したりすることもなく、する心配もなく、「戦争」そのものの経験もなく、「天皇陛下万歳」といふ言葉を叫ぶ必要もなく叫ぶ機会も稀だ。天皇は「日本国」の「象徴」であつて、ほとんど実生活とは無縁の存在と考へられてゐるのである。いや、無縁といふより、むしろ積極的に、今上天皇を戦争の張本人のやうに考へて、敗戦後の苦しかつた生活の責任を天皇になすりつけようと思つてゐるらしい。「天皇の歌」などに耳を傾けるひまはない、といふ氣持だらう。

それにこの時代の人は、短歌といふ文学形式に対しても理解と好意とを持つてゐないのかも知れない。短歌は、戦争中盛んだつた反動として、戦後は、その形式自体が超国家主義的であると考へられ、一時は、文学上の戦争犯罪人扱ひにされたものである。したがつて、戦後の新聞雑誌によつて育てられた人々にとつては、短歌といふ形式は、天皇と同じやうに、戦争と結びつくか、または全く無縁な存在として映つたのである。まして、ラジオ、映画、テレビの大波が、小説といふ形式さへも押し流してしまふやうな時代に、短歌そのものが若い人の意識の外にとり残されてしまつたのは当然のことかもしれない。短歌といふ形式が、時代精神の表現形式となりえたのは、最近では、鉄幹、晶子、子規など明治の歌人を輩出した明治三十年代から、せいぜい戦争中までの時代であつて、敗戦は短歌形式の衰滅となつたのかも知れない。「第二芸術」と言はれる程度ではすまないのかも知れないのである。したがつて、この昭和生れの「若い人」にとつて、「天皇の歌」とは、ナンセンスに近いらしい。だから、この人たちも、明治の人と同様、まづ今上天皇の御歌を知ることが必要だ。

さういへば、「天皇の歌」といふこの用語そのものが、時代の差をものがたるやうだ。明治の人は、「今上天皇御製」と言ふだらう。さう言ひなれてきたにちがひない。それを若い世代の人は「天皇の歌」と言ふのである。「御製」といふ言葉は、天皇を尊敬してその歌を特別にかういふのである。皇后、皇太子の歌は「御歌」とよんで「御製」とは区別した。天皇の詩歌だけを御製とよぶのである。漢語をとつたので、これに対応する和語の方は「大御歌」といふ。この名称の対照が、明治と現代との対照になるのではないだらうか。

新聞ではどうかといふと、多く、「御歌」と書いてゐる。前の二者の間といつたところである。大正生れのわたくしは、やはりこの中間をとつて、今上天皇には「お歌」「御歌」といふことばを使つた。しかし、明治天皇、大正天皇の御歌については、昔からの用法になれてゐるので「御製」としたところが多い。別に他意あつてのことではない。どちらでもいいといへばいへることで、さういふことをはなれて、天皇の御歌を歌として考へてみて欲しい、といふのが、わたしの第一の願ひである。

二

今上天皇の御歌は、大正十年東宮時代の「社頭暁」から、だいたい毎年、新年恒例の宮中御歌会みやちんぎょかに、一首づつ年々の御題のお歌が新聞に発表されてきたのである。この今上天皇の御歌を、読み味ふ、といふ気分では、当年的の、「明治天皇御集研究」の著者故三井甲之先生が、昭和五年「御製拝誦」といふ長詩を発表して、当年の御製「海辺巖」を詩のはじめに引用し、それについての感想をうたつた、その長詩の中によんだのはじめてだつたらうと思ふ。今上天皇の御歌について、うやうやしい道徳的解説以外に、それを、歌として、つまり芸術的表現として味つた、感想といふか研究といふか批評の発表は、おそらくこの長詩あたりがはじめてのことではな

いだらうか。そしてその後、ほとんど毎年三井先生は、この長詩による「御製拝誦」の感想の発表をつづけられたのであつた。(三井甲之著・詩集『日本の歓喜』参照)

敗戦後、日本国民は未曾有の動搖を経験したのであるが、その際新年歌会始の御歌以外の数首の非常に抒情的な御歌が新聞に発表された。この御歌を拝誦した感激をもとにして、富山市の広瀬誠氏が昭和二十三年「今上御製研究」を発表した(雑誌『興風』二十三年十一月号所載)。本書に「御歌歌風の開展」として収載。

昭和二十六年、御歌集『天皇御集・みやまきりしま』が毎日新聞社から発行され、その巻末に斎藤茂吉、釈迦空、吉井勇三氏の、御歌についての研究が掲載された。

昭和二十七年、当時病床にあつた三井先生は、「永訣の書」として、『天皇御歌解説』(謄写刷)を知友に頒布した。昭和二十八年、筆者は雑誌『新公論』に「今上天皇御歌研究」を連載した。以上が御歌研究の概要である。

『みやまきりしま』が出た時、ぼくは、歌壇や国文学界などで、御歌について活潑な研究が行はれるだらうと期待したが、研究らしい研究はほとんど出なかつたらしい。ぼくが不勉強で知らなかつたのかもしれないが、新聞記事の報道くらゐで、立ち入つての研究は少なくともジャーナリズムや学界の表面にはあらはれなかつた。天皇在世中の歌集の刊行といふことも、あまり例のないことだとおもふが、その意義についても論ぜられなかつたやうだ。敬して遠ざけたのか、黙殺したのか、あるいは前にのべたやうな理由でふれるのをさけたのか。それに、歌集そのものが千円の豪華版といふので、民衆的でなかつた。宜しく普及版刊行のおゆるしを仰いで、もつとわれわれ民衆のたやすく手にとれるやうな形にしてもらひたいと思ふ。ぼくらのやうな熱心なものは、すぐ写してしまふからいいが、世間の人は忙しいからさうはいかない。それにうたは見るものでなくよんで心にされる

ものだ。豪華版でも普及版でも歌の価値に變りのあるはずがない。『大正天皇御製集』は普及廉価版が出てゐるが、その価値についての研究は同様に発表されてゐないらしい。だから、文壇や歌壇や学界の多くの人は、きつと御製はつまらないとかがへてゐるのではないかとおもふ。中野重治氏などはその点はずきりしてゐて、さういふ意見を何かに発表してゐた。かういふなかで三井先生が明治天皇御集研究からすすんで今上天皇の御歌についての研究を、昭和五年からその生涯の最後まで、発表しつづけられたことは、今上天皇の御歌に関する研究において、先導的な役割を果したものであつて、その事実を否定することはできないとかがへられる。

三

前述のやうに『天皇歌集・みやまきりしま』は豪華版でとても一般の説誦用の書物ではない。昭和二十七年、前記『天皇御歌解説』謄写頒布の際、その附録のやうな形で、富山の広瀬誠氏の謄輯をもとにして、『今上天皇御製集』を同じく謄写刷にして頒布したことがあつたが、部数はごく僅かなものですぐなくなつてしまつた。そののち、幡掛正浩氏を中心にする兄弟文庫から簡素な活字版の『今上陛下御集』をわけていただいたことがあつた。この『御集』が、大正十年「社頭暁」から昭和三十年新年御歌会始の「泉」の御歌まで、当時までに発表された御歌をすべてあつめて、しかも実にはすがすがしい装幀編輯で、研究にも説語にもありがたい文献であるが、もちろん非売品で、一般に手に入れることはむづかしい。結局、ぼくは、御歌について人に話をするやうなときには、いつも十数首の御歌をプリントにして謹解しなければならなかつた。誰でも手に入れることのできるやうな「御製集」がほしいといふこの渴望は、昭和三十一年の夏、霧島神宮に参拝した時にみたされた。友人と参拝をして、社務所でお札や絵葉書など記念のものを求めてみると、そこに『今上陛下御集』といふ小冊子があるで

はないか。手にとつてみると、兄弟文庫のものと同じやうな体裁で、中を見ると、兄弟文庫の御歌集に加へて、昭和三十年から昭和三十一年発表の御歌を謹載してあるから、当時最近の御歌まですべて網羅してあるわけだ。いくらでわけてもらへるかきいてみたら、十円といふのでなほありがたい。裏を見ると、霧島神宮の朱印が押しあつて参拝の記念にもなる。「昭和三十一年四月二十九日 神社本庁」とあるから、神社本庁で、兄弟文庫の「御集」をもとに、追加謹輯したものであらう。本庁で頒布するものなら、東京の神社にもあつたものだとおもふが、少しも気がつかなかつた。遠く、霧島までやつてきて、求め願つてゐたこの『今上陛下御集』の刊行を知つたのは、大きなよろこびと共に、何か神意のやうなものを感じて心のひきしまるのをおぼえた。これでわれわれは、誰でも、写したり図書館に行つてしらべたり、さういふ努力をしなくて、今上天皇の御歌を当時発表のものすべてよむことができたのである。

われわれは一生のうち、とても個人的に天皇陛下にお目にかかつてお話する機会をもたないから、天皇陛下のお心持とかお人柄といふ点については、直接の経験をもたないので、えらい人々の話をきいたり書いたものを読んだりして想像し、その想像と歴史的につみあげられてきた各自の天皇観とを照しあはせて、さうあるたらうと信ずるのであるが、御歌集があれば、それを読んで誰でも、短歌形式の制約はあるが、それゆゑにかへつて直接に、天皇陛下のお心持を拝察することができるのである。その意味で、この簡素廉価な『今上陛下御集』刊行の価値は無量で、本庁の英断をたたへるとともに、年々の御歌を加へて刊行を継続し、御歌の普及をはかつてもらひたいと思ふ。

かつて明治時代に、明治天皇の御歌が公開された時は、時の御歌所長の高崎正風が、おとがめあらば切腹と覚悟して御製の一部を公表した、といふ有名な話がある。その後、大正八年『明治天皇御集』の謹輯が成り、御集

が刊行され、それにもとづいて各種普及版が出たわけである。部数はどれくらゐになるか、莫大なものだったらう。戦後、昭和二十年編成の奥書をもつ『大正天皇御集』の普及版が刊行されたので、いま、民間謹輯の今上天皇の御歌集が刊行されてもおとがめはあるまい。ただ、短歌といふものは、個人的抒情詩としての位置を万葉時代に確立したものであるから、抒情詩としての性格を本質としてゐる。といふことは、多くの有力な歌人に自選歌集のない理由となるのである。歌集から日記・物語へと発展した日本文学の形式の発展は、創作心理の発展とも見られるから、短歌創作に重点をおくかぎり、自分の歌集を作るといふことは、抒情の整理過程にはひることで、抒情詩としての短歌創作の純粹性を乱すことになる。一方、短歌の創作はさしたる専門技術を必要としないう、むしろ、作者の心境そのものの価値に重点のかかる文学形式であつて、心境といふものは、天稟と教養と境遇と運命によつて左右されるから、真情あふれる一首の無名の民の短歌の価値が、数千首を擁する有名大家の歌集にまさることがあるので、天稟の抒情詩人即ちまことの歌人にとつては、歌集などといふものは厄介なものかも知れない。

本篇の御歌は、前記広瀬誠氏の集録をもととして毎日新聞刊『みやまきりしま』神社本庁刊『今上陛下御集』を参照したものである。したがつてそのほとんど大部分、すなはち、『みやまきりしま』のみに発表された御歌を除いて、すべて中央地方の新聞に発表されたものを集録したのである。

今上天皇のお人柄などのことについて、本文引用箇所以外にも、左記の諸書を参照した。列举して謝意を表す。

新万葉集別巻・宮廷篇（改造社刊）

仰ぐ御光（藤樫準二著）

天皇歌集・みやまきりしま（毎日新聞社刊）

今上陛下御集（神社本庁刊）

天皇御歌解説（三井甲之著）

天皇の人生（入江元彦著）

天皇歌人（堀江秀雄著）

天皇陛下（文藝春秋編）

天皇陛下（高宮太平著）

天皇（トッパン写真集）

皇居（トッパン写真集）

天皇（宮廷記者団）

天皇と生物学研究（田中徳著）

天皇の素顔（小野昇著）

天皇の生物採集

天皇の印象（創元社編）

千代田城（藤樫準二著）

歌人・今上天皇

後篇
(增補)

御歌研究 (増補)

附 皇后御歌「やつがしら」(絵巻連作)

一 終戦時の天皇御歌について

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国とくこくと離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

右の四首の歌は、終戦当時の御製で、昭和四十九年の末に亡くなられた木下道雄先生(皇居外苑保存協会理事長でいらつしやつた)の『宮中見聞録』(昭和四十三年一月一日初版)にかかげられてゐる。

木下道雄先生は今上天皇の侍従として側近にお仕へした方で、宮中の見聞を通して天皇さまのお心を伝へるすばらしい文章を残してをられる。

その第一が「鹿兒島湾上の聖なる夜景」といふ文章であり、第二が「荒天下の分列式」である。ともに陛下の「無私」のお人柄を伝へる世間周知の名文である。第三に——価値の上の順位をいふのではなく、時間的の先後から言つて、——第三に、私は、前記四首の終戦当時の御製を書き残してくださったことを、木下先生の文章のおかげとしてたたへたい。

前記の四首の御製のうち最後のお歌は、ほとんど同じ歌が「折にふれて」と題する次のお歌として当時の新聞に発表された。

折にふれて

海の外とくがの陸がに小島にのこる民の上安かれとただいのなるなり

しかし、「爆撃に」にはじまる三首のお歌は、木下先生の『宮中見聞録』以外に見ることができないのである。

今上天皇には新聞社の刊行した歌集が二冊ある。毎日新聞の『みやまきりしま』（昭和二十六年刊）と読売新聞の『あけぼの集』（昭和四十九年刊）とである。この両御製集には前記三首の御製はない。旧版『歌人・今上天皇』は、昭和三十四年の刊行であるが、謹載の御製は広瀬誠氏が新聞・雑誌誌上

に発表された御製を丹念に集めてをられたので、それに拠つたものである。しかし、当時この三首の御製のあることを私どもは知らなかつた。したがつてこの三首の御製を旧版『歌人・今上天皇』にかかげることはできなかつた。

木下先生がいつこの御製のあることを公表されたのか、正確には知らないが、私がこの御製をうかがつたのは、『今上陛下御製集』の謹編者の青山新太郎氏からであつた。昭和三十八、九年ではなかつたかと思ふ。青山さんが木下先生からうかがつたと言つてこの御製を伝えてくださった時の感動を私は忘れることができない。

青山さんが昭和四十年に刊行された『今上陛下御製集』は、当時までに発表された御製を網羅まろしたものであるが、同時に、前記「爆撃に」「身はいかに」の二首の御製を「終戦後の御製」としてかかげてゐる。その時は「国がらを」の御製は発表されなかつた。青山さんが木下先生からうかがつたのが、前記二首だけであつたからであらう。

そして昭和四十三年一月一日の『宮中見聞録』の発行となつたのである。

木下先生はかう書いてをられる。

「昭和二十年八月十五日、終戦のときにも私は会計審査局にいたから、当時の陛下の御様子を語る資格はないが、当時お詠みになつたお歌を後で拝見させていただいたので、四首ここに載せさせていただきます」(「終戦後、再び側近にありし頃」——『宮中見聞録』四版一一七ページ)

そして、前記の御製をかかげられ、その後、

「鳥にたとえては甚だ恐縮であるが、猛鳥の襲撃に対し雛まもる親鳥の決死の姿を、涙して想うだけである」

と記してをられる。この木下先生のお言葉には千鈞せんこんの重みがある。そしてこれが、前記四首の御製の出典なのである。

（同書には御製が上の句と下の句とに分けて二行で書かれてゐるので、これは一行書きに改めた。今上天皇は一行書きで発表されてゐるし、それが短歌の表記の原則であると信じるからである。また、第一首目の「たふれゆく」とあるのは、文法的に、——短歌は歴史のかなづかひで表記するのが本当たと思ふので——「たふれゆく」の誤植ではないかと思ふ。次のお歌には「たふれゆく」とある）

終戦の時の御製四首の出典について、ながながと述べたのは、この御製が『みやまきりしま』にも『あけぼの集』にも、また新聞にも旧版『歌人・今上天皇』にも載つてゐないので、出典について不審に思はれる人がをられるからである。

木下先生がこの御製を公表されたのは、重大な決心をされてのことであつたらう、と、私は今になつて思ふ。終戦当時の天皇さまのお心もちをこれほどよく伝えるものはないからである。この御製は、今上天皇のお歌の中でも最も重要なお歌であるし、日本歴史の中に記念すべき重大なお歌であると私は信じてゐる。

明治三十七、八年の日露戦争の当時、明治天皇さまのお心もちを全国民に知らせようとして、当時の御歌所長 高崎正風が、明治天皇さまの御許しを得ないで、お歌を発表し、ために国民の志気大い

にあがつたといふ話は有名な話であるが、その時、もしおとがめがあつたら切腹してお詫び申上げる覚悟であつたと高崎正風は語つたといふ。

私は、木下道雄先生もこのやうなお心からこの御製を発表なさつたのではないかと思ふ。木下先生にお会ひしてこの御製の出典について私がうかがつた時、先生は『宮中見聞録』に書いた通りです、といふ意味のことを述べられてそのほかには一言もつけ加へることをされなかつた。先生の覚悟と確信とがその無言の中に感得された。

さて、御製の謹解であるが、最初の二首——「爆撃に」のお歌と「身はいかに」のお歌と——は、連作の形で内容は二首相応する繰り返しである。

第一首目のお歌は「爆撃にたおれゆく民の上をおもひいくさとめけり」まで、一気に、しかし「爆撃に」（五音）「たおれゆく民の」（八音）「上をおもひ」（六音）「いくさとめけり」（七音）といふ字余りを含んで、強くありのままに詠みくだして、最後の句に「身はいかならむとも」（九音）といふ、これも字余りで、しつかりと重くとめてをられる。作者は五七五七七といふ音調をととのへることをせずに、心におもふことを、腰を切つた水の奔流するやうに、率直に詠んでをられるのである。短歌の定型をはみ出したその音調が、かへつて作者のまごころの叫びとなつてゐるので、一読一誦、忘れ難い感銘を与へられるのである。

「爆撃にたおれゆく民」に作者の心はとらへられてゐて、己れ自身をかへりみる余裕はない。国民の破滅を救はうとして終戦の決心をなさつた時、その御決心はおのづから捨身のものであつた。さうい

ふお心の展開がうたはれたのである。

次のお歌は、これを逆に「身はいかになるともいくさとどめけり」と、己れを捨てて終戦の決断をくだされたお心を一気に述べられ、「ただたふれゆく民をおもひて」と深い同情のお心を後に述べられたのである。

第一首目の最後の句の「身はいかならむとも」といふ字余りの句の重い調子と、第二首の最初の句の「身はいかになるとも」といふ2・3・4音の調子とが対照的で、作者の心の動きが、第一首の最後の句から一転して元へもどるといふふうである。そしてその心は変らない、くりかへしくりかへし思ひをこらしてなほ変らない、不動の御信念が音調となつて詠まれてゐるのである。

そして、そのお心を天皇さまがつらぬかれたこと、それが三首目の歌に詠まれた「国がら」であると拝される。「国がらをただまもらむ」といふことは天皇さまが身はいかならむともと決心して国民をお守りくださるといふことにほかならない。天皇さまはさう述べられたのである。天皇さまは「国がら」を守りぬかれたのである。この天皇さまのお心に感応して、天皇さまのお心にしたがふことが、国民の側からの「国がら」である。天皇さまが国民のうへをお思ひくださるお心をあふいで感奮する、その心の中に、日本の国の国がらはあるのである。だから、この心が大切なのであつて、この心をまもりそだて、たやさぬやうにつとめるのが、御製の研究であり、拝誦である。

四首目の御製は前述の通り当時の新聞にも発表されたがその最後の句の「ただいのるなり」は、悲痛なお心の表現である。「ただいのる、いのるほかない」の意味であるが、それなら陛下は祈るばかり

りで何もなさらなかったのか？ とんでもないことで、終戦当時、陛下がマッカーサー元帥を訪問してどんなことをおつしやつたか？ それは今日では世界周知の終戦秘話である。

「秘話」といふのは戦後十年もたつてから公表されたからである。しかもそれは占領軍司令官マッカーサー元帥の口を通してであった。陛下の勇氣といふか信念といふか御心は、驚くべきことである。

「私は戦前には、天皇陛下にはお目にかかった事はありません。始めて御出会いは、東京の米国大使館内であった。

どんな態度で、陛下が私に会われるかと好奇心をもってお出会いました。しかるに実に驚きました。(much to my surprise) 陛下は、まず戦争責任の問題を自ら持ち出され、つぎのようにおっしゃいました、これには実にびっくりさせられました。(to my utter astonishment) すなわち、

「私は、日本の戦争遂行に伴ういかなることに、また事件にも全責任をとります。また私は、日本の名においてなされた、すべての軍事指揮官、軍人および政治家の行為に対しても直接に責任を負います。自分自身の運命について貴下の判断が如何様のものであろうとも、それは自分には問題でない。(go ahead) 私は全責任を負います」これが陛下のお言葉でした。私は、これを聞いて、興奮の余り、陛下にキスしようとした位です。もし国の罪をあがのうことが出来れば進んで絞首台に上ることを申出るといふ、この日本の元首に対する占領軍の司令官としての私の尊敬の念は、その後ますます高まるばかりでした」(天皇陛下を讀めるマ元帥)重光葵——昭和三十年九月十四日読売新聞朝刊寄稿)

「終戦の詔書」の中に「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ」といふお言葉があるが、国体は陛下の捨身のお心において護られたのである。重光外相が同じ文章の中に書いてある通り陛下こそ「新日本の産みの親」であると仰がれる。

そして陛下の、戦災地慰問を中心とする「巡礼」のやうな御巡幸がはじまるのである。戦後御製の多くはこの御巡幸の折のお歌である。

戦災地視察 三首（昭和二十年）

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとみえたりはひにいそしむ民の姿たのもし

（『理想世界』昭和五十年七月号）

補記。終戦時の御製の第二首目「とどめけり」につき、昭和六十年五月三十日附『天満宮梅風会報』に「とどめしむ」とあり。経緯未詳。（昭和六十年六月十三日）

二 歌と思想

——「身はいかならむとも」

—

東京・上野の動物園の隣に、東照宮がある。三代將軍家光の造營の社殿である。社殿・唐門ともに、総金箔である。最近、常時拝観が許されてゐる。

宝物の一に祭神徳川家康の直筆の和歌一首がある。

身のために何かいのらん朝な夕な民やすかれといのるばかりぞ

(私は自分のために祈ることは何も無い。朝な夕な民安かれといのるばかりであるぞ)

一首二文で、自分が無私の心で生きてゐることをウタつてゐる。自分は聖人である、と言ふ人ほど聖人に遠い人はあるまい。自分は無私の心を持つてゐるぞ。朝夕民安かれと祈るばかりであるぞ。か
う言ふ人ほど、無私の心に遠い人は無からう。最後の「ぞ」が、家康の権力意志と慢心を露呈したのである。「慢は悪の極たり」とは、「共に是れ凡夫」と言はれた聖徳太子の御言葉である。

さう言へば、足利義政の歌にも、

さまさまの事にふれつつ歎くぞよ道さだかにも治めえぬ身を

とある。これも「ぞよ」がまづい。

かう思つてゐたところ、歴代御製の中によく似たお歌があつてドキッとした。桜町天皇（第百十五代）御年二十歳の折の御製である。（小田村寅二郎氏著『日本思想の源流』——日本教文社刊——二三〇頁）

述 懐

身の上はなにか思はむ朝な／＼国やすかれといのころに（元文五年——一七四〇——四月十九日）

（自分一身上のことについては何も思ふまい、毎朝毎朝国安かれと祈るところによつて）

朝ごとに国安かれと祈るのは天皇のお志である、そのお心を持ちつづけて、天皇御自身の上については心配すまい、といふ決意でもあり誓ひでもある。倒置法で二句切になつてゐるが一首一文で渋滞がない。このお歌には、人は誰でも自分のことばかり思ふものであるといふ自覚があり懺悔求道の真実がある、それ故にこそ、わが身の上を忘れて国のためにつくさうとする決意である。それは自督の決意であつて、自慢ではない。自慢をするのは自己満足で、自己を神とすること、——すなはち神から最も遠くなることである。神仏を仰ぎたたへることと自己の足らざることを嘆くことは、ひとつのちの両面である。罪惡深重と懺悔するに「まさる功德やはある」と源実朝も詠じてゐる。親鸞が「心は蛇蝎の如くなり」と言つたのは「南無阿弥陀仏」と唱へたことと同じである。

家康の「朝な夕な民安かれと祈るばかりぞ」は、親鸞の言ふ「賢善精進の相を現じて内に虚仮を抱

く」ものに他ならない。つまりは、ウソ・イツハリといふことで、まことの歌ではない。「私は自分のためには何もいらない。ただ朝夕民やすかれと祈るばかりであるぞ」とは頭の中でつちあげた非人間的な聖者の觀念である。朝ごとに国安かれと神に祈ることは人間の可能事で、その可能な祈りの心によつて、わが一身の上を思ふまいと決意することも、人間にできることである。つまり、御製は体験の表現であり、家康の歌は単なる觀念で、その差は雲泥の差といふことになる。

二

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民を思ひて

今上天皇、終戦の御述懐である。国民の上をお思ひになつて御決断なさつたが「身はいかならむとも」と仰せられるので、御一身の上をかへりみられなかつたわけではない。かへりみられて、将来の御運命をお心に画かれ、あるいは死の場合をも予想なさつたのではなからうか。しかし、そのお心の不安、ひるみを直視せられて、「惑まどヲ知りテ惑ハズ」（山鹿素行の言葉）に、御決心を強められるのである。つまり人として誰にでもある本能的な深刻な死のおそれに屈せられることなく、御決断なさつたのにちがひない。「身はいかならむとも」といふ九音の重苦しい口調が、そのお心に屈折のあつた

ことを表現されるのである。そして第二首目は、その言葉をすぐくりかへされて、「身はいかになるとも」とつづけられ一気に詠みくだされた、一言で言へば日本の国がらはこの二首の和歌に表現されてゐる、と言へよう。その折の御製に、

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

の御歌があるが、この御歌の「国がら」とは、前二首のお歌の内容そのものである。つまりは、かういふ御歌があり、かういふ御歌に国民が感激するといふことが、「国がら」にほかならないのである。明治天皇の御製の、

こともなくしらべあげたることはの花にぞにほふ国の姿も

の御歌は、この間の消息をおうたひになつたものであらう。

さういへば、万葉集の防人の歌に、

けふよりは願みなくて大君の醜のみ楯と出で立つわれは

の歌にも「けふよりはかへりみなくて」といふ。けふまでのわが身をかへりみて、その上で「かへりみなくて」と決意をのべるので、決意は、自らかへりみ、自らはげます意味あひがある。いはば、自督の決意なのである。だから、空虚な強がりや自慢とはちがふ強い意志力があらはれてゐる。「背私向公」——現実の本能的の「私」に「背き」、私に克つて「公」つまり国のために身を尽すのである。

大東亜戦争中の国民学校教科書の歌に、一兵士の歌としてあつた、

すがやかに暗れたる山をあふぎつゝわれ御軍の一人となりぬ

は、ハイキングにでもゆくやうな調子で、ウソのむなしさを感じさせるのである。「みいくさ」の代りに「旅に行く」としても通じさうだ。短歌の音調は歌を詠む人の心身の律動をあらはするのであつて、特に肉体があらはれる。歌のしらべは作者の呼吸、息づかひである。そこに虚偽と真実とが區別されるわけである。だから、もしこの歌が事実として兵士の入營の時の歌であつたとしても、それは真実の表現とは言へない。マコトではない。事と言とが一致してゐない。

「滅私奉公」といふ、「滅私」といふウソなのである。

三

私は前々から家康の歌を批評するので、家康を目の仇にしてゐるやうだが、川出麻須美先生の『天地四方』（遺稿集）の中にもこんなことが書いてある。「光明寺に行きて」といふ題の連作短歌の註で、法然の書をほめたあとに、

「なほ家康の親筆和歌一首があつた。下の句を先にかいてあり、書体もわかりにくいので、意味がわからず読めずにゐる、と番人の若い僧が言つた。次のやうに読み意味を説明してやつた。

いく千世さかへぬる身はいへやすし天下とる身はのどかなるかな

『いへやすし』のところ在家康を読みこんだのだと見える。すぐ隣に南無阿弥陀仏の掛軸があるの

で、『この信仰とは全く縁のない大俗悪の歌である』と云つてやる。」（昭和三十九年十一月五日日記より）

蛇足を付け加へれば、この歌も一首二文である。家康は遂に自分を忘れる感激を味ふことのできなかつた我執の人で、そのことを自覚して悲しむこともできなかつた不幸な人だつたのだらう。

（『国民同胞』昭和四十七年八月号）

三 天皇御歌と「天皇制」論

一

大学の国語の入学試験問題集を見てゐたら、ある大学の問題文に「天皇制」についての文章が採られてゐた。それは『「甘え」の構造』といふ書物の中から引用された文章で、かう書いてあつた。

「天皇は、諸事万般しよじばんばん、もちろん国政に至るまで、周圀の者が責任を以て万遺漏ばんいろうなきよう取りしきることを期待できる身分である。したがって天皇はある意味では周圀に全く依存しているが、しかし身分上は周圀の者こそ天皇に従属している。依存度からすれば天皇はまさに赤ん坊と同じ状態にありながら、身分からすれば日本最高であるということとは、日本において幼児的依存が尊重されていることを示す証拠といえないであろうか」

この「幼児的依存」をこの文章を書いた人は「甘え」と言ふのである。そしてこの「甘えの支配する世界」を「制度化したもの」が「天皇制」であるといふのである。かう書いてある。

「以上のように見てくると、新憲法に『天皇は日本国家の象徴である』という条項を設けたのは、

まことにふさわしいことであつたといわなければならない。このところは明治憲法では『天皇は神聖にして犯すべからず』となつてゐるが、この方が新憲法よりおごそかで宗教的なニュアンスがあるにせよ、兩者の間に本質的な差異はないものと思われる。要するに、日本人は甘えを理想化し、甘えの支配する世界を以て真に人間的な世界と考へたのであり、それを制度化したものをこそ天皇制であつたといふことができる』（旺文社『国語・社会問題正解』より）

この文章の中に「日本国家の象徴」とあるのは正しくは「日本国の象徴」であり、「犯すべからず」は「侵すべからず」である。憲法の条文であるから正しく引用してほしいが、何かのてちがひであらう。

二

前記の文章を読んできると、「天皇制」についての、なにか新しい心理的な解明が行はれたやうな気がする。しかし、よく読んでみるといろいろ問題のあることに気がつくのである。

第一、最初の段落の中で、「依存度からすれば天皇はまさに赤ん坊と同じ状態にありながら、身分からすれば日本最高である」といふ判断が、正しいかどうか、これが問題である。

この文章の筆者は、いはゆる「明治憲法」も、かういふ「幼児的依存」の「天皇制」をあらはしてゐるとみてゐることは、あとの方の段落の文章で明らかである。

さうすると、明治天皇さま御一代の国と民とのための御心労は、「依存度からすれば天皇はまさに

赤ん坊と同じ状態」にあつたことになる。そんなことが考へられようか。御生涯に九万三千余首のお歌をお作りになられた日々念々の御精進は「赤ん坊と同じ状態」と言へようか。そんなことは言へない。九万三千余首の御製がその証拠となる。

あるいはこの文章の筆者は反論するかも知れない。――

「わたしは天皇の身分のことについて述べたのであつて、天皇の具体的な御心境などについて述べたのではない」と。

実は、そこに問題があるのであつて、天皇について考へる場合に、天皇さまの御心について考へることなしに考へることができるか、――といふ問題である。

人間が作つてゐる社会の構造を考へる場合に、人間の心を考へないですませるはずがない。「天皇制」を考へる場合に、天皇の精神を考へないですませるはずがないのである。

この文章の筆者は、「幼児的依存」とか「赤ん坊と同じ状態」といふ言葉で、天皇の「身分」を説明したのであるが、これがこの筆者の天皇の精神についての理解にほかならない。「甘え」といふ言葉がその証拠である。「身分だけを論じた」とは反論できない。

おそらく、この文章の筆者は、具体的に、天皇さまの御心境にふれるやうな努力をすることがなかつたのであらう。つまり、天皇さまの御歌とか御言葉とかを研究することが無かつたのだらうと思ふ。さういふ努力と研究を少しでもしたら、さきのやうに、天皇を「幼児的依存」とか「赤ん坊と同じ状態」といふ言葉で評価することは無かつたにちがひない。

「天皇制」といふ言葉自体が、天皇の制度上の地位といふ外からの見方だけを示してゐるやうに見える。こころみに『広辞苑』を引いてみると、かう書いてある。

「①広義においては、天皇が君主として存在する統治体制。②天皇に一切の権力が集中され、天皇に直屬する文武の官僚によって、その権力が行使された近代日本の絶対主義的政治機構。③比喩的に、何らかの意味で天皇制②と類似の特色をもつ社会現象。家の天皇制という類」（第一版）

①は建国以来の日本の政治体制を言つたもので一応納得できるが、②の説明は明治時代が天皇の独裁政治であるかのごとき印象を与へる説明で納得しがたい。③は、②のやうな天皇観があらはれてゐる社会現象といふ意味であつて、いはゆる独裁思想にほかならない。この独裁思想ほど歴代天皇さまの御精神に遠いものは無いのに、かうした誤つた解釈が行はれるのは「天皇制」といふ言葉によつて、天皇さまの具体的なお心持を無視して、ただ形の上のみの、地位の上のみの天皇を、外から論ずることの結果なのである。天皇さまのお心を知らうとする努力なしに、天皇の地位を論ずることはできない。この、子供にもわかる道理を陰蔽いんぺいするためにできたのが、「天皇制」といふ言葉ではあるまいか。私にはそんなふうにはさへ思へる。（『広辞苑』第二版は①②を一緒にし③を削つてゐる）

ここで一旦前にもどる。「甘え」の構造の筆者は、「依存度からすれば天皇はまさに赤ん坊と同じ状態でありながら、身分からすれば日本最高であるという」判断をくだしたことは、「天皇制」を独裁的政治体制とした『広辞苑』②の判断よりは、まじだとしても、正しい判断とは言へない。それは、何よりも天皇のお心そのものにふれるところが無いからである。天皇と国民との信頼関係は「甘

え」といふやうな「幼児的依存」関係ではない。具体的には天皇さまの「捨身」の御努力あつてはじめて実現されてきたことは、歴史上に幾多の例があるし、終戦時の天皇さまの御歌、おことば、御行為によつて立証されるではないか。

「甘え」の論者が新憲法の象徴天皇論を無批判に受け入れたのも、外からの「天皇制」だけを問題にして、内から具体的に天皇さまのお心を仰ぐことを怠つた結果なのである。「象徴」といふことばが「シンボル」の訳語にすぎないことは、いまでは誰でも知つてゐる。天皇の地位を英語の「シンボル」といふ言葉であらはしたのである。「シンボル」といふ言葉はイギリス国王のクラウン（王冠）の説明としてはよいとしても、日本天皇の説明としては適當ではない。

憲法草案の起草者が「シンボル」の意味を問はれて、アメリカの国旗とか英国キングのクラウン（王冠）のことを語つたのは当然で、それは器物であるから成立するのである。しかし、天皇は生ける人格であつて、器物ではない。「三種の神器は皇位のシンボル象徴である」といふのならわかる。しかし現行憲法の「天皇は、日本国の象徴であり日本国民の統合の象徴であつて」といふ意味は、どうもよくわからない。それは、日本の国の歴史的事実にもとづいてあらはした言葉ではなくて、外国語を使つたからなのである。

いはゆる「明治憲法」は、明治天皇さまが国民の代表とも言ふことのできる重臣たちと長年月をかけて起草なされたもので、御歴代の天皇がたが政治を行はれた「統治の洪範」を「紹述」したものにほかならないと宣言なされた文章なのである。「統治」といふ言葉の背後には「治らす」といふ古語

があつたことが『憲法義解』に述べられてゐる。つまり、日本の歴史にもとづき日本語にもとづいて政治原理が表現されたのである。これが本当の「憲法」と言へよう。

『「甘え」の構造』の著者は、この明治憲法と新憲法とを一緒にして「甘え」のあらはれとし、それを「天皇制」と言ふのである。しかも前述のやうにその前提となる判断がまちがつてゐるのでは、二重三重のまちがひといふほかない。

どうしてかういふまちがひが出てくるかといふと、それは一に、天皇の心を知らうとする努力が無
いとところからくるのである。

天皇の心を知るには、いろいろの道があらうが、その近道が、天皇さまのお歌を読むことであること
とを、私は改めて強調したいと思ふ。多くの青年諸君が、御製を読んではじめて天皇さまのお心にふ
れることができた、感激して語つてゐる。さういふ文章がいくつもある。

三

さて、「天皇制」についての問題で、前置きが長くなつてしまつたが、天皇さまの国際的御交際に
ついでに御歌について述べたいと思ふ。

現行憲法では、「天皇はこの憲法の定める国事に関する行為のみを行い、国政に関する権能を有し
ない」（日本国憲法第四条）とあつて、天皇はロボットのやうに見られやすいが、その天皇さまが国際
親善のためにどんなに御努力になつていらつしやるか、さういふお歌が数多くあるのである。

フォード大統領が訪日して、天皇にお会いして深い感激を味はれたといふことは、当時の大統領の談話として報道されたところである。昭和四十九年秋のことでも記憶にあざやかである。また五十年の新年に発表された天皇御歌の中に次の一首があつて、天皇さまの深いお心持が表現されてゐるのを拝したことであつた。

米国大統領の初の訪日

大統領は冬晴のあしたに立ちましぬむつみかはせしいく日を経て

平凡なお言葉づかひで何の奇もないが、「大統領は」と第一句七音字余りにずばりと述べられ、「冬晴のあしたに」とこれも字余り九音で助詞の省略を行なふことなく心こめて述べられ、第三句「立ちましぬ」とこれも敬語を使つてどつしりした句切れとしてをられる。倒置法で、あとの句に「むつみかはせし幾日を経て」と御親交の日々を憶念せられる。一言一言、まごころをこめてお話される陛下の誠実なお人柄そのものあらはれた名歌であると拝される。このお心が、外国の元首がたに通じないはずはない。陛下の「国事行為」は単に外形的なものではない。お心のこもつたものである。そのお心を示すのが、天皇さまのお歌なのである。

『あけぼの集』（天皇皇后両陛下御集）にはかういふお歌もある。

比国のガルシア大統領および夫人を迎へて（昭和三十三年）

外国のをさをむかへついきかひを水にながして語らはむとて

戦のいたでをうけし外国のをさをむかふるゆふぐれさむし

喜びて外国のをさかへるをば送るあしたは日もうららなり

戦争の責任を一身に負ふと占領軍司令官に申し出られた天皇さまにしてはじめて作りえたお歌であらう。第二首目の懐愴なまでの御心づかひのお歌と、第三首のはればれとしたお歌、——かういふお歌のどこに「甘え」があらうか。

かういふ御製を読むと天皇さまはいまも国の運命を一身に負うてはたらいていらつしやる、——さういふ実感が測々として迫るのである。

(『理想世界』昭和五十年九月号)

四

昭和五十年十月十六日の毎日新聞に、九月下旬に行はれた世論調査の結果が発表されてゐる。それによると、「皇室に対する気持」は「年代による差が大きく、二十歳未満、二十代では六割前後が無関心派、一方、五十代では約半数が尊敬派、六十歳以上ではそれが六五%となり、若い層とは対照的である」と書いてある。また「天皇制はずつとつづくと思うか」との質問に対して、「二十歳未満で

は『つづく』五二%に対し『変わる』四六%とほぼ二分される」と書いてある。九月下旬と言へば、天皇后陛下御訪米の直前であつて、例年よりも皇室に対する気持の高まつてゐてよいはずの時期であつたが、結果は、右のやうに、青年層の過半数が無関心派といふことである。

私は、世論調査の結果が世の中を動かすとは思はない。百人の無関心派よりも一人の信念の方が強いと思ふからである。しかし、青年層の過半数が、皇室に対して無関心であるといふ世論調査の結果は事実であらうし、この事実の意味をよく考へてみなければならぬと思ふ。ジャーナリズムにおける天皇制反対の風潮や天皇后陛下の訪米阻止の行動や、沖繩における皇太子殿下襲撃事件や、さらに、東アジア反日武装戦線・狼グループの天皇列車爆破計画（五〇・一〇・一五、一〇・二九朝日新聞記事）などは、この青年層の皇室に対する反感や天皇制反対の気分を背景にして行はれると見られるのである。

それでは、なぜ青年層の過半数もが五十歳代の両親とは違つて皇室に対して無関心であるか、あるいは天皇制の否定に傾いてゐるか、——といふ問題を考へてみよう。

一言でいへば、青少年を指導する教育者が天皇を否定するからであり、大新聞の論文などにさういふ論文が数多く掲載され、大学教授などにも共産主義に同調する人が多勢ゐて、青年層の思想を天皇制反対の方向に指導するからである。共産主義に同調しなくても、天皇を尊敬する考へを積極的に教へる大学教授は多くはあるまい。天皇に対する敬愛の感情を吐露するやうな新聞記事を書けば、さういふ記者はかへつて迫害されようといふものだ。それが証拠に国歌「君が代」を入学式とか卒業式に

齊唱する大学がいまだれくらゐあるだらうか。教校に限られるのではないか。高校でさへ「君が代」を歌ふには、それなりの教員の努力が必要なのであつて、大勢は歌はない方向に傾いてゐる。

昭和四十九年七月二日発表の日教組見解は次の通りである。

「君が代の歌詞は、戦前、天皇一家の繁栄をうたったもので、天皇制国家を発想させ、民主主義に適せず、従つて、民主主義国家の国民が歌うべき歌ではない。君が代を児童、生徒にうたわすことは憲法違反でもある。君が代を国民に強制することは憲法違反である」(七月三日読売新聞)

右の見解の中で、「児童、生徒」とあるのは、小・中・高校の児童生徒を対象としたものであつて、大学生についてはふれてゐない。これは日教組の組織が、小・中・高の教員の組織であるからにもよるが、大学では「君が代」を歌はないことになつてゐるといふ意味でもあらう。

つまり、日本の教育機関では、初等教育から高等教育に至るまで、天皇讚歌の「君が代」はまじめに歌はれてないとみてよい。歌ふ方が例外なのである。日教組では「憲法違反」であるとまで言つてゐる。その憲法の第一章が「天皇」であるのに。

日教組が「天皇」をどういふふうにか考へてゐるかは、右の見解ではつきりしてゐる。かういふ見解のもとに教育の行はれた結果が青年層の皇室に対する無関心の原因であり、天皇否定へとつづくのである。

「天皇制はつづくか」といふ質問をする前に「天皇制」とはどういふ意味かを質問してみなければならぬ。おそらく、前に指摘したやうに、「近代日本の絶対主義的政治機構」(「広辞苑」といふ答へ

がかへつてくるであらう。「天皇の独裁政治」と言ふのである。「日教組見解」の中の「天皇制国家」といふのも、明治時代の立憲政治を天皇の独裁政治とするのであらう。——こんなバカなことがあるか！ と私は思ふ。しかし、説明はしなければならぬ。

「絶対主義的政治機構」といふ「絶対主義」といふ言葉を同じ『広辞苑』で引いてみると、「君主に無制限の権力を付与し、国家は君主の一身に体现されているとする説。またかような政体（絶対君主政体）。この国家形態はヨーロッパ十七、八世紀に見られ、就中、ルイ十四世『朕は国家なり』の統治はその典型」と書いてある。私はルイ十四世の統治の精神も内容もよく知らないので、これを「絶対主義」といふ名称で呼ぶのが穩当であるかどうか、にはかに判断できないが、それが正しいとして、このフランスの絶対主義をもつて、日本の天皇統治の事実を解釈するのは、とんでもないあやまりであると言はなければならない。外国の帝王をもつて、ただちに日本天皇の本質とすることができないのと同じである。

日本天皇は英訳してエンペラーといふからと言って、英語のエンペラーの意味が、全く天皇にあてはまるとは言へない。共通の部分と相異なる部分とがある。日本の神カミをゴッドと訳し、カミ＝ゴッドとして、ゴッドの性質から日本の神カミを解釈するのは、認識の上の根本的なまちがひである。何でも欧米を主として、その概念を、日本に当てはめるのでは、日本文化の事実はわからなくなつてしまふ。欧米でもこのことに気がついて近來セマンティクス（意味論）といふ学問が起つて、言葉の意味を正確にして使用しようとする努力が払はれてゐる。「天皇制」といふ言葉が、「絶対主義的政治

「治機構」と解釈されるのは、このやうな研究方法上の根本的な過誤にもとづくものなのである。

明治天皇の統治としての明治時代の日本国家の政治は、その具体的歴史的事実のありのままの研究によつて解明されるべきであつて、「絶対主義」といふ欧米製の色眼鏡をもつて解釈してはならない。

「天皇制」が歴代天皇の政治といふ意味であるならば、それを知るには、歴代天皇の政治の具体的事実を研究しなければならない。

いはゆる明治憲法による天皇統治を天皇独裁の絶対主義と言ふ人は、明治天皇さまの御製をどう解積するのだらう。そこには、一首一首歌を詠よんでは自らのまことの姿を見つめられながら、一步一步、国と民とのために身を尽される求道のお姿が拝されるのみで、自己を絶対化するやうな高慢な自己顕示のお姿は露ほども見受けられないではないか。

その例は、といふことで、私は御製集を読み返してみたが、それは一首一首みなその例と言へさうで、特に何首かをとり出すことが出来なくなつてしまつたので、それは読者におまかせすることにし
たい。

ただここで、明治時代の文豪の一人徳富蘆花とくとみ りくわの文を引用しておきたい。これは浅野晃先生の文章の中から孫引きであるが、蘆花は、幸徳秋水の死刑に反対する演説を行つたが、その草稿の中で、かう書いてゐる。

「諸君、我々の脈管には自然に勤皇の血が流れてゐる。僕は天皇陛下が大好きである。『とこしへに民安かれと祈るなる吾代を守れ伊勢の大神』その誠は天に逼せまるといふべきもの。『取る棹さかの心長

くも漕ぎ寄せん蘆あしまの小舟さはりありとも』国家の元首として堅実の向上心は三十一文字に看取される。『あさみどり澄み渡りたる大空の広きをおのが心ともがな』実に立派な御心掛である。我等はこの天皇陛下を戴いてゐながら（云々）」と。

蘆花は、御製を通じて明治天皇さまのお心を仰いでゐたのである。「その誠は天に逼るといふべきもの」といふ言葉は、御製にこもるまごころに感激してしか出て来ない言葉であつて、蘆花の信念であつた。明治時代には、天皇と国民との一体感、国民の信念でもあつたから、「絶対主義的天皇制」などといふ考への入りこむ余地はなかつたのであるが、それにしても御製がその信念をささへてゐた一例としてあげたのである。

天皇に対して無関心であるとか否定的傾向にはしるといふのは、天皇のお人柄、お心持を知らないで、まちがつたことを教へられるからなのである。その人について知らないのでは、尊敬のしやうもあるまい。そこで、年輩の者は、天皇についての考へを若い世代に伝へることが大切であるが、同時に若い世代はまた天皇について知るやうに努力してほしいと思ふ。

私なども少年時代には啄木の歌を愛誦してセンチメンタルな感情にひたつてゐたので、御製の尊さがわからなくて苦勞をした。蘆花のやうに「天にも逼るまこと」を御製に感ずるには、それなりに心身の修養が必要であつた。

しかし、一旦、御製のまことにふれえたと思つた時の感動——それは自己執着の殻を破つて何かひろい天地に出て来たやうな感じでもあり、日本人として永遠のいのちにふれえた感じでもあつて、何

とも言へない感激を味ふことができたのである。それで、天皇さまのお心持を知ることができた、などと大それたことを言ふのではない。天皇さまのお心といふひろいひろい世界の一端にふれえたといふことであつて、さらに深くひろく天皇さまのお心に学びたいといふ気持である。そこで、御歴代の天皇さまのお人柄を知ることにつとめるとともに、そのお人柄の骨格となるお心持——そのお心持のあらはれであるお歌を読んで、少しでもお心を仰ぎまつらうと思つて勉強してゐるのである。

人のまごころにふれえたと思ふことは、この世に生きるよろこび——よろこびと言ひ切つてしまつては言ひ足りない——かなしいやうな、ありがたいと思ふ、一種の安心である。さういふ気持を、私は、御製を拝誦して感じるのである。

これは、一種の「さとり」とも言へる心情だとも思ふが、私ひとりがそんな体験をしたのではない。現代の若い人々も同じ体験をしてゐるのである。国民文化研究会の「合宿教室」の感想文集に、天皇の御歌に目が開かれたといふよろこびの声がみちみちてゐる。

四 天皇御歌の歌碑

既に述べたやうに、今上天皇のお歌が、五百首近くも発表されてゐることは、前例のないことで、まことにありがたいが、御製の歌碑が、私の知る限りでも、数十基も建てられてゐる、これも前例のないありがたいことである。これは、戦災地御慰問の巡礼行からはじまる陛下の全国御巡幸、それにおこたへする一般民衆の御製讃仰、天皇敬慕の心持のあらはれである。全国各地に、——立山に、雲仙に、濤沸湖畔とうふいに、最上川河口・酒田市の公園に、水戸駅頭に、等々——陛下のお訪ねになられたまはさまの土地に、御製の歌碑の立つてゐることを思ふと、日本なほほろびずと心がゆたかになり力づけられるのである。

そのうちのいくつかについて解説する。

一 千鳥ヶ淵戦没者墓苑の御製歌碑

戦死者の慰霊のためにわれわれは靖国神社に参拝にゆくので、東京・九段の千鳥ヶ淵戦没者墓苑をおとづれる人は少ない。そこに御製の歌碑のあることを知る人はごく少いだらう。靖国神社の国家護

持について全国民の同意が得られないために、外国風に、無名戦士の墓が建てられ、昭和三十四年、天皇皇后両陛下御臨席のもとに追悼式が行はれたのである。今は毎年八月十五日に政府主催の追悼式が行はれてゐる、そのもとの形であつたのであらう。

御製は、「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」と題された次のお歌である。

くのためにのちささげしひとくのことをおもへばむねせまりくる

書は「雍仁親王妃勢津子謹書」とある。秩父宮妃殿下勢津子さまの書である。

今上天皇の御製には、皇室御一家の方々についてお詠みになつたお歌が数多く拝されるが、今上天皇のすぐの弟宮である秩父宮さまを哀惜なさつた痛切なお歌が何首もある。秩父宮さまは戦後、昭和二十八年になくなられたので、戦病死とは申上げられないであらうが、その御生涯は、時代の苦難を背負はれてのそれであつたにちがひない。秩父宮さまの妃殿下がこの御製を書かれたにはこのやうな意味があるかと拝察される。

「国のためのちささげ」ようとして、つとめられたのは陛下御自身であり、陛下の御兄弟の宮さまがたであり、皇室御一家であり、全国民であつたのである。陛下だけが安全な地点から戦争を命令したのではない。皇室はあげて国民とともに戦争を戦はれたのである。だからこそ陛下は一身を捧げて戦争の責任をおとりになつたのである。それは終戦前後の御行動・御言葉・御製によつて既に周知の通りである。「むねせまりくる」の御言葉は、陛下の御命令のもとに陛下とともに戦つていのちを捧

げた戦死者に対する無量のお心持の表現なのである。「むねせまりくる」の語で終るお歌に次の御製がある。(御製の表記は『あけぼの集』に拠る)

八月十五日那須にて(昭和三十年)

夢さめて旅寝の床に十とせてふむかし思へばむねせまりくる

日本遺族会創立十五周年(昭和三十七年)

年あまたへにけるけふものこされしうから思へばむねせまりくる

稚内公園(昭和四十三年)

樺太に命をすてしたをやめのころを思へばむねせまりくる

「むねせまりくる」のお言葉は、戦死者憶念のお心の直接表現で、陛下の涙をこらへた、ま心のお声なのである。今年の全国戦没者追悼式の「天皇陛下のおことば」にも、「終戦以来ここに三十年、さきの大戦において戦陣に散り、戦禍にたおれた数多くの人々とその遺族の上を思い、今もなお、胸のいたむを覚える」とあつた。陛下のお言葉にいつはりはない。文字通り、「胸」が「いたむ」のであり、「むねせまりくる」のである。なほ、「むねせまりくる」といふ言葉は、他には「佐渡の宿」と題する御製に、「いにしへ思へば胸せまりくる」と使はれてゐる一首のほか見当たらないから、約五百首のうち五首に使はれてゐて、その中の四首が戦死者追悼に関係のあるお歌であるといふことにな

る。このことは、追悼のお心がどれほどお深くあられるかをうかがひ知るたよりになる。

なほ墓苑の歌碑の御製は、大分県護国神社境内にも「大分県戦没者慰霊碑」（侍従入江相政謹書）として、建てられてゐる。

靖国神社については次のお歌のあることを忘れてはならない。

靖国神社九十年祭（昭和三十四年）

このそちへたる宮居の神々の国にささげしいさをぞおもふ

戦死者祭祀追悼の陛下のお心に、戦前戦中戦後、いささかのゆるびもあらせられないのである。

二 「相撲」の御製の歌碑

東京では、前述の歌碑のほかに蔵前国技館に「相撲」の御製の歌碑がある。当時の「宮内庁長官宇佐美毅謹書」とあつて、次の通りに記されてゐる。

ひさしくもみざりしすまひひとくくと手をたたきつゝ見るがたのしさ

歌碑建設の由来については「昭和三十一年九（？）月十五日・大麻唯男謹識」として次のやうに記されてゐる。

「昭和三十年五月 天皇陛下親しく蔵前国技館に行幸はじめて国民と共に本場所を観覧あらせられ

た 陛下は終戦時国民を想い「五内ごない為ニ裂ク」と仰せられた 又日常国民の上に御心の安まる間とでもない 然るに御観覧中は椅子を進められ拍手を送られ大衆も之に和するという光景を現出したのであつた 天皇が一般国民と一つになつて我國の国技たる相撲を御覧になつた和やかな情景は戦前には見られないことであつた 陛下がかくもお喜びになつたことが新聞ラジオテレビジョンによつて伝えられるや国民全体はまた心の底から喜んだのである

これは其時の御製であつて翌年正月初めて発表されたものである

我国相撲道の發展興隆期して待つべく大日本相撲協会の光榮まことに大なりと言ふべきである」

(原文正漢字使用)

この文章が要を尽してゐるが、当時はいまから二十年前で、戦争が終つてから十年目、国民の暮しもやつと落ち着きかけてきた頃であつた。お歌に「久しくも見ざりしすまひ」と述べられて、戦前に御覧になられてから戦中戦後の十数年間長らく御覧になれなかつたことを述べられ、「ひとびとと手をたたきつつ見るがたのしさ」と民衆と一体になつて御覧になれるお喜びをおうたひになつたのである。

明治天皇の御製に、

楽 (明治四十三年の御製)

千万ちよろの民と共にまたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ

といふ、まことにありがたいお歌があるが、今上陛下の「相撲」のお歌は、明治天皇さまのお心がそのまま具体化されたお歌と拝される。「ひとびととともに」「民とともに」といふお言葉は、今上陛下のお歌にみちみちてゐる。大乘仏教の根本精神は日本の皇室のお心に融化ゆうくわされてゐるのである。

三 立山御歌碑たてやま

御製歌碑は、前の二つの歌碑のやうに人の行きやすい場所に立つてゐるばかりではない。高い山の峯や人里はなれた湖の畔ほとりなど、大自然の中にも、建てられてゐるのである。

そのひとつ、立山の三ノ越の歌碑は、東宮時代の御歌の歌碑であつて、言はば今上陛下のお歌の最初の歌碑であらう。大正十四年の新年歌会始に御披露なされた「山色連天」の御歌である。

立山のそらにそひゆるををしさにならへとぞ思ふみ代のすかたも

十年ほどまへ立山三ノ越でこの御歌碑を見た感激はいまに忘れがたい。文字は風化して読みにくくなつてゐたが、ちやうど雲間からさす日の光で文字が浮き出て来て、何か、かう、立山そのものがこの御歌をうたつてゐるのではないかといふ感じさへした。

御歌は、今上陛下の二十五歳、摂政宮の時のお歌である。「み代」(御代)と述べられたのは、父天皇の御治世であるといふ御自覚によるお言葉づかひと拝される。立山のやうに「をしく」あれと、時代のゆくてにのぞみをかけられた、さはやかな「をし」い、若々しいお歌である。

歌碑の由来については特に広瀬誠氏の文章があるが、当時の富山県の人々が感激してこの建碑の難工事をしとげられたことが知られる。昭和二年五月除幕、書は当時の入江（為守）東宮侍従長とのことである。入江為守といふ人は御歌所の長をもなされた方で、恐らく当時、今上天皇さまのお歌について御指導申上げてをられたのであらうと思ふ。

この歌碑は、前述の通り、立山三ノ越の絶壁の上に、後立山連峰を前にして、きびしい風雪にさらされてゐる、そのために風化が早く、碑の文字がうすれて読みにくくなつてゐる。それで昭和三十三年、富山市郊外の呉羽山に同じ御歌の歌碑が建設された。現侍従長入江相政（いりえすけまさ）氏の書になる碑である。

四 最上川御歌歌碑

立山のお歌の翌年、大正十五年、今上陛下御年二十六歳、摂政宮の時代のお歌は、「河水清」といふ勅題の、次の御歌である。

広き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

このお歌は自然をお詠みになつたお歌であるけれども、前のお歌と同じやうに、広野を流れて濁らない最上川のやうに生きるべきことを教へられるお歌である。自然のいのちを人生の道として作者は心にすべをさめられたのである。単なる写生ではなく、自然・人生をひとつのものとすゝる真実の体験の表現——真の写生のお歌である。明治天皇の御製に次のお歌があつて、あはせて拝誦するとお歌の

意味もよくわかる。

水

山川のながれはすゑになりぬれどにごらぬ水はにごらざりけり
 (明治三十九年)

みなもとは清くすめるを濁江におちいる水のをしくもあるかな
 (明治四十三年)

さて、最上川のお歌も、立山のお歌の歌碑と同じく「東宮侍従長入江為守謹書」で、酒田市日和山公園に、最上川河口をのぞんで、建てられてゐる。立山歌碑とともに東宮御歌の歌碑の双壁である。もつとも御歌歌碑はこの二碑で、あとはすべて御製碑で、戦後の建設によるものである。

五 雲仙御製碑

立山の御歌碑について述べれば雲仙野岳の御製碑をもらすわけにはゆかない。素淮(S・Y)すなはち吉田茂の書である。吉田茂首相については追悼の御製と皇后御歌とがあつて、両陛下の御信頼のほどがしのばれるが、その人の書である。御製は昭和二十四年の御作。

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

六 水戸駅前御製碑その他

御製（昭和二十二年「あけぼの」）

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて

「徳川圀順謹書」とある。建碑は昭和三十三年。戦後の復興を象徴するお歌で、天皇皇后両陛下御金婚記念御集『あけぼの集』はこの御題「あけぼの」からとられたとのことである。大正十年、今上陛下の東宮時代の最初の御歌「社頭暁」、

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

とあはせて拝誦して、時代のうつりゆきを思ふと、感慨一層深いものがある。

横浜市の復興をおよろこびになられた御製の碑は、水戸の碑と同じ動機で建てられたのであらう。御製は昭和三十年の御作。

浦島ヶ丘に立ちて

いくさのあといたましと見し横浜は今はうれしくたちなほりたり

戦災地の復興をおよろこびになられた御製はこのほかにも数多くある。

なほ次に私の知つてゐる御製碑（未見のものを含めて）の名前だけあげる。日本全国にかういふ御製碑のあることを思ひうかべると心がにぎはしくなるのである。

○益子窯業指導所歌碑 ○氷見市朝日山公園・行幸啓記念歌碑 ○北海道瀾沸湖畔歌碑 ○吉田フ
 スナー黒部工場歌碑 ○富山県ルンビニ園歌碑 ○兵庫県洲本三熊山月見台歌碑 ○神戸港万国波止
 場歌碑 ○会津若松市赤井谷地歌碑 ○いわき市湯本駅前歌碑 ○萩市笠山歌碑 ○頼成山植樹祭御
 製碑 ○富山県水芭蕉御製碑 ○礪波野御製碑 ○熊野那智滝御製碑 ○山形県上山歌碑 ○層雲峽
 御製碑

最後の上山御製歌碑は、今年の冬たづねようとして遂に果せなかつた。雪のつもつた斎藤茂吉記念館からはるかに遠くにのぞむ山麓を指さされてはあきらめるほかなかつたが、いつかまた折を見て行つてみたいと思つてゐる。なほ『今上陛下御製集』の謹編者青山新太郎氏のおたよりで、四十九年、東京の読売ランドと岡山県とに御製碑の建つたことを知らせていただいたが、まだ拝見できないでゐる。

五 北海道・濤沸湖畔の御製碑

今年は昭和五十年といふので、お祝ひの行事などもあるが、今上天皇さまのお歌についての関心が特に深まったといふ話は聞かない。私は、御治世五十年も未曾有のことだが、御在世中五百首の御製の公表も未曾有の盛事であると、声を大にして言ふが、ジャーナリズムでは耳を貸してくれる人も少ないやうだ。今上天皇は、御製集に『みやまきりしま』と『あけぼの集』といふ二冊の歌集があり、新聞等の発表から民間で集めた御製集のお歌をあはせると、全部で約五百首になるのである。これは、私は、未曾有の盛事と申し上げたい、と言ふのである。

次に、御製の歌碑といふものがあつて、全国で数十基になる。これもあまり知られてゐないが、未曾有のことなのである。

その中で、濤沸湖畔・原生花園に御製碑のあることは、友人に知らせてもらつてゐたので、前から知つてゐた。次のお歌である。

湖の面うみにうつりて小草せむぎ喰む牛のすがたのうごくともなし

昭和二十九年のお歌である。泰西名画を見るやうな、実に印象の鮮明なお歌であつて、見たままに表現されてゐることがそれだけ無心な作者の清らかな心を感じさせる——、さういつたお歌と思はれる。このお歌は私の心に焼きついてゐたので、北海道旅行の道すがら心の中でくりかへして誦詠した、——できるならば是非この御製歌碑を観たいと思ひながら。さうしてゐるうちに、このお歌の魅力は単に印象が鮮明であるといふことだけにあるのではないといふことに気がついた。

牛の姿が、そつくりそのまま静かな湖面に影を落してゐる——そこに何とも言へない味ひがある。実際の牛の姿と、その影とが、ひとつになつて、作者の眼にうつつてゐる。物とのかげとが相応じてゐる——そこに作者の安心があつて作者の心は、その光景に無心に吸ひこまれていつたのである。かう思はれた。

さうすると、御製にはほかにもかういふ御製のあることが思ひ出された。

河口湖の宿（昭和三十二年）

みづうみにともしびうかび打上げの花火はひらく山の夜空に

湖面にうつる灯火のかげと、夜空にひらく花火の光とが、相応じてゐるのである。この御製を思ひ出した時、私の心に「感応相称」といふ聖徳太子のお言葉が響きわたつた。

聖徳太子の言はれるのは、仏さまは衆生の感ずる心に応じて教へを説かれるので道が実現される、仏の心と衆生の心とが相通ふところに人生の眞実は実現される、——かう言はれる。

仏説法の「時」とは、「感應相称」の「時」を言ふのであると解釈なさる。これは、人間の心と心とが一致した「時」を、人生の理想とするといふことである。人心の和合が人生のよろこびであるとは、われわれが虚心に己れをふり返つてみればわかることだが、太子は、その心の通ひあひを人生の理想の実現された「時」とされたのである。「感應相称」とは「和」といふことであらう。

次のお歌は、さうした折のおよろこびを表現されたお歌である。

ともしび(昭和三十二年)

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

「港まつり光りかがやく夜の舟」とは、天皇さまをお迎へする民衆の歓迎のあらはれである。その民の心に「こたへてわれもともしびをふる」とうたはれるそのお心に、お歌を読むものは感動するのである。

私の思ひは、さらに、自然と人心との感應、死せる人の魂と生ける人の憶念との感應から永久の精神世界といった心の世界にひろがつてゆくのであつた。

「うつる」といふ日本語よ!

明治天皇さまのお歌に、かういふお歌がある。

国のためのちをすてしものふの魂や鏡にいまうつらむ

靖国神社におまつりする神々は「国のためのちをすてしものふの魂」であるが、いまあらたにまつられる戦死者のみたまが「鏡にうつる」といふお歌と拝せられる。このことの意味がよくわからなかつたが、感応相称といふ信の世界のことを思へば、天皇さまのお氣持の深さに目をひらかせられる。魂があるかないか、客観的に証明しようと考へれば、あるかないかわからないものが鏡にうつるとは、ありえないことである。しかし、戦死者を心から思ふ氣持には、みたまはなつかしい日本に帰つて来て、靖国神社の御神体であるお鏡のくもりがない鏡面にうつるのである。そしてそのみたまは、鏡として、なつかしみをろがむ心に永久にのぞむのである。

「凱旋の時」といふ、やはり明治天皇さまのお歌で、

外国にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらし。(む——官内省発行『御集』)

といふお歌を読むと、戦死者の靈を信じてをられた明治天皇さまのお心がうかがはれる。明治天皇さまには、さう見えたのである。それをわれわれが見ることができないと言つて、このお歌の眞実を疑つてはならないのである。戦死者の靈は明治天皇さまのお心の世界に生きてゐるのであつて、戦死者をいたむことのない心に生きるのではない。

副島蒼海は、かう言つてゐる。

「無神論といふことを、理屈から言へば、随分、色々と説もあらうけれども情愛から論じて言ふと、無神論といへば、君父が死なれば、其霊も亦消えて無くなつてしまふといふことになる。しかし、消えてしまふといふことは、あまり惨憺な談である、果して然らば惻隱の心、何いくにあるか、万々一君父の霊が消えてしまふにもせよ、尚なほ在りはせぬかと思ふが、是れが、臣子たるもの君父を思ふ誠である」と。

これは戦死した百武礼之君が、署名して扉に「天皇陛下万歳」と書き遺してくれた蒼海先生講話『精神教育』といふ書物の中の一節である。

「情愛から論じて言ふ」といふ言葉が、何ともあたたかい言葉である。人生はこの情愛で動いてゐるのではないか！

こんなことを考へながら旅行をつづけてゐると、たまたまテレビのニュースで留萌沖三船遭難三十周年追悼会が放映され、その模様を見聞きした。樺太から脱出した婦女子を満載した三艘の船が北海道の留萌港に到着する寸前、国籍不明の艦船の砲撃を受けて、海岸で人々の見てゐる前で、沈没して、多くの人命が喪うしなはれた事件である。遺族たちが中心になつて涙ながらに弔ひの行事をする姿が放映されたのである。

中で、特に私のはげしく心を打たれたのは、ある父親が喪つた二人の子どもに呼びかけて花束を海に投げ入れてゐる姿であつた、なかんづくそのコトバであつた。

——○○ちゃん！　○○ちゃん！　お父さんがあひに来ましたヨ！　もうちきお父さんも行きますから、待つてゐてくださいよ——。

お父さんが来ましたよ！——　何といふかなしいコトバだらう。私は人中であつたが目がしらのうむのをとめることができなかつた。さうして、その時、ハッキリとわかつた。あの子たちの魂は、父親の心の中に生きてゐるのだ。三十年生きつづけて来たのだ。死ぬまで生きつづけるのだ。さうして、そのお父さんが死ぬとき、お父さんの魂は子どもさんたちの魂のゐるところに行くのだ！

死んだ人の魂は、死んだ人をしたふ人の心の中に、生きつづけるのだといふことが、よくわかつたのである。

戦死者の魂は、明治天皇さまのお心の中に生きてゐるのである。戦死者をおもはない人の心の中には生きてゐないのである。精神の世界とは、感応相称の世界である。本居宣長が「感ずべきことに当りて感ずる」と言つたのも、このことだと思はれる。「感ずる」ことなしに、「感ずべきこと」を論ずることはできないといふことである。

さて、このやうに、今上天皇の一首の御製を中心にして、精神の世界といふものに心をはせながら、幾日かの旅行のはてに、網走の原生花園にたどりついた私は、早速、この御製碑をさがして、その前に立つた。

霧雨が降つて、御製歌碑の前に立つ人もなかつたので、かへつてひとりしづかに情景を味ふことができた。九月四日のことである。

御製碑は雨に濡れて砂丘の上に立つてゐた。すぐそばには咲きのこつたはまなすの紅の花が雨に濡れて色あざやかに見えた。御製碑の背後の砂丘の向うにはオホーツクの海がひらけてゐた。雨が降つてゐるせるか、海はいちめんきさ波が立つてしろじろと見え、孤を描いてつらなる水平線の上には、雨雲が低く垂れてくらしい空だつた。御製碑の前面は、道路をへだてて、濤沸湖で、御製碑にあるやうな牛は、雨のせるか、湖畔には見えなかつた。湖面にうつる牛は見えなかつたが、湖畔の木々は、鏡のやうな湖面に美しいみどりの影を映してゐた。

帰りのバスの中で、ガイドさんが説明してくれたが、濤沸湖は水深が浅いために、もののかげがよくうつるといふことであつた。さうすると御製は、濤沸湖でなくてはできないお歌といふことになつた。濤沸湖の性質まで見抜かれたうへでのお歌かと思はれて、無私の心といふものが、どれほど深い洞察力をもつものかと、また改めて、お心の深さが仰がれたことであつた。

〔「国民同胞」五十年十一月号〕

六 天皇后兩陛下御集『あけぼの集』について

表題の歌集——御製御歌集を入手したのが昭和四十九年四月二十九日、天皇誕生日のよき日であった。天皇御在世中の歌集の御刊行といふことは、史上さう例の多いことではあるまい。うれふべき世態ながら、よき日よきことの意味をありがたくかみしめたことであつた。

今上陛下にはすでに『みやまきりしま』といふ御製集がある。これには編纂の経緯が一切記されてゐないので、はつきりしたことはわからないが、ただ巻首冒頭の御製が母宮さま「貞明皇后をしのぶ・二首」の歌であることからその意味をこめての御製集であらうかと推察申上げたのであつた、それはそれでありがたいことであつたが、御製の御発表といふ点では、その二首以外の御製はほとんど新聞紙上などに発表された御製の再録であつた、そのために未発表の御製を数多く拝誦するといふ感激にはめぐまれなかつた。

発表された御製については、広瀬誠氏と青山新太郎氏とが丹念に集録をつづけてをられ、青山氏の頒布してこられた、『今上陛下御製集』（非売品）は発表御製の集成であるが、公刊の御歌集とは異なるし、また多くの人の目にふれがたいものであるから、今上陛下にたくさんのお歌があることを知る

人は少いだらう。

今回の御製御歌集——天皇陛下のお歌を「御製」と言ひ皇后陛下のお歌を「御歌」といふのが正式の言ひ方である——は、『みやまきりしま』とは違つて、未発表の御製御歌が数多く集録されてゐる。またその経緯が木俣修氏の「編纂の記」として記されてゐるのである。私は感動にふるへる心で、入手したその日に、歌集を通読し、それから日々数首づつ拝誦をつづけ、約二ヶ月かかつて全部を了へた。それからまた折にふれては読み返し朗誦してあらたな感動を得てゐるので、こまかく論ずるにはまだ未熟な感想であるが、それを記しておくことにしたのである。

この御集は新聞広告では両陛下の金婚式を記念して刊行されるといふおもむきであつた。それは「編纂の記」によると今上陛下の古稀（昭和四十五年四月二十九日）を記念して、その御祝ひに御製御歌集の刊行が企画された、しかしいろいろな困難のために延引して、御外遊（昭和四十六年）中の御詠ぎよえいをもふくめての御作品集にするといふことになり、「昭和四十八年の夏ごろから印刷の段階に入ったのである」といふ。「かくして、ここに本集は昭和四十九年一月二十六日の両陛下御金婚を記念して刊行されることになった」とある。したがつて、昭和四十四年の夏ごろから昭和四十八年夏にかけての四年間が編纂に費やされてゐるわけである。編纂にたづさはつた方々の御苦心がしのばれるが、それは発表すみの御製をすべてそのまま歌集としたこれまでの御製集とは異なるものだからである。

「編纂の記」の中には重要な一文がある。

「未発表の御製作はおびただしい数にのほっているが、それらを全部収録することは不可能なの

で、その中から撰をしなければならなかった」

この「御製作」の意味は、御製御歌の意味である。皇后陛下の御歌については、まだ御歌集もなく、恒例の御歌の発表以外にはほとんど御歌の発表は行はれてゐないので、未発表の御製作が、「おびただしい数」であることについてはすぐに納得がいったが、この意味は御製についても該当するのであらうから、今上陛下は当時発表ずみの御製概数三百六十首以外に「おびただしい数」の未発表の御製をおつくりになつた意味になるのである。このことはわれわれの初めてうけたまはることで、当然さう推察申上げるべきことであつたとは言ひながら、ありがたいことに思はれる。

現在、今上陛下のお歌は新年歌会始に一首と、新年元日の新聞紙上に数首が発表される。皇后陛下についても同じである。それ以外には何かの行事の折に発表されることがあるが、数としてはごく少い。皇后陛下の「やつがしら絵巻」の四十首を拝見できたといふやうなことは、異例なことである。

そのうへ、大新聞各紙は、年末に宮内庁から発表される数首の中の一、二首を元日の新聞の皇室記事に発表するにすぎない。全然発表しない新聞もある。私などは主として広瀬誠氏のたゆまざる御努力による「元日御発表の御製を拝誦して」といふ文章によつて、やうやく当年発表の御製すべてを知ることができるのである。毎年数首の御製であるが、そのすべてを知ることが、マスコミによつてはほとんどできない状況なのである。そこで世の多くは「未発表の御製作はおびただしい数にのぼつてゐる」といふ一文にさしたる注意を払はないであらう。しかしこの一文は、毎年発表の数首の御製の背後に「おびただしい数の未発表の御製作」があつたといふことである。つまり、一言で申上げれば、

今上天皇が「しきしまのみち」の修業を怠らず精力的におつづけになつてをられるといふことが、歌の数の上からも明らかだといふことなのである。

さて前おきが長くなつてしまつたが、御歌集の内容に入らう。まづ未発表の、「古稀」の御歌、——「七十歳になりて四首」は現在の陛下の御心境をさながらにしのばしめられる御歌であつて、誰しも深い感動をおぼえるにちがひない。

七十歳になりて 四首（昭和四十五年）

七十の祝ひをうけてかへりみればただおもはゆく思ほゆるのみ

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

ななそちになりしけふなほ忘れえぬいとせ前のとつ国のたび

第一首の「ただおもはゆく思ほゆるのみ」といふお言葉の、ゆたかなそして深い、痛切なお心のこもつたしらべ。「ををしい」とはかういふみしらべを評することばであらう。第二首目、「むかへたりけるこの朝も」といふお言葉づかひ——七十を迎へられたことを深くお心にかみしめられる御感動は、ただ単に「むかへし朝」「むかへたる朝」とおつしやらずに「むかへたりける朝」といふ御表現

に仰がれる。そして「朝も」と日々の御いのりの暗示せられる自然の御言葉づかひ、「祈るはただに国のたひらぎ」と強く言ひ切りたまふ——。第三首目、「よろこびもかなしきも民と共にして」といふ、お言葉づかひの、単純な、それでゐて限りなく深い意味——終戦の詔書に「朕ハ……常ニ爾臣民ト共ニ在リ」とおつしやられたお言葉が心にかんでくる。第四首目、「いとせ」は五十年の意味である。「六十の賀・三首」の御製にも同じおもむきの歌がある。

六十の賀 三首（昭和三十六年）

ゆかりよりむそぢの祝ひうけたれどわれかへりみて恥多きかな

還暦の祝ひのをりも病あつく成子のすがた見えすかなしも

むそとせをふりかへりみて思ひでのひとしほ深きヨーロッパの旅

第二首目のお歌の中に「成子」とあるのは東久邇成子さまのことである。「皇室年譜」（共同通信刊『皇室二十年』）によると昭和三十六年五月七日「皇后陛下のご主催で、天皇陛下の還暦祝い開かれる」とある。御製はこの折のことであらう。そして同じ「年譜」には、七月二十三日の項に「東久邇成子さん死去、三十五歳。両陛下、ご臨終まで旧宮内庁病院で徹夜のご看病」とある。成子さまとは昭宮さまと申上げた御長女さまである。第三女和子内親王さまの御夫君は死去なさった。第四女池田厚子さまは同じ「年譜」によると「敗血症」で数年間御病床にあられ、後、御快癒なさったが御病氣中の

御心配の御製御歌が数多く拝される。弟宮の秩父宮さまについても御哀惜の御製が何首も拝される。動乱の時代の痛苦は陛下の御一家とも申上げるべき皇室内に及んで、父として、兄として、子としての御感情が率直に表現されてゐてそこにわれわれ国民ひとりひとりの家庭感情とかはらぬ御情愛を拝するのである。「よろこびも悲しみも民と共にして」といふ御言葉の中には、もちろん国全体の運命を荷ふ意味の強いことは言ふまでもないが、かうした民衆の家庭感情の悲喜哀歎とひとしき思ひを、動乱の時代の運命の中にお味ひになられたことがかうした御歌にうかがはれるのである。そしてその御心が戦争遺族のうへによせられるお心の深さとひとつのお心であることが知られる。

遺族のうへを思ひて 二首（昭和三十七年）

忘れめや戦の庭いづまにたふれしは暮しささへしをのこなりしを

国のためたふれし人の魂たまをしもつねなぐさめよあかるく生きて

私的な家庭感情が否定されずに国民全体のうへにおしおよぼされる——聖徳太子のおほせられた「自他の二境をひとしくす」とはかういふことであつたのか！

右に引用した御製は同じ題の下に四首、三首、二首とあつて、連作の御歌と思はれる。あるいは、もつと沢山のお歌があつて、その中から編纂者がお撰び申上げたのかも知れないが、それにしてもこれより数が多かつたわけであるから、連作の御歌があることはたしかで、注意すべきことである。

皇后陛下の御歌については「やつがしら」の連作四十首を拝見した感激を書いたので、いまここには改めて述べないが、次の御歌を拝誦して私は肅然とした。

折にふれて二首（昭和四十四年）

つぎつぎにおこる禍まがごとをいかにせむ慰めまつらむ言の葉もなし

みこころを悩ますことのみ多くしてわが言の葉もつきはてにけり

「なぐさめま、つらむ」「みこころ」はいづれも天皇陛下についての敬語であつて、昭和四十四年の御歌である。同年の御製の中にこの御歌に対応する御製は見当らない。それは恐らく発表がさしひかへられてゐるのであらう。昭和四十四年は、いはゆる東大全共闘が安田講堂を占拠した事件の年である。あるいはそのことを悲しまれたのではないかと思ふが、それは私の推測の域を出ない。

皇后陛下の御歌の中で天皇陛下をお詠みになられた歌は、とりわけ感銘深く誦せられた。国家と国民のうへにお心をそそがれる天皇陛下と天皇をおたすけする皇后陛下の御心づかひと。

なほこの御集には、終戦時の御製としてわれわれの心肝に徹せしめられた次の三首の御製は掲げられてゐない。

爆撃にたおれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

その他、終戦直後の「戦災地視察」三首は、本歌集に一首、「帝室林野局移管」四首が一首となつてゐる等、未発表の歌を数多く掲載するために既に発表せられた御製が割愛されてゐる。そのために、発表された御歌の出典について疑問を持たれる方があるかも知れないが、それらは発表当時のものがそのまま前記青山氏謹編の『今上陛下御製集』にあるのである。なほ「終戦時の御製」三首は、木下道雄先生の『宮中見聞録』（昭和四十三年一月一日発行）に拠るものであつて、私どもは木下先生から直接おうかがひました。

われわれの生きてゐる時代と同時代の天皇さま——つまり今上陛下の御製を拝誦することのできることは私の最大のよろこびである。そしてこれは「私どもの」と言つてまちがひのないことだと思ふ。御製御歌集の刊行せられたことは本当にありがたいことであつた。今上陛下の深い深いお心をなぐさめまつることなど何ひとつできない、この己れの無力をかへりみてはかなしみにたへないが、ただこのよろこびを記して、御集御刊行をことほぎ申上げたい。

七 天皇御歌と皇后御歌

一 神宮御参拝の御製と御歌

御製 十一月八日内宮にまゐりて

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

皇后陛下御歌

おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

この御製と御歌とは、昭和四十九年十一月八日、遷宮後の神宮に親しく御参拝あらせられた折の兩陛下のお歌であることは申上げるまでもない。しかし、この二首のお歌を二首とも元日紙上に掲げた中央の大新聞は一社も無かつたのである。皇后陛下の御歌を掲載しながら、御歌と相応する御製を掲げなかつた新聞は、いつたいどういふ考へなのか、お歌の意味がわかつたのかどうかとさへ疑はれ

る。それで果して報道の任務が果されるのだらうか。

私どもは、例年、元日新聞誌上に発表される御製御歌を拝誦するのを楽しみにしてゐるものであるが、——そして、毎年のことながら大新聞の御製御歌の扱ひぶりに落胆してゐるが——、今年元日の大新聞が、ほとんど各紙とも、この二首を無視したことほど、現代のジャーナリズムの性格を暴露したことは少いと思ふ。

つまり、現代の大新聞——流行のジャーナリズムは、和歌とも神宮とも、ともに縁が薄いのである。

私どもは友人の助けをかりて、毎年、元日新聞発表の御製御歌を全部拝誦することを努めてゐるの
で、見落しはないと思ふが、今年の神宮御参拝の二首ほど、天皇・皇后両陛下御一緒に同じ折のこ
を、お心があひ応ずるやうに、お詠みになられたお歌が、しかも同時に発表されたことは無かつたか
と思ふ。

「そらみつ倭の国は 皇神の厳しき国 言霊の幸はふ国」（万葉集）といふ、日本の国の国がらがその
まま表現されたのが御製であり、その御製に相応ずるやうに「みともして」と歌はれたのが皇后さま
の御歌で、この二首を並べて拝誦して、私はことばにあらはし難い感激を味つたのである。それで、
この二首のお歌の重大な意味が、大新聞の記者にもわからないのか、と思ふと、それがまた憂慮にた
へないのである。

歌は言葉の意味だけを理解するものではない。何遍も朗誦して、歌の調子——しらべ——にこもる

作者の感情のうねりに読者が心身を共鳴させるものである。

御製は「冬ながら朝暖かし」と、御参拝の折の印象を一気に、——何の飾り気もなく率直明快に、お詠みになる。二句切れで力強い。そして、あとでしづかにそこに至る経過を述べられるのである。「まうで来つれば」は、「お参りに来たところ」といふほどの意味である。「つれば」といふので、「いま来たところ」といふ現在の意味が強い。全く、自然そのままの御表現で、ありのままにして全し、といふやうな御心持が拝されるのである。私はこの御製を拝誦して、明治天皇の御製、明治三十八年「をりにふれて」の二首を思ひおこさせられた。

をりにふれて

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな

さくすゞの五十鈴の宮の広前にけふおほ幣かきをさゝげつるかな

この御製は、明治天皇さまが日露戦争の終結を皇大神宮の神前に御奉告になるために御参拝になられた、その折のお歌であると拝察される。このお歌に、私は、皇祖の大神と天皇さまとの、神人交流の安らかなお心とでも言ふやうなお心が拝されるが、今上陛下の御製にも、同じ安らぎのお心が拝されたのである。

昭和二十年十月十一日、——(終戦直後のことである、今上陛下がマッカーサー元帥を訪問されて、

「自分は今度の戦争に関して重大な責任を感じてゐる。従つて絞首刑も覚悟してゐる」と言はれたと伝へられてゐるのが、九月二十七日、それから約二週間後のことである。——「伊勢神宮に親拝したいがどうだらうか」と御下問があつたといふことである。〔木戸幸一関係文書〕——「天皇語録」からして十一月十三日、御親拝のことは実現したといふ。その時、陛下は敗戦——終戦の御奉告をなさつたのであらう。

その折にお歌があつたのかどうか、その折の御歌として発表されたものはないので、うかがふことはできないが、終戦の折の三首のお歌が、その時のお気持ちをあらはすものと見ることができよう。また「終戦の詔勅」の「……斯ノ如クムバ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗の神靈ニ謝セムヤ」といふ悲痛な御言葉にも、この御親拝の折のお心持の一端を推察しまつることができよう。

それから二十九年を経て、このたびの「式年遷宮」の後の新宮御参拝となつたのである。終戦直後の御親拝を推察申上げて、このたびの御製を拝誦すると、一層の感動を味はしめられる。

しかも、皇后さまの同じ折の御歌を拝することは、まことにありがたいことである。御製に「冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮」と詠まれたところを、皇后さまの御歌には「おだやかに冬たつこの日みともして」と詠まれる——本当に心の通ふあたたかい御夫婦と申上げることのできる一面をも、この二首のお歌に拝することができるのである。

皇后さまは昭和四十四年、東大安田講堂占拠事件の年の御歌に、前述のやうに非常な憂慮を詠んでいらつしやる。

天皇さまの御心痛を一心共同体におわかちになられるのである。この悲しみを分かつたれるお心が、神宮参拝のお歌では、神人交通の安らかなお心持を共にせられたやうに拝されるのである。「よろこびもかなしみも民と共にして」といふ御製の中のおことばがあるが、皇后さまこそは天皇さまと御治世五十年の「よろこびもかなしみも」「共に」せられたことを、この御歌を拝誦してしみじみと思ふ。

二 歌会始「祭り」の御製と御歌

今年の歌会始のお題は「祭り」で、天皇皇后両陛下の歌は次の通りであつた。

御製

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

皇后陛下御歌

星かげのかがやく空の朝まだき君はいでます歳旦祭に

天皇さまが「神々に世の平らぎをいのる朝々」とお詠みになられるのに、相應するかやうに、皇后さまが「朝まだき君はいでます歳旦祭に」とお詠みになられる——元日発表の伊勢神宮御参拝の両陛下のお歌と同じく、ひとつお心に神々をおまつりになるお心が示されてゐるのである。

皇后さまの御歌は、前のお歌には「みともして」とあり後のお歌には「君はいでます」と天皇さまをお見送りなさるお心が、まことに自然に、深い御情愛をもつて詠まれてゐる。

天皇御在位五十年といふ記念すべき年の、両陛下のかうしたお歌を拝誦すると、天皇さまの神まつるお心の深さは申上げるまでもないが、天皇さまをおたすけなさる皇后さまのお心の深さを、いまさらのやうに仰がしめられるのである。

御製に「世の平らぎをいのる朝々」とある。「祈る」といふお言葉は、御製にみちみちてゐると言へよう。殊に、戦前、戦中、敗戦直後の御製には、「祈り」のお心の詠まれたお歌が多い。そのことを、今年の「歌会始」の「祭り」の御製を拝誦して思ふ。しかもこの御製は「わが庭の宮居に祭る神々に」「世の平らぎを」「祈る」と具体的に仰せられて、陛下の御信仰の内容をも暗示せられたのである。この「宮居」は「宮中三殿」と考へられるので、「神々」は、皇祖皇宗（天照大御神はじめ皇祖の神と御歴代天皇さまの御霊）の神々をはじめ天神地祇の神々を意味すると思ふ。この祭祀は皇室の御伝統であるから、日本の固有の信仰にもとづくのである。そこに立つて、「世の平らぎ」といふ、人類の普遍的理想を祈られる——これが御製の意味するところである。したがつて御製は、世界の諸宗教に通ずる普遍的内容をもつてゐるのである。

昭和二十九年に次のお歌のあつたことを『あけぼの集』で知ることができるが、それは右の御製に詠まれた御信仰につながるものであらう。

伊勢神宮に参拝して

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

〔瑞垣〕一〇六号「天皇陛下御治世五十年奉祝記念号」

八 皇后御歌「やつがしら」(絵巻連作)

「やつがしら絵巻」と言ふのは、『錦芳集』に載つてゐる前田青邨画伯の「皇后さまと絵」といふ文章によると、一丈七尺余り(五メートル)の長巻の絵巻で、金泥で下地の絵をお書きになつて、「その下地の絵の上に、四十首のご自作の和歌、それには詞書もあり、二度とは来ないヤツガシラへの思いをおこめになつたあとがきもあり、歌物語風のものである」とあつた。

どうしてこの絵巻ができたかといふことについても画伯はかう説明してをられる。

「昭和四十二年の四月のはじめ、めずらしい鳥が一羽、吹上御所のすぐ前の草原におりた。ちょうどお昼のお食後のこと、兩陛下でしずかにお話になつていた時のことだという。すぐそこに遊んでいる美しい鳥。

天皇陛下が『ヤツガシラにちがいない』とおっしゃつたそうだが、これは満洲、北支あたりの鳥で、渡り鳥ではないから、日本に、東京に、来るはずもない鳥だけに、本当に不思議なこととお思ひになつたそうである。つまり迷鳥というわけなのだが、そんな遠くから、どうして、どのようにして、ここ東京まで飛んできたものか。

冠羽をたくさん立てて、なんとも味の深い姿である。それにこの鳥は正倉院の御物の、紅牙撥鏝こうげばちるの尺や、琵琶の槽の模様、その姿をのこしている。千何百年かの昔、ペルシアあたりで同種の鳥の姿を美しとして、模様の意匠に使ったのが、『絹の道』を通して北支に伝わった。そんな鳥が、生きて、おびえることもなく、吹上のお庭におりたということ、しかも四日間もそこに逗留して、草原に、高い木の梢に、遊んだということ面白いではないか。

すぐさまこれをお描きになった。小品でいい味のものがおできになったが昨年、さらにこれを大いに展開させて絵巻をおつくりになった。

金泥で下地の絵をお描きになった。正倉院御物の前記の牙尺と琵琶、ヤツガシラが舞い降りたのが四月のことだったから、御苑のサクラ、とまった高い梢、飛んでいるところ、草の上におり立つたところ」

そして、「その下地の絵の上に、四十首のご自作の和歌云々」と前に引用した文章がつづく。『錦芳集』に載つた「やつがしら絵巻」は九首の歌をふくむその一部分であつた。全巻を拝見したいのはいふまでもないことだが、連作短歌のもつ自然な自由なすばらしい詠みぶりのうかがはれるにつけて「四十首」全部を拝読したいといふのが当時から私の願ひであつた。

この願ひはこの昭和四十八年九月、東京・上野の日本芸術院会館で行はれた「皇后さまの絵と書展——古希をお祝いして」によつてかなへられた。絵巻全巻が展示されてゐるとは知るよしもなく入場した第一室のガラスケースの中に、展示されてゐるのは、まぎれもなく五メートル余の絵巻全巻では

ないか。をどる胸をしづめて、見れば、全巻にわたつて御歌が、もちろんご自筆で、書かれてあるではないか。

これを読んだ時の感動は、うれしいといふか、ありがたいといふか、言ひつくせない。うれしいといふのではまだあさく、ありがたいといふのでは少し俗で——この二つの言葉のもつてゐるはじめの感じに近いのではないかと思ふやうな宗教的な安心をともなつた感動だつた。いまここに生きてゐることがありがたく感じられる——さういつた気持だつた。一言で言へば、驚嘆したのである。

下地の絵といひ、題材といひ、和歌といひ、渾然とひとつになつた芸術作品で、現代第一級の作品と申上げるべきではないだらうか。

青邨画伯はその和歌の価値については何も申上げてをられないが、それは絵の御指導をなさつてをられるので、批評をつつしまれたのであらう。すばらしい御歌であることは当然のこととして絵巻全体を批評なさつたのだと思はれる。

この絵巻の御歌を拝読して私は、孝明天皇の、近衛忠熙第の桜花を御覧になつての三十一首の宸筆御製を思ひ出した。ともに自由無礙の連作短歌の特徴を存分に發揮されたお歌である。とりわけ皇后さまの御歌は、今日われわれが歌をつくる場合の直接の模範になると思ふ。

その意味でも是非人々にお伝へしたいと思つて、書き写してきた。文中に変体仮名がまじつてゐると、他の観覧者の方々に迷惑にならぬやうにと思つて、反対の位置から写したので、多少うつし違ひがあるかも知れないが、その点は御容赦いただきたい。

またかういふ形でお伝へするについて、その筋のおゆるしを得る必要があるかとも思つたが、絵巻全巻が展示されたので、その中のお歌だけをお伝へすることは悪いはずはあるまいと考へて、どちらにも御相談することなく、お伝へする次第である。東京の方はともかく、地方の方々はこの展覧会に出席されることもむづかしく、また東京の方でも変体仮名のあるためよく読めない方もおありのやうなので、現代の^{かな}に改め、濁点を加へ、詞書には句読点を加へなどして、拝読に便ならしめた。間違ひの箇所をお気づきでしたら是非お教へください。前に書いた通り四十首の御歌を拝読したいといふ強い願ひがかなへられたよろこびのままみなさまにお伝へ申上げる次第である。

『錦芳集』の扉に皇后さまの御写真があるが、その御着物の模様が、この「やつがしら」の図であることを、今度あらためて気づいた。ちやうどその姿は、

やゝしばし櫛の老木の梢より遠くながめてまたとび立ちぬ

といふ御歌の中の姿のやうであつた。また御着物に「やつがしら」の図をおかきになられたのは、

目にのこるかげをよすがにやつがしら姿をきぬのすそにかかまし

とある御歌を実現なされたと拝された。

「やつがしら絵巻」の御歌 四十首

昭和四十二年四月二日、吹上のみそのに、日の本にはなき迷鳥

やつがしらといふを、くしくもわれのみいでければ

ひるげをへふとながめやる庭さきにおもひもかけぬ瑞鳥を見ぬ

いただきにかんむり羽のつらなりてさもおもしろき鳥のまひきぬ

日の本にはぬぬ鳥なりと人はいふわが見いでしをあはれと思ふ

大君はわがさげぶこゑにおどろきの御まなざしもてみいりたまひぬ

ひとめみてやつがしらぞとのたまへる君のみことばうれしとぞ思ふ

正倉院の御物ぎよぶつにありとふやつがしらいま目のまへに餌をあさるなり

うすいろの冠はねもおもしろくつらなりたてりこのやつがしら

めづらしき鳥にわがむねとゞろかせときを忘れてあかず眺むる

やつがしらは日々にくるをたのしみて

よべのとまりいづこなりけむやつがしら西の空よりとびきたりたる

黒白のはねひるがへしやつがしら檜より黄楊つげにとびうつりゆく

やゝしばし檜の老木の梢より遠くながめてまたとび立ちぬ

やつがしらけふはいづこと庭の面はしらすがたのしみにして

けふもまたみいでてうれしやつがしらこのまゝこゝにうつりすみてよ

鳥ずきの宮もはせつけ双眼鏡手にして鳥をさがしもとめつ

冠羽立てつおろしついくたびか眼鏡のうちにとらへしといふ

をどるむねおさへてカメラむけしといふ鳥まなぶ人のこゝろやいかに
庭めぐりやうやく見出でしやつがしら写すまもなくとびたちしといふ

四月五日まで四日ありて、五日目より見えすなりければ

四日にて見うしなひけむやつがしらいつこの里にとびたちにつむ

ここにして目のゆくかぎりさがせどもつひに見いでずわがやつがしら
いづちにかとび立ちにけむやつがしらつゝがなかれと日々いのりつゝ
みそのにははやぶさもをればいかならむやつがしらのうへをわれは気づかふ
ながるせずときけばきくほどの庭に四日もゐたりしことのうれしさ
北南いづちいきけむやつがしらこゝろなき人の手になかゝりそ
やつがしらうつしゑに姿のこすのみいづちいにけむ影だにもなし

そのまたの日、岡山の植樹祭に旅立つ

やつがしらこゝろのこして旅立ちぬ姫まつ国に木をうゑむとて

岡山に旅立ちにけりみそのふのやつがしらのうへにこゝろのこして

かへりきて庭を見やりけれど

木々はみな若葉となりてみとほしもきかぬみそのにむなしく目をやる
朝なあさなあきらめかねてひとわたり庭を見わたすいかにせしかと

けふもまたすがたもとめて庭をみるしらざりしまではしらぬさびしさ
 海こえて満州のあたりにかへりけむつぎの年にはまたかへりこよ
 つつがなく旅をへにけむやつがしらまたこむ春をたのしみにまつ
 つつがなくながふるさとかへりけむまたの春まで羽をやすめて
 こむとしも姿を見せよやつがしらおそろゝことなくこの庭にこよ
 日の本にまたままひこよやつがしらこのみそのふをわするゝことなく
 こむ春はつれだちてこよやつがしら心ゆくまでそのにやどれよ
 みいでたる桜のもとに札たてゝひとりしのびぬやつがしらもうへ
 紙にゑがきはたまきぬに染めもしてやつがしらのすがたをのちにつたへむ
 目にのこるかげをよすがにやつがしら姿をきぬのすそにかゝまし

昭和四十三年の春のころ

こぞきつるやつがしらのうへを思ひつゝ仰ぐみそらに花吹雪まふ
 やつがしら今年もこよといのりつゝながむる庭に花吹雪する

まこと迷鳥にや、くしきこの鳥そののちはおとづれくることなくて月日をふ。

さはれをりにつけて、はじめ見出でつるあたりに目をやり、去年のかのめでた

きすがた思ひいでてはなつかしむこと、いつしかならひとなむなりぬる。

九 今上陛下御成婚六十年奉祝に際して

今上天皇さまの御成婚六十年をお祝ひする「奉祝特集号」に御製御歌ぎよせいみかについて書いてほしいとの編集者のお話を承った時、私ははじめて「御成婚六十年」といふことに気づかせていただいたのである。どうもわれわれはとかく身近かなことばかりに気をとられてゐて、天皇さまのお心とか御身の上のことを忘れがちだと、今更のやうに反省させられたのであつた。

「御成婚六十年」といふことで先づ心に浮んだのは、次の御製である。

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり

「佐賀の宿にて」といふ題で、昭和五十二年元日の新聞紙上に発表された御製である。いまから六年ほど前の御製であるから、直接「御成婚六十年」には関係が無い。しかし、当時この御製を拝誦した時、そしてそれからずつと、この御製が、辛酸をともにして長い生涯を経て来た夫婦愛といった感情を、御表現になつてをられるやうに感じられて、愛誦して来たのである。「うちつれて二羽のかささぎ」といふので、何か雌雄二羽のやうに思はれる。その二羽のかささぎが「とびすぎにけり」といふ

ので、そのあとをお心の中で追つていらつしやるやうな深い御感懐が、天皇さまが皇后さまのお助けを得て、未曾有の国難の時代を繁栄に向つて生き抜いていらつしやつた、深い深い御感懐を暗示するやうに拝されて、忘れることのできない印象を受けたのであつた。「御成婚六十年」といふことをうかがつた時、ふと心にこの御製の浮んだのは、さうしたわけである。

つづいて、御製と皇后さまの御歌と、御唱和のやうに拝されるお歌のあることが心に浮ぶ。さうしたお歌は、毎年元日に発表されるお歌の中にもあるし、また歌会始その他の行事の際に発表されるお歌の中にも数々拝されるのである。最近のお歌では次のお歌がある。

一

御製「祭り」(昭和五十年・歌会始)

わが庭の宮居にまつる神々に世の平らぎをいのる朝々

御歌「祭り」(同前)

星かげのかがやく空のあさまだき君はいでます歳旦祭に

新年歌会始の「祭り」の題でお詠みになられた御製御歌であるから、「御唱和」といつても、直接に、天皇さまと皇后さまとの間に、唱ひかはされたお歌ではない。御製は、いつてみれば天皇さまがお詠みになつたお歌を、国民全体に対して御発表になられたお歌である。皇后さまのお歌もそれには

ちがひないが、このやうなお歌は、天皇さまに対してお詠みになられたかと拝されるのである。さうした意味で、皇后さまのお歌には、天皇さまのお妃としてのお心持と、皇族のお一人であられるから国民とはちがふが、しかし天皇さまにおつかへする国民的感情と同じき思ひとが、ひとつになつて表現されるのである。そこで、この二首のお歌を拝すると、御唱和かと拝されるのである。

御製は、天皇さまが毎朝、宮中三殿（賢所、皇靈殿、神殿）を御拝され三殿に祭られる神々に「世の平らぎ」をお祈りになられる意味である。

御歌は、元旦の弘暁に執り行はれる「歳旦祭」に出でます天皇陛下を、お見送り申上げる皇后さまのお心持をお詠みになられたお歌である。「君」は申すまでもなく皇后さまから天皇さまをお呼び申しあげた言葉である。元旦の弘暁、「星かげのかがやく空の朝まだき君はいでます」と、祭祀を厳修せられる天皇さまとお見送り申上げる皇后さまと、お心が全くひとつになつていらつしやることが感じられて、感激にたへない。

二

御製「十一月八日、内宮にまゐりて」（昭和五十年元日発表）

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

御歌（無題、同前）

おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

右の二首は、昭和五十年元日発表であるから、十一月八日は、昭和四十九年のことと思はれる。

伊勢神宮をお詠みになられた御製には、これ以前に次のお歌がある。

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

(昭和二十九年「伊勢神宮に参拝して」)

八束穂を内外の宮にささげもてはるかにいのる朝すがすがし

わが庭の初穂ささげて来む年のみのりのりつ五十鈴の宮に

(昭和三十年「神嘗祭に皇居の稲穂を伊勢神宮に奉りて二首」)

外国の旅やすらげくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に

(昭和四十六年「伊勢神宮参拝」)

秋さりてそのふの夜のしづけきに伊勢の大神をはるかをろがむ

(昭和四十八年「式年遷宮」)

大東亜戦争の開戦の折にも、敗戦の折にも、陛下は伊勢神宮に御参拝になつていらつしやるのであるから、敗戦後の伊勢神宮の有様もよく御存じのはずなのである。そして、昭和二十九年、漸く日本復興のきざしの見え始めた時に、「詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれし」とお詠みになつてをられる。そして、三十年の神嘗祭のお歌、それから十五年後、欧州旅行に先立つて御参拝のお

歌、式年遷宮の厳肅な秋の夜の御遙拝のお歌と、かう読みつづけて来ると、昭和四十九年十一月八日、——フォード米大統領訪日(十一月十八日と二十一日)の十日ほど前に、伊勢神宮に御参拝になられたのが、五十年元日発表の御製御歌であることがわかる。このしみじみとした御感懐のこもるお歌を拝すると、戦前、戦中、敗戦、戦後といふ未曾有の御体験を生き抜かれた、何かかう大海原のなぎ渡つたやうな広くゆたかなお心持が御製に拝されるのである。同時に、皇后さまのお歌には、天皇さまにすべてをまかせ切つてしたがつて来られた、とでもいふやうな、限らない信頼のお心持が感じられる。「みともして五十鈴の宮に詣でけるかな」——何といふ自然な、それでゐて深いお心のこもつた表現であらう。

この二首のお歌の発表された年の翌年すなはち昭和五十年に、次の御製がある。

米国の旅行を無事に終へて帰国せし報告のため伊勢神宮に参拝して

たからかに鶏のなく声ききにつつ豊受の宮を今日しをろがむ

三

御製(昭和五十二年元日発表、無題)

夕餉をへ辞書をひきつつ子らとともにしらべものすればたのしくもあるか

御歌(同じ折の発表「那須にて」二首のうち)

めづらしき草をたをりてみつくゑにかざれば辞書にてをしへたまへり

右のお歌は、宮中において「辞書」といふ題でお詠みになられたお歌ではないだらうか。同一の題でお詠みになられたお歌が、自づから御唱和のやうに拝されるのである。

御製（明治天皇を偲びまつりて）明治神宮創建六十年祭、昭和五十五年）

外国とくにの人もたたふるおほみうたいまさらにおもふむそぢ（六十路）の祭に

御歌（昭憲皇太后を偲びまつりて）同前）

世にひろく蚕飼こがひのわざをすすめむとつとめましけるみ心を思ふ

右の二首は御唱和ではないが、明治神宮の御祭神である明治天皇さまと明治天皇の皇后さまの昭憲皇太后さまとに対して、天皇さまと皇后さまとで詠み分けられたので、ひとつお心の御唱和とみてよいであらう。

次の法隆寺の御製と中宮寺の御歌も同じである。

御製「法隆寺にて」（昭和五十五年元日発表）

過ぎし日に炎をうけし法隆寺たちなほれるをけふはきて見ぬ

御歌（無題、同前）

中宮寺のついちの内にしづもりてさざんくわの花きよらかに咲く

また、昭和五十八年元日発表のお歌の中には、五十七年十一月、両陛下で御一緒に御旅行になられた三宅島の御製御歌がある。

御製

住む人の幸いのりつつ三宅島のゆたけき自然に見入りけるかな

御歌

三宅島の磯に住むとふうみすずめ標本を見て描きうつしぬ

以上、(一)(二)と、昭和五十年以後のお歌の中で、特に御唱和かと拝せられる御製御歌を掲げたのであるが、それ以前にも同じ趣きのお歌を数々拝することができると思ふ。

かうした、天皇・皇后両陛下が、ひとつお心で、あひ応するやうにおよみになられたお歌をよむと、天皇さまと皇后さまとが、御夫婦として、本当にあなたかにお心を通はしあつていらつしやるこゝとが拝されて、読むものの心は、なごめられ清められる思ひがするのである。

「天皇御一家」といふ言葉が戦後新聞紙上に現はれて、私は何だか好まぬ言葉ではあるが、天皇・皇后両陛下は、国の政治の上での御地位にあられるばかりでなく、たしかに、皇太子さまはじめ皇子皇女さまがたの御両親でもあられ、且つ皇族の長者としての御身分でもあられるのである。さういふ

意味では、国民の家庭と同じやうに、悲劇的な事件を御体験になられながら、しかも両陛下お心をあはせて皇室を導かれる模範的な御家庭を実現していらつしやることが、御製御歌に拝されるのである。われわれ国民の家庭生活で体験される悲しみと喜びと明暗とを、国の大事の只中に立たせられつつ、御体験なされたことが御製御歌に拝されるのである。この自然の家庭感情が日本の国の国がらと矛盾するものではないことを、御製御歌を読むと強く悟られる。家庭を大切にすることと国のために尽すこととは相通するものであることを御製御歌を読んでいまさらのやうに教へられるのである。御成婚六十年に際して、未曾有の国難を打開されて、今日の世界的日本を導いていらつしやる天皇陛下下皇后陛下の御家庭感情の御製御歌を拝誦することは、両陛下の御成婚六十年のお心をお偲び申上げられたよりになるにちがひないと、私は思ふ。

御製

冬すぎて菊桜さく春になれど母の姿の見えぬかなし

(昭和二十七年「平和条約発効の日を迎へて」)

すこやかに空の旅より日のみこのおり立つ姿テレビにて見し

(昭和二十八年「皇太子の帰国」)

あなうれし神のみ前に日の御子のいもせの契り結ぶこの朝

(昭和三十四年「皇太子の結婚」二首のうち)

還暦の祝ひのをりも病あつく成子しげこのすがた見えずかなしも
(昭和三十六年「六十の賀」)

背のねがひ民のいのりのあつまりてうれしききはみ病なほりぬ

(昭和四十年「厚子病気全快」三首のうち)

おとうとをしのぶゆかりのやかたにて秋ふかき日に柔道を見る
(昭和四十二年「秩父宮記念館」)

皇后陛下の御歌には「やつがしら絵巻」四十首連作(本書二六二頁参照)のお歌があつて、天皇さまを中心とする御皇室の団欒のお姿が実にリアルに拝されるが、長文で引用しがたいので、次の二首の引用にとどめる。

「折にふれて 二首」(昭和四十四年)

つきつきにおこる禍まがごとをいかにせむ慰めまつらむ言の葉もなし

みこころを悩ますことのみ多くしてわが言の葉もつきはてにけり

この悲しき御歌に対応する御製は、同年度御発表の御製には見当らない。しかしその頃、大学紛争によつて学園が荒廃し過激派学生によつて東京が混乱に陥つたことがあつた。将来をになふ学生に対して天皇陛下はいかばかりか御心痛になられたことであらう。皇后さまの御歌は、その天皇さまの御

心痛に対する御同情のお歌ではなからうか。私にはそのやうに思はれるのである。それにしても、国
の行く方を御心痛になられる天皇さまに対する皇后さまの御同情の深さは、「わが言の葉もつきはて
にけり」との御言葉に極まる思ひがするのであつて、天皇さまのお側にあつて天皇さまをお助けする
皇后さまの深い深い御心持が仰がしめらるのである。先に述べた五十年以降の安らかなお心持の拝
される御歌も、戦中、戦後、数十年にわたる御労苦を経てのお歌であることが、かうした御歌によつ
て拝察せしめられるのである。このやうに書いてくると、私には、昭和といふ時代の力の源が、天皇
皇后両陛下の御唱和のお歌の中にあるやうにさへ感じられて、深い感動を覚える次第である。(昭和五
十八年十一月二十三日記)

(生長の家『聖使命』昭和五十九年元月号)

十 昭和六十年歌会始の御儀に参列して

莊嚴極まりなき御儀

天皇陛下の御主催になられる毎年恒例の御歌会始は、今年は一月十日、皇居・宮殿「松の間」に於て開かれました。御題を「旅」とせられた今年の御歌会始に、はからずも私の詠進歌が選に預り、この日、私は参列を許され、大前に於て披講の榮譽をかたじけなくも賜はるることとなりました。

その日はすつかりと晴れわたり実に清々しい日でございました。最初、正面に大屏風の前に玉座だけが置かれてゐる他には、これといつて飾られた様子もない松の間に、預選者、披講者、陪聴者の順に案内されます。一同がみな席に着き終りますと、やがて天皇陛下をはじめ皇族方がお入りになり、私どもは起立してお迎へ申し上げるのですが、陛下が玉座にお着きになられますと、それまで何となく華やいでゐた辺りの雰囲気は途端にしんとして、一瞬音が無くなつてしまつたかのやうに、深い静安に包まれました。それは何とも言ひやうもない独特の雰囲気でした。陛下の御姿は実に神々しく、その場の世界がすべて陛下を中心にひとつにまとまり、陛下は完全にその場を統すべておいでなので

す。また、皇太子殿下・同妃殿下も宮様方も眩いばかりに輝いて拝されました。

御歌会始は約四十五分間、預選歌、召人歌、皇族方の御歌、皇太子妃、皇太子殿下、皇后陛下の御歌、最後に御製へと続きます。それは実に荘厳極まりない御儀でした。

天皇陛下はこの四十五分の間、終始じつとして、ひとりびとりの歌をお聞きとりになつてをられます。預選者の席は、丁度玉座の正面になります。陛下は最後まで少しもお動きにならず、誠心誠意、民草の声をお聞き下さつていらつしやると拝しました。

古語に「まつりごとをきこしめす」といふ表現があります。「きこしめす」とは「おききになる」といふ意味ですが、私どもひとりびとりの歌を、分け隔てなく一心にお聞き下さつてゐる陛下を拝しながら「きこしめす」とは、かういふことを言ふのだなあと沁み沁み思ひました。そして陛下は「きこしめす」と共に、民草の声を「しろしめし（お知りになる）」ておいでなのです。「しろしめす」といふ言葉には「お治めになる」との意味がありますが、まさしく御歌会始はそれらの言葉が最も適切で、その言葉のままに現実化してゐるといふ確かな感じがしました。陛下は御歌会始の場で、「きこしめす」「しろしめす」ことを実践していらつしやると感じたのです。天皇が民の声を聞き給ひ、心を知り給ひ、一方、国民は御製に大御心を偲び奉るといふ営み、和歌（しきしまの道）を介して執り行はれるといふ、日本の国柄の中心と言ふべき御儀が、この御歌会始であると思ひました。

大和路の御製

本年の御題は「旅」でしたので、多くの方が、旅に赴いたときの様子を詠進してをられたやうです。それはそれでいまの日本の国民の活動を語ってくれたのですが、その中には海外の馴染みの薄い地名があり、耳で聞いてゐるだけではすぐにイメージの浮かばないものがありました。また歌の中に漢語の言葉がありまして、例へば「観光」とか「御親閲」とか「尖塔」とか「一家」などの語は、字で見れば簡単ですが、これまた耳だけではすぐに分かりませんでした。

さて、そのやうに感じてをりますと、いつしか皇族方の御歌となり、皇太子殿下につづいて、皇后陛下の御歌が披講されました。

つくしなる旅路の空に新月のかかるを見たり
冴えわたりつつ

「つくしなる」といふ初句が聞こえてきたとき、何か急に遠い海外の旅から日本に帰つて来たやうな、ほつとした気持がしたのを覚えてゐます。続いて「新月」といふ漢語が出てきます。ところが、これは漢語には違ひありませんが「つくしなる旅路の空にシン、ゲツの……」とお聞きしてゐると、すぐ「新月」だとわかります。それは御歌の中に見事に溶け込んでをり、拝聴しつつ「新月」といふ言葉が何と美しいことかと思ひました。

皇后陛下の御歌の次は、陛下の御製です。

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

「大和路」といふ、日本の古里へと私たちは帰つて来ました。「歴史」といふのも漢語ですが「遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史」といふ御言葉の中では漢語といふことが少しも気になりません。それどころか、「つくし」から「大和」、その「大和路の歴史」といふ響きに、私は嬉しくなりました。「大和路の歴史」といふ言葉が日本人の心に生きてゐるからだと思ひます。御歌会始の最後を飾るやうに、この御製を拝しまして、私はただただ驚嘆するばかりでした。

あたかも、国民が津々浦々を旅して、時には海外に赴いて、悲喜交々な想ひを抱いてゐる中、陛下はさうした国民の喜びも悲しみも「しろしめし」「きこしめし」「見そなはし」ながら、遠つおやからの歴史を端然と引き継がれて、日本の中心におはします、といふことが象徴的に表現された御製であり御歌会始ではなかつたかと拝察致しました。

御製に拝する陛下の日々の御姿勢

先にも述べましたが、「しろしめす」「きこしめす」といふのは、日本の統治についての歴史上の事実です。遠つおやの時代から少しも変はりなく、国民のすべてに対して上も下も、軽いも重いもなく、誠の心でお知りになり、お聞きになられる今上陛下の御姿が、御歌会始にさながらに拝することができました。預選歌をお聞きのと きも、皇太子殿下の御歌をお聞きのと きも、陛下は少しもお変はりになりません。全ての民の声を平等にお聞きになるのが、「しらす」「きこす」といふことでせう。

御製の「けふも旅ゆく」といふところは、私は、奈良御行幸のときの何日間かの中の「今日も」

といふことだと思ひます。陛下は、奈良の行幸を「遠つおやのしろしめしたる」歴史をしのびつつお続けになつてをられたといふことだと拝します。もつとも、陛下は昭和五十四年、「甘樫丘にて」、

丘にたち歌をききつつ遠つおやのしろしめしたる世をししのびぬ

といふお歌を詠んでをられますから、陛下には日々の御姿勢が奈良御行幸の折に御製の如き御心境として滲み出たものと拝します。しかも、御歌のどれもが、その時その瞬間の御心を詠んでいらつしやる事が、更に一層素晴らしいことだと思ひます。

詠進の尊い意味

私にとつて、この度の選に預かり、御歌会始に参列させて戴いたことは、この上もない光栄であり、喜びであります。

私は、長年御製の拝誦を続けてゐまして、昭和三十四年『歌人・今上天皇』を刊行致しました。また、昭和三十七年、御歌会始が初めてテレビで放映されたときに、藤樫準二氏（当時、毎日新聞記者）と共に、送られて来る映像を見ながら解説を致しました。おそらく私もその頃から毎年詠進するやうになつたものと思ひます。

毎年三万余首の詠進があり、その中から入選者は十名ぐらゐ（今年は九名）ですが、詠進された歌は整理されて陛下のお手許へも届くさうです。陛下がお下しになる御題を受けて、国民が詠進し、陛下

がそれを「しろしめす」といふことです。選に預るか否かは別として、詠進には尊い意味があると思ひます。今回の預選者も異口同音に「預選のことは考へないで詠進を続けてゐた」とおつしやつてゐました。皆さんも、是非詠進なさつて下さい。

御歌会始の後、宮中御回廊に侍立しまして、天皇陛下に謁見を賜はり、御言葉を戴きました。陛下は、

「入選おめでたう。尚ますます励むやうに」とおつしやいました。その御言葉通り、歌道にはげみ詠進を続けてまゐりたいと思つてゐます。

本年御在位六十年をお迎へするにあたりまして、私は年頭の御歌会始の鮮烈な印象の感想が先立つてしまひますが、さうした意味も含めて、大変ありがたい年のはじめであると思ひます。ありがたいと言ふ他に、今は言葉を持ちません。

私は、毎朝、明治天皇御製をはじめ御歴代の御製を朗誦します。今上陛下の御製も繰返し朗誦してゐます。そしてますます、「しきしまの道」を励んで参りたいと思ひます。私には、恐れ多いことですが、陛下の下にこの昭和の六十年を生き抜いて来たといふ実感があります。このことを思ふと、少辛いことなど何でもなくなるのです。(談)

御歌解説 増補

社団法人・国民文化研究会機関誌「国民問題」は、毎年、元日新聞発表の天皇・皇后両陛下の御歌を集録し、研究解説を付して発表することを新年の行事としてゐる。本篇の文章はその中からの抄録である。解説の一例としてお読み願ひたい。(執筆者の氏名は年度ごとの表題の下に記した)

昭和四十三年元日発表の

今上御歌を拝誦して (抄) (広瀬 誠)

孝明天皇御陵

百年もとはとの昔しのびみささぎて 陵みささぎををろがみをれば春雨のふる

春ふけて雨のそぼふる池水にかじかなくなりここ泉涌寺せんとうじ

明治百年といはれ、いろいろ行事も執り行はれてゐるが、その明治維新直前の激動期に、身も心も砕かれ、御年三十六歳といふ若さで崩御された孝明天皇を追憶する者の少いのは残念である。孝明天皇の数々の御歌のうち元治元年の述懐「さまざまに泣きみ笑ひみ語りあふも国を思ひつ民おもふため」「天が下人といふ人ころあはせよろづのことに思ふどちなれ」、慶応元年の独述懐「人しらず我が身ひとつに思ひつくす心の雲の晴るるをぞ待つ」、文久三年の書「日々日々の書につけても国民の安き文字こそ見まくほしけれ」、水鳥多「むらがりて何をかたるぞ我がおもひひとしくおもへ池の水鳥」、これら数首の御歌を拝誦しただけで、天皇がああ激しい時代に

処して、どんなに国と民とのために御心を砕いて居られたかが、ひしひしと迫ってくるのである。

天皇陛下は孝明天皇御陵にまうでて、春雨そぼ降る中で、しみじみと百年の昔を回顧され、曾祖父天皇の御苦衷をしのばれたのである。

二首連作である。一首詠じ、なほ尽くせぬ思ひを第二首に詠ぜられたのである。「かじかなくなり」で切つて、結句を「ここ泉涌寺」と添へられた。「ここ泉涌寺」には深い感慨がこめられてゐる。泉涌寺は歴代天皇の御菩提寺で、孝明天皇の後月輪東山陵もその境内にある。古びた池のほとり、けふるやうな春雨と蛙の声にひたりながら「ここ」、ここそは列聖御陵のある泉涌寺であると詠ぜられた。自然の風物は史的憶念によつて強く統一されて居るのである。「ここ泉涌寺」といふ結句はまことに比類のない表現である。

なほ明治天皇の明治三十六年の御歌に「月の輪のみささぎまうでする袖に松の古葉もちりかかりつつ」とある。今上御歌に併せて拝誦したいと思ふのである。

秩父市秩父宮記念市民館

弟をしのぶゆかりの館やかたにて秋ふかき日に柔道を見る

ありのままを、つくろはず、飾らず詠まれた一首である。「柔道を見る」とは日常用語そのままであるが、日常語のままであるところが、かへつて新鮮に強くひびく。平凡なやうであつて平凡でない。

「秋ふかき日に」は文字通り秋深き日であるが、この一首を味つて居ると、亡き弟宮を追憶せられる深い御心が、この一句にこもつて居ることが感ぜられる。深みゆく秋の日と、故人を偲ぶ深い心もちとがひとつにとけあつて居るのである。

昭和三十三年発表の御歌に、大昭和製紙吉原工場と題して「母宮のゆかりも深きたくみ場に入りてつぶさに紙つくり見る」とある。併せて拝読すると、弟宮・母宮の「ゆかり」の場所に深く御心をとどめておいでになることがよくわかる。「つぶさに……見る」といふ御行動はすなはち切なる追憶の御心なのである。

今上御歌には、この単純な「見る」で結ばれた作が数首ある。その無技巧・無造作の結句に天皇のお人柄がしのばれるのである。

〔「国民同胞」昭和四十三年二月号〕

昭和四十四年元日発表の

今上御歌を拝誦して（抄）（広瀬 誠）

宮殿の竣工

新しく宮居なりたり人々のよろこぶ声のとよもしきこゆ

明治宮殿は昭和二十年五月二十五日の大空襲で炎上した。戦後、宮殿の造営が建議されたが、天皇は「国民は住む家もなく困つてゐる。住宅事情がよくなるまで待ちたい」とおつしやつて、なかなか許可されなかつたといふ。しかし国民のもり上がる熱意はつひにかなへられ、工事は着工された。竣工は昭和四十三年十一月十四日。竣工を喜ぶ国民の声（喜びざわめく声であらうか、それとも万歳の三唱であらうか）は御座所までひびいたのである。

今まで発表になつた今上御歌中「見ゆ」と詠まれたものは十一首を数へるが、「聞ゆ」はわづか三首である。しかも、結句は終止形で「きこゆ」と結んだものは、これがはじめてである。よほど人々の声をうれしく思はれたのであらう。

明治天皇御製にも「目に見えぬ人の心のよろこびも声によりてぞ聞き知られける」（明治三十九年）とあるが、御座所をとよまず人々の声をお聞きになつて、渦まくやうな国民の喜びを知られ、その喜びをおのが喜びとされたのである。それは、新宮殿の完成もふくめて、広く、敗戦日本のめざましい復興を喜ぶ声である。君から民へ、民から君へ、喜びは喜びを呼び、新宮殿をとよもして秋晴の青空にもりあがつていくのである。

稚内の公園にて

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

昭和二十年八月十五日終戦。その五日後の二十日朝、樺太真岡沖にソ連の艦船が現はれた。進駐と思つてながめて居ると、いきなり艦砲射撃をあげて上陸攻撃して来た。この非道な攻撃のため真岡在住の民間日本人約一千名が死んだ。ソ連軍は故意に平和的進駐を避け、樺太・千島のいたる所で、戦闘をしかけ、要所といふ要所を軍事占領したのであつた。

真岡電話局勤務の九人の乙女もまた、ソ軍上陸と同時に青酸カリをのみ、最後の力をふりしぼつてキイをたたき「皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です」の言葉を残して若い命を絶つた。（九人は十九歳から二十四歳まで。樺太在住民の内地引揚げがはじまつたとき、父母兄弟が泣いて「いつしよに帰つてくれ」と頼んだが、「大切な任務があります」といつて踏みとどまつた、けなげな大和撫子であつた）この話を聞いて私は総身

の毛が逆立つ思ひがした。

北海道最北端稚内の岡の上に、この殉職乙女の碑が建てられてゐる。碑にはプレストを耳にかけた九人の交換手のレリーフがはめこまれ、「皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です」と最後の打電の言葉が刻まれて居る。

昭和四十三年九月五日の夕方、天皇・皇后両陛下は稚内市長の案内でこの岡に立たれた。市長の説明を一言一言うなづきながら聞いて居られたが、説明が終ると、天皇は碑の前に進まれて、ていねいにお辭儀された。つづいて皇后も同じやうにされた。天皇はそれから双眼鏡を手にとられて、感慨深げに樺太の方をながめられた。あいにくこの日は曇つて樺太は見えず、宗谷海峡の白い波頭が見えるだけであつたが、天皇はいつまでも暮れゆく北の方を見て居られた。この地へのおたちよりは五分間の予定であつたのが、八分間に延ばされたといふ。

以上の事實は読売新聞社の『昭和史の天皇』によつたものであるが、このたび御発表の天皇御歌はまさしくその時の御感懐である。皇后も天皇に唱和して「樺太につゆと消えたるをとめらのみたまやすかれとただいのりぬる」と詠ぜられてゐる。

天皇は昭和三十年八月十五日、那須にて「夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる」と詠ぜられ、昭和三十四年千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて「国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる」、昭和三十七年日本遺族会創立十五周年に際し「年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる」と詠ぜられてゐる。敗戦に関し、戦没者に関し、くりかへし「胸せまりくる」と詠ぜられてゐるのである。その御心をおしのびして、民我等の心も迫つてくるのである。

昭和四十七年元日御発表の

御製を拝誦して（抄）（広瀬 誠）

伊勢神宮参拝

外^とつ国の旅やすらげくあらしめとけふは来ている^{いすず}の五十鈴の宮に

御渡欧に先立つて陛下は神宮に参拝され、旅路の安全を祈られた。「祈る」と詠ぜられた陛下の御歌は今までに十首。「安らげき世」「波たたぬ世」「むつみかはして栄ゆかむ世」を祈り、開戦時むら雲を「はやくはらへ」と祈り、敗戦後海外に「のこる民の上安かれ」と祈り、惨事をふせぐ道を祈り、田の豊作を祈る等、すべて世界の平和・国民の幸福を祈念された御作である。御自身のことに関して祈ると詠ぜられたのはこれが始めてである。

しかも「旅やすらげくあらしめ」と祈願の内容を具体的に強く表現されてゐる。「けふ来ている」でなく、「けふは来ている」と字余りの表現になつてゐる点に心を留むべきである。そこに、せつばつまつた御心持が深くこもつてゐることを拝察すべきである。（日常会話でも「今日行く」といへば尋常であるが、「今日は行く」といへば、何か事情があつて行きにくいのをあへて行くといふやうな特別の情意がこもるのである）

ひるがへつて思ふと、今までの政治のありかたは、陛下が直接手を下されることは少なかつた。大臣以下が陛下の御心を体して政治に従事し、その成果を報告し、陛下はこれを知りしめされるのであつた。どの

程度、大御心を体し、大御心にお応へできたかは別として、これがわが国政治の姿であつた。陛下はひたすら肝胆砕いて政治のなりゆきを祈念されるのであつた。

ところが、このたびの御渡欧は陛下がみづから日本国を代表して国際親善の実を挙げるため、俗な言ひ方をすれば、「皇室外交」を積極的におし進められたのであつた。陛下の祈念されたのは御一身の安泰以上のものがあつた。日本国の外政を担はれ、危惧も憂慮もおしきつて大事にのりだされた。その緊迫した御心事をこの一首にしみじみとお偲びするのである。

しかし、「けく」「あらしめ」「けふは」といふ強まつた調子が、後半キ、テイ、ノル、イスズ、ノミ、ヤニ、とイ音を反覆する美しいひびきの中にとけこみ、安らかな調べをかなでてゐる。それは、皇祖神の御加護に対する深い御信頼から、おのづから湧きいでた安らぎであらうと拝しまつるのである。

アラスカの空にそびえて白白しろしろとマッキンレーの山は雪のかがやく

「ご渡欧のさいのお歌」と注記されてゐる。最初の着陸地はアラスカのアンカレジであつた。アンカレジに近々と迫つてそびえるのはマッキンレーの大山脈。六一八七米、北米大陸の最高峰である。

空の遠くにそびえて白々と見えた山が、飛行機の進むにつれて前面に大きくたちはだかり、やがて細部までくつきり見えてくる。山肌を埋めて雪が輝いてゐる。そんな飛行機の進行を感じさせる一首である。

初句「アラスカの」、結句「雪のかがやく」、この上下のやはらかな「の」。「空にそびえて」とソ音の反覆で波状に高まり、中央に「白白と」の「と」が重くひびき、「マッキンレーの山は」と主語を示す強い「は」から次の句へ落ちこんでゆく。中が高く強く、左右が低くなつてゐる。高峯岳山の起伏そのままのリズムである。

「アラスカの空にそびえて白白と……」といふ調べには、空の奥処おくところに此の世のものでないやうな雪姿を示す山脈の神秘感が縹渺としてゐる。前田普羅の俳句「奥白根かの世の雪をかがやかす」をふと連想する。しかし御歌には「かの世」などといふ超越的な語は全然使用されず、どこまでも見たままを一気によみ下されてゐる。

私事にわたるが、勅題「山」の下、私が試作した多数の歌の中に「君乗らす翼のま下きららぎて見えわたりけむアラスカの山」の一首が陛下の空の旅をひたすら偲び、最初の着陸地の風景を思ひうかべての作であつた。いま陛下がアラスカの山を見て御歌をお作りになつたことを知り、偶然の符合に私は感激を抑へえないのである。

〔国民同胞〕昭和四十七年一月号

昭和五十年元日新聞掲載の

御製・御歌を拝誦して（夜久正雄）

「迎賓館」の御製

例年のやうに広瀬誠氏の集録によつて年頭の御製御歌の拝誦ができるが、最初私が元日の新聞紙上で拝見したのは、「迎賓館」の御製一首だけであつた。

たちなほれるこの建物に外とつ国のまればとを迎へむ時は来来にけり

偶然のことに、まちがへて「まればとを」の「を」を落して読んだためもあつたらうが、この一首だけではさ

びしい感じがしたのである。

考へてみるとこの「を」があることによつて、一首のなかの各句のつながりが断たれず、しかも第一句の「たちなほれる」といふ六音の字余りと「まれびとを迎へむ」といふ九音の字余りとがバランスを保つて、——つまり自然で、一首全体はすこしの切れ目もなく、一すぢにつづくのである。お心のゆきわたつた力強い充実した感じがするのは、「まれびと迎へむ」といふやうに「を」を省略することもなく、そのほかにすこしの省略を行はず、具体的にありのままにお詠みになつてをられる、そこに作者のまごころの充溢を感じるのちがひない。いはゆる歌らしい歌にしようといふ技巧が全くなくて、それでゐて心のもつた御表現である、歌らしくない歌であることがかへつて本當の歌の道をお示しになつてをられる。

内容的に言へば、国際親善におつくしになる御誠意が、一首全体からにじみ出てゐる——さう申上げたらよからうか。「迎へむ」の「む」は連体形で、ここで切れずに「時」にかかるのである。「この建物に」外国の賓客をこれからお迎へする時が来たのである、といふ意味である。「まれびと」は賓客の意味で、この場合は国賓級の人を言ふ。

「迎賓館」はもとの赤坂離宮で、戦後一時期国会図書館の分室となつたことなどあるが、昨年改修されて「迎賓館」となつた。離宮が「たちなほれる」(たち直る)もとのやうな姿になつて、外国の賓客を迎へる役に立つことを陛下は特別におよろこびになられたにちがひない。やがて、ベルギー国王陛下、フォード米大統領が訪日され、この迎賓館に宿泊されることとなつた。天皇陛下とフォード大統領閣下との最初の御会見はこの迎賓館の前庭であつた。当時テレビで報道されてわれらの視聴にあたらしい。もちろんこのお歌の成つたのは、それより前のことで、改修の出来上つた折のことであらう。

「米國大統領の初の訪日」の御製

それにしても、「迎賓館」一首といふことはあるまいと思つて、東京の各新聞をしらべて、次に拝誦しえたのは、「米國大統領の初の訪日」の一首であつた。

大統領は冬晴はれのあしたに立ちましぬむつみかはせし幾日を経て

「大統領は」七音、「冬晴のあしたに」九音、「立ちましぬ」五音で、——ここで切れるから三句切れである。そこまで一気に述べて、あとは倒置法の語句になる。散文的に言へば、「大統領は」「むつみかはせし幾日を経て」「冬晴のあしたに立ちましぬ」といふ順序になる。それを、一気に「大統領は冬晴のあしたに立ちましぬ」と詠まれたので、それがこの歌の中心である。「立ちましぬ」といふ「まし」は敬語の助動詞である。「おたちになつた」といふ、最後の「ぬ」が重くしつかりと前の字余りの句を受ける。「むつみかはせし」といふのは「親しみをかはした」といふか「なかよく交際した」とかいふやうな意味あひであらう。フォード大統領が来日されたのは十一月十八日で大阪から離日されたのは二十二日である。あしかけ五日で、この間陛下はお心をつくして大統領をおもてなしなさつたにちがひない。過激派のゐる日本の治安がよくないうへに、野党が反対を表明したといふなかにあつて、政府は大統領を迎へたのであるから、非常な警戒を余儀なくされた。こんなに敢重な警戒をされなくてはならないのならむしろ招待しなければよい、——もしかするとかういふのが大統領側のいはらぬ感情だつたのではあるまいか。そんなふうには思はれるほどの警戒ぶりだつた。しかし、もしさういふ感情の上のわだかまりがあつたとしても、それを和めることができたやうに見えるのは、一に天皇陛下のおもてなし

にあつたと私は思つてゐる。それが陛下のお言葉にも大統領の離日の御挨拶にもあらはれてゐた。「むつみかはせし幾日を経て」といふ直截なお言葉がかひにその間の消息がうかがへる。そして「冬晴のあしたに」大統領をお送りすることができた陛下の安堵のお気持と惜別のお気持とが、一氣に述べられた上の句にあふれてゐるのを拜することができる。

現在、国の政治や外交について直接政治的な決定をなさることのない陛下として、せめては外国の君主、大統領、元首との御親交を通じて、国家の繁栄と世界の平和維持への御努力をおつづけなされていらつしやるのではないか。その切々たるお心もちは、フォード大統領とお会ひになつた陛下のお姿にあふれてゐるやうにテレビで仰ぎ見られたが、さらにはつきりと詩的表現によつて表明なさつたのがこの御製である。英訳してフォード大統領にお伝へできれば、大統領にも陛下のお心がさらによく通ずるであらう、——さう思つてジャパン・タイムズを調べてみたが、元日号には、英訳御製を見ることができなかつた。

『あけぼの集』には、あたらしく発表された御製で、外国の皇帝・大統領を迎へておよみになられたお歌が数首ある。

エチオピアの皇帝を迎へて（昭和三十一年）

外国の君をむかへて空港にむつみかはしつ手をばにぎりて

比国のガルシア大統領および夫人を迎へて 三首（昭和三十三年）

外国のをさをむかへついきさかひを水にながして語らはむとて

戦のいたでをうけし外国のをさをむかふるゆふぐれさむし

喜びて外国のをさかへるをば送るあしたは日もうらなり

この三首目のお歌が米国大統領を送るお歌とよく似てゐる。また、

英国アレキサンドラ王女殿下を迎へて（昭和三十六年）（あけぼの集に拠る）

イギリスの姫を迎へて若き日のたのしき旅を語りけるかな

その他、陛下が国際的の御交際におつとめになられるお心を仰ぐについて、次のお歌をあはせて拝誦したい。

迎年祈世（昭和十五年）

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそ祈れとしのはじめに

吉田茂追憶（二首のうち一首、昭和四十二年）

外国の人とむつみし君はなし思へばかなしこのをりふしに

皇后御歌

東京の大新聞の中で、毎日と東京とは前記二首の御製をかかげるとともに、皇后陛下の御歌二首をかかげた。

これは広瀬さんの写して知らせてくださった御歌と同じである。つまり、毎日と東京は皇后さまの御歌については宮内庁発表の皇后御歌を二首全部載せたと思はれる。二首のうちあとの方のお歌は次の歌である。

おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

「みともして」は「天皇陛下のお伴をして」の意に解される。「伊勢の宮居」はいふまでもなく「伊勢神宮」のことである。「冬たつこの日」は「立冬の日のけふ」といふ意味である。「立冬」は「冬の始、陽暦の十一月八日頃」と辞書にある。この頃、春のやうにおだやかに晴れる日があつて、これを小春日こはるひと呼んでゐる。神宮に御参拝の日がたまたまそのやうな日であつたと拝察される。語句の意味はやさしくて、以上の説明さへ蛇足であらう。どの単語ひとつをとつてもむづかしい単語はない。一首は流れるやうに詠みくだされて、何のどこほりもない。まことにすぐれた抒情詩である。いまの世の中では、御製や御歌をはめることもできるし、けなすこともできる（いつの世でもさうだが）。正直に自分の感想をのべればよいのだが、私は、かういふ歌には本当に頭が下る。ことばがやさしくてしらが深いのである。くり返し読んであきないし、一度読めば心にしるされて忘れられない。「おだやかに冬たつこの日」といふ詠み出しが、そのことばの調子が天地自然のおだやかさと一致し、「みともして伊勢の宮居にまうでけるかな」といふ、よどみないしらが、天皇さまのおともをして御一緒に伊勢神宮に参拝される皇后さまのお心のやすらかさそのものとなつてゐるからである。つまり、ことばが対象と全く一つになるといふ芸術の至極が実現されてゐるのである。

「十一月八日内宮にまゐりて」の御製

そして広瀬さんからのお知らせで、御製「十一月八日内宮にまゐりて」を拝誦して、重ねて、私は言ひやうのない感動を覚えた。皇后陛下のお歌に感じたと同じ感じを、同じ折の御製に感じたからである。次の御製である。

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

二句切れのお歌で、「朝暖かし」で一旦切れる。あとは、倒置法で、もとかへるのである。「冬ながら朝暖かし」といふお言葉が何ともうつくしい。われわれだと「冬なれど」といふふうにしてしまふ。これだと反省的思维的で、「冬ながら」の自然、随順的の表現からすると、我執を感じるのである。しかも御参拝の折の印象を一気にさつと述べられてあとでしづかにそこに至る経緯をつけ加へられるのである。皇后さまのお歌は、参拝を終へられてから、その全体の印象を述べられたのであるが、天皇さまのお歌は、参拝の途中、参道を歩みたまひつつ詠まれたかとも拝される。それだけ具象的で印象が強い。

この御製を拝誦し、改めて皇后さまの御歌を並べて拝誦し、私は、明治天皇の伊勢神宮御参拝の御製を憶つた。宮内省版『明治天皇御集』明治三十八年「をりにふれて」の二首である。

をりにふれて

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまるるけふかな

さくすゞの五十鈴の宮の広前にけふおほ幣をさくげつるかな

明治天皇御製は日露戦争の終結を神前に御奉告なさるために御参拝になられた折の御製と思はれる。「あまたの年をへしこゝちする」と詠まれたほどの御心労が、戦争の勝利を神前に御奉告なさることで解き放たれるやうな、安らかなお心もちのうかがはれるお歌である。今上陛下の御製にも、さういつた神人交通の安らぎが拝される。

またこの日の御参拝には劍璽の御動座があつた由に承つてゐる。戦後約三十年の間をいって古来伝統の儀礼が復活せられたのである。(住吉大社内発行『すみのえ』昭和四十九年十二月号所載「劍璽と動座復活の意味」— 矢島三郎氏、参照)

なほ、今上陛下には、伊勢神宮御参拝御遙拝の折の次の御製があつて、皇祖の大神に対するあつい御信仰がうかがはれる。

神嘗祭に皇居の稻穂を伊勢神宮に奉りて 二首 (昭和三十年)

八束穂を内外の宮にささげもてはるかに祈る朝すがすがし

わが庭の初穂ささげて来む年のみのりいのりつ五十鈴の宮に (『あけぼの集』より)

伊勢神宮参拝 (昭和四十六年)

外つ国の旅やすらげくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に

式年遷宮 (昭和四十八年)

秋さりてそのふの夜のしづけきに伊勢の大神をはるかをろがむ

次の御製は、『あけぼの集』にはじめて発表されたお歌である。

伊勢神宮に参拝して（昭和二十九年）

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

国際的の親善交流にお心をつくされ、外国元首と深い御親交をなさることのできる天皇さまは、同時に皇祖の大神をまつる伊勢神宮にお心をこめて御参拝なされ、国民のともに参拝することを心からおよろこびになる。日本文化の伝統に生きることと国際的に親しみかはすことは、ひとつのまごころのうちに実現せられたのである。

自然を詠まれた御製二首

国際親善をお詠みになつた「迎賓館」や「米国大統領の初の訪日」のお歌、宗教的な感情をお詠みになつた「十月八日内宮にまゐりて」のお歌のやうな歌をすぐれた歌だといふと、歌といふものは、頭の中で正しいと考へることをよめばよい、道徳的な観念を詠めばよいと感ちがひする人がある。観念はことばの意味にあらはれ、感情は歌のしらべにこもる。観念と感情とが一致するのがまことの歌であるが、その点がなかなかむづかしい。そこで、自然を詠んだ歌を読むと、観念のとりこになることから救はれるのである。部屋にこもつて考へごとばかりしてゐる人が、戸外に出て大気を吸つて自然に向きあふと、利害得失を忘れて心が晴れるやうなものである。

自然鑑賞といふことは、日本人にとつては、自己を超える修養の助けになる。頭のなかで考へたよいことを三十一文字に並べることができても、自然のすがたをことばに写すことはむづかしいのである。天皇さまの抒情詩がことばの上のきれいごとでないのは、自然をお詠みになつたお歌を読めばすぐわかることである。

今年の新年発表の御製の中で純粹に自然をおよみになつた御製は次の二首であらう。

夕空にたけだけしくもそびえたつ岩手山には雪なほのこる
(八幡平ハイツにて)

おそ秋の霞ヶ浦の岸の辺に枯れ枯れにのこる大きはちす葉
(国民宿舎水郷にて)

俗にいふ美しい自然が詠まれてゐるのではない。むしろあらあらしい山の姿、枯れ枯れのはちす葉についてお詠みになつてゐて、自然のきびしさ、強さといふものの感じられるお歌である。

視点が、前のお歌では、夕空、岩手山、雪と背景から次第に焦点に移動する、後のお歌では、霞ヶ浦、岸の辺、はちす葉と、全景から近景へと移動する。分析的であるが、少しも弱さを感じない。自然のすがたがそのままことばにあらはれてゐて、センチメンタルな甘えを受けない。

ホイットマン(一八一九—一八九一)が詩集『草の葉』の初版に序文を書いて詩人の目ざすところはシンプルシティー simplicity(ありのまま)にあると言つてゐる。詩人は対象に対して増減のない通路となるべきだ、それを實現できたら最大の詩人だと言つたのである。つまり自然そのままがことばを通してあらはれるといふことは、詩の偉大な業績であるといふので、私は、天皇さまの自然をおよみになられたお歌を読むと、よくそのことばを思ひ出すが、この二首に対しても、同じ感想を抱くのである。正岡子規のいふ「写生」の妙味を最大に發揮

された御製といふこともできよう。

「雪なほのこる」「枯れ枯れにのこる」と、同じ「のこる」といふお言葉を用ひられて、前のお歌には、自然のきびしいのちを、後のお歌には生命のたくましいのちをおよみになられたものとも拝される。くり返し朗誦して広大な自然をそのままに写される無私・広大なお心を仰ぎたい。

をばらこ

「茨城国体」(国民体育大会)の躍動するリズムのお歌、「弘道館にて」の「斉昭思ふ」といふ英傑憶念のお歌、原研のお歌、マナティーのお歌、みな感想を申し上げたいが、あまり長くなるので、稿を改めることにしたい。新年発表のお歌をお知らせするのが拙論の主目的である。これで発表の御製は概算四百九十首になる。昭和五十年が国史上の新記録なら、御在位中約五百首の御製の公表もまた新記録ではなからうか。これもまた昭和の民の幸ひである。このことの意味を深く考へていただきたいので、未熟な感想は御製の広大な世界へのほんの小さな手がかりにすぎない。わかり切つたことと言へばそれまでであるが、さう考へてお読みねがへれば幸ひである。

〔国民同胞〕昭和五十年一月号)

補記・「米国大統領の初の訪日」の御歌は、安川駐米大使のもとで英訳されてフォード大統領に伝へられた由であるが、さらに下島運教授の名訳が成つて、御訪米を機に、同大使はじめ諸方の御配慮によりアメリカ側に伝へられた。次にその訳をかかげさせていただく。(昭和五十年十月十日サンケイ新聞記事参照)

(昭和五十一年九月五日)

Farewell to honorable Mr. Ford, the President of the United States of America,
who visited Japan for the first time as
the incumbent President.

On bright morning of November, Mr. President, you've taken off our land

And soared into the blue deep,

Leaving the warm memory of our friendly talks,

Oh, these blessed days!

昭和五十一年元日発表の

御製・御歌を拝誦して（宝 辺 正 久）

元日の新聞から、天皇御歌と皇后御歌を探して読むことは、めでたい恒例ではあるが、普通の新聞に載つてゐるのは一首か二首だけである。先輩の方々から速達や電話で御教示をいただき、発表された全部を確かめて拝読することのできたのは正月三日であつた。富山の広瀬さんが謹写して知らせて下さつたはがきには「清爽自在なお歌、謹写しつつ、うれしきで心がはずみません」と書かれてゐた。

比叡山ドライブウェイにて

やまみちのみどりにはえてたにうつきうす桃色に咲きみちてあり

うす桃色に咲きみちてある「たにうつき」は、自動車に乗られた陛下の御目にうつる感嘆の光景で、この一首の御製の中心になつてゐると拝察される。深山比叡の靈氣と、それをきりひらいて造られた明るいドライヴウェイと、五月の新緑と——「やまみちのみどりにはえて」といふ單純なおことばづかひには、却つて多彩な天地の恵みとうましき空気が感じられて、「たにうつき」の群生と花のさかりをひきたててゐるやうに思はれる。陛下が植物の名をすぐに歌に詠みこまれることは数多く拝見することであるが、多くの場合、「ひめしやがはうす紫にいま咲きさかる」とか「ミヤマカタバミむれさきにほふ」とか、このお歌の「咲きみちてあり」のやうに、今を限りと咲く花のさかりに、特に生命的御共感を懐かせ給ふことに気付かせられる。

湖畔のホテルにて

比良の山比叡の峯の見えるて琵琶の湖暮れゆかむとす

比良の山、比叡の峯の「見えてゐて」とは何と平明で自在なおことばであらうか。ご覧になつてゐる比良比叡は、おそらくその山かげに夕日が沈み、墨絵のやうに大きく眼前にあり、古来日本人の心景としても慣れ親しまれてきた湖畔の山の姿はいま見えて動かず、暮れゆかんとする琵琶の湖の風か波か明暗か、しづかな推移が感じられて美しい。新聞によれば五月二十五日滋賀県栗東町金勝山（こんがくやま）で植樹祭が行はれ、朝から快晴であつたよし。兩陛下御手植ゑの行事があつてその日湖畔守山市にお泊り。前の御歌と共にこの御旅行の折の御作と思はれる。

米国の旅行を無事に終へて帰国せし報告のため伊勢神宮に参拝して

たからかに鶏とりにのなく声こゑきききにつつ豊受とようけの宮を今日しをろがむ

兩陛下の米國御訪問と無事御歸國は、日本の歴史において特筆される出来事であつた。「無事に終へて歸國せし報告のため云々」と自ら詞書きされてあるやうに、陛下御自身の御緊張は豊かな御安堵、御確信を秘めて神宮参拝の時まで続いてゐると思はれる。

「たからかに」とはじまるところに陛下の御氣持の高揚を拝する思ひがするのは私だけではあるまい。神苑に歩をすめられる折しも、あるいは御親拝になられようとする折しも、たからかに鶏がなく、その声を「きききにつつ」とあるのだから「たからかに」は鶏のなく声のことなのだが丁度、明治天皇が日露戦争の勝利を御奉告なさるため神宮に御参拝になつた折の御製と承はる、「久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな」が思ひ出される。どちらもその御心の張りが高まりにおいて、そのお喜びと御確信の表現において、同質の類似が感じられるのである。また歌が力強い副詞を以てはじまる、と思ひ返してみると、昭和四十四年の御製、「久しくも五島を觀んと思ひゐしがつひにけふわたる波光なみの灘を」が思ひ出される。どちらの御製も「今日」の御感動を、うちつけに高らかに歌ひ出されたものと拝され、作者の感情の高揚が仰がれてまぶしく、ひれ伏したい思ひである。

「鶏のなく声きききにつつ」。「ききき」の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形で、反覆や継続をあらはす助詞「つつ」につづく。間をおいて、あるいは次々にわきおこるやうな、鶏のたからかな爽やかな鳴き声を陛下はうなづくやうにお聞きになりやがて御親拝を終らせられる。「今日し」とあるその今日は、「胸の痛むのを覚える」(戦没者慰靈祭で毎年くり返して述べられてゐるおことば)とも「私が深く悲しみとするあの不幸な戦争の」

(ホワイトハウス晩餐会でのおことば)とも仰せられた昭和の御代の動乱の、主要相手国米國との親交融和のため自ら御努力なされたこの度の御旅行を神宮に御報告なされる、その今日にはかならない。「豊受の宮を今日しをろがむ」、そのことによつて、訪米の御旅行はつひにつつがなく終つた。陛下の御英氣と御安堵をここに拝して感動つきぬものがある。

御帰國になつたのが十月十四日、十月二十四日に志摩に御泊、二十五日神宮御参拝、二十六日三重國体開會式でおことばを賜ふ。次の「三重國体」「朝熊山の眺望」ともこの御旅行の折の御製と拝される。

三重 國体

秋ふかき三重の県あがたに人びとはさはやかにしもあひきそひけり

朝熊山あさまの眺望

をちかたは朝霧こめて秋ふかき野山のはてに鳥羽の海みゆ

国民体育大会での御作に「あひきそふ」といふおことばを毎年のやうにおつかひになることに気付く。「きそふ」といふ日本語(イキソフⅡ息添とも、キシリオシアフⅡ軋庄合とも解されてゐるが)の語感と共に、くり返しおつかひになる陛下の御人柄といつたものがここにも深く味はれる思ひがする。

「朝熊山」は鳥羽からそそり立つてゐるから、山深い峠から眺めれば晴れてゐても海は遠くに見える。まして霧こめてあれば鳥羽の海は秋ふかき野山のはてに。鳥羽から上つてこの峠を越えれば内宮にいたる。「秋ふかき」の音調にひきこまれるほどに歌の御しらは深い。

皇后陛下の御歌も、やさしいおことばづかひの中に、はじめての御訪問先のめづらしさも活気もよくあらはれてゐて、御心の全体が伝つてくる心持がする。その三首の最後の御歌は、御帰国後の御感想を詠まれたものであらうか。

アメリカの旅も終りてかれがれにこほろぎのなくころとなりたり

天皇陛下下の神宮参拝の御製と対照してまことに心に沁みる。「かれがれにこほろぎのなくころ」といふ日本の自然と伝統に御心はおのづから帰り来つて未曾有の訪米御旅行を終へさせられたのである。

(附記・なほ、中央・地方紙のあまたあるなかで、発表される御製をかりそめとせずその全部を謹載する数少ない新聞社——北日本・富山・サンケイ東京版等に対し深く敬意を表したい)

(『国民同胞』昭和五十一年一月号)

昭和五十二年元日発表の

御製を拝誦して(抄) (青砥 宏一)

元日の新聞に発表された御製・御歌の全部を載せてゐるのは北日本新聞・富山新聞・サンケイ東京版等と『国民同胞』には昨年記してあるが、小生の住む地区の中国新聞・山陰中央新聞にも同様全部載つてゐるのは有難い。多分地方紙では他にもあると思ふ。

高萩の宿にて

古くよりつたはる浅川のささらの舞音にあはせてはげしくをどる

高萩は茨城県高萩市（日立市の北約一〇キロ）「浅川のささらの舞」は茨城県大子町浅川の熊野神社に伝はる能の神社獅子舞で三頭の獅子が、笛、太鼓に合せて踊る舞。「ささら」は田楽の楽器の一種で、一尺位の竹を細かく割つて束ねたものを打つて音を出すものであるが、この舞とは関係ない（茨城県観光課調）。大子と高萩は約三〇キロ離れてゐるが、恐らく大子町の有志が高萩まで出向いて御覧に入れたものと思はれる。

御製を再読、再々読すれば音に合せて踊る三頭の獅子が目に見える様だ。それもだんだん踊つてゐるうちに、踊る者も笛、太鼓をならす者も熱狂して佳境に入つたのではなからうか。御覧になる陛下もそれにつれて御感を深めてゆかれるのか、と拝察される。最高の「音」を出し無我で「はげしく」踊つたのだらう。

「楽に合せて」「節に合せて」ではない御表現が感ぜられたままに表現されてゐる。「天上の極楽」「日本の歓喜」とはこの瞬間であらう。よつて「つたはる浅川の」九字、「ささらの舞」六字と字余りになつたと拝誦するのである。五九六七七の前句の字余りを「はげしくをどる」でしつかりと統一してをられる。

「古くより」と親から子へ、子から孫へと伝へられて来たささらの舞を御嘉賞になるのである。この舞ひは又子孫に永遠に伝へられることであらう。

KDD（国際電電）茨城衛星通信所

新しき衛星通信のかずかずの施設をまもる人をしおもふ

この御歌は第一と共昭和五十一年五月下旬に茨城県での植樹祭に御出ましの折りで御作と拝するのである。この通信所は高萩市と大子町にまたがる、四万五千坪の広大な土地に、さまざまの施設があり、職員はわづか六十名で処理してゐることである。世界最新最高の通信技術で、太平洋上に静止する人工衛星（地球の自転と同じ速度で回つてゐる衛星であるから、静止したことになる）を中継として電波を送受信し、主として国際電話を扱ひ、其他テレビ、テレックス等も送る。実験電波を送つてゐるとき、たまたまケネディ大統領暗殺の模様を受像したのは有名である。太平洋岸に面する全ての国々、北南米大陸の国々、又中国、フィリピン、其他東南アジア諸国からの国際電話全ての中継衛星である。世界の出来事を一瞬にして伝へ、直接の肉声で悲喜を伝へる人工衛星である。神業とも云ふべきものである。

御製はここを訪れたときの、新らしき技術と、ここにこれを駆使して仕事をする人々の労苦を御思ひになつて御詠みになつたものと拝する。「新しき」と言ふ御表現では、特に

原研東海研究所にて（昭和四十九年）

新らしき研究所にてなしとげよ世のわぎはひをすくはむ業を

の御製を思ひ出すのである。「なしとげよ」と仰せらるる至上命令、身を粉にしても報ずべき至難の業を全国民一体となりて、御応へすべきと思はるのである。

（『国民同胞』昭和五十二年一月号）

昭和五十三年元日発表の

御製 拝誦（抄）（長内俊平）

第三十二回国民体育大会秋季大会

花火ひらき風船あがり青森の秋の広場に若きらつどふ

十二月十四日、右の御製が県に伝達され、知事は直ちに「心豊かに力たくましくのスローガンで開いたあすなろ、国体の開会式をおほらかにうたひあげ賜うたもので、あの情景がすぐ思ひ浮ぶ」とその感激を述べたと報ぜられた。

秋季国民体育大会は晴天に恵まれた。殊にも陛下がおいでになつた九月三十日からお帰りになられた十月三日までは、まことに爽やかな秋晴れだつた。山々が霞むばかりにおだやかに晴れたみちのくの青森の青空に、青森県知事の開会宣言とともにパーッと開き一瞬にして消えて行つた七色の花火の美しさが、そして会場の空の碧のなかに浮きたつてゐた赤と黄のまだら模様十個の気球のあざやかな色合ひ、それらの光景が御製を拝誦しまつりつつ直ちに甦つてくるのをおぼえた。私は疑ひもなく「風船」との御言葉から気球を連想した。御製を高らかに神前に朗誦しまつり、そのまま知事様のお宅へお伺ひし、御製を戴けた青森県民の感激を申しあげてゐると、「俊平君、あの日は風船はあげなかつたといふ者が居るんだよ、しかし陛下は帳面によくメモして居られるから決してお間違ひになられる筈はないと信じ、念のために辞典をみたら「風船」の説明の一番先に「気球の俗

称」と書いてあるんだよ。本当に教へられました。」といはれる。私の脳裡に拝誦した時に浮んだ鮮やかな気球が、知事様のお話で正しかったことを確認しえた嬉しさはたとへ様もない。しかも丁度お邪魔してゐる最中に、入江侍従長の謹書された御製が伝達され、知事様がおしいただいて拝された後私にも拝させて下さった。よろこびの二重奏であつた。

なほこの朝御製を拝誦しまつたとき「青森の秋」との御言葉のところで胸に熱いものがこみあげて来てならなかつた。他県の方々は或は簡単に読みすぐされるかも知れない、「青森の」といふ言葉、それは陛下をお迎へ出来た青森県民のよろこびと感激と、これを御嘉納遊ばされる陛下の県民に対し給ふ温い呼びかけのお言葉と拝されてならなかつたからである。

いま元旦に発表されたこの国民体育大会のみ歌と共に御在県中におつくりになられた御歌二首

弘前の秋はゆたけしりんごの実小山田の園をあかくいろどる

強き雨のまがにもめげず青森のあがたの小田に稲穂いろづく

を、ともに拝誦しまつりつつ陛下御来青の模様をお伝へして御歌拝誦の一助といたしたい。

陛下が正式に青森県においでになられたのは、昭和二十二年八月（十日から十二日迄）と昭和三十八年五月（十九日から二十二日迄）の二回である。最初の行幸は、戦に敗れた国民を励まされるために全国をお巡りにな
られ

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちてきぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
 国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

の御製をお詠みなされた頃である。当時我々国民は陛下の御姿を仰ぎ「御巡礼ではないか」と哭いてお迎へした。まことに元侍従次長故木下道雄氏が

御民われ生けるしるしありあめつちのくづるゝときにあへりと思へば

と詠まれたごとく、戦に敗れて初めて陛下と国民とはさへぎる壁一つなしに真心と真心を通はせ合ひ得た時であった。田舎で百姓をしてゐた私は紋服を着て青森市の沿道でお出迎へした。

陛下はこの年に東北視察と題されて

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

の御製をお詠みになつてをられる。

第二回は植樹祭においでになられた時である。陛下は皇后様と御一緒に御来県になり、護国神社を御参拝なされたことが記されてゐる。その時の御製として（昭和三十八年）

青森県における植樹行事に際して

みちのくの国の守りになれよとぞ松植ゑてけるもろびとともに

浅虫の宿にて

初夏はつなつの雨うちけぶる陸奥むつの浦島影うらあはく見えてくれゆく

弘前にて

あかねさすゆふぐれ空にそびえたり紫にほふ津軽の富士は

の三首を残されてをられる。

このたびは第三回のお出ましであるが、皇后様はお病気のためお見えにならず陛下御一人での御来県となつた。去年は皇太子殿下御夫妻の二度にわたられる御来県を初めとして、各宮様の御来県があひ継ぎ、その上に陛下をお迎へするといふ青森県民にとつて言葉に言ひ尽せない光榮と感激の年であつた。皇太子御夫妻の御来県の折に県民に残された感動の数々は是非記しておきたいのであるが、ここでは陛下御来県によせた県民の感激の一端を記しておきたい。

陛下がおいでの日、一しよに駅頭に陛下をお迎へした私の友人野村光三君は、次の様な便りをくれた。「天子さまお迎への日俊平様のおかけ様にて心の真中から万歳三唱発することが出来、「光三」のいのち新らしく誕生したる感動いまもいまでもしてをります」と。

新聞は連日「熱烈歓迎日の丸の波」との見出しで、四日間に県民三十六万八千余人がお出迎へ申しあげ親しく陛下の御姿を拝したと記し、御来県の模様を詳細に報じた。(中略)

いま以上のことを心によみがへらせつつ再び御製を拝しまつらんとするのである。

花火ひらき風船あがり青森の秋の広場に若きらつどふ

碧空のなかにパァーッと開き一瞬にして消えて行つた花火を美しと愛で給ふみ心は、過ぎてみれば一瞬とも思はれる国体の開催に心をつくした多くの人々への憶念に連ならせ給ひ、青空にくつきりと浮んでゐる気球に、「明日は檜にならう」（県木あすなろの名の由来といふ）との高きを志向する県民の願ひをみそなはされつつ、四季の変化のけぢめしるけきみちのく青森の秋の自然と、心からお迎へ申しあげた県民に、そそがせ給ふ温かいみ思ひを「青森の秋」とのみことばにこめさせ給ひて、手に手に日の丸の小旗をしつかりと握りしめつゝ入場した八名のブラジル選手団を初めとする若き一万四千人の集ふ国民体育大会の広場の光景を明るくおほらかな御しらべのなかにあますなく表現せさせ給ひしものと仰がれ、ひとしほの感激をおぼえるのである。

（『国民同胞』昭和五十三年一月号）

昭和五十四年元日発表の

御製を拝誦して（抄）（島田好衛）

おだやかに晴れた元日の朝、代々木の明治神宮に参拝し、天皇御製・皇后御歌を拝誦しまつる。畏しともかたじけなしとも言ふべき言葉を知らず、身心の緊張と高まりを覚え、低く頭を垂れるのみ。

世界に国々は多い（国連加盟国百五十一、うち王国、准王国は日本を除き約二十カ国）。けれども、年頭にあらたつて元首クラスのメツセーシヤや所感発表の行はれる国はない。ひとりわが国だけは、歴代の天皇が踏んでこら

れた「シキシマノミチ」の和歌―御製の新聞発表を通じて、天皇のみ心を直接仰ぐことができるのである。朝な夕な「国民の幸はひ」と「世の平らぎ」を祈念したまふ陛下は、平明簡潔、しかもおほらかに何びとも共感し得るお歌を詠みあげられる。われわれは陛下の芸術的表現である御製を拝誦するたびに、美しい日本語の本質に触れ、誠実、清浄で無私のご人格、精神の高貴さに強く心打たれるのである。

御製を拝誦すると、人の世に生きる喜び、心の安らぎが感ぜられ、揺れ動く内外の諸情勢に対し進むべき指針を与へしめられる。われわれが日本国民として生れ育まれてきたことに無上の幸慶を感得するのは、広く深く、温かで細やかな天皇のみ心を仰ぐときを措いてほかにない。世界広しといへども、このやうな歓喜を内心に味識することができる国民はほかにない、とわれわれは確信する。

春はやく南風ふきたてて鳴神のとどろく夜なり雨ふりしきる

御製の注(宮内庁発表)に「二月に春一番が来た時の歌。皇居で」とある。昨年二月二十八日夜、東京、神奈川、千葉の三都県は、突風と激しい雷雨の「春あらし」に見舞はれた。地下鉄東西線が竜巻で鉄橋上に横転、多数の負傷者を出し、家屋の破損や停電が続出する異変であった。

第一、第二句に「はるはやくはえふきたてて」と比較的軽やかなハ行音を重ね第三句の「鳴神の」とつづけ、気象の激変をそのまま詠まれてゐる。特に「はえふきたてて」と表現されて、「はえふきあれて」などのことばを用ゐられなかつたところに、突風の吹き上つてゐるさまをまのあたり見ることと感ずる。それにつづく第四、第五句は、一瞬の間をおかず一気に「とどろく夜なり雨ふりしきる」と結ばれる。ラ行の回転音を重ね現在形で終つてゐるおことばに、陛下のお驚きと事故でもなければよいがといふご憂慮が感ぜられるやうな気がす

る。緩から急へと移る一首に緊迫感がこもり、その高鳴るときしらべに陛下のみ心が偲ばれる、すぐれたお歌と拝するのである。

牧野植物園

さまさまの草木をみつつ歩みきて牧野の銅像の前に立ちたり

注として「『牧野』＝牧野富太郎」とある。高知県生れの植物分類学者として有名な博士は、小学校中退後、独学で東京帝大助手、講師となり、日本植物分類学の基礎を築いた。学士院会員、文化功労者、歿後三日目（三二・一・二一）に文化勲章授与。

風薫る五月二十日、植樹祭ご出席のため二十五年ぶりに土佐路入りされた陛下は、高知市五台山上にある牧野植物園を訪はれ、青葉若葉に映える園内をご視察された。陛下はさる三十三年の開園記念に山桜の苗木を贈られ、前々から同園にご関心を寄せられてゐたと聞く。地元の高知新聞は「『学者天皇』らしく木に、花に、石にお目を留められては熱心に観察されるので、なかなか前に進まれない」と、そのご様子を報じてゐた。

石を積み上げ、植物の葉をあしらつた台（約三メートル）の上に立つ牧野博士銅像（本郷新氏作、約二・五メートル）の前で、陛下は手を組まれ、山脇哲臣園長のご説明にじつとお耳を傾けられた。「きつと『心の対話』をなさつてゐたに違ひない」といふのが、同園長の感想であつた。温室での熱帯植物をはじめ「さまさまの草木をみつつ歩みきて」、いま「牧野の銅像の前に立ちたり」と、そのままお詠みになつてゐる。

戦後の天皇のお歌には、皇太子、親王など皇族方を除いて特定の個人を対象に詠まれたものは、吉田茂、湯川博士ほか数名にすぎない。「牧野の銅像」といふおことばには、博士に対する温かさ、親しみがこめられてゐる

やうに感じ取れる。卜部侍従たちのお話によると、陛下は皇居で博士からご進講を受けられたときのことを思ひ出されてゐたといふ。

(『国民同胞』昭和五十四年一月号)

昭和五十五年元日発表の

御製・御歌を拝誦して(抄) (松吉基順)

甘樞丘にて

丘にたち歌をききつつ遠つおやのしろしめしたる世をししのびぬ

甘樞丘は、奈良県明日香村にある一四七メートルの小高い丘である。

「歌をききつつ」は、奈良新聞が詳しく報道してゐるので引用する。

「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香久山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原
は 加万目立ち立つ うまし国そ あきづ島大和の国は

飛鳥の里に、犬養孝・阪大名誉教授のろうろうたる朗詠が響いた。千五十年前、舒明天皇が天の香久山で国見をされたときに詠まれた歌。いま、甘樞丘に「昭和の国見」に立たれた天皇陛下は、古代の心を宿す大和三山、飛鳥・藤原古京、多武峰、二上山、葛城山などをご覧になりながら、じつと耳をすまされた。「舒明、天武両天皇などがお作りになつた万葉歌四首を独特の『犬養節』で高らかに歌い上げたが、最後に志貴皇子が飛鳥古京を

なつかしんで詠まれたという

采女うねめの袖そで吹きかへす明日香風都あすかこを遠とほみいたづらに吹く
を朗詠ろうぎ申し上げた。」

「遠つおやのしろしめしたる世をししのびぬ」と一気にお詠みになられたご心境は、遠つみ祖のお治め遊ばされた飛鳥・藤原の時代に御身自らを置かれたやうに感ずる調べである。

「世をし」の「し」は強意の助詞で、この強い言葉に、舒明天皇、天武天皇がたのお治めになられた当時の盛んな精神を、「歌」によつて切実に憶念される陛下の深い御心を思はずにはゐられない。

正倉院にて

遠つおやのいつき給へるかずかずの正倉院のたからを見たり

「いつく」は「傳く」で、「大切に取扱ふ」の意である。

このお歌にも「遠つおや」のみ言葉があるが、過ぎ去りし日のこと故、通常ならば「いつき給ひし」と表現するところであらう。しかし陛下は「いつき給へる——正倉院のたから」とお詠みになつてをられる。この御歌を繰返し拝誦してみると、陛下は、遠つみ祖と直接に、うつつに接してをられるご心境におありになるのだ、と私は感ずるのである。現実には眼前にある数々の宝物、それは千年余も昔の聖武天皇のご遺愛品であるが、その現前のご遺愛品を介在として、あたかも陛下ご自身が遠つみ祖にご対面なさつてをられるが如くに——それ故にこそ「いつき給へる」と仰せられたのではないだらうか。

法隆寺にて

過ぎし日に炎をうけし法隆寺たちなほれるをけふはきて見ぬ

法隆寺の金堂壁画が焼失したのは昭和二十四年一月であり、私にはかすかな記憶しかなく、昔のこととして忘れてしまつてゐた。

この度陛下が法隆寺をお訪ねになられたのは六十四年ぶりで、大きく生長したお手植の松を感慨深げにご覧になつた（奈良新聞）。そのお久しぶりのご訪問もさることながら、陛下は法隆寺の炎上にお心を痛めてをられたのである。「焼けたときはたいへんだつたでしょうね。涙する思いでした。立派に修復できて嬉しく思います。」とお言葉をかけられたと奈良新聞は報じてゐた。何といふ大きく深き恵みのお言葉であらうか。法隆寺金堂の炎上に、陛下はこの三十年間み心を痛め続けてをられたのである。

「たちなほれる」といふみ言葉は、昭和二十五年の「名古屋の街」の他、横浜、長崎、福井、仙台などの街の復興に、また迎賓館の修復にもお詠みになつてをられる。「たちなほれる」のみ言葉は、陛下の永く深い祈念のみ心より発する大御言葉と拝するのである。

また「けふはきて見ぬ」のみ言葉は、これも昭和二十年の戦災地視察の御歌の「いでたちて来ぬ」と同じ深いみ思ひがこめられてゐるやうで、唯々大御心を仰ぎまつるのである。

皇后御歌

春日山くれゆくすがたをみさけつつ心しづかにいにしへを思ふ

「みさける」は「遠くを見やる」の意である。皇后さまは甘樫丘にはお登りになられなかつたが、天皇さまと同じみ心のままに、遠つみ祖のお治めになられたいにしへの世をお偲びになられたのである。

中宮寺のついでの内にしづもりてさざんくわの花きよらかに咲く

「中宮寺」は、聖徳太子がご創建なされた尼寺で、法隆寺の東隣りにある。「ついで」は「築地」で、土塀である。「しづもり」は広辞苑によると「静まる・鎮まる、に同じ。(明治時代の造語か)」とある。「静かに落ちつく」の意である。音調の上で、皇后さまは「しづもりて」とお詠みなられたのであらうか。いかにも皇后さまのお優しい御心をそのままに感じられる御歌と拝するのである。

〔『国民同胞』昭和五十五年一月号〕

昭和五十六年元日発表の

御製・御歌を拝誦して（抄）（小林 国 男）

御 製 明治神宮鎮座六十年大祭にあたり明治天皇を偲びまつりて

外国とつくにの人もたたふるおほみうたいまさらにおもふむそちの祭に

御 歌 明治神宮鎮座六十年大祭にあたり昭憲皇太后を偲びまつりて

世にひろく蚕飼こがひのわざをすすめむとつとめましけるみ心を思ふ

五十五年十一月六日の西日本新聞には、「天皇皇后兩陛下は六日午前、鎮座六十年大祭が行はれてゐる東京代々木の明治神宮を参拝された。兩陛下の同神宮ご参拝は四十九年の昭憲皇太后六十年祭以来。兩陛下は、いったん貴賓館に入り、天皇陛下皇后陛下の順に高沢信一郎宮司の先導で本殿に進み、同神宮に参拝された。」の記事について、前掲の御製と御歌が記されてゐた。

「外国の人もたたふるおほみうた」といふ上の句につゞいて、「いまさらにおもふむそぢの祭に」といふ八、八と連続した字余りの下の句の句調に、陛下の謹厳なお心と深いしみとほるやうな御感慨が、私の身内にもしみわたりゆき、いひしれぬ感銘を覚えたのである。「むそぢの祭」は「六十年祭」の意。

さらに陛下は明治神宮御鎮座六十年大祭にあつて明治天皇を御追憶なされるのに、歴史にのこる数々の御偉業御事蹟を概括されるのではなく、それらさまざまの御業蹟を内にささへる「おほみうた」つまり「明治天皇御製」そのものにみ心を馳せられたといふことに、このお歌の重要性を思ふのである。

しかもその「おほみうた」は外国の人でさへも、たたへてゐるではないか。例へば昭和五十四年、カーター大統領が宮中晩餐会の席上で、明治天皇御製の英訳を直接朗読して、明治天皇の御遺徳をお偲び申し上げたのは、テレビの実況放送で国民ひとしく知るところとなつたが、今上陛下御自身も、おそらくその場で深い感慨を催され、外国人でさへもこのやうにみ歌を拝してその御徳をお偲び申し上げてゐることをまのあたりにされて、あらためて明治天皇の御製のもつ大きな意義について思ひを深められたその御気持ちだが、「外国の人も」の「も」のお言葉や、「いまさらにおもふ」といふ字余りの語調の中に、しみじみと拝されるのである。そして現代の日本において、明治天皇の御製を拜誦することによつて、その御遺徳を偲びまつらうとする日本人のいかに少ないかを思ふとき、このお歌の意味するものは、現代日本人の、明治天皇のお言葉お歌への無痛感に対する一大警告と

さへうけとめられ、かしこききはみといはなければならぬ。

明治天皇が、「和歌」を「シキシマノミチ」と御表現になり、日本人の求め生きるべき道として、その御生涯を「和歌」創作鑑賞の御修練に励まれた、その数々の「おほみうた」が、言葉の全く違つた外国の人の心までも動かしてゐるといふ確かな事実に対する今上陛下の深い御感動が、一首全体のひびきの中にこめられてゐると思はれてならないのである。

成人式

初春におとなとなる浩宮のたちまさりゆくおひたちいのる

今年の正月元旦に発表された御製五首の第一首、「成人式」のお歌は、成人式を迎へられた第一皇孫殿下に対し、「おとなとなる浩宮ひろのみやの」とお歌の中に直接宮様のお名前をおよびかけになり、「たちまさりゆくおひたちいのる」と力強いお言葉で結ばれてゐるが、将来天皇となり国の運命を御一身に荷はせ給ふ凛々しいお姿を偲びたまふ大御心が拝せられるのである。

（『国民同胞』昭和五十六年一月号）

昭和五十七年新年

御製 拝誦（抄）（関 正臣）

警視庁新館

新しき館やかたを見つつ警察の世をまもるためのいたつきを思ふ

五十六年一月十七日警視庁に行幸、新館をつぶさに天覧あり。

館とは殿舎・建物を云ふが、此の場合は単なる構造や外見では無くて、警視庁として機能するに不可欠な一切を備へた活動体を此の様に表現遊ばしたと拝する。「見つつ」といふ句が之を裏書きする。即ち「外から概見して」では無くて「内側に設けられた施設や機材を仔細に点検してみて」のお心持ちだと拝するのである。それ故に「いたつき」（この場合は「病ひ」「慰め」ではなくて「心身を労するつとめ」といふ概括的抽象的な語が俄然具体性を帯びて来るのである。

新館の設備を私は全く知らないが、現在の治安を思ふにつけ「御苦労さん」の挨拶を禁じ得ない。陛下は国民の代表として逐一点検なさり、それ故に「いたつき」を沁々感じ入られたのに違ひない。そのことは世俗的な、ありきたりの、慰労の辞などとはくらべものにならぬ難さである。「世をまもる警察」との仰せを蒙つた警察官諸氏の感激は想像を絶するものがあるに違ひない。

奈良 東大寺

いくたびか禍まがをうけたる大仏もたちなほりたり皆のさちとなれ

五十六年五月二十三日東大寺に行幸啓、佐保山管長の御誘導に依つて「昭和大修理」成つた大仏殿を御視察遊ばした。

「いくたびか禍」大仏は聖武天皇の勅願に依り天平勝宝四年（西曆七五二、以下同）開眼したが延暦五年（七八六）以降裂碑が生じて西に傾き、斉衡二年（八五五）震災で頭が落ち、治承四年（一一八〇）兵乱に炎上、永祿十年（一五六七）兵乱に炎上、現在のものは元祿五年（一六九二）開眼である。因みに昭和大修理の大仏殿の抑々そととの落成供養は宝永六年（一七〇九）であつた。

東大寺大仏は居高（坐してゐるもの高さ）五丈三尺五寸（一六・二一メートル）で、鑄銅像としては世界最大。かかる巨大な建立の前提条件は、高度な文明と高度の秩序、要するに高度の文化であり、それが、前述の様な災禍をくぐりぬけつつ千二百年後の今日に伝へられてゐることは我が国の文化そのものを端的に内外に闡示してゐる。

大仏殿の昭和大修理を報ずるものは、高さや広さ、或いは棟の両端の金の据ゑ物などに氣を取られて居た。言はば「仏作つて魂入れず」であるが、陛下は、さういふ外見の評価ではなくて魂をはつきりと把んでおいで遊ばす。即ち「大仏もたちなほりたり」と仰せられるのである。サンケイの記事に依ると佐保山管長に対し「大仏は昔の通りなのか」と御下問あり、更に侍従を通して「大仏がいくたの被害を受けながらよく保存されてゐるのを見てうれしく思ふ」との御感想をお伝へ遊ばした御由。更に付記して置きたいのは「皇后さまは、大仏の前を去るさい振り返つて、深ぶかと礼をなさつてゐた」といふことである。

昭和五十八年元日発表の

御製を拝誦して（抄）（高木尚一）

新春に当つて発表せられた、天皇皇后両陛下の御製御歌をいたゞいて何度も拝誦した。

こゝ数年にわたり毎年本誌新年号に御製御歌について諸兄の感想が謹んで発表されてゐるが、今年はこの四月で、天皇陛下が満八十二歳におなりになり、三月には、皇后陛下は満八十歳におなりになる。まことにお目出度き限りである。

御製御歌は、ありのまゝに平易なご表現の中に、渾身のご意志と祈りのお言葉となつて表現せられてゐるもので、心をこめて拝誦しつゝそのお心にふれてゆく外はない。そしてたゆまずに作歌の道に精進しつゝ、ひたすら国がらを守り文の林を茂らせむとの、天皇のお志をうけつぎ守るべく努力せねばならぬと決意を新たにす次第である。

日御碕にて

秋の果の碕の浜のみやしろにをろがみ祈る世のたひらぎを

天皇が「秋の果の碕の浜のみやしろに」とお詠みになつたみやしろは日御碕神社である。昭和十年発行の辞苑（新村出編）によれば島根県簸川郡大社町（現地名）日御碕にある神社。上社下社に分れ素戔嗚尊（上社）、天照大御神（下社）を祀る。当時国幣小社。夜久正雄氏の印象によると、神社は日御碕の海岸に近く建てられ、

日本海の荒波のうちよせる厳しい景観の中に荘嚴さをたへてゐるお宮である。

「をろがみ祈る世のたひらぎを」と詠ませられる深い大御心は、

わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば

の御製にも深いつながりのある様に仰がれる。この御製は、直接には七月の豪雨による各地の被害をご心痛になつたものと拝察されるが、「をろがみ祈る」といふご表現は測り知れぬ深いみ心のこもつてゐるご表現である。

行徳野鳥観察舎にて

秋ふくる行徳の海をみわたせばすがもはむれて渚なみさにいこふ

行徳の海をみわたせばとまづ全体の背景を詠まれ、つゞいて、すがもはむれて渚なみさにいこふ、と結ばれ、すがものむれと概念化せず、すがもは「むれて」と動詞を用ひられることにより、すがもの群が一羽毎にリズムカルな動きを見せてゐる様を詠まれつゝ「渚なみさにいこふ」と渡り鳥すがもに對するお心づかひを詠まれてゐる。無技巧の技巧ともいふべきご表現と仰ぐ外はない。

（『国民同胞』昭和五十八年一月号）

昭和五十九年元日御発表の

御製を拝誦して（抄）（加納祐五）

昭和五十九年は、今上陛下御成婚六十周年と、皇太子殿下御成婚二十五周年の二つのお喜びごとが重なるお目出度い年である。まづ国民挙つて心からのお祝ひを申し上げたい。このよき年の元日に御発表のあつた御製を拝誦してのつたなきおもひの限りを述べさせていただくこととする。

気多神社の森

斧入らぬみやしろの森めづらかからたちばなの生ふを見たりき

昨年五月、石川県津幡町の県森林公園での全国植樹祭に御臨席のため、金沢から能登路をお廻りになつたり、能登一の宮の気多神社に立ち寄られてお詠みになつた御製である。御祭神は大己貴命おほなむち。御案内役の三井宮司および御説明役の里見金沢大学講師から伺つたところによれば、このお宮の社叢は広さ約一万坪。高木層、亜高木層、灌木層、草層、地上面層の五層を完全に備へた数少い原生林で、その中に、素戔鳴尊すさのと奇稻田姫命くしいなだひめをお祀りする奥社の祭儀のため、年にただ一度大晦日に、限られた神官のみが足を踏み入れることのできる「入らずの森」であり、二千有余年前の林相を今に残すといふ。カラタチバナはヤブコウジ科の常緑低木、葉は披針形で濃緑色、夏に小さい白色の花をつける。その分布は精々富山県を北限とするもので、更に北に位置するこの社叢に比較的多く見られるのは、自然林としての環境によるものと考へられ、これも珍らしいことであるといふ。新聞

の伝へるところによると、自生のものとしては珍らしいオモトにお顔を近づけられ「花は咲くのか」と質問されたり「原生林がこのやうに昔のままに保存されてゐるのは、ほかのところでも屢々見られるやうに住民の信仰と関係があるのだね」とお尋ねになるなど「入らずの森」への御興味は尽きない御様子であつた由である。「めづらかに」は主として「斧入らぬみやしろの森」にかかるが「からたちばなの生^おふ」ることにも同じお気持ちをいだかれたものではないかと拝される。「斧入らぬ」といふ言葉には昭和三十六年に

斧入らぬ林をゆきて驚きぬしらねあふひは群れ咲きにほふ

といふ御歌があり「めづらかに」には昭和五十六年に

めづらかにコンピニューターにて動きゆく電車に乗りぬこちよきかな

の御歌がある。前者は今回のものと同じく、原生林の昔のままの自然の中に新鮮なおどろきを示され、後者はこれと全く異なる先端科学技術の世界に尽きぬ興味をお示しになつた。神話信仰の世界と生物学的現象とハイテクノロジーの領域と、それらはすべて清新な御感覚御関心と広大な御精神とのうちに統べをさめられてあるものと仰がれる。随行の記者は、このときのやうに御満足の御表情は滅多に拝見できないものであつたと伝へてゐるが「生ふを見たりき」といふ御表現に御感興の深かりしことの一端をうかがふことが出来るのではなからうか。「き」は回想の助動詞であるから、この御歌は御覧になつたみ社の森の景観そのものを直叙されたのではなく、それを御覧になつた事実についてお詠みになつたのである。その時間の経過のうちに新鮮至純の感覚世界の表現がやがて思想詩へと展開しようとする微妙な消息を、比類なくよどみないみ調べによつてお示しになつたことを、この

うへなく有難く拝誦したことである。

行田の足袋をおもふ

足袋はきて葉山の磯を調べたるむかしおもへばなつかしくして

これも昨年の五月、埼玉県行田市に「さきたま資料館」をお訪ねになつたときの御歌である。行田は有名な足袋の産地。いまはゴム長靴を用ゐられる海洋動植物の採集調査に、以前は地下足袋をお穿きになつたのである。縁りの地行田を訪ねられてその昔を懐しく思ひ出されたのであつた。内外諸般の情勢のなほ厳しく険しかつたそのころ、わづかにお慰みとせられた生物学の御研究。「なつかしくして」といふ御表現のゆたかな余韻のなかに無量の御感慨のほどをうかがふことができる。その御感慨はとりもなほさずまた日本の歴史でもあつた。この御製を拝誦しつつ、数ならぬわれらもまた、各々たどりこし歴史のあとを深く思ひおこさしめられるのである。

〔「国民同胞」昭和五十九年一月号〕

補説 御製の御改作について (廣瀬 誠)

昭和五十八年五月二十二日、天皇陛下は石川県能登一ノ宮気多神社に参拝された。神社は日本海に面し、背後は立入禁止の神域「入らずの森」で、鬱蒼と茂つてゐる。神社付近の寺家遺跡からはおびただしい古代遺物が出土し、「渚の正倉院」といはれるほどで、大和朝廷にとつて北陸屈指の重要な大社であつた。大伴家持も越中守在任中の天平二十年(七四八)この社に参拝し、万葉集に「氣多神宮」と記載してゐる程である。陛下の「気多

神社の森」と題する御製は五十九年元日の新聞各紙に発表された。

斧入らぬみやしろの森めづらかにからたちばなの生ふを見たりき

の一首である。しかしその後「生ふを見」のお言葉遣ひに文法上の疑義が生じ、陛下もすでお氣付きで御自ら「生ふるを見たり、ではどうか」と仰せ出され、改作されたといふ。(朝日新聞五九・三・二五)。本年七月、同神社境内にこの御製の碑が建立されたが、入江相政侍従長の謹書で、御改作の「生ふるを見たり」の形で刻まれた。碑の本体は幅一六〇センチ、高さ一五〇センチ、厚さ二八センチ、能登特産の滝石である。(北陸中日五九・九・一七)

「見たりき」は過去形である。深い感興を回想の形で、強いアクセントをつけて示されたのである。御改作の「見たり」の「たり」は「てあり」の縮まつた形で、完了と存在、今日の前につくづくと御覧になつた趣である。強ひて口語訳すれば前者は「見たことであつた」、後者は「見た」となろうか。両形ともそれぞれ捨て難い味はひがあると拝するが、「生ふるを見たり」の方が一層のびやかで、調べが流動的である。回想から一步踏み込んで、御覧になつたその時点に身を置いての姿勢で作り返されたのであらう。

御製の御改作は従来もあつたことで、新聞に発表された形と『あけぼの集』に収録された形との間には、かなり辞句の相違がある。単に仮名遣の「みずばしよ」「みづばせを」の他、「足なみをそろへ」「足なみそろへ」、「をさなき日」、「をさなき日」、「麦生青々」「麦生青あをと」、「めづらしと見つ」「めづらしく見つ」、「早く咲く」「早く咲く」、かなり大きく変つたのは「たひらぎの世のかくあれかしと」が「世の荒波はいかにあらむと」、「秋たつらしも」が「秋立ついまも」、「黒潮の寄する紀の国」が「黒潮のうちよする紀伊の」となつてゐる等である

(後に記した方が『あけぼの集』の形)。

詔勅など公的文書は一字一画たりとも動かしえぬ厳肅なもので、まさに「綸言汗（あせ）の如し」であるが、詩歌といふものは作者の改作がかなり自由で、御製の場合も、御自ら、あるいは側近や専門歌人の意見をお汲みになつて改作なきことは古くからあつた。

民間歌人の場合でも、雑誌等への発表、歌集収録、その初版と再版以下、全集収録等で改作を重ねた例はおびただしく、読者は、改作よりもむしろ原作を愛誦して居る場合もあつたりして、ために複数の歌形が並び行はれてゐる例も少なからずある。

皇后陛下の「やつがしら絵巻御歌」も御自筆(昭和四十八年日本芸術院会館「皇后さまの絵と書展」展示。夜久正雄氏模写)では「海こえて満州のあたりにかへりけむ」とあつた。その「満州」が『あけぼの集』では「中国」となつてゐる。国際的配慮から、止むをえず満州の名称を避けられたためかと拝するが、歌としての情感は原作がはるかに優つてゐる。

明治天皇御製の場合は、大正十一年宮内省蔵版、文部省刊行の『明治天皇御集』と、昭和三十九年明治神宮刊行の『新輯明治天皇御製集』との間に数多くの辞句・題詞の相違がある。(岩波文庫本は前者の普及版。角川文庫本は後者からの抄出本)。御改作の詳細な事情は不明。両御集とも信頼すべき公的出版物であるが、これ以外に、明治天皇御製の名で世上流布してゐる歌の中には、出所不明の疑はしいものが若干あつて、注意すべきことを付記しておく。

(『国民同胞』昭和五十九年十二月号)

昭和六十年元旦

御製を拝誦して（小柳陽太郎）

昭和六十年、今上陛下御在位六十年目といふ記念すべき年はあけた。天皇、皇后両陛下は、この歴代の天皇さまのためしにも稀な、記録的に長い御在位の年を、陛下満八十四歳、皇后さま八十二歳といふお揃ひの御長寿でお迎へになつたのである。このかぎりなくめでたい新年を、民草揃つて御祝ひ申し上げることが出来るのは、昭和の御代に生きるわれわれの、この上ないよろこびであつて、「みたまわれ生けるしるしあり」といふ古へびとの感慨がさながらに実感された新年であつた。この輝かしい年の始め、今年もまた天皇御製五首が発表されたが、それに先に発表されてゐる鹿児島における植樹祭、奈良国体の折の御製を加へて、拙い所感ながら、思ふところを綴らせていただきたいと思ふ。

今上天皇御製（昭和五十九年）

伊豆須崎にて

あたたかき須崎の岡も春寒くあたまさくらはまだ咲きのこる

赤坂東宮御所にゆきて

桜の花さきさかる庭に東宮らとそぞろにゆけばたのしかりけり

鹿兒島にて

みわたせばしづかなる朝をちかたに白き煙のたつ桜島

ロスⅡアンジュエルス・オリンピック

外国びととををしきそふ若人の心はうれし勝ちにこだはらず

福島県果樹試験場

黄の色にみのりたる実をもぎとれり梨の畑の秋ゆたかなる

御製(第三十五回鹿兒島県・全国植樹祭)

霧島の麓に苗をうゑにけりこの丘訪ひしむかし偲ひて

第三十九回国民体育大会秋季大会についてお詠みになつた御製

若草山見ゆる広場の秋晴にあまたの人のよろこびつどふ

第一首、詞書にある須崎は伊豆半島の西端、下田の港からほど近いところであるが、この地でお詠みになつた御歌には、広く太平洋にむかつて開かれた大自然の中で、微妙に変化する季節の推移をこまやかに詠まれた御歌が多い。この御歌もまたその系列に属する御歌であつて、陛下は咲き残る「あたまざくら」の中に、いまだ去りやらぬ冬の余韻をたしかめたまふのである。「あたまざくら」とは須崎にほど近い河津町に住む大塩耕三君の報告によれば、伊豆の大島を原産地とする大島桜の交配種で、伊豆半島一帯に分布する寒桜の一種であつて、一月

中旬に咲きはじめ、一月の終りには散り果てるのが常であるといふ。たゞ去年は異常な寒波のため開花がおくれ、陛下が二月、須崎の御用邸に御出ましになつた時はまだ桜も散り残つてをり、その花の姿が陛下の御目にとまつたのであらうといふことであつた。

季節の変化に対する陛下の御観察は鋭いが、この御歌に見られるやうに、過ぎ去らむとしていまだこの世にとどまる、もののいのち、そのいのちをわがものごとくにいとほしみたまふ大御心が、かかる観察にいのちを与へたまふのであらうか。特に最後の「まだ咲きのころ」といふ、さりげない御言葉が身にしみるのである。一般に陛下の御製の大きな特色の一つは、その第五句に独自のしらべを挿入することであつて、この「まだ咲きのころ」といふ「2・2・3」のしらべは、昨年春発表された「そびえたる三つの遠山みえにけりかみつけの秋の野は晴れわたる」の「野は・晴れ・わたる」の御歌にも見られるやうに、小刻みにゆれ動きながらも、全体に悠揚迫らぬ独特のしらべを感じしめらるるのである。

第二首は、同じ、桜を題材とされてはゐるが、一首目とは異つて、春爛漫の豪華な桜が配されてをり、その桜花を背景に東宮さま御一家と御所の御庭を散策される折の、心豊かな家庭的情愛をよませ給うた御歌である。陛下が東宮御所を御訪問になつたのは四月二十二日、それより十日ほど前、四月十日に御結婚二十五周年の銀婚式を御迎へになつた皇太子殿下御夫妻の御招きによるものであつた。

当時の新聞によれば、「昼食のあと陛下は皇太子さま、皇后さまは美智子さまの案内で桜が満開の赤坂御苑内を散策された」といふ。銀婚式当日、皇太子さま御夫妻が宮中に御挨拶におみえになつた時には、御風邪を召してをられた皇后さまも当日は御元気に、陛下と御一緒に春の一日をお楽しみになつたが、それに礼宮さま、紀宮

さまざま御加はりになつた心暖まる御写真も翌日の新聞に掲載されてゐた。

たゞ同じ家庭的愛情をおよみになつたとはいつても、例へば昭和二十八年、岡山の池田家に嫁がれた順宮さまを御訪ねになつた折の

池の辺のそぞろあるきに娘らとかたるゆふべは楽しかりけり

といふ御歌に拝せらるゝやうな、御病氣勝ちの姫宮さまと久々に語り合はれる時の、しみじみとした御心境とは異り、日嗣ぎの皇子とともに「さきさかる」桜の下を歩まるる大御姿には、国家永久の発展、隆昌を象徴さるるごとき無限の力を偲ばせらるるのである。

三首目の桜島を御詠みになつた御製の雄大深刻の御表現には、拝誦した刹那、まさに息を呑むやうなおもひがあつた。陛下が植樹祭のため鹿兒島の地をお踏みになつたのが五月十八日、その日は鹿兒島の市内に御泊りになり、翌十九日と次の二十日、いづれも霧島の林田温泉に宿をおとりになつたが、「みわたせば」といふ御言葉からして、この御歌は近く鹿兒島の町から仰がれた桜島ではなく、やはり霧島の高原からのほろかなる眺望であらう。朝のしゞまの中、なだらかな高原のスロープの彼方、遠く静かに錦江湾上に浮ぶ桜島の雄姿、なかでも白い噴煙がひときは目にしみるのである。特に第四句の「白き煙の」といふ主語が「たつ」といふ述語を第五句にもちこんで、二つの句をまたぎながら、そのまゝ「桜島」といふ体言に堂々と歌ひをさめてゆかれるところ、王者の威厳に満ちた御製と拝せらるるのである。さらに「たつ」といふT音のくりかへしが僅か二回ながら、噴煙のはげしさ、荒々しい山肌さへも偲ばせて、読者に強烈な印象を与ふところ、凡慮の及ぶところではない。

第四首、ロス・アンジェルス（ロサンゼルスといふ一般の呼び方を避けて正確な呼称を御使ひになつてゐることも心をとゞむべきであらう）のオリンピックに集ふ若人、それは日本の若人のことであつて、単に外国の若い選手たちがお互ひに技を競つてゐるといふ一般的な状況を概括的に叙述されたのではない。さうではなく、もつと具体的に、日本の選手たちの姿をクローズアップして、その日本の若人が外国の選手たちに交つてけなげにたゝかふさまを詠まれたのである。このお歌で私が特に心をひかれたのは、第五句の「勝ちにこだはらず」といふ御言葉であつた。それは、和歌らしい粉飾を一切捨ててしまつた自由奔放な御表現であつて、まさしく陛下ならではの御言葉と申し上げべきであらう。このやうなことは、一首目の「あたまざくら」の御歌の「まだ咲きのころ」の「まだ」といふ御言葉にも感じたのであるが、陛下はそれを「いまだ」といふ文語的雅語的御表現をおとりになることなく、口語そのまゝの「まだ」といふ言葉を御選びになつてゐた。それと同じく、ここでも「勝ちにこだはらず」といふ通俗の言葉を、しかも字あまりのまゝで御使ひになつてをられるのである。この、それこそ「もの」にこだはらぬ天真さながらの御表現であつて、それは内にみなぎる力の大きさを示すといへようか。内に力乏しき人はかゝる平凡な言葉を用ひることをためらひ、外に言葉を飾らんとするのである。「勝ちにこだはらぬ」ところに「ををしき」があり、「ものにこだはらぬ」ところに真の勇氣がある。陛下がおもちになつていらつしやる「勇氣」とはこのやうな勇氣であつた。

第五首、陛下は九月二十五日、福島駅からお車で福島市飯坂の県果樹試験場を御視察、その折、梨畑で二十世紀梨三個を御収穫になつた、その折の御製である。その御旅行には皇后さまも御一緒であつたが、この御歌をお

よみになつた翌日には、両陛下御新婚時代の思ひ出も深い猪苗代湖畔の高松宮別邸「天鏡閣」にお出ましになつた。さう思へば、この御歌全体に波うつゆたかなしらは、同年一月、御成婚六十周年のよき日をお迎へになつた両陛下の心暖まる追憶を背景として生れたものであらうか。現にこの梨畑における両陛下の御睦ましい御姿は新聞記者の目にも深く印象づけられたらしく、翌日の現地の新聞には「ナシ園に用意されたイスにお掛けになる時は、陛下がかたわらのイスをお示しになるなど、皇后さまへの細やかなお心遣いを見せておられた」といふ一節がある。両陛下の温かな御心の通ひあひと、この御歌にあふれるおもひの深さとは二つのものではない。そのおもひがあればこそ、第三句目で「もぎとれり」と文が終止して、一首二文になつてゐるにもかゝはらず、一首全体が見事に統一されてゐるのであらう。特に「梨の畑の」と「の」を重ねつつ「秋ゆたかなる」といふ連体止めを終る堂々たる格調は、国土豊穰の予祝とさへ言ふべき、ゆるぎない力がこめられてゐると思はれるのである。

植樹祭における御製は五月二十日、鹿児島県始良郡牧園町の高千穂においておよみになつたもの、御歌の中の「むかし偲ひて」の「むかし」は鹿児島大学の学生諸君からの報告によれば、この御製が鹿児島県にお下げ渡しになつた直後の六月二十二日、読売新聞鹿児島版に、陛下がこの地にお出ましになつたのは昭和十年十一月のことであり、従つて「むかし偲ひて」の「むかし」とはその時をさすと記されてゐる由——とすれば当時陛下は三十五歳の御壮年、翌年には二・二六事件、さらに支那事変へと昭和の動乱は拡大の一途をたどりつゝあつたそのさ中にあつて、祖国の運命を一身に担ひたまふ陛下の、若々しくも凛々しい御姿が偲ばれるではないか。その日の陛下の御眼にも、必ずや今日の日と同じく白煙を吐く桜島の雄姿が鮮かに映じてゐるにちがひない。それより五十年、未曾有の動乱を生きてこられた陛下、その陛下の万感のおもひが、この「むかし偲ひて」といふ一語に

こめられてゐると思ふのである。(なほ鹿児島県当局に確かめたところによれば、「むかし偲ひて」のひは古語の清音「ひ」をお使ひになつてをられる。)

奈良の国体における御製については紙面が尽きたが、たゞ書きとゞめておきたいことは国体の御製にたびたび拜する「広場」「よろこび」「つどふ」といふ御言葉の中に、スポーツに技を競ふこともさることながら、この国体の行事を国民と国民の心のふれあふ場所として、この上ないおよろこびをもつて見守つてをられる大御心がこめられてゐることである。国民とともに生きていかれる陛下、その陛下の御製を毎年の年頭に仰ぐことの出来る日本の国柄の尊さをただ思ふばかりである。

今年もまた皇后さまの御歌の発表がなかつたのは淋しかった。時折りテレビでにこやかな御姿を拜して心慰められるが、これからもさらにさらに天皇陛下とともにお健やかに、御長寿を重ねられるやうお祈りしてやまない。最後になつたが所感文執筆についてたゞならぬ御配慮をいたゞいた島田好衛氏をはじめ文中記させていたゞいた大塩耕三君、鹿児島大学の学生諸君に心から御礼を申し上げて、拙い所感を終らせていたゞきたいと思ふ。

(「国民同胞」昭和六十年一月号)

今上天皇の御歌

夜久正雄 謹編

本篇は主として、広瀬誠氏と青山新太郎氏とがその時々々の新聞発表等によつて集録した御製集に、『あけぼの集』の御歌を加へた御製集である。今日までに公表された御製については、われわれの知りうる範囲の御製をすべて集めたことになる。と言つても、全く私の手控への御製集であつて、もちろん何ら公的の権威のあるものではない。ただ、読者の拝誦の便を考へて公表するのである。長年にわたつて心をつくして集録に當つてはるるが、誤謬も少くあるまいと思はれるので、御気づきの方には御叱正を仰ぎたい。

御製の用字法については、新聞発表のそれと『あけぼの集』のそれとの間に、相当箇所について違ひがある。和歌であるから、用字法はそれほど問題にならないと思ふが、それでも、どちらに拠るべきかは考へなければならぬ。『あけぼの集』は昭和四十九年の公刊であるから、それ以前の御製については『あけぼの集』に拠るべきであるとも考へられるが、『あけぼの集』に載つてゐない御製も多いし、本書の研究と解説とはみなその時々々の新聞発表の御製を対象として、その用字法にしたがつてゐるので、本篇においては、新聞発表の折の御製の用字法に拠ることとした。御題および詞書きについても、主として新聞発表に拠ることとした。なほ、歌詞そのものの相異は重要であるから、気づいたところは括弧内に註記した。また、『あけぼの集』ではじめて拝見した御製については括弧内に（あけぼの集）と註記した。

ふり仮名については、新聞発表の折に付せられたものはもちろんであるが、なほ、短歌になじみの薄い人には読みにくいと思はれる箇所について、編者の考へによつて相当箇所につけ加へた。編者のあやまりもあるかも知れないが、大方読者の便を考へたことである。識者の御叱正を乞ふ。

御製の掲載年次については、元日新聞発表の御製は、前年作の御製と考へ、新年歌会始の御製は当年の御製として、配列した。御年齢は「数へ年」で記載申上げた。

御歌会始の御題の読み方については今回特に宮内庁の高力幸太郎氏の御教示を得て、訂正する事ができた。本篇作成上参照した書物は次の通りである。記して謝意とする。

『天皇歌集・みやまきりしま』（毎日新聞社、昭和二十六年）

『今上陛下御集』（神社本庁、昭和三十一年）

『今上陛下御製集』（青山新太郎氏謹編、昭和四十五年）

『天皇さま』（甘露寺受長氏著、講談社、昭和五十年）

『今上陛下のお歌』（宮崎五郎氏著、昭和四十六年）

『歴代天皇の御歌』（小田村寅二郎、小柳陽太郎両氏共編、日本教文社、昭和四十八年）

『天皇皇后両陛下御集・あけぼの集』（読売新聞社、昭和四十九年）

——昭和五十一年九月二十三日 編者識

右につづけて、昭和六十年『君し旅ゆく』（坊城俊民氏著）がある。これらを参照して、前版につづけて、昭和六十年一月十日の歌会始の御製まで、新聞発表等の御製を『国民同胞』（国民文化研究会発行）に拠り増補し、且つ昭和四十八年四十九年植樹祭の御製を『不二』（大東塾発行）の「今上陛下御製碑調査資料」に拠り増補し、五十一年版の誤字誤植を訂正した。

——昭和六十年六月二十一日 編者識

今上天皇の御歌

(大正十年—一九二一—御年二十一歳 東宮御歌)

社頭 暁 (歌会始)

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

(大正十一年—一九二二—御年二十二歳 摂政宮御歌)

旭光 照波 (歌会始)

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

(大正十二年—一九二三—御年二十三歳 摂政宮御歌)

暁山 雲 (歌会始)

あかつきにこまをとどめて見渡せば讃岐のふじに雲ぞかかれる

(大正十三年—一九二四—御年二十四歳 摂政宮御歌)

新年 言志 (歌会始)

あらたまの年を迎へていやますは民をあはれむ心なりけり

(大正十四年—一九二五—御年二十五歳)

山色 連天 (歌会始)

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも

(大正十五年Ⅱ昭和元年—一九二六—御年二十六歳)

河水清(歌会始)

広き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

(昭和三年—一九二八—御年二十八歳)

山色新(歌会始)

山やまの色はあらたにみゆれども我まつりごといかにかあるらむ

(昭和四年—一九二九—御年二十九歳)

田家朝(歌会始)

都いでてとほく来ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道

(昭和五年—一九三〇—御年三十歳)

海辺巖(歌会始)

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐいはほの力をぞおもふ

(昭和六年—一九三一—御年三十一歳)

社頭雪(歌会始)

ふる雪にころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

(昭和七年—一九三二—御年三十二歳)

暁鶏声(歌会始)

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる

(昭和八年—一九三三—御年三十三歳)

朝 海 (歌会始)

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

(昭和八年三月三日、鈴木侍従長をして白川大将の遺族におくらせたまへるみ歌)

をとめらの雛まつる日に戦をばとどめしいさを思ひ出でにけり

(昭和十年—一九三五—御年三十五歳)

池 辺 鶴 (歌会始)

楽しげにたづこそあそべわが庭の池のほとりや住みよかるらむ

(昭和十一年—一九三六—御年三十六歳)

海 上 雲 遠 (歌会始)

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

(昭和十二年—一九三七—御年三十七歳)

田 家 雪 (歌会始)

みゆきふる畑のむぎふにおりたちていそしむ民をおもひこそやれ

(昭和十三年—一九三八—御年三十八歳)

神 苑 朝 (歌会始)

静かなる神のみその朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

(昭和十四年—一九三九—御年三十九歳)

朝陽映島（歌会始）

高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま

（昭和十五年—一九四〇—御年四十歳）

迎年祈世（歌会始）

西ひがしむつみかはして栄^{さか}ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

（昭和十六年—一九四一—御年四十一歳）

漁村曙（歌会始）

あげがたの寒きはまべに年おいしあまも運べりあみのえものを

（昭和十七年—一九四二—御年四十二歳）

連峯雲（歌会始）

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

（昭和十八年—一九四三—御年四十三歳）

農村新年（歌会始）

ゆたかなるみのりつづけと田人^{たびと}らもかみにいのらむ年をむかへて

（昭和十九年—一九四四—御年四十四歳）

海上日出（歌会始）

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海^{おほうみ}のはらに日はのぼるなり

（昭和二十年—一九四五—御年四十五歳）

社 頭 寒 梅（歌会始）

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

（終戦時の御製） 四首 （木下道雄著『宮中見聞録』による）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり
外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

戦災地視察 三首

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

折にふれて

海の外の陸に小島にのこる民のうへ安かれとただいのるなり

皇居内の勤勞奉仕者 二首

をちこちの民のまゐきてうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ
戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

母宮より信濃路の野なる草をたまはりければ 二首（あけぼの集）

わが庭に草木をうゑてはるかなる信濃路しののせにすむ母をしのばむ

夕ぐれのさびしき庭に草をうゑてうれしとぞおもふ母のめぐみを

(昭和二十一年—一九四六—御年四十六歳)

松 上 雪 (歌会始)

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

(昭和二十二年—一九四七—御年四十七歳)

あ け ぼ の (歌会始)

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつちのおともたかくきこえて

水戸の町あけそめにけりほのぼのと常陸ひたちさかひの山もみえきて (あけぼの集)

帝室林野局移管 四首

うつくしく森をたちてわざはひの民におよぶをさけよとぞおもふ

こりて世にいだしはすとも美しくたもて森をば村のをさたち

料の森にながくつかへし人人のいたつきをおもふ我はふかくも

九重ここのへにつかへしことを忘れずて国のためにとなほはげまなむ

帝室博物館の文部省移管 二首 (あけぼの集)

いにしへの品のかずかずたもちもて世にしらしめよ国の華はなをば

世にひろくしめせとぞ思ふすめぐにの昔を語る品をたちて

新憲法施行（あけぼの集）

うれしくも国の掟おきてのさだまりてあけゆく空のごとくもあるかな

長野県大日向村

浅間あさまおろしつよき籠かごにかへりきていそしむ田人たびとたふとくもあるか

紙（あけぼの集）

わが国の紙見てぞおもふ寒き日にいそしむ人のからきつとめを

和倉にて

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

広 島（あけぼの集）

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

東北地方視察 二首

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ

あつさつよき磐城いはらきの里の炭山にはたらく人をををしとぞ見し

栃木県益子窯業指導所にて

ざえのなき媼おきなのゑがくすゑものを人のめづるもおもしろきかな

奈良にて

大き寺ちまたに立ちていにしへの奈良の都のにほひふかしも

折にふれて

老人おいびとをわかき田子たこらのたすけあひていそしむすがたたふとしとみし

冬枯ふゆがれのさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとはせむ

潮風しほのあらきにしたふる浜松のををしきさまにならへ人人

(昭和二十三年—一九四八—御年四十八歳)

はるのやま(歌会始)

うらうらとかすむ春べになりぬれど山には雪ののこりて寒し

春たてど山には雪ののこるなり国のすがたもいまはかくこそ

(あけぼの集)

折にふれて

たふとしと見てこそ思へ美しきすゑものつくりいそしむ人を

外国とらくにとあきなふために糸をとりまたはたおりてはげめとぞ思ふ

せつぶん草さく山道の森かげに雪はのこりて春なほ寒し

海の外ととむつみふかめて我國わがのふみのはやしを茂らしめなむ

悲しくもたたかひのためきられつる文ふみの林をしげらしめばや

秋ふけてさびしき庭に美しくいとどりのあきざくらさく

霜ふりて月の光も寒き夜はいふせき家にすむ人をおもふ

風さむき霜夜しもよの月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

緑なる牧場まきばにあそぶ牛のむれおほどかなるがたのもしくして

たゆまずもすすむがををし路をゆく牛のあゆみのおそくはあれども

しづみゆく夕日にはえてそそり立つ富士の高嶺たかねはむらさきに見ゆ

(あけぼの集)

(昭和二十四年—一九四九—御年四十九歳)

朝 雪 (歌会始)

庭のおもにつもるゆきみてさむからむ人をいともおもふけさかな

九州地方視察 五首

雲仙嶽にて

高原たかはらにみやまさりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

開 拓 地

かくのごと荒野が原に鋤うまをとる引揚人ひきあげびとをわれはわすれじ

福岡県和白村青松園にて

よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松まつの木のまに

佐賀県因通寺洗心寮にて

みほとけの教守りてすくすくと生ひ育つべき子らにさちあれ

福岡県大牟田

海うみのそこのつらきにたへて炭すすほるといそしむ人ぞたふとかりける

葉山にて

潮のひく岩間藻もの中石の下海牛うみうしをとる夏の日ざかり

引揚者に対して 二首（『あけぼの集』前出の「開拓地」につづく）

外国につらさしのびて帰りこし人を迎へむまごころをもて
国民くにたみとともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

湯川博士ノーベル賞受賞 二首

新聞のしらせをけさは見て嬉し湯川博士はノーベル賞を得つ
賞を得し湯川博士のいさをしはわが日の本のほこりとぞ思ふ

国民体育大会（『あけぼの集』昭和二十三年）

風さむき都の宵に若人のスポーツの歌ひびきわたれり

折にふれて

枯れ立てるコスモスのみにむらがりこかはらひわは冬たつ朝あした

横浜訓盲院にて

めしひたる少女をとめがともの編物にはげむ姿かまを感かじてわれ見つ

未婚還者をおもふ（あけぼの集）

外国にながくのこりてかへりこぬ人をおもひてうれひはふかし

（昭和二十五年—一九五〇—御年五十歳）

若 草（歌会始）

もえいづる春のわかきさよろこびのいろをたたへて子らのつむみゆ

博士らに二首

うれひなくまなびの道に博士らをつかしめてこそ国はさかえめ
はかなしと人は見らめど博士らのいたつきにより世はすすむなり

〔あけぼの集』昭和二十四年〕

淡路島

朝ぼらけ鳴門の宿ゆ見わたせば淡路島山霞たなびく

香川県大島療養所 二首

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば

船ばたに立ちて島をば見つつ思ふ病やしなふ人のいかにと

興居島にて

静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし

室戸三首

室戸なる一夜の宿のたましだをうつくしと見つ岩間岩間に

うつぼしたのこるもさびし波風のあらき室戸の磯山のへに

室戸岬うみべのをかに青桐のはやしの枯木たちならびたる

（あけぼの集）

（あけぼの集）

名古屋にて 三首

名古屋の街さきに見しよりうつくしくたちなほれるがうれしかりけり
 日の丸をかかげて歌ふ若人のこゑたのもしくひびきわたれる
 夜の雨はあとなくはれて若人の広場につどふ姿たのもし

帝室博物館移管

いにしへのすがたをかたるしなあまたあつめてふみのくにたてまほし

(昭和二十六年—一九五—御年五十一歳)

朝 空(歌会始)

淡路なるうみべの宿ゆ朝雲のたなびく空をとほく見さけつ

貞明皇后崩御 三首

かなしけれどはふりの庭にふしをがむ人の多きをうれしとぞ思ふ (あけぼの集)

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも

池のべのかた白草を見ることがに母の心の思ひいでらる

京都府天の橋立 二首

めづらしく晴れわたりたる朝なぎの浦わにうかぶ天の橋立

文殊なる宿の窓より美しとしばし見わたす天の橋立

滋 賀 県 三首

谷かげにのこるもみち葉うつくしも虹鱗にしますをどる醒井さめがみのさと

をさなきあつめしからになつかしも信楽焼しがらぎの狸を見れば

〔あけぼの集』第一句「をさなき日」〕

（ヤンマーディーゼル分工場）（あけぼの集）

うるはしく戦場たもちて山すその永原村はすくはれにけり

奈良県吉野

空高く生ひしげりたる吉野杉世のさま見つついく代へぬらむ

三重県賢島

美しきあごの浦わのあまをみなとりし真たまは世にぞかがやく
色づきしさるとりいばらそよごのみ目にうつくしきこの賢島かしじま

○

古の奈良の都のをとめども新しき世にはた織りはげむ

はり紙をまなぶ姿のいとほしもさとの足らぬ子も励みつつ

きよらなる家にすまひてよるべなき老人もまたうれしかるらむ

（昭和二十七年—一九五二—御年五十二歳）

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重桜やへ咲く春となりけり

〔あけぼの集』「平和条約発効の日を迎へて」〕

国の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに

花みづきむらさきはしどい咲きにほふわが庭見ても世を思ふなり

冬すぎて菊桜さく春になれど母の姿をえ見ぬかなしき 〔あけぼの集〕昭和二十八年「姿の見えぬ」
わが庭にあそぶ鳩見て思ふかなたひらぎの世のかくあれかしと

〔あけぼの集〕下句「世の荒波はいかにあらむと」

母宮をおもふ 二首（あけぼの集）

母宮のめでてみましし薯烟ことしの夏はいかにかあるらむ

あつき日にこもりてふとも母宮のそのの畑をおもひうかべつ

順宮厚子結婚（あけぼの集）

いもとせの深きちぎりをあがた人よろこびくるる声のとよもす

東北視察の折に 七首

秋ふかき山のふもとをながれゆく阿武隈川のしづかなるかな 〔福島県〕

うちあぐる花火うつくし磐城なる阿武隈川の水にはえつゝ

水きよき広瀬川への谷ぞひは木木のもみちに美しきかな

島島もかすかに見えぬ朝ぎりの深くこめたる松島の海 〔宮城県〕

うすくこく木木のそめたるみちのくの面白山のあたりすぎゆく

ありし日の母の旅路をしのぶかなゆふべさびしき上の山にて 〔山形県〕

豊年のしるしを見せてうちわたす田の面はるばるつづく稲づか

菊久栄

この秋にほひそめたる白菊のさかり久しく榮えゆかなむ

立太子礼

このよき日みこをばいはふ諸人のあつき心ぞうれしかりける

○

しをれふすあしの葉がくれいづこよりわたりきにけむこがものあそぶ

木がらしのすさぶみ空はすみにすみてふけゆく夜半の月ぞ寒けき

古の文まなびつつ新しきのりをしりてぞ国はやすからむ

(昭和二十八年—一九五三—御年五十三歳)

船 出 (歌会始)

霜にけぶる相模の海の沖さして舟ぞいでゆく朝のさむきに

外国の港をさしてふなでせしむかししのべばいままたのしき

(あけぼの集)

△皇太子の海外旅行▽出 発 (あけぼの集)

外国に旅せしむかししのびつつ春さむきけふのいでたちおくる

ナポリ湾頭カプリ島 (あけぼの集)

皇太子も琅玕洞をたづねしとききてはるけきむかししのびぬ

英国女王戴冠式 (あけぼの集)

皇太子のたづねし国のみかどとも昔にまさるよしみかはさむ

ロンドンよりの便りを見て（あけぼの集）

あて人はまこともてみこを待ちきとのたよりうれしも昔を思ふ

パリよりの便りを見て（あけぼの集）

パリよりのみこのたよりのなつかしもわが訪れし昔おもひて

婦 朝（あけぼの集）

皇太子を民の旗ふり迎ふるがうつるテレビにこころ迫れり

婦 国

すこやかに空の旅より日のみこのおり立つ姿テレビにて見し

外人の生物愛護の状況をききて 二首（あけぼの集）

生物のほしいままに園に遊ぶとふ話をききてうらやましかり

湖につりするひとも法を守るゆかしきころ学びてしがな

皇太子の旅ものがたりうかららと集ひて聞きつ時を忘れて

（あけぼの集）

折にふれて（あけぼの集）

さくら田の道のほとりの糸柳あをめぐかげを堀にうつせり

弟秩父宮の四十日祭に鶴沼を訪ひて（あけぼの集）

鉢の梅その香もきよくにほへどもわが弟のすがたは見えず

水 害

荒れし国の人らも今はたのもしくたちなほらむといそしみてをり
嵐ふきてみのらぬ稲穂あはれて秋の田見ればうれひ深しも

松山国民体育大会（あけぼの集）

沖繩の人まじりていさましく広場をすすむすがたうれしき

松山市聾学校

あはれなる啞の子らをたくみにも教へみちびくいたづきを思ふ

高知にて

保育所のわらはべあまた楽しげに遊ぶを見れば心うれしも

小松島の旅館にて

よろこびのいろもあふれて堀の辺ににぎはしく踊る阿波の人びと
心こめし仕掛花火は堀の辺の水にうつりてうつくしく見ゆ

高松にて

いにしへの書に名高き屋島見ゆる広場にきそふ人のたのもし

四国の復興（あけぼの集）

戦のあとしるく見えしを今来ればいとをしくもたちなほりたり

岡山にて

池の辺のそぞろありきに娘らとかたるゆふべは楽しかりけり

（あけぼの集）

新穀献上者に 二首

新米にんまいを神にささぐる今日の日に深くもおもふ田子たごのいたづき
 一年ひとしの誠こめたるたなつものささぐる田子にあふぞうれしき

〔あけぼの集〕昭和二十九年

（昭和二十九年—一九五四—御年五十四歳）

林（歌会始）

ほのぼのと夜はあけそめぬ静かなる那須野なすのの林鳥の声して
 ほととぎす声たかく鳴くしづけさを那須の林にたのしみにけり

（あけぼの集）

藤の花こずゑにかかるはつ夏は那須の林のうつくしきとき

（あけぼの集）

植樹祭に際して

人々とうゑし苗木よ年とともに山をよろひてさかえゆかなむ

山崎あたりの車中にて

山崎に病やしなふ人見ればにほへる花もうつくしからず

舞子にて

見わたせば海をへだてて淡路島なつかしきまでのどかにかすむ

伊勢神宮に参拝して（あけぼの集）

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

北海道地方視察、昭和九年の夏の天候とくらべられて

夏草のおひたち見つつうれはしも二十年前のひよりも似て

岩手県にて

たへかぬる暑さなれども稲の穂の育ちを見ればうれしくもあるか

(あけぼの集)

さきの旅路今また過ぎてくらぶればゆとりのあるが見えてうれしき

『あけぼの集』「うれしも」

網走道立公園(あけぼの集)

浜の辺にひとりおくれてくれなるに咲くがうつくしはまなすの花

澗沸湖畔にて

湖の面にうつりて小草喰む牛のすがたのうごくともなし

阿寒国立公園 二首

えぞ松の高き梢にまつはれる薄桃色のみやままたたび

水底をのぞきて見ればひまもなし敷物なせるみどりの毬藻

(あけぼの集)

札幌国民体育大会(あけぼの集)

うれしくも晴れわたりたる円山の広場にきそふ若人のむれ

事業にはげむ道民を

なりはひにはげむ人人ををしかり暑さ寒さに堪へしのびつつ

社会事業を(あけぼの集)

おほきなるめぐみによりてわび人もたのしくあれとわれ祈るなり

飛行機上より 二首

ひさかたの雲居貫く蝦夷富士のみえてうれしき空のはつたび
 松島も地図さながらに見えにけりしづかに移る旅の空より

(あけぼの集)

葛の花 (あけぼの集)

篠竹にまとふまくずの花のいろくれなるにほふ那須野の秋は

洞爺丸の惨事

その知らせ悲しく聞きてわぎはひをふせぐその道疾くところ祈れ

北の旅のおもひ出ふかき船も人も海のもくづとなり果てにけり

(あけぼの集)

伊豆西海岸堂ヶ島にて

たらちねの母の好みしつはぶきはこの海の辺に花咲きにほふ

駿河湾の採集 (あけぼの集)

富士の嶺の影さす海に網ひきてさちをさぐるがおもしろきかな

(昭和三十年—一九五五—御年五十五歳)

泉 (歌会始)

みづならの林をゆけば谷かげの岩間に清水わきいづる見ゆ

宮城県植樹行事に際して

茂れとし山べの森をそだてゆく人のいたつき尊くもあるか

宮城県黒川郡大衡村

日影^{ひかげ}うけてたちががよひぬ春の雪きえし山辺^{やまのへ}に植ゑたる松は

松島にて

春の夜の月の光に見渡せば浦の鳥々波にかけさす

相撲

ひさしくも見ざりし相撲^{すまひ}ひとびとと手をたたきつつ見るがたのしさ

輕井沢にて

ゆふすげの花ながめつつ楽しくも親子語らふ高原の宿

八月十五日那須にて

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

神嘗祭に皇居の稲穂を伊勢神宮に奉りて 二首（あけぼの集）

八束穂^{やつかほ}を内外の宮にささげもてはるかにいのる朝すがすがし

わが庭の初穂^{はつほ}ささげて来む年のみのりいのりつ五十鈴^{いすず}の宮に

三ツ沢の国民体育大会（あけぼの集）

晴れわたる秋の広場に若人のつどふすがたのいさましきかな

三ツ沢国体開会式場（あけぼの集）「平沼亮三」

松の火をかざして走る老人^{おきな}のををしき姿見まもりにけり

（新聞発表第四句「田の実いのりつ」）

浦島ヶ丘に立ちて

いくさのあといたましと見し横浜も今はうれしくたちなほりたり

箱根強羅環翠楼にて

思ひでのふかき山々さびしげにそばだつ見えて秋ぞくれゆく

日本鋼管川崎製鉄所

新しきさえに学びて工場たくみばにはげむ人らをたのもしと見つ

社会福祉法人エリザベス・サンダース・ホーム（あけぼの集）

この子らをはぐくむ人のいたつきを思ひてしのぶとせとせのむかし

秩父セメント有恒クラブにて

朝もやはうすうす立ちて山々のながめつきせぬ宿の初冬

正仁の成年（あけぼの集）

晴れわたるけふのよき日にわがみこのををしき姿見るがうれしも

をりにふれて

なりはひに春はきにけりさきにはふ花になりゆく世こそ待たるれ

（小田原に往復された時に作られ吉田茂元首相に贈られたみ歌）

行きかへり枝折戸しやうどをみて思ひけりしばし相見ぬあるじいかにと

（昭和三十一年—一九五六一御年五十六歳）

早 春（歌会始）

たのしげに雉子ひなごのあそぶわが庭に朝霜ふりて春なほ寒し

山口県植樹行事に際して

木を植うるわざの年年さかゆくはうれしきことのきはみなりけり

山口県矢筈が丘の植樹

人々とつじ花咲くこの山に鋏を手にして松うゑてけり

防府市の毛利邸にて

水清きいささ小川の流れゆくたたらたたらの庭の春のしづけさ

児島湾締切堤塘を見て

海原をせきし堤に立ちて見れば潮ならぬ海にかはりつつあり

岡山県山陽町

見わたせば今を盛りに桃咲きて紅にほふ春の山畑

王子陸上競技場の開会式

たたなづく六甲むいかの山なみ近く見る広場につどふ若人のむれ

尼崎防潮堤を見て

さきざきに思ひをいたす県人のこころも見えてうれしき堤

旅の宿にて

つたもみち岩にかかりて静かにも旅の館やかたの秋の日は暮くる

関西の工場を見て 二首

外国のそれを取りいれ我が方かたのわざもたくみにいよなりゆく
かしましく機械の音の工場にひびきわたるをたのもしと聞く

関西の復興

いくさのあといたまじかりし町々もわが訪ふごとに立ちなほりゆく

農業技術研究所を見て

新しきざえに学びて田づくりのわざも日に日に進みゆくなり

大阪市立弘済院（あけぼの集）

世のなかをさびしく送る老人にたのしくあれとわれいのりけり

エチオピアの皇帝を迎へて（あけぼの集）

外国とくこくの君をむかへて空港にむつみかはしつ手をばにぎりて

（昭和三十二年十一月五十七—御年五十七歳）

ともしび（歌会始）

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

植樹行事に際して

人々と苗木をうゑて思ふかな森をそだつるそのいたつきを

日光の宿にて

たちならぶ杉のかなたにそびえたつあかなぎ山に雲はこのこれり

岐阜の宿にて

夢さめし旅寝の床に鳥の声きこえて楽し宿の朝あけ

蒲郡の宿にて

朝霞たなびく海に竹島のかげをうつせる宿の見わたし

漁船（あけぼの集）

ひき潮の三河みかわの海にあさりとるあまの小舟せなわの見ゆる朝かな

四十周年記念に際し全国民生委員に（あけぼの集）

さちうすき人の杖ともなりにけるいたつきを思ふけふのこの日に

葉山にて 三首（あけぼの集）

青空にうき立つ雲のおもしろくみわたされけり城ヶ島あたり

舟出してはるけくも見つ大島のけむりにまがふ峰のしらくも

ほのぼのとあけゆく空をみわたせばうす紫の雲ぞたなびく

甲府春風寮にて

よるべなき老嫗おきなの身にもあたたかき春風かよふ家のあれかし

甲府の宿にて

ながむれば雨もいとはずまだきより湯村の小田をだに人のいそしむ

河口湖の宿にて

みづうみに灯火うかび打上うちあけの花火はひらく山の夜空に

那須にて(あけぼの集)

高原に立ちて見わたす那須岳に朝ゐる雲のしろくしづけし

水口屋にて西園寺公望を思ふ

そのかみの君をしみじみ思ふかなゆかりも深きこの宿にして (あけぼの集)

波風のひびきにふとも夢さめて君の面影しのぶ朝かな (御題「興津の宿にて」ともあり)

静岡国民体育大会(あけぼの集)

足なみをそろへていまし草薙の広場につどふわかうどのとも

静岡県立三方原学園

親にかはるなさけに子らのすくすくとのびゆくさまを見ればたのもし

浜松の宿にて

いくさのあといたましかりし此こゝの市まちもほかげあかるくにきはへる見ゆ

大昭和製紙吉原工場

母宮のゆかりも深きたくみ場に入りてつぶさに紙つくり見る

佐久間ダム

たふれたる人のいしぶみ見てぞ思ふたぐひまれなるそのいたつきを

(昭和三十三年—一九五八—御年五十八歳)

雲 (歌会始)

高原のをちにそびゆる那須岳に帯にも似たる白雲かかる

植樹行事に際して

美しく森を守らばこの国のまがもさけえむ代々をかさねて

関門国道トンネルを見て

人の才を集めて成りし水底かそこの道にこの世はいやさかゆかむ

植栽地志高湖畔にて

鍬くわを手てに苗こゑうゑてけり人々とともに由布岳ゆふだけ眺めながらも

狩野川沿岸の水害

思出の多き川とてひとしほにその里人のいたましきかな

下関の宿にて

見てあれば色とりどりの美しき火花ぞ開く海の夜空に

赤間神宮ならびに安徳天皇陵に詣でて

水底みぞに沈み給ひし遠とおつ祖おやを悲しとぞ思ふ書あひ見るたびに

別府の宿にて

桜花今を盛りと咲きみちて霞にまがふ宿の見わたし

高崎山の猿

山に住むあまたの猿の人なれていつくしきかな餌をあさるさま

宮崎の宿にて

来て見ればホテルの前をゆるやかに大淀川は流れゆくなり

鹿児島にて

ながむれば春のゆふべの桜島静けき海にかげをうつせり

リデルライト記念養老院を訪ひて

母宮の深きめぐみを思ひつつ老人たちの幸いのるかな

大阿蘇の岩間に雪はのこるなり山桜咲く春としもなく

阿蘇の宿にて

裏山に登りて見ればなつかしき雲仙岳たけはほのかすみり〔あけぼの集〕第五句「ほのかにかすみり」

九州復興（あけぼの集）

たびたびの禍まがにも堪へてををしくも立ちなほりたり筑紫路つくしちはいま

博多の宿二首

行きかよふ車をさばく警官のうごき見てるぬやどの窓より
（あけぼの集）

さ夜ふけて街の灯火みわたせばいろとりどりの光はなてり

戸畑の宿にて

黒煙かなたこなたに立ち立ちて北筑紫路のたのもしきかな

富山国体開会式

時々の雨ふる中を若人の足なみをそろへ進むををしき

〔あけぼの集〕第四句「足なみそろへ」

富山の宿より見たる立山連峯

高々と峯々青く大空にそびえ立つ見ゆ今日の朝けに

富山市の復興

県庁の屋上にしてこの町の立ちなほりたる姿をぞ見る

ルンビニ園にて

御仏につかふる尼のはぐくみにたのしく遊ぶ子らの花園

黒部の工場にて

たくみらもいとなむ人もたすけあひてさかゆく姿たのもしと見る

宇奈月の宿より黒部川を望む

紅に染め始めたる山あひを流るる水の清くもあるかな

氷見の宿にて

秋深き夜の海原にいさり火の光のあまたつらなれる見ゆ

女子ホッケー競技

石動小学校（あけぼの集）

ふる雨もいとはできそふ北国の少女らのすがた若くすがしも

和倉の宿

波たたぬ七尾の浦の夕ぐれに大きな能登島よこたはる見ゆ

輪島市の鴨ヶ浦にて

かづきしてあはびとりけり沖つべの舳倉島より来たるあまらは

湯涌の宿にて

旅宿の杉の青葉は秋の雨にぬれてひとときは色のさえたる

下呂の宿にて

にぎりたる益田川見てこの夏の嵐のさまも思ひ知らるる

科学博物館の貝類展（あけぼの集）

めづらしき海と陸との貝を見て集めしひとのいたつきをおもふ

明仁と正田美智子の結婚内約 二首（あけぼの集）

けふのこの喜びにつけ皇太子につかへし医師のいさを思ふ

喜びはさもあらばあれこの先のからき思ひていよよはげまな

比国のガルシア大統領および夫人を迎へて 三首（あけぼの集）

外国のをさをむかへついでいさかひを水にながして語らはむとて

戦のいたでをうけし外国のをさをむかふるゆふぐれさむし

喜びて外国のをさかへるをば送るあしたは日もうららなり

(昭和三十四年—一九五九—御年五十九歳)

窓(歌会始)

春なれや楽しく遊ぶ雉子^{きざす}らのすがたを見つつ窓のへに立つ

植樹行事に際して

人々とうゑし苗木よ年とともに国のさちともなりてさかえよ

埼玉の植樹祭行事

金尾^{かなせ}山みつばつつじの咲く中に鋏とりながら苗うゑてけり

多摩川をはさみてかかる虹の橋色さまざまに春の日にはゆ

雨はれし武蔵の野辺ははてもなく麦生^{むぎ}青々うちつづきたり

靖国神社の九十年祭

このそぢへたる宮居の神々のくににささげしいさををぞおもふ

皇太子の結婚 二首

あなうれし神のみ前に日の御子^{みこ}のいもせの契^{ちぎ}り結ぶこの朝

日の御子の契り祝ひて人々のよろこぶさまをテレビにて見る

那須にて 二首

谷川を下りてゆけば檜^{ひのき}の枝^えにかかりて葛^{くず}の花咲ける見ゆ

〔埼玉途上二首〕とも

〔あけぼの集〕第四句「青あをと」

〔あけぼの集〕第三句「皇太子」

み空には雲ぞのこれる吹き荒れし野分のわの後の那須の高原

愛知三重岐阜三県の風水害 二首

日の御子をさしつかはして水のまがになやむ人らをなぐさめむとす
 たちなほり早くとぞ思ふ水のまがを三つの県あがたの司つかさに聞きて

東京の国民体育大会 二首

この場こばにつどふ人らのととのひし姿を見るもたのもしくして
 をとめらがをどる姿は見えすして振るともし火の光るこの宵よひ

千鳥ヶ淵戦没者墓苑

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

(昭和三十五年—一九六〇—御年六十歳)

光 (歌会始)

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞ我がねがひなる

植樹行事に際して

鍬を手に苗植ゑ終へて人々のするそのさまを見るが楽しさ

清宮貴子の結婚

千代ちよかけていもせのちぎり祝ふなり春のやよひのこの朝ぼらけ

伊豆大島の宿にて 二首

夕庭に島の少女は踊るなり節に合はせて手振りもかろく

見渡せば白波立てる海づらをへだてて遠く富士の嶺そびゆ

上山の宿にて

樺色のれんげつつじは若葉さす湯宿の庭にあざやかに見ゆ

蔵王山麓の植樹 二一首

人々としらはた杉を植ゑてあれば大森山に雨は降りきぬ

雨の中鋏を手にして人々と苗木植ゑゆく大森山に

山形県の田舎

実桜の花にまじれるりんごの花田づらの里は咲きにほふかな

米沢市にて

国力富まさむわざと励みつつ機織り進むみちのくをとめ

飯坂の宿にて

たぎちゆく摺上川の高岸にかかりてにほふ藤の初花

福島県庁の屋上より吾妻連峰を（あけぼの集）

見わたせばつらなる峯に白雪の残りてさむしみちのくの空

汽車中にて

そびえ立つ安達太郎山に白雪の残れるさまを汽車に見て過ぐ

始めての皇孫

山百合の花咲く庭にいとし子を車にのせてその母はゆく

九州への空の旅 二首

白雲のたなびきわたる大空に雪をいただく富士の嶺みゆ

地図を見るごとき海山しづしづと翼の下をさかりゆきつつ

水前寺陸上競技場にて 二首

大阿蘇おほあその山なみ見ゆるこのにはに技競わざふ人らの姿たのもし

秋の色澄める広場にあまたなるをみなは踊る歌に合はせて

熊本くまもとの宿にて

人々のつらなりて振る灯火を窓越しに見るゆく秋の夜に

(昭和三十六年—一九六一—御年六十一歳)

若わか(歌会始)

旧ふるき都ローマにきそふ若人を那須のゆふべにはるかに思ふ

のどかなる春の光にもえいでてみどりあたらし野辺の若草

福寿草ふくじゅうそう(あけぼの集)

枯草ののこれる庭にしかぎくの花さきにけり春いまだ浅く

(あけぼの集)

九州への旅(日本航空富士号に乗りて)

霞立つ春のそらにはめづらしと雪ののこれる富士の山見つ

〔「あけぼの集」第五句「めづらしく」

佐賀市付近の鶴（あけぼの集）

のどかなる筑紫路ゆけば小山田にさちをつたふる鶴の飛ぶ

鏡山の眺望

はるかなる沓岐は霞みて見えねども渚美（あけぼの集）この松浦瀉（あけぼの集）

有明海の干拓を憂へて（あけぼの集）

めづらしき海蝸牛（あけぼの集）もほろびゆく日のなかれといのる

嬉野の宿にて

春雨のそぼふる庭に咲きにほふつつじの花は色とりどりに

長崎復興（あけぼの集）

あれはてし長崎も今はたちなほり市の人びとによろこびの見ゆ

長崎の宿にて

長崎の港見おろす春ゆふべめぐりの山は霞たなびく

長崎市の街路樹（あけぼの集）

この町のなぎの並木をながめつつ暖かき国としみじみおもふ

長崎にて（龍をどり）

唐国（あけぼの集）ゆ伝はりにける龍をどりは楽（あけぼの集）に合はせて荒れ狂ふなり

西海橋

潮の瀬の速き伊の浦あたらしくかかれる橋をけふぞ渡れる

雲仙岳 仁田峠（あけぼの集）

大阿蘇は波路はるかにあらはれて山なみうすく霞たなびく

雲仙岳 薊谷にて 二首

あいらしきはるとらのをは咲きにほふ春ふかみたる山峽ゆけば

藤色のやま瑠璃草は山峽の峯路に群れていま咲きさかる

雲仙岳・地獄にて

わきいづる湯の口の辺に早も咲くみやまきりしまかたちかはれり

〔あけぼの集〕第三句「早く咲く」

雲仙の宿にて

ホテルの庭棚にまつはる山藤の花咲きにほふ春もたけつつ

日本航空シティ・オブ・サンフランシスコ号に乗りて 二首（あけぼの集）

空翔けて雲のひまより見る難波ふるき陵をはるかをろがむ

白波のよせてはかへす大島をつばさのしたになつかしく見る

六十の賀 三首（あけぼの集）

ゆかりよりむそぢの祝ひうけたれどわれかへりみて恥多きかな

還曆の祝ひのをりも病あつく成子のすがた見えすかなしも

むそとせをふりかへりみて思ひでのひとしほ深きヨーロッパの旅

北海道・モラツツ山麓の植樹 二首

湖の風寒きモラツツ山麓にもろびととともに苗うゑにけり

人々とあかえぞ松の苗うゑて緑の森になれといのりつ

支笏湖畔

湖をわたりくる風はさむけれどかへでの若葉美しき宿

苫小牧営林署第十四号班にて

斧入らぬ林をゆきて驚きぬしらねあふひは群れ咲きにほふ

登別の宿にて

わかみどり朝日にはゆる山峡の出で湯の宿にまた来つるかも

翁島の宿にて

なつかしき猪苗代湖を眺めつつ若き日を思ふ秋のまひるに

赤井谷地にて

雨はれし水苔原に枯れ残るほろむいいちご見たるよろこび

磐梯吾妻スカイラインにて

さるをがせ山毛櫨の林の枝ごとに垂るるを見つつ道のぼりゆく

温海あつみの宿にて

雨あめけぶる緑の山は静かなり庭の山かと思ひけるかな

秋田の国民体育大会

暖かく秋田の人に迎へられてここに正しくきそふ若人

湯瀬の宿にて

深谷ふかやの岩のはざまを流れゆく米代川よねしろの水は澄みにけり

十和田湖の遊覧船にて

おもしろき物語するたをやめの声を聞きつつ五色岩ごしき見る

十和田湖の宿にて

十和田とわだの湖波風立うみたず夕まけて山はあかねに色かはりゆく

花巻の宿にて

打ちならず太鼓を胸にをのこらは鹿のふりしてをどりけるかな

小河内ダム

水み涸がれせる小河内せがうちのダム水底みなそこにひとむら挙げて沈みしものを

英国のアレキサンドラ内親王を迎へて『あけぼの集』には王女殿下

イギリスの姫を迎へて若き日の楽しき旅を語りけるかな

(昭和三十七年—一九六二—御年六十二歳)

土（歌会始）

武藏野の草のさまざまわが庭の土やはらげておほしたてまつ

福井県における植樹行事に際して

緑濃き林になれとをながだにに松の苗木をわれ植ゑむとす

福井県の植樹

遠山は霞にくもる女形谷諸人とともに松の苗植う

福井県の復興

地震にゆられ火に焼かれても越の民よく堪へてここにたちなほりたり

小浜湾にて

波もなき浦をめぐればとらふぐもはまちもあまた遊べるが見ゆ

天橋立

晴れわたる成相山のふもとよりあかず見わたす天の橋立

那智の滝

そのかみに熊野灘よりあふぎみし那智の大滝今日近く見つ

串本にて

若葉さす潮の岬に来てみれば岩にうちよする波しづかなり

紀州白浜の宿にて

雨にけふる神島かみしまを見て紀伊きいの国の生みし南方熊楠みなかたぐまくすを思ふ

下津井の宿にて

夕さればあかねにそまる空のした波たたぬ沖の島山の見ゆ

長良川の鶉飼 二首

篝火かぶりびをたきつつ下る舟ふねぞひに鶉うは川波をたくみにくぐる

長良川鶉飼の夜を川千鳥河鹿かわしかの声の近くきこゆる

華 敵 滝

岩が根をつたひて落つる滝の水白きしぶきとなりてとび散る

中禅寺湖にて

みづうみをわたる船より見わたせば男体山おんたいさんにかかる白雲

小田代おだよが原にて

いく代へしからまつ林直なほき幹のひまにまじりて白樺の立つ

から松の森のこずゑをぬきいでて晴れたる空に男体そびゆ

岡 山 国 体

岡山のあがためぐりて国体にただしくきそふ若人を見つ

日本遺族会創立十五周年に際し

年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる

(あけぼの集)

傷痍軍人のうへを思ひて 二首（あけぼの集）

国守ると身をきずつけし人びとのうへをしおもふ朝に夕に

年あまたへにけるけふも国のため手きずおひたるますらをを思ふ

遺族のうへを思ひて 二首（あけぼの集）

忘れめや戦の庭にたふれしは暮しささへしをのこなりしを

国のためたふれし人の魂をしもつねなぐさめよあかるく生きて

桃山御陵 三首（あけぼの集）

陵も五十の年をへたるなり祖父のみこころの忘れかねつも

五十をばへにける年にまのあたり国のさま見ていにしへおもふ

桃山に参りしあさけつくづくとその御代を思ひむねせまりくる

（昭和三十八年—一九六三—御年六十三歳）

草原（歌会始）

那須の山そびえてみゆる草原にいろとりどりの野の花はさく

青森県における植樹行事に際して

みちのくの国の守りになれよとぞ松植ゑてけるもろびととともに

仙台の復興（あけぼの集）

青葉しげる城より見れば仙台市たちなほりけり眺めもあらたに

仙台の植物園

城あとの森のこかげにひめしやがはうす紫にいま咲きさかる

東北大学理学部付属研究所初代研究所長畑井新喜司を思ふ（あけぼの集）

白海鼠しろなまこ見つつし思ふありし日の畑井博士に聞きにしことを

浅虫の宿にて

初夏はつなつの雨うちけぶる陸奥むつの浦島影うらあはく見えてくれゆく

弘前にて

あかねさすゆふぐれ空にそびえたり紫にほふ津軽つがるの富士は

岡山大学付属病院に厚子をたづねて（あけぼの集）

その病あつひ篤しとききてはるばると訪ねたる今のこころなぎゆく

秋芳洞二首

若き日にわが名づけたる洞穴ほらあなにふたびは来てくだりゆかむとす（あけぼの集）

洞穴もあかるくなれりここに住む生物いかになりゆくらむか

笠山三首

そのむかしアダムスの来て貝とりし見島みしまをのぞむ沖べはるかに（あけぼの集）

秋ふかき海をへだててユリヤ貝のすめる見島をはるか見さくる

波たたぬ日本海にっぽんかいにうかびたる数の島影は見れどあかぬかも（あけぼの集）

横須賀線および三池炭鉱の二大事故（あけぼの集）

大いなる禍まがのしらせにかかるとふたたびなかれとただ祈るなり

（昭和三十九年—一九六四—御年六十四歳）

紙（歌会始）

世にいだすと那須の草木の書よみ編みて紙のたふときことも知りなき

わが庭のかうぞの木もて毛けの国の紙のたくみは紙にすきたり

（あけぼの集）

長野県八子が峯の植樹行事

八子やしが峯にはかに電でんのふるなかもろびともなへうゑをはりたり

諏訪湖精密工場（あけぼの集）

みづうみの辺にたちならぶ工場のさかえゆかなむ日ひをた経るごと

新潟県・国民体育大会

山なみは春ふかくして広庭にあまたの鳩とびのそらたかくとぶ

佐渡の宿にて

ほととぎすゆふべききつつこの島にいにしへ思へばむねせまりくる

おけさ丸（あけぼの集）

風つよき甲板にして佐渡島にわかれをしみて立ちつくしたり

新潟 地震（あけぼの集）

新潟の旅の空よりかへりきて日数も経ぬに大き地震いたる

妙高山麓杉野沢にて

霨もなく高くそびゆる火打山雪のこれるを山越しに見つ

五十年祭にあたりて昭憲皇太后をしのぶ 二首

わが祖母は煙管手にしてうかららの遊をやさしくみそなはしたり

おとうとら友らつどひておほまへに芝居したりき沼津の宮に

(あけぼの集)

正仁親王結婚(あけぼの集)

しづかなる朝ぼらけかな若き二人のけふの祝ひをテレビにて見つ

オリンピック東京大会(あけぼの集)

この度のオリンピックにわれはただことなきをしも祈らむとする

(昭和四十年—一九六五—御年六十五歳)

鳥(歌会始)

国のつとめはたさむとゆく道のした堀にここども鴨は群れたり

草ふかき那須の原より飛びいでしせつかの声を雲間にぞきく

(あけぼの集)

新幹線 二首(あけぼの集)

四時間にてはや大阪に着きにけり新幹線はすべるがごとし

避け得ずに運転台にあたりたる雀のあとのまどにのこれり

鳥取県における植樹行事に際して

静かなる日本海をながめつつ大山の嶺に松うゑにけり

三朝の宿 二首

戦の果ててひまなきそのかみの旅をししのぶこの室を見て

夜の間に河鹿のこゑのひびくなりきよきながれの三朝の川に (あけぼの集)

鳥取の宿にて

飼ひなれしきんくろはじろほしはじろ池にあそべりゆふぐれまでも

鳥取砂丘 (あけぼの集)

砂の丘四里もつづけりかなたなる松のはやしに雲雀のこゑす

宍道湖 三首

夕風の吹きすさむなべに白波のたつみづうみをふりさけてみつ

湖のますあみを見ておもふかな白魚むれてきたりしころを (あけぼの集)

夏ちかし湖をへだてて島根なるみさきの山をはるかみさくる (あけぼの集)

○

夏はきぬ波路の末の隠岐の島霧にくもりて見れども見えす

厚子病氣全快 三首 (あけぼの集)

背のねがひ民のいのりのあつまりてうれしききはみ病なほりぬ

あたらしき薬と医師くしのまことにより岡山の子の病癒えたり

この秋は病の癒えてすこやかにたりたる吾子わがことあひにけるかも

国民体育大会

晴るる日のつづく美濃路みのぢに若人わかんどは力のかぎりきそひけるかな

(昭和四十一年—一九六六—御年六十六歳)

声 (歌会始)

日日ひびのこのわがゆく道を正さむとかくれたる人の声をもとむる

鳩 二首 (あけぼの集)

国民くにたみのさちあれかしといのる朝宮居みやみの屋根に鳩はとまれり

静かなる世になれかしといのるなり宮居の鳩のなくあさぼらけ

愛媛県植樹祭・久谷村大久保 二首 (あけぼの集)

風つめたく雨ふる中に杉苗を人びとともてうゑてけるかな

久谷村くたにを緑にそむる時をしもたのしみにして杉うゑにけり

道後の宿にて

晴れわたるこの朝ぼらけはるけくも霞む四国の山なみを見つ

五色台に少年団の訓練を見て日本にはじめて結成されし頃のことを思ひいでて

この岡につどふ子ら見てイギリスの旅よりかへりし若き日を思ふ

飛行機の旅にて

飛行機の翼つばのました工場を雲間に見たり水島のあたり
晴れわたる大海原ははてもなし八丈島も遠とちにうかびて

秋季国民体育大会

秋ふけてこの広庭に子らはみなふるさとぶりの踊見せたり
若人の力のこもる球たまはとぶ高崎山見ゆるテニスコートに
由布岳ゆふだけの麓の庭に若人は力つくしてホッケーきそふ

山下湖畔の宿にて

しづかなる山下湖には白鳥はくちやうのうかぶ姿も見えてくれゆく

(昭和四十二年—一九六七—御年六十七歳)

魚(歌会始)

わが船にとびあがりこし飛魚をさきはひとしき海を航かきつつ

岡山県植樹祭(岡山市金山の峯)

霏もふかくあたりもみえぬ金山に赤松の苗をこころして植う (あけぼの集)
はるふかみあめふりやまぬ金山のみねに赤松の苗うゑにけり

(民生委員制度五十周年にあたり)

いそとせもへにけるものかこのうへもさちうすき人をたすけよといのる

孝明天皇御覽 二首

百年ももとしのむかししのびてみさきををろがみをれば春雨はるさめのふる
 春はるふけて雨あめのそぼふる池水せいのうみにかじかなくなりここ泉涌寺せんにうし

牡 丹（あけぼの集）

春はるふかみゆふべの庭にわに牡丹花ぼたんはなはくれなるふかくさきいでにけり

埼玉国民体育大会

川かわもあり山やまもそびゆる広ひろき野ののこの武蔵野むさしのに若人わかひときそふ

秩父宮記念館

おとうとをしのぶゆかりのやかたにて秋あきふかき日に柔道じゆうだうを見る

武甲山登山口

山裾さんすその田中たなかの道のきぶねぎくたくれなるににはへるを見つ

吉田茂追憶 二首（あけぼの集）

君きみのいさをけふも思おもふかなこの秋あきはさびしくなりぬ大磯おおいその里

外国とくごくの人ひととむつみし君きみはなし思おもへばかなしこのをりふしに

（昭和四十三年—一九六八—御年六十八歳）

川（歌会始）

岸しづみちかく鳥城とりしろそびえて旭川あさかながれゆたかに春はるたけむとす

秋田県田沢湖畔の植樹祭に臨みえざりしを惜しと思ひて 二首

湖のながめ得ならずと聞く大森に杉をうゑむと思ひしものを
鉢の土に秋田の杉を植ゑつつも国の守りになれといのりぬ

(あけぼの集)

層雲峡

そびえたつ大雪山のたにかげに雪はのこれり秋立つらしも

(『あけぼの集』第五句「秋立ついまも」)

稚内公園

樺太に命をすてしたをやめのこころを思へばむねせまりくる

福井県の国民体育大会

秋なれば福井あがたに若人は力のかぎりきそはむとする

豊岡市コウノトリゲージにて

この秋の最中に見たるここのとり雛をもつらむその日思ほゆ

宮殿の竣工

新しく宮居成りたり人びとのよろこぶ声のとよもしきこゆ

(昭和四十四年—一九六九—御年六十九歳)

星(歌会始)

なりひびく雷雨のやみて彗星のかがやきたりき春の夜空に

新宮殿初参賀

あらたまの年をむかへて人々のこゑにぎはしきにひ宮の庭

折にふれて（あけぼの集）

のどかなる春もなかばの新宮（にひみや）にいろとりどりのつばき花さく

富山県植樹行事

頼成（らんじやう）もみどりの岡になれかしと杉うゑにけり人々とともに

繩ヶ池（いづなが池）にて（富山）

水きよき池の辺（ほとり）にわがゆめのかなひたるかもみずばしよう咲く

〔「あけぼの集」第五句「みづばせを」〕

仁別森林公園にて（秋田）

下草のしげれる森に年へたる直（なほ）き姿の秋田杉を見つ

靖国神社百年祭

国のためのちささげし人々をまつれる宮はももとせへたり

長崎県・国民体育大会

長崎のあがたの山と海の辺（へ）に若人（わかうど）きそふ秋深みつつ

ゆく秋の平戸の島にわたりきて若人たちの角力（すまひ）見にけり

五島列島福江島

久しくも五島を親むと思ひのしがつひにけふわたる波光る灘を
(昭和四十五年—一九七〇—御年七十歳)

花 (歌会始)

白笹山のすその沼原黄の色につこうきすげむれさきにはふ

明治神宮鎮座五十年大祭 (『あけぼの集』昭和三十九年)

おほぢのきみのあつき病の枕べに母とはべりしおもひでかなし

万国博覧会

きのふよりふりいでし雪はや晴れて万国博覧会の時はいたりぬ

七十歳になりて 四首 (あけぼの集)

七十の祝ひをうけてかへりみればただおもはゆく思ほゆるのみ

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなししみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

ななそちになりしけふなほ忘れえぬいとせ前のとつ国のたび

福島県植樹祭・磐梯 (あけぼの集)

松苗を天鏡台にうゑをへていなはしろ湖をなつかしみ見つ

裏磐梯の宿にて

赤松の林の緑の中の宿ゆふべきはやかにみづばせう咲く

富士通株式会社津工場にて

いたつきもみせぬ少女らの精こむるこまかき仕事つくづくと見つ

岩手県・国民体育大会

人びとは秋のもなかにきそふなり北上川のながるるあがた

盛岡にて

すみわたる秋空のあなたはるかにも駒ヶ岳のみね煙はく見ゆ

平泉中尊寺

みちのくのむかしの力しのびつつまばゆきまでの金色堂に佇つ

折にふれて（あけぼの集）

筑紫の旅志布志の沖にみいでつるカゴメウミヒドラを忘れかねつも

（昭和四十六年—一九七—御年七十一歳）

家（歌会始）

はてもなき礪波のひろ野杉むらにとりかこまるる家々の見ゆ

三瓶山

春たけてそら晴れわたる三瓶山もろ人とともに松うゑにけり

三瓶山のふもとにて

春浅き林をゆけば白花のミヤマカタバミむれさきにはふ

欧州の旅

外国の旅やすらげくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に (御題「伊勢神宮参拜」ともあり)

外国の空の長旅ことなきはたづきはりし人のちからとぞ思ふ (あけぼの集)

アラスカの空に聳えて白じろとマッキンレーの山は雪のかがやく

和歌山国民体育大会

黒潮の寄する紀の国秋たけて今日あひきそふ若人たちは (『あけぼの集』第二句「うちよする紀伊の」)

(昭和四十七年—一九七二—御年七十二歳)

山 (歌会始)

ヨーロッパの空はろばろと飛びにけりアルプスの峰は雲の上に見て

(『あけぼの集』「欧州の旅」に出づ)

伊豆須崎にて

谷かげの林の春は浅くして風藤葛の実のあかあかと見ゆ

第二十七回国民体育大会秋季大会

まのあたり桜島みゆる秋晴の広場にけふはひとびとつどふ

マングロープの自生地 (奄美大島) にて

汐のさす浜にしげれるメヒルギとオヒルギを見つ暖国に来て

ミュンヘンオリンピック大会

朝も夕もドイツに競ふ若人をテレビに見つつ思ひやるなり

(新潟県北蒲原郡黒川村胎内平植樹祭)(新潟県立図書館調査)

黒川の胎内平にうゑし杉やがては山をみどりにそめむ

(昭和四十八年—一九七三—御年七十三歳)

子ども(歌会始)

氷る広場すべる子どもらのとばしたる風船はゆくそらのはるかに

式年遷宮

秋さりてそのふの夜のしづけきに伊勢の大神をはるかをろがむ

須崎の夏

夏の朝をさなき孫の紀宮も汐あみしつつかあそびけるかな

須崎の冬

風寒く師走の月はさえわたり海を照らしてひかりかがやく

秋季国体

よべよりの雨はいつしかふりやみて人々はつどふ千葉の広場に

上野動物園

ロンドンの旅思ひつつ大パンダ上野の園にけふ見つるかな

アフリカにすむてふポンゴの珍しさかひなれしさまを見て驚けり

宮崎県植樹祭

飢肥杉を夷守台にうゑをへて夷守岳をふりさけみにけり

(昭和四十九年—一九七四—御年七十四歳)

朝(歌会始)

岡こえて利島かすかにみゆるかな波風もなき朝のうなばら

迎賓館

たちなほれるこの建物に外つ国のまれびとを迎へむ時はきにけり

八幡平ハイッにて

夕空にたけだけしくもそびえたつ岩手山には雪なほのこる

茨城 国体

南より北より来つる選手らの常陸の秋にあひきそひけり

原研東海研究所にて

新しき研究所にてなしとげよ世のわざはひをすくはむ業を

国民宿舍水郷にて

おそ秋の霞ヶ浦の岸の辺に枯れ枯れにのこる大ききはちす葉

よみうりランド水族館

オランダの旅思ひつつマナティーのおよぐすがたをまたここに見ぬ

十一月八日内宮にまゐりて

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

米国大統領の初の訪日

大統領は冬晴のあしたに立ちましぬむつみかはせしく日を経て

弘道館にて

館にて若人たちに蘭学を教へしかの日の斉昭思ふ

岩手県植樹祭

岩手なるあがたの民の憩場の森となれかしけふ植ゑし苗

(昭和五十年—一九七五—御年七十五歳)

祭り (歌会始)

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

比叡山ドライブウェイにて

やまみちのみどりにはえてたにうつぎうす桃色に咲きみちてあり

湖畔のホテルにて

比良の山比叡の峯の見えてゐて琵琶の湖暮れゆかむとす

米国の旅行を無事に終へて帰国せし報告のため伊勢神宮に参拝して

たからかに鶏のなく声ききにつつ豊受の宮を今日しをろがむ

三重 国体

秋ふかき三重あつたの縣に人びとはさはやかにしもあひきそひけり

朝熊山あさまの眺望

をちかたは朝霧こめて秋ふかき野山のはてに鳥羽とばの海みゆ

植樹祭

金勝山こんざ森の広場になれかしといのりはふかしひのきうゑつつ 『志賀』所載

(昭和五十一年—一九七六—御年七十六歳)

坂 (歌会始)

ほのぐらき林の中の坂の道のほりつくせばひろきダム見ゆ

高萩の宿にて

古くよりつたはる浅川のささらの舞音にあはせてはげしくをどる

KDD (国際電電) 茨城衛星通信所

新しき衛生通信のかずかずの施設をまもる人をしおもふ

このゆふべ南伊豆にて大雨のふるとしききてうれひはふかし

佐賀国体 二首

ことそぎて秋の国体はひらかれぬ人々はつどふ佐賀の広場に

ゆく秋ををしみつつけふは若人のハンドボールを神埼に見つ

佐賀の宿にて

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり
夕餉をへ辞書をひきつつ子らとともにしらべものすればたのしくもあるか

茨城県植樹祭

人々とけふ苗木うゑぬ茨城の自然観察の森とはやなれ

(昭和五十二年—一九七七—御年七十七歳)

海(歌会始)

はるばると利島のみゆる海原の朱にかがやく日ののぼりきて

高野山にて

史たみに見るおくつきどころををがみつつ杉おほき並なむ山のぼりゆく

折にふれて

初秋の空すみわたり雲の峯ひざかりにそびゆ那須岳の辺に

第三十二回国民体育大会秋季大会

花火ひらき風船あがり青森の秋の広場に若きらつどふ

弘前の秋はゆたけしりんごの実小山田の園をあかくいろどる

強き雨のまがにもめげず青森のあがたの小田に稲穂いろづく

和歌山県植樹祭

かすみたつ春のひと日をのほりきて杉うゑにけり那智高原に

(昭和五十三年—一九七八—御年七十八歳)

母(歌会始)

母宮のひろひたまへるまてばしひ焼きていただけり秋のみそのに

春はやく南風ふきたてて鳴神のとどろく夜なり雨ふりしきる

牧野植物園

さまざまの草木をみつつ歩みきて牧野の銅像の前に立ちたり

戸隠にて

秋ふけて緑すくなき森の中ゆもとまゆみはあかくみのれり

繊維工業試験場

コンピューター入れて布地を織りなせるすすみたるわざに心ひかるる

中央線の車中にて

山やまの峯のたえまにはるけくも富士は見えたり秋晴れの空

高知県植樹祭

甫喜ヶ峰みどり茂りてわざはひをふせぐ守りになれとぞ思ふ

(昭和五十四年—一九七九—御年七十九歳)

丘（歌会始）

都井岬の丘のかたへに蘇鉄見ゆこは自生地の北限にして

明治村を訪ねて

人力車瓦斯燈などをここに見てなつかしみ思ふ明治の御代を

加江田溪谷（自然休養林）にて 宮崎県

薜むせる岩の谷間におひしげるあまたのしだは見つたのしも

甘樞丘にて

丘にたち歌をききつつ遠つおやのしろしめしたる世をししのびぬ

正倉院にて

遠つおやのいつき給へるかずかずの正倉院のたからを見たり

法隆寺にて

過ぎし日に炎をうけし法隆寺たちなほれるをけふはきて見ぬ

第三十回全国植樹祭にあたり六月二十六日愛知県へ賜つた御製

初夏はつちの猿投さなげのさとに苗なうゑてあがたびとらのさちをいのれり

十二月二十七日宮崎県へ賜つた御製

若人の競ふ広場を囲みたるカナリー椰子に南国を思ふ

（昭和五十五年—一九八〇—御年八十歳）

桜（歌会始）

紅のしだれざくらの大池にかけをうつして春ゆたかなり

成人式

初春におとなとなれる浩宮のたちまさりゆくおひたちいのる

須崎の春

朝風に白波たてりしかすがに霞の中の伊豆の大島

賢島宝生の鼻

花の咲くそよごうばめがし生ひ茂り浜辺の岡はこきみどりなり

上二子山にて

岩かげにおほやましもつけ咲きにはふところのももいろの花

箒川のほとり滝岡にて

小雨ふる那須野が原を流れゆく小川にすめるみやこたなごは

第三十一回三重県全国植樹祭

人びととうゑたる苗のそだつとき孤野のさとに緑満つらむ

第三十五回国民体育大会秋季大会

とちのきの生ふる野山に若人はあがたのはまれをになひてきそふ

明治神宮鎮座六十年大祭にあたり明治天皇を偲びまつりて

外国とくこくの人もたたふるおほみうたいまさらにおもふむそちの祭に

(昭和五十六年—一九八一—御年八十一歳)

音(歌会始)

伊豆の海のどかなりけり貝をとる海人の磯笛の音のきこえて

警視庁新館

新しき館やふたを見つつ警察の世をまもるためのいたつきを思ふ

奈良東大寺

いくたびか禍まがをうけたる大仏もたちなほりたり皆のさちとなれ

神戸ポートアイランドにて

めづらかにコンピュータにて動きゆく電車に乗りぬこちよきかな

伊香保山森の岩間に茂りたるしらねわらびのみどり目にしむ

須崎より帰りきにけるわが庭にはなあやめ咲けり梅雨寒つゆさむのけふ

桃華楽堂とうかにて

沖繩の昔のでぶり子供らはしらべにあはせたくみにをどる

那須にて

野分の風ふきあれくるひ高原の谷間のみちはとざされにけり

昭和五十六年十二月二十四日滋賀県民に御下賜

秋ふかき琵琶湖をはさみ若人は力をつくしきそひけるかも

(昭和五十七年—一九八二—御年八十二歳)

橋(歌会始)

ふじのみね雲間に見えて富士川の橋わたる今の時のま惜しも

さんしゆゆの花を見ながら公魚わかまと菜の花漬を昼にたうべぬ

わが庭のひとつばたごを見つつ思ふ海のかなたの対馬の春を

わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば

八月なる嵐はやみて夏の夜の空に望月のかがやきにけり

日御碕にて

秋の果の碕みさきの浜のみやしるにをろがみ祈る世のたひらぎを

行徳野鳥観察舎にて

秋ふくる行徳の海をみわたせばさすがもはむれて渚にいこふ

住む人の幸いのりつゝ三宅島のゆたけき自然に見入りけるかな

第三十七回国民体育大会(くにびき国体 十月四日—八日) 行幸に際し島根県民に下し給へる御製

きその雨いつとしもなく晴れゆきて秋の松江に国体はひらく

栃木県植樹祭

栃と杉の苗植ゑをへて山鳥をはなちたりけり矢板の岡に

(昭和五十八年—一九八三—御年八十三歳)

島(歌会始)

凧ぎわたる朝明の海のかなたにはほのぼのかすむ伊豆の大島

気多神社の森

斧入らぬみやしろの森めづらかにからたちばなの生ふを見たりき(御製歌碑「生ふるを見たり」)

行田の足袋をおもふ

足袋はきて葉山の磯を調べたるむかしおもへばなつかしくして

那須にて

夏山のゆふくるる庭に白浜のきすげの花は涼しげにさく

秋くれどあつさはきびし生業なりはらの人のよろこびきげばうれしも

ポークスカウトのキャンプに加はりしときの話浩宮より聞きしことあり

上州の秋

そびえたる三つの遠山みえにけりかみつけの秋の野は晴れわたる

秋くれて木々の紅葉は枯れ残るさびしくもあるか覚満淵は

昭和五十八年第三十八回国民体育大会についておよみになった御製

薄青く赤城そびえて前橋のひろばに人びとよろこびつどふ

石川県植樹祭

津幡なる縣あがたの森を人びとのいこひになれと苗うゑにけり

(昭和五十九年—一九八四—御年八十四歳)

緑 (歌会始)

潮ひきし須崎の浜の岩の面みどりにしげるうすばあをのり

伊豆須崎にて

あたたかき須崎の岡も春寒くあたみぎくらのまだ咲きのこる

赤坂東宮御所にゆきて

桜の花さきさかる庭に東宮らとそぞろにゆけばたのしかりけり

鹿児島にて

みわたせばしづかなる朝をちかたに白き煙のたつ桜島

ロスⅡアンジェルス・オリンピック

外国とくこくびととををししくきそふ若人の心はうれし勝ちにこだはらず

福島県果樹試験場

黄の色にみのりたる実をもぎとれり梨の畑の秋ゆたかなる

御製（第三十五回鹿児島県・全国植樹祭）

霧島の麓に苗をうゑにけりこの丘訪ひしむかし偲ひて

第三十九回国民体育大会秋季大会についてお詠みになつた御製

若草山見ゆる広場の秋晴にあまたの人のよろこびつどふ

（昭和六十年―一九八五―御年八十五歳）

旅（歌会始）

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

今上御製歌碑百余基所在（及び謹書者）一覽資料

凡 例

一、本編は、侍従長入江相政先生からいただいた資料御製歌碑七十五基に、東宮御歌碑（五基）及び他の調査によるもの計二十余基、及び建立予定の三基を加へた一覽表である。追加の二十余基については、一々現状に当つたものではないから、多少の誤りがあるかと思はれるが、ほぼ誤りはなからうと思はれるものを、敢て公表させていただくのである。なほこの他にもありうることと思はれるので、大方の御指摘によつて補正を期するものである。

一、今上御製の歌碑百余基とは、云はば全国民の敬慕の心の表現で、昭和六十年盛代中の盛事と申上げてよからうと思はれて感激に堪へない。

一、謹書者については確認のできたもののみ記載するにとどめた。謹書者の記載のないものはほとんどが入江侍従長の謹書によるものと思はれるが、これも一々確認がとれなかつたので、記載しなかつた。入江侍従長の多年にわたる謹書の御尽力に深甚の敬意を表するものである。

一、本覧の御製（御歌）は碑面に拠ることに努めたが、とても全体にわたることができなかつた、今後の課題である。濁点はすべて追加した。

一、歌碑の頭の番号は大方は御製そのものの年代順に拠つたもので、便宜的なものである。冒頭を富山県立山三ノ越の東宮御歌碑としたのは、今上天皇の御歌の歌碑建碑の最初のものであることを記念したのである。

一、今上御製を御歌の出来たその地で拝誦するのは特にまた感銘の深いものである。大方の御参考になれば幸ひである。

昭和六十年八月十五日、編者識

- 1 富山県立山町立山三ノ越東宮御歌碑 (「山色連天」大正十四年歌会始)
立山のそらにそびゆるを碑面ノマをしさにならへとぞ思ふみ代のすがたも (東宮侍従長子爵入江為守敬書)
- 2 同県富山市呉羽山頂上
立山の空にそびゆるををしさにならへとぞおもふみよのすがたも (侍従入江相政謹書)
- 3 同県新湊市放生津放生津保育園
たてやまのそらにそびゆるををしさにならへとぞおもふみよのすがたも (松村謙三謹書)
- 4 山形県酒田市日和山公園、東宮御歌碑「河水清」(大正十五年歌会始)
廣き野をながれゆけども最上川うみにいるまで濁らざりけり (東宮侍従長子爵入江為守敬書)
- 5 岡山県邑久郡牛窓町前島・モラロジ―研究所岡山社会教育センター、「旭光照波」(大正十一年歌会始撰政宮御歌)
世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にはへるおほうみのはら (新田興謹書)
- 6 愛知県熱田市熱田神宮神苑内、「朝海」(昭和八年歌会始御製)
天地の神にぞ祈る朝風の海のごとくに波たたぬ世を (吉田桂秋謹書)
- 7 茨城県水戸市水戸駅前、「あけぼの」(昭和二十二年歌会始)
たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて (徳川罔順謹書)
- 8 栃木県益子町益子、栃木県益子窯業所内、「栃木県益子窯業所にて」(昭和二十二年)
ざえのなき嬢のゑがくすゑものを人のめづるもおもしろきかな (関屋貞三郎謹書)
- 9 福島県いわき市湯本駅前(後、湯本町向田・いわき石炭化石館前に移転)「常磐炭鉱御視察の折に」(昭和二十二年)
あつさつよき磐城の里の炭山にはたらく人ををしとぞ見し (大越新謹書)
- 10 福岡県和白村青松園、「福岡県和白村青松園にて」(昭和二十四年)
よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木のまに (和白青松園長松熊孫三郎謹書)

- 11 佐賀県基山町宮浦・因通寺洗心寮前、「佐賀県因通寺洗心寮にて」(昭和二十四年)
 みほとけのをしへまもりてすくすくとおひそだつべき子らにさちあれ
- 12 長崎県小浜町雲仙岳野岳山上、「雲仙嶽にて」(昭和二十四年)
 高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり(素淮謹書)(註・素淮はS・Y・即ち吉田茂首相)
- 13 愛媛県興居島鷲ヶ峯、四国御巡幸の折「興居島にて」(昭和二十五年)
 静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし(徳川義寛謹書)
- 14 兵庫県洲本町三熊山月見台、「朝空」(昭和二十六年歌会始)
 淡路なるうみへの宿ゆ朝雲のたなびく空をとほく見さけつ
- 15 京都府宮津市文珠玄妙庵庭、「京都府天の橋立」(昭和二十六年)
 文珠なる宿の窓よりうつくしとしばし見わたす天の橋立(吉井勇謹書)
- 16 山形県上市上山温泉村尾旅館前、「東北視察の折に」(昭和二十七年)
 ありし日の母の旅路をしのぶかなゆふべさびしき上の山にて(西川義方謹書)
- 17 千葉県富津市富津・県立富津公園内、「千葉県植樹祭」(昭和二十八年)
 うつくしく森をたちてわざはひの民におよぶをさけよとぞおもふ(侍従入江相政謹書)
- 18 北海道斜里郡清水町小清水原生花園、「濤沸湖畔にて」(昭和二十九年)
 みづうみのおもにうつりてをぐさはむ牛のすがたのうごくともなし(入江相政謹書)
- 19 宮城県黒川郡大衡村平林県民の森、「宮城県黒川郡大衡村」(昭和三十年四月宮城県植樹祭)
 日影うけてたちかがよひぬ春の雪きえし山辺に植ゑたる松は
- 20 東京都台東区両国新国技館(昭和六十年一月、蔵前国技館から移転)「相撲」(昭和三十年五月)
 ひさしくもみざりしすまひひとくんと手をたたきつゝ見るがたのしき(宮内庁長官宇佐美毅謹書)

- 21 神奈川県横浜市浦島ヶ丘、「浦島ヶ丘に立ちて」(昭和三十年十月)
いくさのあといたましと見し横浜もいまはうれしくたちなほりたり(侍従入江相政謹書)
- 22 埼玉県秩父市羊山公園、「秩父セメント有恒クラブにて」(昭和三十年)
朝もやはうすうす立ちて山々のながめつきせぬ宿の初冬
- 23 岡山県児島湾締切堤塘、「児島湾締切堤塘を見て」(昭和三十一年)
海原をせきし堤にたちて見ればしほならぬうみにかはりつゝあり(甘露寺受長謹書)
- 24 兵庫県神戸市メリケン波止場、「ともしび」(昭和三十一年十月、兵庫県国民体育大会の折)
港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる
- 25 静岡県磐田郡佐久間町佐久間発電所ダム、「佐久間ダム」(昭和三十一年)
たふれたる人のいしぶみ見てぞ思ふたぐひまれなるそのいたつきを
- 26 富山県氷見市朝日山公園、「氷見の宿にて」(昭和三十三年)
秋深き夜の海原にいさり火の光のあまたつらなれる見ゆ(侍従入江相政謹書)
- 27 富山県富山市中布目社会福祉法人ルンビニ園、「ルンビニ園にて」(昭和三十三年)
御ほとけにつかふる尼のはぐくみにたのしくあそぶ子らの花園(侍従入江相政謹書)
- 28 富山県黒部市吉田YKK吉田工業黒部工場前庭、「黒部の工場にて」(昭和三十三年)
たくみらも営む人もたすけあひてさかゆくすがたたのものともしとみる(侍従入江相政謹書)
- 29 同御製歌碑は、黒部市牧野・YKK牧野工場構内、黒部市吉田・YKK黒部工場構内にあり。前者28は社長の
建立で「侍従入江相政謹書」、後者は社員一同の建立で「侍従長入江相政謹書」の由。
- 30 富山県黒部市奈月、「宇奈月の宿より黒部川をのぞむ」(昭和三十三年)
くれなるにそめはじめたるやまあひをながるゝ水のきよくもあるかな(侍従入江相政謹書)

- 31 石川県七尾市和倉温泉加賀屋旅館内庭、「和倉の宿」(昭和三十三年)
波たたぬ七尾の浦のゆふぐれに大き能登島よこたはる見ゆ(侍従入江相政謹書)
- 32 同県七尾市府中町通り小公園内
なみたゝぬなゝをのうらのゆふぐれにおほきのとしまよこたはるみゆ
- 33 石川県輪島市鴨ヶ浦海岸、「輪島市の鴨ヶ浦にて」(昭和三十三年)
かづきしてあわびとりけり沖つべの鮎倉島よりきたるあまらは
- 34 東京都千代田区千鳥ヶ淵戦没者墓苑、(昭和三十四年)
くのためにのちささげしひとくのことをおもへばむねせまりくる(雍仁親王八秩父宮▽妃勢津子謹書)
- 35 山形県上市市大森植樹祭会場跡、「藏王山麓の植樹」(昭和三十五年)
人びととしらはた杉を植ゑてあれば大森山に雨は降りきぬ
- 36 長崎県大村湾県立公園西海橋特別地域、「西海橋」(昭和三十六年)
潮の瀬の速き伊の浦あたらしくかかれる橋をけふぞ渡れる
- 37 佐賀県鏡山、「鏡山の眺望」(昭和三十六年)
はるかなる彦岐は霞みて見えねども渚美しこの松浦潟(唐津市長金子道雄謹書)
- 38 福島県会津若松市湊町赤井北浅野原、「赤井谷地にて」(昭和三十六年)
雨はれし水苔原に枯れ残るほろむいいちご見たるよろこび
- 39 和歌山県白浜町番所山上、南方熊楠記念館前、「紀州白浜の宿にて」(昭和三十七年)
雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ(野村吉三郎謹書)
- 40 和歌山県熊野那智大社前、「那智の滝」(昭和三十七年)
そのかみに熊野灘よりあふぎみし那智の大滝けふ近く見つ(侍従入江相政謹書)

41 大分県大分市護国神社境内、大分県戦没者慰霊碑、「日本遺族会創立十五周年に際し」(昭和三十七年) 年あまたへにけるけふものこされしうから思へばむねせまりくる(侍従入江相政謹書)

42 山口県秋吉台国民宿舎、「秋芳洞」(昭和三十八年)

洞穴もあかるくなれりここに住む生物いかになりゆくらむか

43 山口県萩市椿東字奈古屋笠山頂上、「笠山三首」(昭和三十八年)

秋ふかき海をへだててユリヤ貝のすめる見鳥をはるかみさくる(侍従入江相政謹書)

44 同前

そのむかしアダムの来て貝とりし見鳥をのぞむ沖べはるかに(萩市長菊屋嘉十郎謹書)

波たたぬ日本海にかびたる数の鳥影は見れどあかぬかも

45 愛知県春日井市王子製紙工場、「紙」(昭和三十九年歌会始)

世に出すと那須のくさ木のふみあみて紙のたふときともしりにき(侍従入江相政謹書)

46 長野県茅野市白樺湖八子が峯、「長野県八子が峯の植樹行事」(昭和三十九年)

八子が峯にはかに雹のふるなかをもろ人もなへをうゑをはりたり(侍従入江相政謹書)

47 新潟県妙高高原管理事務所附近、「妙高山麓杉野沢にて」(昭和三十九年)

靄もなく高くそびゆる火打山雪のこれるを山越しに見つ

48 島根県松江市宍道町御野立所、「宍道湖」(昭和四十年五月)

夕風の吹きすさむなべに白波のたつみづうみをふりさけてみつ

49 鳥取県大山町上槇原、「鳥取県における植樹行事に際して」(昭和四十年五月)

しづかなる日本海をながめつつ大山のみねに松うゑにけり

50 51 岐阜県総合運動場及び関市市民会館、「国民体育大会」(昭和四十年十月)

晴るる日のつづく美濃路に若人は力のかぎりきそひけるかな（侍従入江相政謹書）

皇后陛下の御歌「若ものの声はりあげてひとうちとうちこむ竹刀の音のさえたる」（並刻）

52 愛媛県温泉郡久谷村大久保植樹会場跡、「愛媛県植樹祭・久谷村大久保」（昭和四十一年四月）

久谷村を緑にそむる時をしもたのしみにして杉うゑにけり

53 香川県高松市生島町青峯五色台山の家林間遊地、「五色台に少年団の訓練を見て日本にはじめて結成されし頃のことを思ひいでて」（昭和四十一年四月）

この岡につどふ子ら見てイギリスの旅よりかへりし若き日を思ふ

54 岡山県岡山市金山植樹祭会場跡、「岡山県植樹祭」（昭和四十二年四月）

はるふかみあめふりやまぬ金山のみねに赤松の苗うゑにけり

55 埼玉県秩父市秩父宮記念市民会館、「秩父宮記念館」（昭和四十二年十月埼玉県国体）

おとうとをしのぶゆかりのやかたにて秋ふかき日に柔道を見る（小池武一謹書）

56 岡山県岡山市後楽園外苑、「川」（昭和四十三年歌会始）

きしちかく鳥城そびえて旭川ながれゆたかに春たけむと寿（侍従入江相政謹書）

57 北海道大雪山国立公園（層雲峡）、「層雲峡」（昭和四十三年八月）

そびえたつ大雪山のたにかけに雪はのこれり秋立ついまも

58 北海道稚内市稚内公園、「稚内公園」（昭和四十三年九月）

御製 樺太に命をすてしたをやめのころを思へばむねせまりくる

御歌 樺太につゆと消えたる乙女らのみたまやすかれとただいのりぬる（松本春子謹書）

59 富山県砺波市頼成植樹会場跡、「富山県植樹行事」（昭和四十四年五月）

頼成もみどりの岡になれかしと杉うゑにけり人びととともに（侍従長入江相政謹書）

- 60 富山県東砺波郡城端町蓑谷山繩ヶ池畔、「繩ヶ池にて」(昭和四十四年五月)
 水きよき池の辺にわがゆめのかなひたるかもみづばせを咲く(侍従長入江相政謹書)
- 61 秋田県秋田市仁別、仁別自然休養林、「仁別森林公園にて」(昭和四十四年八月)
 下草のしげれる森に年へたる直き姿の秋田杉を見つ
- 62 長崎県福江市福江国際会館前、「五島列島福江島」(昭和四十四年十月)
 久しくも五島を視むと思ひるしがつひにけふわたる波光る灘を
- 63 長崎県平戸市岩の上町龜岡国際会館前、「長崎県・国民体育大会」(昭和四十四年十月)
 ゆく秋の平戸の島にわたりきて若人たちの角力見にけり
- 64 長崎県諫早市栗面町黒木県立総合運動公園、「長崎県・国民体育大会」(昭和四十四年十月)
 長崎のあがたの山と海の辺にわかうどきそふ秋ふかみつ
- 65 福島県耶麻郡猪苗代町天鏡台植樹会場跡、「福島県植樹祭・磐梯」(昭和四十五年五月)
 松苗を天鏡台にうゑをへていなはしる湖をなつかしみ見つ
- 66 福島県会津若松市富士通商会津工場、「富士通株式会社社会津工場にて」(昭和四十五年五月)
 いたつきもみせぬ少女らの精こむるこまかき仕事つくづくと見つ
- 67 福島県須賀川牡丹園、「牡丹」(昭和四十五年五月) 〆註「あけぼの集」昭和四十二年〃
 春ふかみゆふべの庭に牡丹花はくれなるふかくさきいでにけり
- 68 岩手県県営運動公園、「岩手県・国民体育大会」(昭和四十五年十月)
 人びとは秋のもなかにきそふなり北上川のながるるあがた
- 69 岩手県平泉中尊寺境内、「平泉中尊寺」(昭和四十五年十月)
 みちのくのむかしの力しのびつつまばゆきまでの金色堂に佇つ(岩手県知事千田正謹書)

- 70 富山県砺波市城端町繩ヶ池付近、「家」(昭和四十六年歌会始)
 はてもなき砺波のひろの杉むらにとりかこまるる家々の見ゆ(皇室経済主管並木四郎謹書)
- 71 島根県太田市三瓶町小屋原字大会根植樹会場跡、「三瓶山」(昭和四十六年四月)
 春たけてそら晴れわたる三瓶山もろ人とともに松うゑにけり
- 72 新潟県北蒲原郡黒川村胎内平植樹会場跡、「新潟県植樹祭」(昭和四十七年五月)
 黒川の胎内平にうゑし杉やがては山をみどりにそめむ
- 73 宮崎県霧島山麓夷守台、「宮崎県植樹祭」(昭和四十八年四月)
 飯肥杉を夷守台にうゑをへて夷守岳をふりさけみにけり
- 74 千葉県千葉市県総合運動場、「秋季国体」(昭和四十八年十月)
 よべよりの雨はいつしかふりやみて人びとはつどふ千葉の広場に(侍従長入江相政謹書)
- 75 岩手県岩手郡松尾村東八幡平県民の森、「岩手県植樹祭」(昭和四十九年五月)
 岩手なるあがたの民の憩場の森となれかしけふ植ゑし苗
- 76 茨城県日本原子力研究所、「原研東海研究所にて」(昭和四十九年十月)
 新しい研究所にてなしとげよ世のわざはひをすくはむ業を(侍従長入江相政謹書)
- 77 神奈川県よみうりランド水族館、「よみうりランド水族館」(昭和四十九年十月)
 オランダの旅思ひつつマナティーのおよぐすがたをまたここに見ぬ(侍従長入江相政謹書)
- 78 三重県伊勢市朝熊山頂、「朝熊山の眺望」(昭和五十年)
 をちかたは朝霧こめて秋ふかき野山のはてに鳥羽の海見ゆ
- 79 茨城県久慈郡大子町高柴薄久保植樹会場跡、「茨城県植樹祭」(昭和五十一年五月)
 人びととけふ苗木うゑぬ茨城の自然観察の森とはやなれ

80 佐賀県佐賀市県立城内公園、「佐賀の宿にて」(昭和五十一年十月)

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり(侍従長入江相政謹書)

81 和歌山県那智勝浦町那智高原植樹会場跡、「和歌山県植樹祭」(昭和五十二年四月)

かすみたつ春のひと日をのぼりきて杉うゑにけり那智高原に

82 和歌山県高野町高野山奥の院、「高野山にて」(昭和五十二年四月)

史に見るおくつきどころをがみつつ杉大樹並む山のぼりゆく(侍従長入江相政謹書)

83 高知県浦喜ヶ峰森林公園、「高知県植樹祭」(昭和五十三年五月)

甫喜ヶ峰みどり茂りてわざはひをふせぐ守りになれとぞ思ふ

84 高知県高知市県立牧野植物園中央広場、「牧野植物園」(昭和五十三年五月)

さまざまの草木をみつつ歩みきて牧野の銅像の前に立ちたり

85 長野県戸隠森林植物園、「戸隠にて」(昭和五十三年十月)

秋ふけて緑すくなき森の中ゆもとまゆみはあかくみのれり

86 愛知県藤岡町猿投山麓昭和の森(植樹会場跡)「第三十回全国植樹祭に際して」(昭和五十四年五月)

初夏の猿投のさとに苗うゑてあがたびとらのさちをいのれり

87 宮崎県加江田溪谷県自然休養林硫黄谷休憩所、「加江田溪谷にて」(昭和五十四年十月)

辭むせる谷の岩間におひしげるあまたのしだは見つたのしも

88 宮崎県串間市都井岬観光ホテル前の丘、「丘」(昭和五十四年歌会始)

都井岬の丘のかたへに蘇鉄見ゆこは自生地の北限にして

89 三重県菰野町県民の森(植樹会場跡)及び菰野町社会福祉センター、「第三十一回三重県全国植樹祭」(昭和

五十五年五月)

- 人びととうゑたる苗のそだつとき孤野のさとに緑満つらむ（侍従長入江相政謹書）
- 91 栃木県矢板市片候第三十五回国体サッカー会場、「第三十五回国民体育大会秋季大会」（昭和五十五年十月）
とちのきの生ふる野山に若人はあがたのほまれをになひてきそふ（侍従長入江相政謹書）
- 92 群馬県伊香保町県立伊香保森林公園、（昭和五十六年六月）
伊香保山森の岩間に茂りたるしらねわらびのみどり目にしむ（侍従長入江相政謹書）
- 93 栃木県矢板市長井県民の森植樹会場跡、「栃木県植樹祭」（昭和五十七年）
栃と杉の苗植ゑをへて山鳥をはなちたりけり矢板の岡に（栃木県知事船田謙謹書）
- 94 石川県河北郡津幡町加茂植樹会場跡、「石川県植樹祭」（昭和五十八年五月）
津幡なる縣の森を人びとのいこひになれと苗うゑにけり
- 95 石川県羽咋市気多神社境内、「気多神社の森」（昭和五十八年五月）
斧入らぬみやしろの森めづらかからたちばなの生ふるを見たり（侍従長入江相政謹書）
- 96 埼玉県行田市忍、市商工センター前、「行田の足袋をおもふ」（昭和五十八年五月）
足袋はきて葉山の磯を調べたるむかしおもへばなつかしくして（侍従長入江相政謹書）
- 97 群馬県前橋市敷島町県宮陸上競技場、「第三十八回国民体育大会」（昭和五十八年十月）
薄青く赤城そびえて前橋のひろばに人びとよろこびつどふ（侍従長入江相政謹書）
- 98 群馬県赤城山覚満淵附近、「上州の秋」（昭和五十八年十月）
秋くれて木々の紅葉は枯れ残るさびしくもあるか覚満淵は（侍従長入江相政謹書）
- 99 群馬県前橋市前橋総合運動公園、「上州の秋」（昭和五十八年十月）
そびえたる三つの遠山みえにけりかみつけの秋の野は晴れわたる（前橋市長藤井精一謹書）
- 100 鹿児島県牧園町高千穂出口自然教育の森中央広場、「鹿児島県植樹祭」（昭和五十九年五月）

霧島の麓に苗をうゑにけりこの丘訪ひしむかし偲ひて

101 長崎県上対馬町国民宿舍園地内、無題（昭和五十八年新年御発表）

わが庭のひとつばたごを見つつ思ふ海のかなたの対馬の春を（侍従長入江相政謹書）

補遺

102 愛媛県松山市山西町新田学園、「葉山にて」（碑面未確認）（昭和二十四年）

しほの引くいは間藻の中石の海中をとる夏の日ざかり

103 静岡県下田市須崎・半島東側、御製御歌「朝」（昭和四十九年）

御製 岡こえて利島かすかにみゆるかな波風もなき朝のうなばら

御歌 くれなるのよこぐものへに光さしつかのまにして伊豆の朝明く

104 埼玉県秩父市秩父市役所、「武甲山登山口」（昭和四十二年）

山裾の田中のみちのきふね菊夕くれなるににはへるを見つ

◎富山県小矢部市建碑予定

ふる雨もいとはできそふ北国の少女らのすがた若くすがしも（昭和三十三年御作、入江侍従長謹書の予定）

◎山口県下関市亀山神社境内及び宇部市琴崎八幡宮境内

謹書者前者は明治神宮宮司高沢信一郎氏、後者は元山口県知事田中龍夫氏予定「朝海」（昭和八年歌会始）

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

編著者略歴

大正四年東京都渋谷区に生まれる

東京府立一中・第一高等学校を経て、昭和十

四年東京帝国大学文学部国文学科卒業

専門 国文学

現在 亜細亜大学教授、亜細亜学園理事

著書 「三条実美歌集『梨のかたえ』とその

研究」「詩と政治―明治の詩魂」「白村江の戦」

「古事記のいのち」ハロピンソン氏訳<

『The Kojiki in the Life of Japan』

「しきしまの道研究」歌集「戦後」「武蔵野」

「救世く」等

共著 「短歌のすすめ」「短歌のあゆみ」

「ホイットマン詩撰」「天皇―日本のいのち」

「昭和史の天皇・日本」

共編著 「三井甲之歌集」「川出麻須美詩歌

集・天地四方」「日本思想の系譜」「明治天

皇勅勅諱解」その他

歌人・今上天皇<増補新版>

定価 一七〇〇円

編著者

夜久正雄

<検印省略>

昭和六十年十一月十日初版発行

発行人 清都松夫

発行所 株式会社 日本教文社

〒東京都港区赤坂九一六一四四

電話東京(〇三)四〇一九一一(代)

振替 東京 四一五五一九番

飯島印刷・笠原製本

落丁・乱丁はお取替します

© Masao Yaku 1985, Printed in Japan

ISBN4-531-06164-0

谷口雅春著 ¥950 ㊦250
限りなく日本を愛す

戦後の偏向歴史教育より生じる青年諸君の質疑に答え、日本の実相——中心帰一の日本民族精神を詳述し、それに裏付けられた日本独自の世界的使命を力説する

谷口雅春著 ¥900 ㊦250
国のいのち 人のいのち

反天皇、反国家的教育と社会状況の横行する今日、「国家は生命体である」という著者の国体論を基礎として日本国家建設の中心理念を説き明かす全国民必読の書

谷口清超著 ¥900 ㊦250
日本よ永遠であれ

中心帰一の秩序をその生命体的理念として持つ国家「日本」の使命とは？ 記紀万葉に見る日本の精神を軸に天皇、防衛、憲法等内外の諸問題の本質を衝く。

谷口清超著 ¥400 ㊦250
正しき日本の進路

著者が現代の混濁した世情を鋭敏に洞察し心魂こめて初めて世に送る警告の時局評論集。日本を思う愛国の熱意が迸り溢れた、全日本人が久しく待った必読の書

肥後和男著 ¥1100 ㊦250
天皇と国のあゆみ

天皇は日本歴史の中核として、長い間極めて大きな位置をしめてきた。本書は、この長い存続の根拠となってきた天皇の神聖性、絶対性を歴史学的に解明する。

葦津珍彦著 ¥1500 ㊦250
みやびと覇権
—類篇天皇論—

日本の天皇と西欧君主との違いを豊富な資料を駆使して分析。地鎮祭問題、元号問題等戦後生じた種々の国家的問題を取り上げ鋭く論及。葦津天皇論の決定版。

小田村寅二郎 共編 ¥1700 ㊦300
小柳 剛太郎
歴代天皇の御歌
—初代から今上陛下まで二千首—

初代から今上陛下まで百二十四代にわたる歴代天皇が天地、人間、自然、風物、折にふれて詠まれた御歌は日本民族の精神の核であり、日本の文化伝統の極致である

小田村寅二郎著 ¥1200 ㊦300
日本思想の源流
—歴代天皇を中心に—

日本なるものの本質を歴代天皇の御歌の中に求め天皇の御人生観御思想を中心に天皇と国民の関係を正しく解明。日本人の心と思想の源流を探る独創的見解の書

杉田幸三著 ¥1200 ㊦250
親子で読める
天皇日本史

121代の歴代天皇を中心に、神話の時代から幕末までの2525年間の日本歴史をやさしく描写。誰でも読める日本史読本。『エピソードで綴る天皇さま』の姉妹編

